
ロボゲで異世界

カツラギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボゲで異世界

【Nコード】

N9315F

【作者名】

カツラギ

【あらすじ】

長年の夢が叶う瞬間、天才君にさらっと持っていかれた。おまけに人違いでこんなところに……さてどうしたものか。

挫折、そして泣きつ、面に異世界（前書き）

負けた。

間違われた。

ここどこ？

挫折、そして泣きつ面に異世界

まず言っておきますが、俺は天才って奴が大嫌いです。
イキナリな話で、申し訳ないですけどね。

俺もね、以前は自分にも、そこそこの程度の能力は、備わっている
と思ってたんですよ。

ある事柄に関していえば、地元は元より、それなりの範囲に名前
が売れてますし、色々と実績も残してます。

高校出てからは、その縁で就職。

今もね、それでメシを食っていける位には、関わっている事です
しね。

そりゃあね、飛びぬけて凄い全国ナンバーワンだの、怪しげな独
自技術のスペシャリストだったりはしませんかね。

継続が力になってるだろうって、確信できる程度の自信はあるん
ですよ。

それでも、天才なんていう手に負えない奴は、物事がある程度以
上に突き詰めれば、意外にポロポロと出会ってしまうものでしてね。

今だってそうだ。

人の努力をあっさりと無にしてくれる。

「凄い、凄い凄い!!」

僕は貴方みたいに凄い人には、始めて出会いました!!」

「そりゃ、光栄の至り」

おいおい、マジかよもうっ!!」

今の今に修正したばかりで、もうアラートが鳴りっぱなしだ。

ええと、ここの数値を修正、シールドの追従パターンをBへ。
あーもう、どうしてあれだけ収集したデータが、こども短時間で塗り替えられていくんだ。

「僕の攻撃をここまで凌ぐなんて!!」

全く嫌になるな、くそっ!! 基本負ける事は考えてないんじゃないか。

機体スペックはこちらが優位なのに、動きの先を取られて後手にまわされている。

操作技術はともかく、攻防と間合いの出入りの感覚が、まるで予知能力じみてやがる!!

データ収集からの先読みでの封殺は、こちらの持ち味だったのに、とつさの判断の部分で遅れを取っている。

つまりこいつは、俺があちらの癖を読んで、先取りしようとしているこちらの動きを見て、瞬時に行動を変更しているって事だ。

それでも凌げているのは、その反撃行動が、収集したデータの対応範囲に収まっているお蔭で、それに対応した操作マクロのパターンが、俺の指示よりも先に機体を動かして防御できているからだ。ぶっちゃけ俺の操作技術というよりは、蓄積した戦闘データのお蔭……つまりは俺の手掛けた戦闘ルーチンと、それに対応できる機体の優秀さに他ならない。

とはいえ、そんな勝手に暴れまわる機体を宥めつつ、かつパラメーターを一部変更するだけで、立っている事すら難しくなるという膨大な要素の絡む機体操作のマクロパターンを、適宜修正しながら適用していけるプレイヤーは、俺くらいしか居ないだろうけど。

それでも少しずつ、こちらの予想範囲を超えて、防御をちょいちょい突破してくる攻撃が増えてきた。

機体中枢を中心にカバールしているシールドで、守り切れない部分

を削っていく。

「本当に、この機体は凄いやー!!」

あなたの組んでくれた機体で、あなたと戦えるなんて!!」

嬉々とした声が届く。

いや、その機体でどうやって、こうまで俺の機体を押し込めるのか、想像もつかないよー!!

俺の『ケイオス』は、在り物の機体に限界を感じてから、自分の散々手を入れて来た、俺の年月の結晶。

そっちは素の初期機体を効率化して、駆動部やら関節のロスを丁寧なフィニッシングで、小さくしただけの機体なんだぞ。

名前こそ『ジークフリード』なんていう大層な名前がついてるけどな、よく動くだけの既製品なんだよー!!

仕事のお得意さんから頼まれた片手間のやつなんだ!!

「なあ、君ってさ、例のゲームを結構やってるんだろ？」

うちの知り合いの子がさ、今度始めるらしいんだ。

だからさ、初めてでも使いやすいようにしてやってくれない？」

そんな風な事を言われて、ちよつと手を入れただけの代物なんだよっ!!

そんな機体で全国百傑に乗り込んでくるとか。

今迄に、俺を踏み台にしてランカーに成っていった奴でも、もうちよつと自分で手を入れてたよー!!

ああ、これが天才って奴かー!!

そんな漫画みたいな奴、本当に居やがるんだなあ。

せつかく、引退ランカーの繰上げで、晴れてランキング入りだと思っただのになあ。

確かにフレッツシユマン大会の優勝者に、101位への挑戦権があ

るのは知ってたけどさ、このタイミングで来るかよ！！

今の今迄、ランカーへの道に全く関係無い時は、新人なんぞ散々蹴散らしてたのになあ！！

いざランカーへの道が見えた瞬間に、こんな天才君と当たるとか、神様はよっぽど俺が嫌いなのか！！

もしかして社員がランカーなのは、外聞が悪いとかな理由で、誰か手を回してないだろうな？

社員でランカーなんて奴は、結構居るじゃねーかよ！！

いや、落ち着け落ち着け、今はそんな事はどうでもいい。

やる事をやらねば。

「とはいえ……くそ。 どうにか見つけた隙をつくにも、相打ち狙いしかないのかな」

今、天才君の機体『ジークフリード』は、両手持ちの大剣を、左の袈裟切りを繰り返して、縦の回転を維持。

時折、こちらの機体のサイドに隙を見つけては、一撃離脱で削るように攻撃してくる。

こちらが押し込んで剣の回転を止めてしまえばと思うのだが、抜群の感覚でこちらの動きに合わせて引いていきやがる。

それに下手に押し込めば、大剣の回転は下から上への切り上げ、あるいは横回転に変化して、首なり足なりを狙って、するりと致命の一撃を送り込んでくるのを、散々収集データで見せ付けられている。

見つけた隙だって、ぶっちゃけるとフィニッシュの傾向に、こちらの首の右から入れる袈裟切りが多いというか、お気に入りだというのを知っているの、ちょっと隙を見せたら食い付いて来たって言う程度のものだ。

それに合わせて一撃入れられれば、道が開けるかなーという希望的観測だが、やらねばギリ貧で負ける。

(…………くそ、やってやる!!)

「そろそろ決着をつけます!!」

「やってみろ!!」

俺は右手の剣を振り上げ、強引に相手の剣に叩きつけ、攻撃に割り込ませた。

「そんな荒い攻撃なんて!!」

その一撃を天才君は、あっさりと回転の力を込めた一撃で叩き落とし、こちらは叩き落された剣に引かれて、首を差し出すようにたらを踏む。

その隙を見逃さず、ツバメのように翻った剣が、こちらの首を狙ってくる。

剣で防ぐのは間に合わない。

剣を捨て、右腕を首に添えて、つんのめるように突撃する。

「な、なんてことを!!」

「なんと……!!」

回転の変化直後、スピードが乗り切っていないタイミングで懐に入れば、いくら両手剣でも軽量級のパワー、腕の一本は落とせても首まではっ!!

ガツンと衝撃。

腕、肩、背中にダメージ。

アラート表示で真っ赤になる。

「構つかあ!!」

頭から相手の胸元へ突っ込む。

万歳する相手に左腕で構えていたシールドを！！
シールドを……。

「……くそ、ここまで来て」

左腕が上がらなかった。

盾でぶち上げようとしたが、だらりと下がったケイオスの左腕に力は戻らなかった。

「くそ」

胸元をひしゃげさせ、ふらつきながらも体勢を立て直したジークフリードが、その剣を振り上げるのを感じた。

「くめんなさい」

画面の表示が落ちた。

「くぞおおおおお」

俺はボロボロにされたケイオスを、エディタで修正しながら悔し涙に濡れていた。

「ごめんなさいとか！ お前なに様だよオオ！ くっそー
ー！ー！ー！」

ああ、これでまた万年101位の記録が伸びた。

「やっぱり、俺には無理なのかよ」

このゲーム、『ミッシング・ウォー』に出会ってから、俺は全国百傑を目指して色々と研究してきた。

恥を忍んで、ランカーの機体のメンテを引き受けたりして、そのカスタムを真似ては試行錯誤してきた。

ノウハウの蓄積は、高校時分の小遣い稼ぎにゲーム内ショップで各関節や駆動部だののパーツのパッケージを売ったりしてた位で、あげく後にはゲームの管理会社に勤めているランカーに、高校を出たらうちにおいでと言われて、本当に入社しちゃう程度になっている。

一応、高校は工業で情報処理やってたが、やってる仕事は営業兼広報で『カスタムQ&A』とか、解説本のライターとか、使いやすい初期製品のバランス取りとか……選択授業だった、製図関連のCAD弄った経験の方が、役に立つとかな状況になっている。

ちなみにゲームで古い馴染みには、俺が就職した事が身内バレしている。

そんな俺が、やっと101位まで上り詰めたのは、中学最後の夏休み大会。

始めたのが中学入学して、それなりに経ってからだから、一年とちよつと掛かった計算だな。

そこから、あと少しと願いつけながら、その順位で固定されてから現在で五年以上になる。

ランカーもあらかた入れ替わる中、ずっと維持している101位に『無冠の帝王』だの『門番』だの『栄誉の守護者』だの『公式ラ

ンカー認定官』とか言われている。
全く嬉しくない。

「やる気が起きないな」

仕事と別に続けている、カスタムの依頼だとかアイテム作成依頼だとか、メールが溜まっているものの、粗方消化できてない。

このところ、休みの日はあの天才君のデータ取りだとかに掛かりきりで、マクロ設定したりケイオスいじったりに、かなりな時間使っていたからなあ。

……俺、これでも社会人か？

ああ、今更だが自己紹介しておこう。

俺の名前は『杵島木 一哉』

プレイヤー名は『KAZUYA』、愛機は『ケイオス』だ。

MMORPG『ミッシング・ワールド』と派生ゲーム『ミッシング・ウォー』では、そこそこ有名なプレイヤーだと思う。

何で有名なのかの一端は既にご存知だろう。

ついでにゲームの紹介も。

うちの会社が管理をしている関係で手前味噌な話になるけど。

元々、ミッシング・ウォーはミッシング・ワールドの中の、一要素でしかなかったんだ。

さらに言えば、ミッシング・ワールドも当初は、十把一絡げの有り触れた国家戦争をモチーフにしたMMORPGでしかなかった。

それが中世の剣と魔法の世界に、何をトチ狂ったか王家の秘密兵器として、巨大ロボットである所の『機兵』が導入された時から、ミッシング・ワールドは名前が売れ出した。

俺が中学に入った頃には、稼働三年位になっていたけど、名前がババっと出たのはそのタイミングだったな。

それ以降、どんどんと規模が大きくなっていった。

しかし、数万人規模のゲーム世界の中に、機兵は百機足らず。その希少さと笑っちゃうような強さから、機兵のRMT（現金でのトレード）が暴走。

社会問題になる程に話が大きくなった。

いやあ機兵が歩くだけで、カンストレベルのプレイヤーが死にまくるんだよ。

何を考えてるんだって話題になってたなあ。

それだけに金持ってる連中は派手に動くし、場合によっては色々噴出した事件によって、ゲーム会社の危機にもなつてたと思う。

そこで対応策として、ミッシング・ウォーが現れたんだ。

つまりは機兵による、戦闘だけを抽出してのランキング戦。

そして全国百傑たるランカーのみに、ミッシングワールド内で機兵を使えるようにしたんだ。

これで、ランカー以外には機兵を使えず、トレードも出来ないようになり、問題は終結。

うまい事を考えたよね。

これで誰でもが機兵を動かし、カスタムの自由度やその強さを楽しめるようになった。

俺も機兵の登場から、ゲーム自体に興味はあったんだけど、あからさまな現金が飛び交うさまに引いててさ、一寸躊躇してたんだよね。

面白そうなんだけどなって、ずっと思っていたから、このチャンスには飛びついたね。

そして全国百傑に、最も近くて遠い男と呼ばれるように……。

さて、気を取り直して。

実は俺は機兵が使いたくて、ランカーを目指している訳じゃない。何故かというと、俺は既にミッシング・ワールド内で、機兵を持っている。

それも複数……でもこれは、ある種の名誉職扱いなんだよね。

ぶつちやけると、ゲーム内ショップでの評価になる『お助け有難うポイント』（俗に感謝ポイント：良心的なショップにプレイヤーが投票する）の一定評価と、全ランカーの内での最多名誉点（主に勝利等で貰えるポイント）を持つている為だ。

ショップの方は、ほぼ商売つ気なしでやってたし、感謝されるのは嬉しいので良いのだが、問題は名誉点の方だ。

これは単純に、ランカーの変動は年四回のグランプリでしか変わらない上に、普通の大会ではポイントが稼げない（そのかわりグランプリは桁が違うポイントが入るが）のに比べて、圏外の俺は引っこり無しに地方大会等の優勝者に狙われるから、大会優勝に準じたポイントが入る（グランプリでのポイントに比べれば一桁少ないが）それを五年も繰り返していれば、嫌でも溜まる。

ただ、あくまでもそれはミッシング・ワールドの中だけで通用するもので、ランキングには全く関係ないけど。

ランカーになるにはグランプリでの直接対決で勝つか、ランカー引退での繰上げしかないのだ。

今回はその繰上げが見事に潰された。

それじゃあ、なぜランカーを目指しているかといえば……ぶつちやけ、意地です。

名誉点にも関わるけど、ミッシングワールド内の機兵に使える資源というか、カスタム等に使えるお金みたいな物は、初期状態の機兵分+ワールド内で稼いだ物+名誉点の変換分なのだ。

つまり俺は、基本的にワールド内では最強と思われても、仕方が無い程のポイントを使える。

実際使っているし、ワールド内で負けた事も無いから、溜まる一方。

それがランカーになった事の無い、万年101位だったら格好がつかんでしょうが！！

でもそろそろ限界かなとも思う。

今は機兵の操作に、アクションやシューティングを基にした物が使われている。

ミッシング・ワールド内での操作とは全く違うのだ。

元々は、フライトシミュすらも生温いと言われる程の、えげつない難易度の代物。

歩くコケル、曲がるコケル、剣を抜くコケル、振り上げるコケル。とりあえず戦場へ着くまでに、怪我をしないのが大事かと言われていた頃もあった。

それをマクロの登録や、細かい設定で何とか動かせるようになるので、ランカーの強さ＝ワールド内での強さではない。

そんな中、俺はワールド内での操作を、ミッシングウォーでもそのまま使っている。

細かい操作が出来るということは、簡易な操作で出来ない事も出来るということなのだ。

簡単に言うと、俺はケイオスで逆立ちもバック転も、某YOSH IMITU張りの自刃も出来るが、ランカー連中はよっぽど変な登録をしていない限り出来ない。

でも、そんなことは関係なく、ミッシング・ウォーはミッシング・ワールドを置き去りにして、進化し続けている。

だから、ワールド内で使われる機兵は、ランカーの一部と俺と同じく名誉所持の十何人で、四十機に満たない。

殆どが領主職だの、ギルドマスターだのばかりだ。

機兵同士の戦闘も、殆ど起こっていない。

ミッシング・ワールドは、停滞している……。

「ぐわあああああ！ えええい、気が滅入るっつーのー！！

はあ、ワールドの情勢でも眺めてニヤニヤするか……」

クライアントを立ち上げる。

……

……

……

「あー、平和だのう」

北部帝国の蛮族征伐だの、諸島連合の内輪もめ位で、中央部は平和なもんである。

動きたくても動けないというか。

大陸中央部は五ヶ国がひしめいているが、三強二弱でもある。

ただ、兵力差を簡単にひっくり返す機兵のせいで、動くに動けなくなっている。

いっちゃん弱いところに俺が居るせいも有るんだが。

「さーて、頼まれものの剣やら作るか……」

ちなみにプレイヤーとしては、錬金術と鍛冶の一通りがマスターで、生産系は一通り齧っている。

戦闘系スキルの魔術と剣はそこそこより上程度。

機兵乗りのスキルである機士は、プレイヤーの腕次第なので、機兵を持つてる時点でマスター扱い。

珍しいところでは、機兵鍛冶とか。

これは、ミッシング・ウオーのカスタムで、優秀と認められた者に与えられたりする特別職。

場合によってはデザインした機兵が、皆のスタート時の基本デザインとされたりするので、なかなかに榮譽である（今では仕事で基本デザイン作ってるが）

ただ俺の場合は、上位者のノウハウ欲しさに戦闘ダメージのメンテを手伝わせて貰ってたら、そいつらがランキング上位に駆け上がっていった、なぜか感謝されての推薦だったりするので、当時は非常に気拙かったりした（後々、ゲーム内シヨップの評価で、獲得基準を満たしたので、ホツとした覚えがある）

とにかくそんなこんなで、ワールド内で機兵のデザインが出来るツールが使えるようになった（まあ、社員用アカウント使えば、アレな訳だが）

流石に自分の機体ばかりに、手をかけたりって言う事は、許されてないけど。

一応、えり好みなしで受けてるから、評判は良い。

とはいえ、俺がやるのは基本バランスの調整だけ。

ワールドで使う時は、使いやすさが一番なので、まずそれで使ってから物足りなくなったり、好みを出したくなったら、その時に別の機兵鍛冶に調整してもらえばいいと思う。

で、やり過ぎて使い辛くなったら、また俺の所へ持ち込んでくる訳だ。

……

……

……

「あー、終わった。外暗くなってるし、溜め過ぎだったな。

結局、休み潰したし……俺、ミッシングワールドとかのサービスが終わったら、どうやって生きていくんだろう？

いやいや、今日終わらせた分のメール出しかないって、あれ？」

ポンとメニューがポップアップした。
見るとメールが着ている。

「どれ、機体の調整依頼？ 誰だ？ プレイヤー名『グラム』？
聞いた事無いなあ。

新規の機体持ちって……機体名『ジークフリード』……はあっ
！……！」

例の天才君だった。

「何の冗談？

流石に相手をえり好みしないで受けるつつても、流石にこの相手
は無いでしょ。

俺、作業中に色々と感極まって泣いちゃうよ。

つか、基本バランスの調整はちゃんとやってるし、ワールド用の
基本動作は組み込み済みだし、触るところないから」

断ろう。

そう決めて、メールを出そうとして、もう一つメールが来た事を
ポップアップが知らせた。

「今度は何だ？」

メールの送り主の名前が化けている。

ウイルスの類かと思ったが、なんだか妙に気になったので、アン
チウイルスのソフトを三つ程使って、検査をかけてから、思い切っ
て開いてみた。

『最強の、最強になるべき機士様へ、
私達をお救い下さい。』

Y/N』

「なんだこりゃ？」

「新手的嫌がらせか？」

「やりそうな奴は結構思い当たるけどさ」

特に最強の機士とか「ワールドじゃ最強だよー」とか揶揄されてるようで、ひじょうに気分が悪い。

ぶっちゃけ、最強の機士になるべきとかつてのは、始めてすぐの大会で優勝した挙句、あんな機体で俺を蹴飛ばしてランキングに駆け上がって行った、あの天才君にこそ相応しかろう。

もう消してしまおうと、ゴミ箱に入れようとして、このメールが送られてきたのが、ミッシングワールドのクライアントメールだと言ふ事に思い当たった。

ゲーム内メールとなれば、送り先を追いかけるのは、普通のメールより簡単だ。

クライアントメールのヘッダには、プレイヤー情報なりがそのまま入っているので、普通のメールのように、IPを追っかけたりする必要はなく、ゲーム内の窓口に問い合わせれば、送り主が化けていても、何とかなるだろう。

「いや、社員用のアカウントなら、自前で追っかけられるか。」

「よし、追っかけてやる。」

「まず、ヘッダは……おいおい、こっちで見ても送り主が化けてるのかよ。」

「開発の連中の悪戯じゃないだろうな。」

「手の込んだ事に、宛先の抽出に関数使ってるしな」

「関数は、ゲーム内プレイヤーの不特定多数に送る場合に、色々と

パラメーター指定ができる。

たとえば、プレイヤーのスキルを指定するなどすれば、高レベル生産者へ送ったり、初心者オンリーに送ったりも出来るわけだ。

今回は……色々と設定しているが、まずミツシング・ウォーの現ランカー1位。

それから……なるほど、栄誉点獲得一位、通算戦闘数、通算勝利数、対ランカー戦闘数、対ランカー勝利数……最短ランキング入り一位。

なんとというか、こんだけ色々設定して、恐らく三人しか抽出できないとか。

一番最初と最後以外はことごとく俺だとか（演習とか野良大会では、結構ランカーにも勝ってるんですよ！！）

「どう考えてもこれは、俺を狙った嫌がらせに違いない。

現一位のランカーさんは知り合いだが、ミツシング・ワールドには入ってこないから、メール見ないだろう。

となると、俺とあの天才君だけがこのメールを見るって訳だ」

判ると思うが、あの天才君は最短ランキング入りの記録持ちですよ。（最年少は別に居るが、この抽出条件には入ってなかった）

「こうなれば、これは間違いなく……俺と天才君で、なんかやらせる気だな。

ふっふっふっふっふ、いいじゃない。

やってやるうじゃないの付き合ってやるうじゃないの！！」

思いつきりマウスを握り締めて、Yを押した。

『あれ？　なんで？』

そしたら、そんな声が頭の中に響いた。

緊張感の無い異世界生活開始

「なんだか、酷い扱いを受けたような。ここは何処だ？」

気が付いたら辺りは真っ暗で、屋外に放置されていました。

「ちょっと落ちっこう。 なにか、納得できる理由がある筈」

たしか……。

『折角だから俺はYを選ぶぜ!!』

『あれ？ 何で二人も居るの?』

『システムメッセージ：先程の抽出条件により、三名を選出。

内、一名はミッシング・ワールド内にプレイヤーを登録していない為、二名にメールを送信。

イベントへの各人の参加意思を確認。

イベント提案者に各人の意思決定を返信。

イベント実行……処理の途中にエラーが発生しました。

イベント提案者……プレイヤーID照合エラー……システム担当者に問い合わせを……』

『え？ どういう事？ 貴方、誰？ 勇者様以外に声が届くなんて？

その世界の管理者？ 嘘お!!』

『な、なんだ、急に真っ暗に？ 停電か？ ヤバイ!? データーは無事か？ UPSちゃんと動いてるか?』

『最強つて、ボクでいいのかな?』

『えー!? 私、何処に異界の門を開いちゃったのよ!?!』

『ヘルプメッセージ：ゲーム内の語句については、オンラインマニュアルを……』。

管理者への連絡、問い合わせ、ハラスメントの報告はGMコール

を……。

不正規な、アカウントです……通信の接続を切断します』

『へ、駄目、門が閉じちゃうー!!』

まだこっちに、ああ、処理が終わってないのにー!!』

『ここは？ 何処？ 嘘……ジークフリードが……本物？』

『うわ、何だ？ お、落ちてる？ 俺、落ちてるー!!……!!……!!』

『巫女殿、勇者殿の召喚は無事に？』

『あ、あ、えーと、こちらに（ちゃんと呼べてるって事で良いのよね）』

『え、と……ボクは結城ヒロじゃなくて、機士グラム』

『うーわー!! おーちーるー!!……!!』

……なんだこりゃ？

思い返すに、なんだか酷くスルーされているような、というかなんだったんだ？

記憶が断片過ぎて、色々と受け取れ過ぎてカオスすぎる。

一番マシなのが、拉致とかな洒落にならないような方法を使うイベント。

最悪が、自分でも頭悪い考えだけど、どっかに召喚された挙句に、更に失敗されたとか。

「異世界召喚かー、まっさかー。

ホラ、どう見たって、デニムにシャツで……」

あちらこちらを金属で補強された、黒い革の上下にバックパック、腰には剣と銃。

駄目押しにマントと仮面……。

なんとという中二病……しかも、ゲーム内の無駄に美形なアバターじゃ無くて、素の自分らしい。

だって足短いし、見覚えのある手のひら、面倒臭いから短くして

いる髪。

覚悟を決めて、剣に自分を映す。

「月明かりにも拘らず、雰囲気の出ない馴染みのある顔だよな」

よし！！ 性質の悪いコスプレイベントの可能性が高まった！！
ドッキリならドッキリで結構、こうなんか、馬鹿なことをしてみ
せれば、それで終わりになるに違いない！！

「えーと……うわ、マジか！？」

よく出来た金貨だな。こいつを握って、錬金マナ変換！！」

叫ぶと金貨がボロリと崩れて、体の周囲と中に何かが満ち溢れる
ような感覚が。

「って、ちょ、これは、苦しいって！！ マジでマナとか！？

嘘臭いけど破裂しそう！！ えーっとなんかでマナ使えば、そう
！！

馬鹿そんな方法を、よしクリエイト・フード『米』」

ザラザラザラザラザラザラ手の内から零れてコボレ
テこぼれて……地面の上に俵をぶちまけたような、高さ数十センチ
の山が、米粒で出来あがった頃、体の圧迫感が無くなった。

「あはははははは、マジか？ 勿体ねえ、じゃ無くって！！」

現物を見た事以上に、今のスキル使用で自分の中の感覚が、あり
得る筈の無いスキル群に馴染んで、それらが在るという事に、目で
物が見える・肌で風を感じる、そんなレベルの物だと判ってしまっ
た。

「嘘みたいだ」

じゃあ、やっぱりここは……ミッシングワールドの中、って訳でもないのか。

何故か判る周辺情報が真っ黒に塗り潰されている。

ミッシングワールドなら、ほぼ全ての場所を探索済みだから、マップが出る筈……って、そういう感覚もおかしいんだが。

多分、異世界に呼ばれたって事なんだろうな……そう、ストーンと腑に落ちた。

「そついえば、もう一人、天才君もこっちに来てるんだろうか？」

俺が失敗で変な所に落とされたってんでなければ、同じ世界に来てるんだろう。

なんとなく、イレギュラーで二人来たって感じだったが。

「とにかく、明るくなるまでは、ジツとしてる方が無難か」

まあ、スキルが使えるなら何とかなるか。

バックパックの中に、簡易な鍋と油で使えるコンロがあったので、火をつける。

金属のカップもあるから、無駄にある米をすくって鍋に入れ、水と塩かけて粥にして食った。

因みに火を点けたり、水出したりも魔術だ……便利すぎる。

あと寝袋もある……至れり尽くせりな状態で一晚過ごした。

朝起きて、辺りの惨状に驚いた。

「なんだこりゃ？ 隕石でも落ちたのか？」

俺が落ちてこの有様ってのは考えたくないなあ」

自分が居るのが、出来立てっばいクレーターの底だったとか、驚きです。

縁までの高さが20m位あって、直径もたぶん数十から百m。

よく生きてたな、俺。

「ここに居てもしょうがないから、移動するか」

クレーターをよじ登り、人気がない森から歩き出した。

マナさえあれば、無からでも有を生める無駄に高めた生産系スキルと、自前の精神力で土を金に、金をマナ変換で、元手に使った精神力の数十倍を補完できるインチキ錬金術スキルの前には、自給自足は容易い。

でも、野宿は寂しいのだ。

「でも、この世界にも末期臭いミッシングワールド並みに、マスターリースキルの持ち主がうじゃうじゃ、わいてるんだらうか？」

戦争が煮詰まったら、やることは生産系にのめり込む事位しかないからなあ。

なんで、近代産業革命が起きないのかという位に、資源やエネルギーが余ってたからなあ。

ぶつちやけ、機兵の戦闘で起きる損害を基準にしているマスターレベルのスキルは、バランスが井勘定過ぎるのである。

それでも機兵の一つ二つがこけると、復帰に時間がかかるとかな、

機兵運用の資源コストやエネルギーコストがとんでもないせいも在るけど。

「機兵も有るんだろっうなあ、ちよつと見てみたいな。

折角いじれるんだから、生の機兵を弄ってみたいもんだ」

朝飯に粥を食いながら、今後のことを考えてみた。

「まずは人の居る所を探す。

それから、生活の基盤……スキルで食っていけるなら、それでいい。

駄目なら何とか……金銀にそれなり以上の価値が有るなら、ミスリルやらの価値もあるだろうし、錬金で」

ワールドの経済はミスリル・アダマンティン・オリハルコンが通貨扱いになるほどインフレ起こしてたけど。

「さて、こんな感じか？」

クレイゴーレムを十体ほど作成、方々へ向けて走らせる。

効果時間は延長してある。

姿が見えなくなっても、周辺情報には残る。

本当は飛べる使い魔でも使えればよかつたんだろうけど、そこまでの魔術スキルは無い。

飛べるゴーレムなら作れるけど、面倒くさい。

ペット召喚とかも手を出してないからなあ。

ミッシング・ワールドのペットは萌えないのだ。

一応、野良のアニマルには格好良いのも居るので、テイミングは少し取ってるけど。

少し移動して、雨風の凌げそうな場所を見つけて昼飯の準備をしていると、ゴーレムが三体潰された感覚を覚えた。

ゴーレム自体は脆いので、シャベルかなんかでザクザクやれば壊せるが、動物は近寄りたりしないだろうから、壊すとすれば人間だと思われる。

場所を確認すると、一体は真東に15キロ位進んだ辺りで壊れたらしい。

残りの二体は東向きから少しずらしていたせいか、時間を少し置いて壊れた。

町かなんかにぶつかつたにしても、少し対処が早すぎる気もしなくは無いが……人が居るならと、昼飯後に東へ向かって歩き始める事にした。

ああ、他のゴーレムは時間切れで崩れたが、特には何も見つからなかった。

「さて、とりあえず仮面はやめとこうな」

金属製のそれを握りつぶして、眼鏡に再構成。

荷物を纏めて担ぎなおすと、余った米をポン菓子にしようとして失敗した、ポップライスもどきをつまみつつ、ゴーレムの見つけた森の小道を進む。

獣道にしてはしっかりしてるので、人の出入りは間違いないと思う。

テクテク歩きながら、楽しい気分が盛り上がってくるものの。

「時間かければ、自転車くらい作れそうだけどなあ……この世界に

無かったら、まずいしなあ」

流石に機兵乗りを指定して呼ぶ位だから機兵はあるだろうし、機兵があるなら、それなりに機械は発達してるだろうけど。

諦めて歩き続けた。

小一時間ほど歩いて森の端に出ると、整備された道に突き当たった。

舗装はされていないけど、結構な往復があると思われる轍が見て取れた。

それに感心していると、シャンシャンシャンと鐘を鳴らして、坂向こうから何かが姿を現した。

「ん？ 何の音だ？」

じつと待ち構えていると、俺の脇を猛スピードで馬車がすっ飛んで行った。

砂煙の煽りを食らって、持ってたポン菓子（失敗作）が砂だらけ。遠くにも道が見えて、馬車の行き来が伺える。

どうやらゴーレムは、馬車にでも轢かれてしまったらしいな。さて、どっちに向かうかな。

しばらく眺めていると、南北の道のりを北に進む馬車は、木材だの袋詰めのお菓子だの荷物満載、南に進む馬車は人や雑多な生活物資を積んでいた。

北は大きな消費地で南は郊外かと思う。

「正体不明の怪しい人物は、田舎に向かうべしかな」

俺は手の中の砂塗しのお菓子を、小鳥に撒いてやると道端を南に歩き出した。

ただ歩くのにも飽きたので、手の中の硬貨を鍊金して遊んでいた。

その辺の石ころを自前の精神力でミスリルまで変換、ミスリルをマナに変換、溢れそうになるマナを使つて、金貨銀貨を片っ端からアダマンティン、ミスリルに。

一通り、変えてしまつてから、もしかして金貨しか使えなかつたらどうしようと気付いて途方にくれた。

単純に石ころを、金銀に変えてしまえば済む話だったが。

そんな事をしながら、いい加減歩き疲れた所で、道の傍の空き地でちよつとした市場が出来ている所に出くわした。

色々を持ち寄つた物を物々交換しているようだ。

休憩がてら眺めていると、人の話している言葉はちゃんと理解でき、文字もなんとなく読めるようで安心した。

でも訛つた日本語を、見るからにバタ臭い白人系の容貌の人達が流暢に喋っているのを見ると、なかなか違和感を感じる。

そして皆さん、随分と普通のおっちゃんおばちゃん、とんでもなく美形率が高いとかが無い事にも安心半分、軽い失望半分。

いや、エルフで美形なお姉さんとかが、居ないかなーとか思つていただけです。

赤ら顔のドワーフじみたビール腹のオッサンは沢山居ますが。

「さーて、どうしよっかなー」

どっか、ちゃんと泊まれる所を確保したいなあ。

木賃宿じゃなくて、そこそこちゃんとした所。

泥棒とかに寝てる所襲われたりするんのは嫌だしな。

「やっぱり誰ぞに聞くのが一番か」

道の端に竹つばい植物が生えてるのを確認。

竹藪に入って、剣を抜いて竹を一本バツサリ。

節残してトントンと更に切り詰めて、穴一つ開ける細工して、水筒三つ作成。

中に水を生成、よく洗って、今度は酒を入れる。

焼酎、日本酒、泡盛。

チヨイスがあれだが、単純にイメージしやすかつただけ。

栓をしても結構な匂いのするそれを持って、馬車を止めて休憩してるおっさんに声を掛けた。

「おじさん、今大丈夫かな？」

「なんだ？ 兄ちゃん。あんまり見ない顔だな」

「とりあえず、お近づきのしるしに一杯どう？」

「おお、こりやすまねえ」

おっちゃんの持っている、ビールかエールかの入ってたマグにターツと注いで薦めた。

「まずはググーツとね」

「お、こりやちよつと変わった風味だがなかなか旨いな」

機嫌の良くなったおっちゃんに、この辺で泊まれる所が無いか聞いてみた。

「持ち合わせはそれなりに有るから、安心して泊まれる所がいいなあ」

「ほう、安心して泊まれるとこねえ……」。

おりゃあ、そんな金払って泊まった事ねえからなあ。

宿屋つてんなら、村に行きや何軒かあるがな。

お貴族様が泊まるような大層な宿屋はねえぞ」

「そこまで大層な事は言わないよ。」

飯が旨くて、寝床があつたかくて、南京虫が居なけりや上等ぞ。

あと、綺麗なお姉さんでも居りゃ、最高かな」

ほれ、空いちゃったよ飲みねえ飲みねえと、今度は日本酒。

「こりゃうめえ!!」

兄ちゃん、おいえが村まで連れてってってやらーな」

あ、ちゃんぽん飲みが良くまわるのは、変わんないみたいだな。
ダウンしたおっちゃんの酔いがさめるまで、他の所を見てまわる
事にした。

「鍋、釜の穴あき、ナイフ、カマ、鉈、研ぎ直しは、私にお任せを
!!」

聞いててリサイクルカーと感心。

中世風の場所で、白人のおっちゃんが紳士然とした格好して、威
勢の良い声で鑄掛なんてもんをやってるとか……。

江戸の町並みの人形展示を思い出して、違和感に思いがけず噴出
しそうになる。

「ちょっとこの鍋さ、宿六ぶん殴ったら凹んじまったんだよ。

何とかしとくれよ」

「やあ、綺麗な姉さんのお願いとくれば、頑張らねばなりませんな

!!」

この錬金屋ウォルフガングヘルブライトにお任せを!!」

「ぶっ!?!」

……錬金屋?

物凄く気になったので、鍋の凹みを直す作業をじっと見ていた。

「確かにマナが使われてる。

錬金術で鍋直すのか……これだと、穴塞ぐのも研ぎなおすのも錬金術なんだろうな」

なるほど、やけに身軽な格好してるわけだ。

ノボリ一本と作業台にルーペ位しか持ってない。

でも、これで錬金術は使っても一応は大丈夫みたいだな。

しかし、なんて地域密着な魔術なんだ。

宗教的な物が物凄くおおらかなのか？

それとも魔術込みで宗教に取り込まれてるのか？

単なる技術として認識されてるのか？

さっぱり判らんなあ。

「なんだい、お兄さん。腰の物に研ぎが必要かな」

じつと見てたら、錬金屋のウォルフガング氏に話しかけられた。

「いや、大丈夫だよ。

それより、鍋の修理とかだと力任せで再構成しちゃうところなのに、素材の干渉だけで手直しするとか、良い腕してるなと」

実際、素材を再構成してしまう方が楽だと思う。

それを凹みだけ直して、ついでに疲労部も修復するとか……美術品じゃあるまいし、えらい手間だ。

「ほうほう、お若いのに良くお判りだ。

手に馴染んだ道具を何でもかんでも作り変えちゃいけない。

我々に求められているのはあくまでも修理なんだからね」

なるほど、勉強になるなあ。

「おう、錬金屋!!」

その腕で、うちの母ちゃんの面、直してくんねえか!!

昔は別嬪だったんだぜー」

「いやいや、私に出来るのは、もう一回鍋の修理の準備をしておくくらいで」

「おい、宿六!! あたしがあんたの性根を叩き直してやるよ!!」

「か、母ちゃん、冗談だつて冗談!!」

「やかましい!!」

「勘弁だー!!!!!!」

なんとという下町人情話……だから、赤鼻ドイツ親父でそういうのは違和感があるんだと何べん。

大草原の小さな の映像に、藤山 美の人情芝居を吹き替えてる ような……疲れる。

京言葉のお貴族様とか出てきたら暴れるぞ。

「さて、錬金術は使えても大丈夫というのは判った。

問題はお金か、粒の銀とか使つてたよな。

貨幣は無いのか？ それとも金銀の価値が思った以上に高いのか？

鍋の修理に指で摘んだくらいの銀の粒。

これは、金貨とかより砂金の方が良いのかも知れない。

空にした竹筒の一本に砂を入れて、荒い粒の砂金に換えた。

めっちゃ重い。

「これで、いっぺん買い物してみるか」

屋台で串焼き三本頼んで、小指の指先大の金を一粒出してみた。屋台のおっちゃんは、何も言わずに串焼きを二本追加してきた。基本、お釣りって言う概念は無いつばい。

そして、金の価値は思ったより低いつばい。

さつき錬金術の鍋修理が銀の粒だったから、銀の価値が高いのかと思つたら、錬金術の修理が安かつたという事ね。

正確な価値の基準はよく判らないけど。

あと、金の確認がまな板代わりの石台に置いて、包丁の背で叩くとか。

それで判ってるのか謎だったが、伸びた金の粒の成れの果てを見て、おっちゃんが良い笑顔になったので、どうやら混ざり物が無い判別は出来てるようだった。

しかし、こんなにでっかい串焼き五本も食えない。やたらしょっぱいし。

……

……

……

もう一本の空いてる竹筒に焼肉のタレを生成した。

串焼きにぶっ掛けて、おっちゃんに頼んでもう一あぶりして貰った。

残ったタレはおっちゃんにあげた。

匂いに釣られた連中が屋台を取り囲んだので、今日の商売は売

り切れ御礼だろう。

感謝してほしい。

牛つばい肉に焼肉のタレはそれなりに美味かった。

食い切れなかった串焼き二本を持って、最初の親父の所に戻ったが、まだダウンしてたので、錬金屋のウォルフガング氏に串焼きをあげた。

彼の話をお盛ちびちびやりながら聞かせて貰った。

肝つ玉母ちゃんに女手一人で育てて貰っておきながら、やんちゃして魔術の学院を飛び出してしまった事。

悪い連中と付き合ってたのもつかの間、バカやってる事に気付いたものの、仕事も無くやさぐれて故郷に帰ってきたら、母親にそんな意気地の無い息子なんて、私には居ないと叩き出された事。

それに発奮して学院に戻り、なんとか卒業して帰って来た時には、母親は病の床に就いていた事とか。

人間、親孝行は出来るうちにやっておくものだよと、泣きながら諭された。

だから、田舎風イギリス紳士に見えるおっちゃんに、そんな人情話は勘弁だと何度。

それはさておき、一応は魔術の事も聞いてみた。

錬金術に関しては登録制になっていて、モグリはあんまり宜しくないとの事。

ただ、登録自体は錬金術が使えて、名前が書ければそれで良いらしい。

大き目の街にある、最寄の学院関係の出先機関で登録できるとか。他の魔術に関しては、ギルドやらの絡みでそれ程は煩くは言われないとか。

ただ保証があれば箔はつくので、登録しないのはどっかしら後ろ暗いと思われがちだとの事。

なぜ錬金術だけが煩いかといわれると、やっと出てきた話題だが機兵の存在の為らしい。

高位の錬金術師は機兵の燃料になる、マナに変わりやすい金属の精製に必要なからだとか。

ミッシングワールドでは、ミスリルなんかのマナに変わりやすい金属を更に精製して、マナのバッテリーみたいなもんを作り出していたが、こっちではまんま燃料にしてるのか。

「機兵は国にとっては最高戦力だからね。

それに関わるだけに、錬金術を扱う者は細かく管理されるし、腕さえ良ければ取り立てられるのだよ」

ウォルフガング氏はそう話を纏めた。

「おーい、兄ちゃんよ!!」

すまん、すまん、ちょっと寝ちまつてた!!」

丁度良いタイミングで、おっちゃんが目覚めたようだ。約束どおり、村へ連れて行ってくれる為に探していたようだ。

「おや、ウォルフガングの旦那じゃないですか。今日はもうしまいですかい？」

おっちゃん、ウォルフガング氏と知り合いか？

「私は半分趣味みたいなもんだからね。

そういうヘンケルさんは、こんな所に今時分居るようだ……」
「うへー、母ちゃんはツノ出してやがるでしょうなあ」

ちよつとこめかみを揉んでから、おっちゃんことヘンケルさんに村まで連れて行って貰う事にした。

ウォルフガング氏も、同じ村の人だとのことで一緒に。

パカポコと馬の蹄の音を聞きながら、夕陽を肴に三人で酒盛りしながら村へ向かった。

「うちはどうかって感じで勉強中

村に着くまで、ヘンケル@恐妻家親父に街での噂を色々聞いた。この親父、この辺りの森で伐採した木材を、街に持って行って商売をしているらしい。

「それで最近一番のネタっていうと、十日程前に、王都へ銀の機兵が天から降り立ったってーのが」

「ぶっ！！」

「どうしたね、兄さん」

「いえ、何でも」

思わずむせた。

「それで、その機兵つてのがべらぼうに強いつて話でね。近衛の黒機士をバツサリー太刀で叩き伏せたとか」

な、何をやってるんだ天才君！！

こちとら目立たないように必死なのに。

大体、こっちに来てから、まだ二日目！！ たったの二日目です！！

つて、あれ？ 十日前？ 時間ずれてるのか？ まあいいや。

十日にしたつて、そんな噂になってどうすんの！！

なんと言う順応性というか、リアル中二病！！

俺なら自己嫌悪で寝込んでしまう。

「それで、その天の機士様が言うには、銀の機兵を作り上げた者も、天から降りてきているってえ話だ。

なんでも機士と魔術師の名を持つ者だとか。

その強さは天の機士様とて、その機士手ずからの機兵『ジークフ
リード』を持ってしても、魔術抜きでやっと勝ちが拾える程という、
恐るべき強者だってえんだから、こりゃよっぼど恐ろしい姿をして
いるにちげえねえ。

確か名を『KAZUYA』だとか」

うああああああああああああああああ！！！！！！

か、痒い、体中が痒い！！

死ぬ、死んでしまう。

臭くて痒くて耐えられん！！

自分の名前にくだらない尾ひれが付くと、これ程の破壊力を持つ
とは……！

頼むから、俺に中二病な設定をつけるな。

目とか腕が疼いたらどうしてくれる。

「それで、この先の森にも星が落ちたとかで、近々調査隊がやって
くるんだと」

「おや、どうしたのかね」

酒で口が良く回るようになってるヘンケルさんの横で、自己嫌悪
の舞を踊っている俺にウォルフガング氏が心配げに声をかけてきた。

「いえ、天の国って所が、どんなに恐ろしい所なんだろうと想像し
てしまいました」

「確かに。それほどの強さを持つ機兵同士が戦うとはね」

ミッシングワールドでは、機兵は対軍、対拠点用の兵器であって、
そのもの同士で戦う事は少ない。

これは機兵同士で殴り合って、そのダメージを直すコストより、
機兵の手が回らないくらいに人手を集めるほうが安いって事なのだ

が、その辺はゲームでもこちらのリアルでも変わらないらしい。

ただ聞くと、此方では従機兵という物があるそうで、人間相手や拠点を攻撃するのはそれらの仕事だとの事。

機兵は、従機兵を率いる象徴みたいな物で、戦う事は殆ど無いそう。

ただ、王都の近衛は十二機の機兵のみで構成された、対機兵掃討の部隊で、その黒の装甲に覆われた機兵を駆る者達は黒機士と呼ばれ、大陸中にその名を轟かせているそう。

だからこそ、その黒機士を倒した天の機士が、ここまで噂になるという訳だ。

ちなみに、ここまでの話を聞くだけで、俺の精神は瀕死の状態です。

「おう、兄ちゃん！！ 村に着いたぞ！！」

俺は、母ちゃんの機嫌を取りにいかにかやあならんでな、ここでお別れだ。

お勧めの宿屋はこの道を広場まで行ったドン突きだからあよ、迷うことねえ」

「ヘンケルさん、ありがとうございます」

「いいって事よー！！」

ヘンケル親父は、馬車を進めて村の裏に消えていった。

残された俺とウォルフガンク氏は、その背中に別れを告げると、広場まで一緒に一緒した。

「そら、ヘンケルさんが言っていた宿はそこだ」

「どうもありがとございました。色々と聞かせていただいて

「いやいや、良い酒を飲ませてもらった。礼には及ばないよ。

それでは……そうそう、君の名前を聞いていなかったね」

「ああ、杵島木 一哉といます」

「キシマギ？ キシマ・ギ・カズーヤ？ 不思議な音の名前だね」

あ……ああ、そか。

キシマギが、名前に取られてるのか。

格好付けてカズヤ・キシマギとか名乗らなくて良かった。

「ああー、その東の方の出でして」

「そうか、ではなキシマ君」

「はい、ウォルフガングさんも」

しょうがない、これからはキシマ・ギ・カズーヤで通すか……。

紹介して貰った宿屋だが、まあそれなりだった。

少し期待していた、綺麗なお姉さんは残念ながら居ない。

真っ赤なほっぺの小さな女の子は居たけど。

まあ、食事はそれなり。

塩気が多いのは保存の為にしょうがないんだろう。

とりあえず、当分厄介になるということで、砂金一掴みと調味料の類を山盛り生成して渡しておいた。

食事が改善されればいいのだが。

翌日から、ウォルフガングさんの蔵書を見せて貰って、色々と情報を得る事に費やした。

ついでに錬金術が使える事は話した。

登録の時は推薦状を書いてくれるそうだ。

さて、ここ数日で知り得た事を、ざっと並べてみるとする。

まあ、社会常識一般はおいおいとして、このあたりの地理と最近の情勢でも。

この村はサレス村といい、このサレス地方の殖民拠点だったらしい。南と東には山々が連なり、西には大きく森が広がっている。

サレス地方はラウレス大河によって南北にぶった切られており、この村は南部サレスに属する。

この村から北に向かった所にある川沿いには、ポートサレス市があり、ラウレス大河による輸送の玄関口である。

河を挟んだ北部サレスには、まんまノースサレス市があり、中央への陸路の中継地として栄えている。

主な産業としては、南部サレスでは森林資源と各種鉱物資源が豊富で、その中には石炭もあるらしく、木材と併せてそれらを燃料とした鍛冶や軽工業がポートサレス周辺に発達している。

北部サレスには、ラウレス大河の支流がしばしば氾濫を起こし、森から流れる肥沃な土を運んで来る為、農業が発達している。

元々はラウレス大河の治水と架橋事業の為の植民で、プロジェクトX張りの苦難があったらしい。

今ではのどかな良い土地に見えるのだが、昔はラウレス大河のおかげで毎年水浸しだったそうなの。

それを森林や鉱山からの資源の後押しで、二十年近くを掛けポートサレスを築き、河の流れを変え、橋を掛けた。

今のこの地方の隆盛は、この村の人たちにとって大きな誇りになっている。

というのは表向きという結果であって、実際の所をぶっちゃけると、この国……『サイオン王国』、今は『王国』とっておく……が、弱小国ながらその体を保っているのも、この地方の生産力のお陰ととってもいい。

というか、昔からそれなりの鉱物資源と、優秀な錬金術師が多く輩出される学院を持つが、武器は有れども兵居らずと相手にされないなかった王国。

それが、機兵や従機兵の台頭で戦が変わっていく中、周囲の国からひっそりと注目され、きな臭くなっていく空気の中で、この地方

の開発は国の未来を掛けた大博打だったのだ。

周囲は、開発が済んだ所でどうなるとも思っておらず、むしろちよつと様子を見ようかと時間を与えた。

実は時の宰相兼外務卿が、周囲の国に態々受ける積もりも出る筈も無い、サレス開発の為の融資を願い回ったりと、アホの振りして必死に時間を得たらしいのだが。

その時間の中、周囲の国が従機兵と軍団の運用を模索し、対拠点用の兵器としての従機兵と指揮官用の高級な従機兵としての機兵を整備していく中、この国はサレス開発で得た資源をぶつこんで、コスト度外視で作られた対機兵・対従機兵用の機兵少数と対歩兵のみを想定した軽従機兵の配備を進めていく。

そして、いち早く数を揃えた一国がこの国に機兵一・従機兵六という戦力で侵入した。

迎え撃つたのは先行配備が間に合った、後に黒機士と呼ばれる事になる機兵が一。

まだ搭乗者も決まっておらず、整備の錬金術師が乗った軽従機兵が二。

およそ数で三倍、純粹な戦力では七対一の状況をひっくり返したのは、真つ向勝負での黒機士の圧倒的な強さだった。

主力たる従機兵のうち、四機を大破、二機も機兵によってなんとか退く事が出来たものの、ただでは済んでいなかった。

そして機兵が退いた後の軍団を、王国の従機兵二機が蹂躪した。

ここに至つて、周囲の国は王国へ時間を与えた事を後悔し、その矛先を敗退し国力を損なつた隣国へと向けた。

因みに弱腰で非難されていた宰相は、救国の英雄の代名詞になり、この地方に名前を残した。

それ以降、王国は順調に機兵を増やし、近衛機士団は十二機の黒機士を持って、最強戦力として周囲の介入を拒んでいる。

思うに、最初の進入時には黒機士一機しか居なかつたんだから、

戦力を分けて二方向から投入すりゃよかつたんじゃなからうかと思う。

まあ、戦力固めて負けるとは思ってなかつたんだろうけど。

因みに負けた国、バルド皇国は元は王国の西から南に接していたが、敗戦のタイミングでお隣さんのヤデイス教国に調停の名の下に侵攻され、六割ほどを併合された上にバルド公領として、かろうじての自治を認めて貰うという状態にまで転げ落ちた。

今ではサレス地方西部の森林の向こうにあり、森林地帯の何処に国境線を引くかで揉めている状況だとか。

それにしても宗教こええ。

神の名の元に調停とか、あまりにインスタントな名分過ぎる。

現状、サイオン王国は北部にローレシア帝国、西にヤデイス教国、南西にバルド公領が接しているが、帝国は内部でごたついており、教国は海と接していない為にラウレス大河の水運を握っている王国を潰せない以上は、表向き仲良くしている。

残りのバルド公領は、恨みと教国の煽りも有って、王国にちょっかいを掛けたくはあるが、下手こいて又教国の餌になるのも馬鹿らしいので、嫌がらせ程度に落ち着いている。

まあ、一応は平和だということだ。

「ふう、久々に勉強した気分だな」

「お茶でもどうかかな？」

「いただきます」

ウォルフガング氏がポットとカップを持って書斎へやってきた。

俺はクッキーを生成、お茶請けにしてティータイムと洒落込んだ。

「しかし、君の錬金術は……錬金術とっていいのか、驚かされる

ね。

確かに鉱物だけでなく、水やアルコールを精製するものも居たが、料理が出来上がった状態で出てくるとはね」

「内緒ですよ」

ぶつちやけ、マナがプールできる条件さえ揃えば機兵の一発生成とか出来ますが……ふむ、この機兵つて鉱石から直接マナ取り出してるとなっけな。

どんな造りになってるのか、是非お目に掛かりたい。

「金属・鉱物も完成品で出来たりするのかな？」

「今は、この程度ですね」

気合を込めると、手の中で弄んでいた銀のティースプーンへ金で象嵌を施した。

マナのプール環境があれば、ゆっくりと考えて大物も出来るのだが、今の状態だと、自前の精神力だけではそう長いことのんびり出来ないで、疲れない程度ではこの寸法になってしまふ。

まあ、マナ変換しながらなら、もっとデカイ物も作れますし、出来合いの物の素材変換とかなら割と簡単に大物も弄れますが！。

「それは、揃いのお気に入りなんだが」

「あ、」

ティーセットを一式、丸々同じデザインで弄る事になった。

ツイテナイ日

その後の数日は何事もなく過ぎていた。

それで毎度のようにウォルフガングさんの所へ出かけたら、ヘンケルさんとウォルフガングさんの用事が重なって、ポートサレスまで足を伸ばすとの事。

それならと、俺も便乗して錬金術師の登録をする事にした。

「はい、こいつを変化させて下さい」

三十センチほどの鉄材を見せられ、そう言われたので取り合えず銅に変えといた。

「はい結構です」

あっさりとテスト？ が、終わり、登録は無事完了。

ハガレンよろしく錬金術師の証のアクセでも有るのかと思っっていたら、銀の指輪を貰った。

四つ目の竜がデザインされている。

目の宝石の色で色々と判断されるそうだが、今一つレベルが判らない。

大体、材質を変質させる事しかやってないのだし。

見せて貰うと、ウォルフガングさんが全部赤、俺が青一つ。

赤は素材操作、青は材質操作の事らしく、学院を出れば大体四つ目になるそうだ。

「なるほど、変化させるって言われて形を変えたら赤になるのか」

野良の登録では、最初は目を一つしか入れないのが規定で、さら

にテストを受ければ埋まっていこうだ。

面倒くさい。

どうせ、この国の中でしか通用しないらしいし……流石に四つ目になっていると、学院の名前のおかげで他国でも多少の効き目は有るそうだが。

ついでに傭兵ギルドにも名前だけ登録する事に。

後ろ暗いと思われるよりはマシ、多少の身分証代わりになるらしいし。

こちらでは、割としっかりテストした……というか、試験管がぶん殴ってくるのを捌けとか、手を抜いたら怪我するようなもんだつたせいもある。

「よろしく願います」

「おう、さっそくいくぞ、そっから剣もってこい!!」

ちょ、この人どう見ても堅気じゃねえ!!

「早くしろよ!!」

「は、はい!! ただいま!!」

「ほら、ボウズ!! 受けるよ、ホラホラ!!」

「ちよっと、重い、いてえ、クソツ!!」

上からガツンガツン模擬刀振り下ろしてきやがる。

上背が二メートル超えてるようなオッサン相手にどうしろと。

懐に入って、金的……と見せかけて、踏み込みついでにかかどで小指を狙って踏みしめた。

ゴツツと違和感。

「くっくっく、つま先には金物入れてあるんだよなこれが」

「キタネエ!!」

俺の反撃に気を良くしたのか、上機嫌のおっさんに時間一杯追い掛け回された。

そして次。

「えーと、そのサークルの中で、私の魔術に耐えてください」

「ちよつと待てえ!!」

優男の声に反論する間もなく、サークル内の足元に魔術の火炎を放り込まれた。

何人かは、魔力を振り絞って耐えようとしていたが、やってられないので、俺はさっさと抜け出した。

「はい、キミ合格ね。とりあえず、もう一回試験するから、こつち来て」

「何すんですか？ 怪我するような事は勘弁ですよ」

「大丈夫だつて、炎よ!!」

「ぶっ!?!」

あわててポケットの中の金貨をマナ変換。

マナは体に取り込まずに、そのまま制御し魔術にぶつけて相殺した。

「ど、どどど、どう考えても大丈夫じゃないでしょっ!! あれ食らったら!!」

「いやいや、直前で消すつもりだったさ」

「嘘だ!!」

「いやいや、あ!!」

「あ、って何!?! 何がいやいやなんですか!?!」

ニヤニヤされるばかりで、俺はとっとと登録証を貰って帰った。

「あのボウズ、面白いな」

「面白いですなあ」

「機転も利くし、生き汚い」

「どちらかといえば魔術が主、剣は余技のようですね。」

それに、最後のマナ制御……放射じゃなく、周囲のマナを制御しましたよ」

「機士か」

「「キシマ・ギ・カズーヤ。とりあえず、一級の即戦力だな」ですな」

そんな事を言われてるとは知らず、えらい目にあつたとぼやきながら、俺はヘンケルさんの馬車に乗せて貰って、村へと帰った。

酒場にて

「くだらない」

テーブルの主が、濡れた唇をいらだたしげに拭い、一言そう吐き捨てた。

「気になるの？ 黒機士を倒したという、天の機士」

向かいに座る、銀の髪が美しい伶俐な印象の女の言葉に、テーブルの主、赤いライオンヘアの女が無言で酒を注ぎ、一気に煽った。飲み干した勢いのまま、カップをテーブルに叩きつける。

「くだらないっ！！」

天の機士だかなんだか判らない奴もっ！！

そいつに倒される黒機士もっ！！

それを有り難がる連中もっ！！ 全部まとめてくだらない！！」

激昂し、酒が切れたとウェイターに噛み付くその様子にため息一つ。

「よりによってギルド呼び出しの前日に、こんなにご機嫌斜めになっちゃうなんてね」

銀の女の憂いの表情に、年若いウェイターが見惚れる。

その様子に気分を悪くした様子もなく、女はクスリと微笑んで赤い顔で緊張するウェイターに声を掛ける。

「ごめんなさい、相方が今日は帰れそうもないから、部屋を一つ空けておいてくれる？」

それと、水を一杯頂戴」

慌てて返事をするウェイターを捕まえてチップを握らせると、つぶれていびきをかき始めた、赤髪の連れをどうやって二階の部屋に運ぼうかと思案し始めた。

「はあ」

なんで、傭兵ギルドなんぞに呼び出されねばならないのだろう？
登録から数日、ギルドからお手紙が届きました。

相談がてら、ウォルフガング氏のお宅にお茶しに行つて、手紙を
見せる。

「これは正式な代物だね。」

無視してもかまわないが、少なくとも公的な機関からの要請だし」

「あまり無碍にも出来ない……と」

「まあ、話を聞くだけ聞いてみても構わないんじゃないかね？」

ウォルフガング氏の言葉に頷いて、俺は取り合えずポートサレス
の町に向かうことにした。

この街、通りの敷石だの建物だのが赤レンガ風味で、工場の煙突
と港町つてのも併せて、明治っぽくもあり、横浜っぽくもあり……
まあ、川沿いで潮気は無い訳だが。

そんな街を、前回ゆっくり見て回れなかったので、眺めて歩く。
それでも随分と余裕を持って、傭兵ギルドの建物にたどり着いた
が……思ったよりもデカイ。

これは何処に行けばいいのやら。

ちなみに書類には、上位ランク者召集とか書いてあって、そこは
かたなく不安を煽ってくれる。

「説明しよう！！ 高ランクな登録者は、ある程度の義務を負うん

だぜー！！

高ランクになれば、いい装備を手に入れやすいし、割のいい仕事回ってくる。

その上、依頼主に貴族様でも居りゃあ、召抱えられる道すら有り得るかもなんだぜー！！

忙しいんで俺はもう行くぜー！！ あばよっー！！」

言うだけ言って、通りすがりの兄さんは姿を消した。

「おっと、窓口はあそこだぜー！！」

帰ってきて、一つの窓口を指差すとまた去っていった。いつたい、誰なんだ。

それに高ランクって……まだ初心者御用達であろうお使いイベントすら、請けおった事が無いのに。

一体、誰が、いつの間に、俺を評価したというのか。

恩恵すら受けて無いのに義務とか有り得ないと思います。

とはいえ、よく判らない権力相手に文句を言う度胸もなく、大人しく来てる時点で駄目な気はしてますが。

「すみません、この書類はこちらの窓口で？」

「あ、その会議室に入ってお待ちください」

「はあ……」

そんな感じで、会議室らしいホールの椅子が並べられてる所に通されて、書類を渡されてサインさせられている。

「外人部隊の契約書じゃなくて良かった」

例えそうでも、周りの圧力に負けてサインしてしまいそうだ。

周囲の連中、どう見ても堅気じゃないです。
こないだの試験官と、どこいじやなかるうか？

因みに書類の内容は、仕事を受ける受けないに関わらずの守秘義務の確認と誓約。

「考えたらずいんせずに帰ればよかつたんでは……………」

もう遅いけど。

しかし見る奴見る奴、体がデカくて柄が悪い。

高ランク〓社会生活不適格者つて気がしてきた。

「それでは依頼の説明を」

「少し待つて貰いたいな！！」

会議室に、張りのある声が響いた。

「おい、赤獅子がまたご機嫌斜めだぞ」

「今度はどいつ……………ああ、あのひよろいボウズか」

「可哀想に、これで当分はまともな飯が食えなくなるぜ」

「それならまだいいぜ、男を辞める羽目にならなきゃいいけどな」

そして、ボソボソと声を潜めて交わされる言葉……………こつちみんなよ！！泣くぞー！！

「おい、そのひよろい奴！！そいつも仕事に絡むのか？

勘弁してほしいね。そんな奴に背中を預ける気にはなれないな

！！！」

その評価はまったく正しいです。

ここに居るのが間違いですよ。

「ですよー。 帰ってもいいですよがね、彼も一応の評価を受けていますのでね」 聞けよ司会！！」

「残念ながら、彼を外す理由が無いのですよ。」

無論、彼が辞退するなり、何らかの事情で受けられないとなれば別ですが……」

おい、くつくくつて肩を震わせるなよ司会！！

そこのお姉さんも通じ合ってんじゃねえよ！！

帰るつってんだろ！！

「ちよつと、そいつの評価って奴を確認してみたいね」

「あまり時間はありませんよ」

「すぐに終わるよ」

「話し聞けよ！！」

なんですか？ このラウレス大河の流れも真つ青の強引な急展開は、流石に温厚な俺も怒るよ。

さつきから高ランク云々とか言われても、扱いは絶対高ランクのそれじゃないし。

もともと高ランクとか言う言葉は俺にはアレルギーじみてんだよ！！

それでも我慢してたのに。

なるほど居心地悪かったのは理由が判った。

認められて無いからだ。 他人様からも、自分でも。

「よーし、実力で認めさせてあげようじゃないか」

あー、アドレナリン出過ぎて頭おかしくなってるな。

「あなたはこのあと『表に出る』という」
「お前、表に出る」

「……」

「……」

「……く」

「「うはあはははははは！ あっはははははは！」「」

周囲がドツと笑いの発作に襲われた。

ポケットのコインをマナ変換。

何人かが、ハツとした顔でこちらを見る。

魔術師も居るのか……遅いね。

「重き荷を背負え、押し潰されよ、萎え萎びれて倒れる」

不意打ち気味に具体的な言葉でのワンワードの詠唱を三つ。

意味的には加重、重圧、疲労。

地味だがキツイ状態異常のスペルを三重起動。

俺の魔術スキルは並みの上だが、マナ増量で無理やり範囲と効果と時間を強化。

そしてバタバタと椅子から転げ落ちる先輩方、無論司会の人も。

「良く判らんが、ムカついたら実力行使しても問題ないってのは理解した。

大概、中二病的な展開だが、目と腕の代わりにヘタレなりの矜持が疼くんだよ。

新しい環境でおっかなびっくり、大人しくしてんのに！！

それについ最近、目標に手が届きかけたところで、ぽつと出の天才に頭を踏まれて、跳び越されて、チャンス潰されて、転げ落ちたと

「こなんだよ。」

ふふふ、八つ当たりってやった事なかったけどさ、喧嘩売って来た相手にやり返すのは正義だよな。

「反論があればどうぞ」

「……」

「……」

「……」

「異論無いようなので、八つ当たりさせて貰うから」

腰から剣を抜く。

司会の前に行つて、その首筋を剣先の腹でピタピタと叩く。

おびえた表情にちよつとばかり溜飲が下がる。

そのまま席の前から順繰りに、全員の首筋に剣先を当てて行く。

脅えた顔をする人も、睨み付けてくる人も居た。

それでも、剣を当てられると目を瞑り、剣が離れるとホツとした顔をして……次の瞬間、安堵した時に自分が許せなくなるのか、皆一様に歯を噛み締めて悔しげな顔をする。

「やべえ、これ楽しい」

自分の見知らぬ性癖がちよつと顔を出したこと二ドキドキしながら、そこうつつしているうちに、ラスト二人。

一人は赤いライオンヘアのさっきの女性。

もう一人は、赤い人の連れなのか、銀髪の美人さん。

何故か、この二人は平然と椅子に腰掛けてらっしゃいます。

なんだか、非常に怖い。 項の辺りにピリピリ来る。

魔術の影響下で皆が椅子から転げ落ちてるのに、二人とも座った姿勢のまま居られるのは、影響を受けてなお強い影響を受けな

いほどに強いか。

銀髪の女性は涼しい顔をしてるし、赤い髪の女性はニンマリ笑ってる。

やせ我慢には見えない。

バカやって上がったたテンションが下がっていく。

「なんだい、女には刃を向けられないとでも？ は、これはとんだ王子様だ」

おお、喋った。

今の俺に挑発なんて聞かないぜ！！

やっぱり、魔術が利いてないんじゃないか。

「なんだ、人間辞めてるのかと思ったら。 多分だけど銀髪の人が凄く腕がいいのかね」

「馬鹿」

銀髪の人も喋った。

というか、つい挑発めいた事を口にした赤い髪の相方へ、何を喋っているのかと突っ込んだ。

「じゃあ、もうこれで良いだろ！！」

赤い人が良いさま、腰に手をやって、ひゅつと一呼吸。とっさに構えた剣が弾かれそうな一撃。

「し、死んだらどうする！！」

「知るか馬鹿！！」「ごめんなさいね」

罵詈雑言と素直な謝罪。

そのゴメンは死んだら謝りますという意味ですか、止められないからというゴメンですか！！

「うわわわわ、押し込まれる。　なんか最近こういう事があったよ
うな。」

しのぐだけでそのまんま終わりに一直線とかー！！」
「さっさと死ねー！！」

勘だけで剣を振って、重い一撃をしのぐ。

そう何度も受けられるかー！！

覚悟を決めて、受けた拍子で自分から吹っ飛んで間を空ける。

ぐえだのぐおだのと声を出す軟らかい物を踏んだけど気にしない。
そして追いかけてくる赤い人。

赤獅子とか云われてただけあって、獲物追い込んでる時が凄く嬉
しそうなのは……見たくねー！！

十歩の間合いが、次の瞬間五歩になる。

金貨をマナ変換、そのマナで別の金貨をミスリルへ、そしてミス
リルをマナへ。

適当な法則で倍倍どころでなく増大、そんな膨大なマナが身に収
まる筈も無く、思いつきり垂れ流す。

そのマナを身に取り込まず、そのままコントロール。
魔術の構成を織り上げる。

「なんだかしらないけどね、これだけマナがあれば、私に魔術は利
かないよー！！」

「なぜ、こんな量のマナが？　これは？」

赤と銀の二人が、身近のマナをコントロールして、己の周囲へ集
めだす。

そのマナの厚みは、確かに適当な魔術は通らない。

つか、体外のmanaをコントロールするのは、機士かよ。

機兵はmanaを動力に変えるが、manaがあれば機兵が動くという訳でも無い。

ミッシングウォーでは神経信号だの精神信号だの動かすという設定だったが、この世界では機士が体外のmanaをコントロールして、その干渉で機兵をコントロールしている。

つまり、機士は体外のmanaをコントロールできる。

そして俺はこの世界に来て、機兵をコントロールする時の感覚と精度で、体外のmanaをコントロールできる事を感じた。

つまり、ゲームパッドで機兵を動かしてたような天才君がこっちに来て、なんとかかんとか動かしてるレベルに、この近在で最強とというような連中が負けるといふなら、あのアホみたいな拘りで機兵を動かしてた俺が、ことmana操作でそこらの腕利きことに負けるはずが無い！！

「あんたも機士？」

「機兵は無いけどな」

軽口叩きながら、二人の纏っているmanaの防御壁を取り上げる。

「嘘」

「……」

構成は単純に衝撃・破壊のみ。

あとは、ただひたすらに圧縮する。

「これぞ、対機兵魔術……ビッグバン・パンチだ！！」

「……何だつてー！！」

という白昼夢を見た（説明とも言う）

まあ、あながち妄想オンリーでもない。

無意識にあの二人がマナをまとっているのは間違いなく、それが機士のスキルだということも正しい。

違うのは、そんな度胸が俺にはなく、DSでもないのだ。

「何をぶつぶつ言っている。ほら、さっさと来な！！」

「勘弁してくださいよー」

髪の毛を引っつかまれてズルズルと。

上背は向こうの方が10cm近く高いとか……この白人種メインの世界は、割と大柄な人が多いとしても女性としては破格の立派な体格をしている。

その上で、鍛えられた腕っ節は、軽々と片手で俺を引きずって行く。

思いがけず、なんか甘い香りがしてきても素直にドキドキできない。

つか心臓バクバクで、吊橋効果で恋に落ちそうだ！！

「痛い、痛いつて、ハゲル、抜ける！！」

「文句の多い奴だな」

ポイと放り出されたのは、会議室ホールで使っていない後方のス

ペース。

「で、何が良い？」

「何……とは？」

彼女の問いの意味は想像が付くものの、なんと応えても考えたくない事になりそう、あえて惚けて見せた。

「なら、素手にしよう」

きっぱりした決断で、こちらの葛藤をあっさり無にしてくれると、彼女はスタスタと長い足で間を詰めて来る。

薄いグレーのインナーにモスグリーンのデニムシャツを腕まくり。薄い皮で補強の入った茶とベージュのパンツにこついブーツ。

だらしなく胸元を開けているせいで、座り込んだ状態から見上げるその光景のなんと雄大な事か。

「ふ、色ガキ」

手を腰に、自慢げに見せ付けるように胸を張り、一言呟くと共に蹴りが来た。

慌てて転がって逃げると、今さっきまで頭のあった場所に、ぶっ刺さるような勢いの爪先蹴りが通り過ぎていった。

「ごろごろと必死で後転して、彼女と距離を開けると立ち上がって頭を確認する。」

「あ、頭ついてる！？」

頭をぺたぺたやりながら、こめかみに感じた重い風の感触を思い出し、背筋に走った電気が限界ぎりぎりの尿意を想像させて体が震

えた。

「安心してる場合か？」

頭が無事でほっとしてたのに、なんでそっとしておいてくれませんかー！！

思った以上の近い声に見上げれば、伸ばされた右腕に再び髪の毛を掴まれて、体を引き起こされると……振り上げられる左腕が見えた。

「ああ、走馬灯」

スローモーション……ゆっくりとやってくる……コブシの軌道が……綺麗……だ。

それを、最後まで見つめて、受け止めた。

「お？」

「何？」

受け止めた俺も、受け止められた方も、ビックリして時間が一瞬止まった。

そして、時間が普通どおりに流れ出すと二人して飛び退くように距離を開けた。

何が起きたんだ？ ああ、当たるなーと思って、じっと眺めていただけ。

避けようとか止めようとか、何も考えてなかったのに。

「なかなかやるじゃないか。これは、騙されていたか？」

「いや、騙したりとかして無いですから……」

「試せば判るさ……」

どっかにスイッチが入ったのか、今まで無造作に近づいて来ていたのが、構えを取ってのステップから飛び込んできた。

右足前の半身右肩入り身から、ジャブ気味に右の平手で目打ちに来る。

手の甲でなく、指曲げてのカギ手で顔面引っかけに来るのが見えて怖気が走った。

中途半端に避けて、どこかしら捕まれたり、鼻やら耳をもがれたり泣けるので、大げさに避ける。

おとつとと体勢を整えるまもなく、右手を振り払った格好から、右ローに繋げたコンビネーションを太ももに貰って、声にならない悲鳴で喚くと転げまわった。

「っー！！っー！！」

「あれ？ さっきのはやっぱしマグレか？」

熱い痛い熱い痛い！！

涙が止まんない、息が詰まる、頭が回らない、誰か何とかしてくれ！！ 喧嘩なんか得意じゃないんだ！！ 訓練だとか試験なら気構えも出来るけど、こんないきなり訳のわからない状況でどうしたらいいんだよ！！

『コントロール受け取りました。 GM権限によるハラスメント対処の対応を開始します』

意識が途切れた。

「あれ？」

「あれ？ じゃない！！」

座り込み、疲れきった顔の赤髪の女性に睨まれた。

辺りを見回すと……椅子が吹っ飛び、柱と壁の装飾もグチャグチャに剥がれ落ちていた。

おおよそ会議室ホール後ろ半分の、天井と床が目も当てられない状況に。

「いったい何が？」

「大暴れだったけど」

「誰が？」

「貴方よ」

今度は銀髪の女性にため息をつかれた。

「これ、俺が？」

「そうだ」「そうよ」

「嘘っぽいなあ」

「こつちは当事者だからって必死で止める羽目になったんだ！！」

それでもこの有様なんだぞ！！ 冗談でこんな事するか！！」

「いや、そんな事を言われても、覚えが無いんですって」

まあ、可能不可能なら十分可能だし、無意識にでもやったのかも
知れないけど。

それより問題は……。

「これって弁償です？」
「そうね」

銀髪の人、さらにため息。

「俺も？」

「当たり前だ！！」

赤い人。

「理不尽だ！！ いきなり呼ばれて襲われて、それで魔術が暴発したからって」

「ああ、もう判ってるよ！！ だから割り勘なんだよ！！」

私らと、あんたと、司会のおっさんで！！」

「それでも結構な理不尽さだと思う」

「私らが五分、司会のおっさんが三分、あんたが二分だよ！！」

悪いけどこれ以上は何をどうやっても出ないから！！

ああ、もう！！ あの子のメンテも済んで無いのにならっけつだよ！！！

なんで、あんたみたいなのに引っかかったんだよ！！」

「何を言ってるんだか……こちとら仕事する気もなかったし、高ラックに登録してくれなんて事も一言も言っただけで、なんか偉いさんから呼び出されて迷惑だなんて思ってたら、いきなり喧嘩売られて痛い目見て金払うとか！！」

まあ、金に関して言えば、金だの銀だので済む話なら、幾らでも作って見せますが？

「ああ、ミスリル五単位とか……会議室ごときに金を掛けすぎなんだよ！！！」

「仕方ないわ。ギルド内部は全部屋に対魔術を施しているんだもの。」

そのお陰でこの程度で済んだともいえるんだし」

「ミスリルねえ……」

「あなたもなんとか都合をつけないと大変よ。」

ギルドは取立てに関しては温情を期待できる相手じゃないから」

いや、何事に関しても温情なんか感じてませんから!!

迷惑しか蒙ってませんから!!

「まあ、ミスリルで話が済むなら、問題ないですけどね」

「なんだって」「なんですって」

「ミスリルなら、いくらか持ち合わせが」

ほら、とポケットから金貨をミスリルに変換した物を、取り出してみせる。

「なんせ、錬金術師ですから」

四つ目竜の指輪を見せびらかした。

石入ってるのは一つだけだな。

「学院出でもない、石一つの錬金術師が、ミスリルを持つてるなんて……」

「別に野良で腕の良い錬金術師が居てもいいでしょう」

「いいえ、それ程の腕があるなら、どの国も何をしてでも困い込もうとするわ」

「そうだな。どこの馬の骨だろうとお貴族様も夢じゃない」

「いや、そういうの面倒臭いから。」

錬金術で金銀作って生活できるなら、それだけ作って生活するし」

金銀が上位金属の素材で、消耗品でしかないという脅威の世界では、それは単なる加工品でしかないから。

その辺の村で鉱石を買ってきて、それらを元にして金銀を作る在野の錬金術師は、単なる第二次産業の一つでしかない。

だから錬金術で安全に合法で食っていけるならそれでOK。

あ、それで貨幣がイマイチ見かけないのか……金銀も物々交換の一つでしかないのね。

持ち運びしやすく、確実に国が引き取ってくれる代物ってレベルのものなんだろう。

「無駄な才能だな」

失礼な、こんな異世界に飛ばされてなければ、ちゃんと普通に社会生活してます……よ？

こんな所に来て身元が安定しないなら、ひっそり細々生きていくのが一番なの。

誰かみたいに国の上に絡んで、名前売り出してどうする。

そりゃ、身分保障してくれる味方は出来るだろうけどさ、でも敵も出来るのは間違いない。

自分で許容できるメリットとデメリットの程度を考えると、地味に生きていくのが一番です。

「まあ、その辺は人の勝手ですんで。

ただ、どうも俺みたいなのがミスリル持ってるのも一般的にはオカシイみたいだから、お姉さん方が太っ腹に皆の分を払ったって事にしてくれない？

十単位でーと、こんなもんでしょ？」

ミッシングワールド通貨のコインを、10グラム単位の装飾も何

も無いコインに変える。

ウォルフガングさんに教えてもらった限りでは、一単位と漠然に言う場合は10グラムの筈。
それを十二枚手渡す。

「十枚は支払いへ、一枚はお姉さん方への手間賃で、もう一枚の余りは司会のおっさんのご機嫌取りにでもしといて。

それで、俺の事うやむやにしておいてくれると嬉しいな」

「へえ……もし、もっと寄越せって言ったらどうする？」

「……お姉さん方の宿を見つけたら持つてる金目の物を全部鉛にしちやうけど」

「……」

「……」

「商談成立だ」

こうして、なんとか話をつけて傭兵ギルドを後にした。

だが結局の所、この日は痛い目みて余計な時間を食っただけで、碌な目にあわなかった訳だ

退屈から急転？

「キシマ君？ どうしたね。 悩み事かね」

「ああ、ここの生活に慣れたら、色々と満たされない渴望があらわになりました」

ぶっちゃけ活字とトキメキが足りません。

活字欠乏は勉強やら物造りで発散していますが、俺だって若い男子なんです…… 女性とのふれあいが欲しい。

でもね、ここの女性って基本ふくよかで骨太なんだもん。

それに白人系の女性って現代でもカッコいいとか綺麗とかは居ても、可愛いって感じる事って少ないじゃない。

まして、ここいら有名な別嬪さんである奥さんが、某天空の城の親方の奥さんレベルだという事で色々と察して欲しい。

してみると、あのギルドで出会った二人は相当レアな存在だったんだよなあ。

可愛いという方面ではなく、ニヤリ笑いの似合う、劇画的というかファンタジー挿絵的な美人だとしても。

「はあ」

「南方に行けば、多様な混血で色々な人が居るようだがね」

俺の大層切実な溜息に、呆れた様子でウォルフガング氏が応えた。

「世間知らずの俺がウロウロするのも怖いですから」

このあたり良い人ばかりで、暮らしやすく良い所なんだけだなあ。

「はあ」

「まあ可憐・美形というなら王家・貴族の血筋に多いといえるがね。美形ゆえに貴族ではなく、力ゆえに貴族。」

その力で綺麗どころを物にしてきた歴史がある訳だからね」

「ははは、実も蓋も無いですね」

「貴族が天から降りて来たなんて事を信じている者は居ないさ。」

その点、天の機士様はねえ。 さぞかし、取り込もうとする連中は多いだろう」

天才君……南無……いや、美人に押しかけられるなら、心配してやる義理は無いか。

「羨ましいこつてすね」

「全くだね」

しばらく静かにお茶の時間を過した。

さて、俺は最近物造りに精を出しているといったが、何をしているかというと機兵をいじっている。

実はウォルフガング氏、村から森に向かう途中の警備詰り所で、その従機兵のメンテをたまに手伝っているのだ。

従機兵といっても王国の代物だから、従機兵の中でも最軽量の物だが、それでも6m近い金属の塊は威圧感がある（通常の従機兵で8〜10m。機兵は頭部が在ると、人型の脚部構造をしている為、鳥足の従機兵より背が高く、10〜13mくらいまで）

まあ、このあたりには賊が出る事もなく、一応置いているといったレベルなので、とことん旧式の上に燃料用のミスリルも、混ぜ物した質の悪い物がほんのちょっと。

実際に動かすのも、ポートサレスからの巡回が年一で来る時程度なので、メンテの必要は限りなく無くて、ぶっちゃけるとウォルフガング氏の暇つぶしでしかない。

その暇つぶしに同行した俺が、それ以来チヨコチヨコ顔を出しては弄らせて貰っている。

とはいえ、いくらウォルフガング氏が信用されてても、公的な施設の戦力をこும்ホイホイ触れてしまふのはどうなのだといいたくもあるが、俺の楽しみが無くなるので言わない。

ここの詰所も軍を退いた六十過ぎのおっちゃんが二人居るだけだから、酒とつまみを持って寄ったら、大歓迎してくれるし。

「さて、ばれにくい駆動部分のミスリルによるコーティングと、摩擦表面のフィニッシングは完了つと。

流石にフレーム肉抜きとがして軽量化すると拙いだろうから、機関部分の抵抗なくして……。

こつそり、マナプールでも仕込むかな」

ここの機兵つてば、燃料をマナに変えて使わなかった出力分、垂れ流してやがるからな。

出力がパワー要る時も要らない時も関係なしとか無駄すぎる。

垂れ流し分を幾らかでも保持できれば、出力ピークの谷間でもトルクを稼げるし、ガツクンガツクンする動きが滑らかになる。

一番簡単なのは、あっちの機関を乗せちゃう事だが……天才君のゲームの機兵がこつちに来て動いている以上、問題はないはず……でもそんな事して、ばれたらえらい事に。

と、なんやかんやと一日中触つてて、気が付いたら辺りは真っ暗だった。

「おい、キシマ君よ！！ そろそろ帰らんと熊あ出るぞー」

「げ、そりゃ本当ですか？」

「いやいや熊はでんがな、野犬くらいは出るかも知れんからの。気をつけるに越した事は無い」

「勘弁してくださいよー！！」

わははと笑う二人に、また来ますと言って、村へ向かう。

意外と月明かりでも足元は明るい。

それでも森と山に囲まれたこの辺りでは、人は小さい事を思い知らされる。

「ん？」

なにか森のほうでチラツと何かが光ったような気がした。

「月の光が反射するような物は無いし……人魂とか？ やだよ、西洋お化けは」

まさかーと思いつつ、足早になってしまつと、どんどん余計な事を考えてしまつ。

「ふふふふふ、別に怖いわけじゃないんだからね。

ちよつと、万が一を考えて、走っちゃってるだけなんだから」

もう、思いつきり走っている俺へ、森の中からちらつく光が、その明滅をハッキリとさせてくる。

そして微かに聞こえだす、大地を蹴立てる音、車輪の音。

さらにでかいマナの気配。

「ちょっと待て？ 馬車？ んで、機兵か？ なんだ脅かすなよ！
！ じゃなくて、あつちは旧道か？」

久々に謎スキルを起動し、周囲のマップを思い浮かべる……色々と動き回ったので、不確定で黒い部分は減っているが森はまだ道のとこしか判らない。

しかし、馬車らしいものは旧道を通って走っている。

よくもこの道が無事にやってきたもんだ。

あそこは伐採した材木の運び出しに開かれた道。

でも切り出しの地区が変わって、ずっと放置されてるはず。

崖が崩れても不思議じゃないから危ないぞと言われてたけど……

そんな所を馬車で走る馬鹿が居るとか……そして、機兵とか。

「なんだか嫌な予感がする……くそ、詰所に戻ろう！！」

俺は来た道を慌てて引き返した。

「おい、爺さん達！！」

「「な、なんじゃ！？」」

酒盛り中にビックリしてひっくり返りそうな様子の二人に、森での事を伝えた。

「あの道の向こうはバルド領、こちらの先はサレス村とラウレスに繋がってる。

じゃがな、村への道は材木積んでふさいどるしな」

「ラウレス脇の製材所跡も荒れ放題じゃしな……川に出る道しかの

こつとらん。

しかし、機兵と来たか……まさかバルドからの進入とは考えたくは無いがのう」

「放つてもおけないだろ？」

「「そうじゃな」のう」

「じゃあ、追っかけよう！！」

「いや、まてまて」

「うちの老いぼれじゃあ、追いつくのは難しいじゃろ。」

ミスリルもそれ程は無いしの」

大丈夫！！ 俺とウォルフガンク氏が弄つてたのは伊達じゃない！！

それにミスリルなんぞいくらでもある！！

「俺が何とかするから！！ 爺ちゃん達は身元保証と大義名分になつてくれたらいいから！！」

「じゃあないのう」

「いつも上手い酒もらつとるしな」

それでも、酒を抜くには迎え酒ーとかいいながら、往生際悪く酒を放さない爺ちゃん達を引きずって、機兵の所まで連れて行く。

「ほう、久々に見たが、男前になつとるな」

「外装も直しておいたからね」

こつそりフレームに高位素材つかつたら、バランス崩れて外装手直しする羽目になつたとかは内緒。

形状は変えずに素材配分だけで重量バランスとか取るの大変だったです。

「さて、行きますよ!!」

「何気にキシマ君が動かしたるがのう」

「わしら、酒がはいつとるしな!!」

「喋ってたら舌嚙みますよ!!」

機兵と違つて、従機兵は乗るところが結構広い。

複数人で動かす事も考えられてるからだが、今はそれもありがたい。

爺さん達がマナ生成の機関へ燃料になる金属のコインを放り込む投入口の、その場所に出つ張つた、消火器レバーみたいなパーツを握りロックを外す。

そして自動拳銃のマガジンじみたパーツを引っ張り出すと、俺が差し出したミスリルコインを大盤振る舞いで十枚詰め、元の場所へ叩き込む。

「準備完了じゃ!!」

「しかし、豪勢じゃな」

「行きます!!」

機関を作動させると、マガジンよりコインが装填され、機関の中でコインが碎かれる。

コインはマナを吐き出し、高密度のマナの中で不安定になったミスリルが、更に崩壊しつつマナに変わっていく。

確かにこれじゃあ、細かい制御は無理臭い。

「まあ、いいか。それよりも出番だぞ!!」

お前が主役だ!! 突つ走れ!! ロシナンテ!!」

何十年も、目的もなく眠っていた『老いぼれ驢馬』が、二人の錬金術師が気まぐれで手を入れまくった成果と豪勢な餌で大きな嘶き

をあげた！！

初めての戦い（仮）

「ところで、どっから旧道へ入る気かの？」

「この辺りからは森が邪魔で、繋がつとる道といえば獣道くらいのもんじゃないな」

流石に森の木々を蹴倒して道を切り開くのは、機体のウエイト的な問題で少々難しい。

「急がば回れって事で、村の外れまで行って、材木除けて入ります。ちよつと遠回りになりますが、どうせ出遅れてますし、何事が起きてるのかだけ確認が出来れば、後はどっかの偉いさんが片付けてくれますよ。」

俺は平穩無事な、のんびんだらりな生活が壊れなきゃOKなんです」

言ってる内に、村はずれにある旧道への入り口が見えてきた。

半端な材木を積み上げてバリケードにしてあるが、杭で挟んで積んでいるだけなので機兵で押せば、簡単に壊せる。

一応、機兵に下手な故障が出ないように、腰に取り付けてあったロングフレイルを手に取り、石突を地面に付きこんで槌子の原理で材木を押しつけた。

通常、機兵の武器は剣や槍、或いは矛、戟等のポールアームだが、人間相手に蹂躞戦をする王国型の軽量従機兵は、長柄の先に鎖と分銅を付けたロングフレイルか、腰だめに振る刈り取り鎌を装備している事が多いらしい。

つまり時速70キロくらいで突っ走る鉄の塊が、人間を蹴倒し踏みつけて行く訳だが、どうせなら蹂躞する幅を稼ぎたいって事で、鎌だのフレイルだのを横手に構えて、軍勢の外側から削っていくら

しい。

フレイルを見ると、身長くらい有る柄の先に4 m長の鎖が間を空けて六本垂れ下がっていて、各々の先に人間の頭よりもでっかい鉄球がくつついている。(とても酷い暖簾だ)

こんなのが後ろから、ガラガラと地面を跳ね回りつつ、追いかけてきたら恐怖だろう……。

「さて、その分かれ道を右じゃ。

新しい轍が残つとる所を見ると、まだ追いかけては続いとるよ
うじゃな」

「いやいや、追いかけることは限らんぞ。 機兵をお供の……あん

まり考えたく無いのう」

「それはともかく、この足跡は鳥足じゃないよねえ。

左右に機体を振ってぬかるみを避けてる。 こんなに綺麗に機体を振り回せるとなると……機兵かあ。 やだなあ」

「じゃな」「じゃのう」

王国の従機兵で他所の国の従機兵を倒した話もあるらしいが、脱走した軍人崩れの持ち出した、あちこち動かなくなった従機兵を相手のタコ殴りだったそうだし。

単純に上背が倍、重量でドンだけ違うやらかな機兵相手に何が出来るだろう。

「ま、普通ならだけど。 ああ、目立つ事したくないんだけどなあ」

頭へ浮かべるマップでは、そろそろ森が開けて製材所跡の広い原っぱが見えてくるはず。

足を止めると機兵へのコントロールを一段階上げる。

漏れ出るマナを全制御し、漏れをなくす。

これでマナでの気配察知はされないだろう。

そうしてから、そろそろと足を進め、森の切れ目にひよいと顔をのぞかせる。

暗視なんかは付いて無いので、自前の魔術で何とかするついでに遠視も行っつう。

「お、見えた！！」

原っぱには馬車がひっくり返り、その近くに機兵が膝立ち。

恐らく搭乗姿勢つてことは、機士は表に出ている？

首の下辺りを見ると装甲が開いており、誰かが姿を現している。

地上に注意を払っているようだが、誰か居るのか？

とにかくチャンスである。

「爺さん達、あの機兵をぶっ飛ばしても問題ないよな！！」

爺さん達に幻影で機兵のイメージを見せて、確認を取る。

「どうも王国の機兵じゃねえしな」

「うちの詰め所に何の連絡もきとらんしのう」

「まとめると？」

「「やっちまっつていいんじゃないね」「」

うん、OK！！

見ると、ここから機兵までは200mちょい。

従機兵の足の速さは馬よりかなり早いはずだが、加速は鈍い。

王国の従機兵はかなりマシな部類だが、出足込みで十五秒はかかるだろつう。

起動済みの機兵の掌握に何秒掛かるかは機士の腕次第だが、あんまり博打はしたくない。

分の悪い賭けは！！とかカッコいい事を言ってみたくは、オヤツ賭けたポーカー位が限界です。命がけとかは出来るだけ避ける方向で。

「とりあえず機兵までの通り道に、効果範囲のつかいサイレンスとダークネスを掛ける。

スタートと同時にマナ操作で、逆方向に気配を出して機兵の注意を釣って、魔術解除と同時に突っ込んで、膝裏に全力ぶっこんで、足を殺した後は相手の手の届かない所からフルボッコ。それで多分、大丈夫でしょ。

駄目なら逃げる感じで……おっと、武器武器」

「こんなフレイルの鉄球ごとき、機兵相手にや豆鉄砲みたいなもんじゃしな。

しかし、得物なんぞないが？ どうするんじゃ」

「え？ なんか言った？」

集中してたら、聞き逃した。

「とりあえず、槍でいいでしょ」

ロシナンテの手に、6m程の槍。

「いつの間に……」

不完全とはいえ、マナ供給環境があれば、そこそこの大物も作れます。

じゃあ、行くとしますか。

「6m x 6mの200mに闇と静寂を！！ ふ、ふふふのふ、完璧過ぎる自分が怖い」

どうも大掛かりな魔術を見せびらかせると思つと、なんか気分がゾクゾクする！！

「本当にかかつとんのか不安じゃのう」

「大丈夫！！ 大丈夫！！」

こつちからあつちが見えなくなっているという事は、完璧に掛かっているという事ですよ！！

レッツゴー！！ とばかりに、ロシナントテを突っ走らせる。

流石に通常は漏れてロスになるマナも、制御して駆動に叩き込めるおかげで、パワーが上がっている。

ただ、フレームを強化してなかったら、バラバラになつてたかもしれない。

「き、軋んどうるしなー！！」

「多分、大丈夫！！ それ！！ 怪しい気配投影！！」

くくく、奴さんは今頃大慌てで振り向いているはず！！
その可哀想な姿が見れなくて残念だ。

「なにやらキシマ君が悪い顔しとるのう」

「ふふふ、今なら何を言われても笑つて流せますよ。

3、2、1、よし魔術解除！！ あとは背後にいちげきいのうあ
ああああああ！！」

あんた！！ なんで、こつちに剣振りかぶって待つてんの！！
大慌てで槍を地面にぶつ刺しつつ、足裏をスキー板に見立ててポ
ーゲンボーゲン！！

「「「まーがーれえー!!」「」」

原っぱ滑るー!!!　ズドンと地面を揺るがす剣の一撃。

ロシナンテは進行方向を何とか曲げ、剣風を背中に感じながら、その一撃をグリコなポーズで回避した。

「はーはーはー、生きてるー」

「じゅ、寿命が縮んだのう」

「ま、まだ助かった訳じゃないがなー」

ハッ!!!　返しの一撃が来る!!!　ダツシュで逃げる。

「な、なぜだ!!!　なぜ気付いた!!!」

盛り上がっていた気分が全て消し飛んだ所で、外部に音声を飛ばし、相手の機兵に問いかけた。

「音も姿も見えなかったが……大地が揺れていた」

律儀に返してくる若い男の声。

あーっ、そこは（振動は）考えてなかったー!!!

「く、こんな所で我が策を打ち破る切れ者と出会っとは……」

「策士策につっー程にや、大した策でもなかったがのう」

「人間、悪い事は出来んという証拠じゃな」

「爺さんたちは　どっちの味方だよ」

言い争っていると、あちらの機士から声が掛かった。

「とまれ、こうなってはそちらに勝ち目は無かるう。」

素直にここから引いてくれればよし、出来ぬというなら斬るが、どうする?」

見なかった事にすれば、見逃してくれるって?

「それじゃあ、そういう「信用してはなりません!!」その男が! 『教国』の機士たる『ルドガー』シユバウアーが、私達を見逃す筈はありません!!」びっくりしたあ

誰? 女の子の声? 甲高い声が、地面の方から聞こえてくる。馬車に乗ってた人か? それは、そうと……この機士。

「「「きよ、教国!?!」」」

「ふむ、せつかく偽装を施していたが……これで、見逃す事は出来なくなったか」

「ちよつ!!! その馬鹿!! 俺らを巻き込みやがった!!」
「退路立たれたのう」「梯子外されたしな」

「な、何を言っているのです!! あなたがたも王国の機士でしょう!!」

事は王国の存亡にも関わるのです!! さあ、戦いなさい!!」
「「「無茶言つな!!!」」」無茶を言つものだ」

敵さんまで心が一つになった。

今までに何度か言っているけど復習しよう。

王国の従機兵は対兵用で、対機兵は全く考慮されていないサイズです。(無論、王国といえど今では重量級の従機兵も居るそうですが。鹵獲品とか貴族の自前とか)

ざっと見た感じ、ルドガーさんの機兵が約12m、こつち6m……
…ドンだけリーチとウェイトが違うんだ!!

「と、とても大きいDEATHね」

不意打ち駄目なら普通は考えるだけ無駄。

「さて、申し訳ないが時間も無い。そろそろ死んでもらおう」

雲が晴れ、ルドガーさんの機兵が月明かりにその姿を晒した。
キヤーカッコイー。物凄く正統派の強そうな機兵です。

「こつやって見ると、確かに教国の意匠が垣間見えるの」

「偽装には気を配ったのだから」

「いやいや、遠目じゃまったく判らんかったんじゃしな」

「こつ判ってたら、関わらなかつたよ」のう「しなー」

大国・政治に介入……駄目、絶対!!

バルド公領のちよっかいか、金持ってる傭兵崩れ位だと思ってた
わ。

「こつ愁傷様とっておこつ」

機兵が剣を構えた。

こちらもとりあえず槍を構えて一步引く。

「が、がんばってください!!」

喧しいこのお馬鹿!!

「あなたは今のうちに逃げた馬を捕まえて、さっさと助けを呼んで
来い!!」

(そして、相手の隙を生んでくれる尊い犠牲になってくれ)

俺の声に、お馬鹿がパタパタと走り出そうとして、別の声に固められた。

「巫女殿、あなたが逃げれば、まずはあなたから潰す羽目になる。流石に異教の巫女とはいえ、女性を潰してしまうのは心苦しい。あまり見たくは無いものだよ、大地の染みになってしまふ様というものは……どうか、動かないで頂きたい」

上手いなあ。 流石にああ言われたら動けまい。

「そ、そんな、そんな事をすれば、あなた方の知りたい事は」

必死のお馬鹿……巫女？ が声をひっくり返らせながらの絶叫……あれ？ どつかで聞いた事があるような？

「確かにあなたを確保せよとは言われているが、既に我々の得たものが、銀の機兵と対峙しうる事は、あなたの様子を見ても明らか。となれば、これ以上の不確定要素が湧いて来ないように……してしまっても問題は有るまい。」

いや、むしろ、その方が正しいに違いない」

格好いい騎士然としていたルドガーさんから、なんか本音がポロツと漏れた。

つか、湧いて来る不確定要素って何？

ともあれ……

「もしかして結構いろいろあったのかな……？ なんか凄く気持ち悪が籠っているような。」

うーむ、何故かその気持ちがわかるような」

俺も、なぜか女性相手だというのに……ファンタジーなロールプレイならヒロインでも不思議じゃない感じで登場したのに、あの巫女さんの声を聞くと、気持ちがささくれる。きっと、前世で仇かなにかだったに違いない。

「ふ、君とは良い酒が飲めたかも知れないな、とても残念だ」

対峙する機兵の間に風が走る。

「それはとても光栄だが、そこのお馬鹿、さっさと行け!!」

「でも、でもっ」

「でもじゃない!!」

「判りました!! あなたを信じます!!」

「自分の命を人任せにするなよ!!」

「ええーっ!!」

あ、バタバタしてるうちにコケタ。

「なんでかなあ、本当にちょっと可愛いっばいのに、ときめかないなあ」

とはいえ、このままでは話が進まない。

秘術!!! 30メートルテレフォンの術!!! (ウインドボイス、またはマナ式系電話)

(巫女さんとやら、真面目な話だから聞いてくれ)

「はれ? だれですか?」

(声を出すな、小さく『はい』と『いいえ』だけ呟けば聞こえる)

(はい)

(これは向こうには聞かれてない。今から突っ込んで、隙を作るからなんとか全力で其処から離れる。ぼやぼやしていると巻き込まれるぞ)

(な、なにをするんですか)

(生き埋めになりたくなかったら頑張つて逃げてくれ)

(は、はい)

「さて、仕切りなおしだ!! ルドガー卿!!」

「いや、これでも私は僧職だね。機士では有るが、卿と呼ばれる身分ではないよ」

「そ、そうなんですか……これは失礼。でも坊さんをなんて呼んだら良いか判らん。とにかく行くぜ!!」

「ふむ、その小兵で私の白機士に立ち向かう意気は買つが、それは無謀という物だ!!」

先手はこちら、ロシナントで槍を突き出し、白機士の左脚内側の膝横を狙う。

ぶつちやけ、継ぎ目に入れないとこつちの馬力じゃ通らん。

「くっ、素早いっ」

白機士は狙われた足を下げず、咄嗟の反応でカウンター気味に蹴り返してくる。

槍は脛の装甲に突き立つが、貫くまでに至らず、その互いの力が掛かった槍は、ロシナントの手から弾き飛ばされた。

蹴りは止まらず、その軌道はこちらを捉えている。

俺はロシナントをくるりと一回転ターンさせ、白機士の脚へ絡みつくよう蹴りをいなしつつ裏に入る。

「取った!!」

「無手でどうしようというのかっ!!」

「あまいっ!!」

瞬時に安定した槍ほどの大物は無理だが、短時間だけ持つようなインスタントなパンチダガーは一呼吸で十分作れる。

左手で白機士の脚を抱え、ダガーを握り締めた右拳を突きこみ、白機士の膝の裏にミスリル製のダガーを抉りこむ。

何度か、駆動用のワイヤーだの何だのを切断した感触と、フレームに突き立って刃先が欠けた感触。

「なにっ」

力を失った左脚に驚愕の声がし、白機士が左逆手に持った剣で背後に居るロシナンテを突こうとする。

俺はダガーを手放して離れざま、崩壊していくダガーを触媒に適当な構成で爆発させた。

それがとどめになったか、白機士がバランスを崩し、膝を突く。

「ふう、なんとかあったか」

「まさか、私の白機士が膝を突く事になるうとは……君、いや貴殿は一体何者だというのか?」

「通りすがりの機兵も持てない貧乏機士だよ」

「信じられん……こうなれば、巫女殿だけでも!!」

白機士が剣を振り上げ、バタバタ走って逃げる巫女に向けて投げつけようとした。

「させんよ!!」

ロシナンテに地面へコツソリ書かせた『しんり』の文字。
大地にマナを注ぎ込んで、構成を起動する。

「我、真理の鍵持ちで、かりそめの命与えん」

大地が揺れた。

機兵の機動する振動よりも大きく揺れた。

そしてロシナンテが立つ位置が隆起し、巨大な土人形の上半身が
起き上がった。

その頭の位置に居るのはロシナンテ、腹の位置に居るのは白機士。

「これは錬金術の化け物かっ」

白機士はバランスを崩して剣を放てなかった。

たたらを踏み、片足と両手を使って土人形の腹から飛び降りてる。

俺は『しんり』から『んり』の部分を消して『し』とする。

それにあわせて土人形が崩れ、大量の土砂が雪崩れ落ちる。

土で埋めてどうにかなる機兵じゃないが、身動きは出来まい。

再度気合を込めて作った槍二号をロシナンテに握らせ、土人形に
持ち上げられた30m程の高さから白機士めがけて突っ込んだ。

「これで、終わりだ!!」

「ぬづづっ!!」

槍は白機士の胸を目掛け進む。

流石にロシナンテの重量と位置エネルギーを転化した破壊力を槍
に込めれば、機兵といえど貫けるはず。

と思っていました。

「させんっ!!」

上空から、そんな声と共に砲声二連。

ドドンと一発は地面に、一発はロシナンテに……直撃でなかったので助かったが、物凄い回転モーメントが付いた、うげえ。

ミキサースタ状態で、地面に叩き付けられる。

土人形が掘り起こした土砂の分、ショックはやわらいだ物の、華奢なロシナンテが動けるダメージではなく……形勢逆転？

「シーマか!?!」

「まさか、白機士の回収に来てこのような。間に合ってようございまして」

「責めてくれるな、あの従機兵、乗り手が尋常ではない。油断するなよ」

聞こえる限りじゃ、ルドガーさんの味方が来たらしいな。

「爺さんたち生きてる?」

「不思議じゃが生きとるのう」「良く生きとるもんじゃな」「一体、何事が?」

仰向けになつたロシナンテから、空に浮かぶ黒い影が見えた。

「な、なんだありゃ?」

見た目通りで言えば……空中戦艦?

ミッシングワールドにも無いようなトンデモ設定が……鉄道はあったけどさ。

それと猟銃とかはあるのを見てたけど……あの規模の火炮があるとか聞いてませんよ。

しかも飛行船にぶら下げるとか……。

「教国の機兵母艦じゃな。あんなもんが出張ってくるとはのう」「白機士が回収されとるしな」

ワイヤーやら何やらが白機士に絡みつき、機兵が引き上げられていく。砲門は装填が終わっているのか不明だが、こっちをピツタリ睨んでいる。

あの規模の代物を持っているのは、機兵の集中運用何ぞを行う王国、山とツンドラだらけで飛ばないとやってられない帝国、金持ってる教国、教国に持たせられる公領……なんだ全部持つてんじやねーか。あんまり珍しい物でも無いらしい。

その空中母艦から、ルドガーさんの声が降ってきた。

「教国の為を思えば、君は此処で消しておくべきなのだろうが……。この私をその機兵で追い詰めた、その恐るべき腕は惜しくもあり。また、今は時間も無いようだ」

見ると、巫女さんが村に向かって馬で爆走しているのが見えた。

「今日の所は此処で退かせて貰おう。だが最後に言っておく。王国の黒機士が最強という伝説はもはや昔日の物と為ろうとしている。」

だからこそその天の機士の召喚であり、銀の機兵なのだ。

だが我々は銀の機兵に対峙しうるものを手に入れた。

君、教国に来たまえ！！君になれば、白機士を任せても惜しく

「は無い」

「ルドガー様、白機士の回収が完了いたしました」

「時間のようだ。では、また会おう。」

できるならば、また戦場で。その時は肩を並べている事を願う」

空中母艦が、向きを変え離れていく。

「勝手な事を言いやがって」

俺と爺さん達は、安心した拍子にグツタリと疲れにひしゃげた。

そして暫くの間、そのまま突っ伏していたのだった。

後片付け……そしてうやむやへ。

翌朝

「おいおい、朝になつてるじゃないか……」

気が付いたら夜が明けていた。

ひっくり返ったロシナンテの中で、ゴキゴキなる体を起こして辺りを見回すと、爺さん達が暢気に眠っていた。

「おお、母さんが……」

「うお、親父」

あ、なんか迎えに来てる。

「こらこら、まだそっち逝っちゃ駄目だつて。婆ちゃんとかもま

だ元気なんだから」

揺すつて起こすと、フガフガ言いながら目を覚ました。

「夢じゃなかったんじゃな」

「エライ目におうたのう」

「全く……」

あたりには砲撃の跡とか、埋まつてるロシナンテとか、掘り返された土砂とか……良く生きてたな。

とりあえず食器とお握り（おかか&昆布）と玉子焼き（ネギ入り出汁巻き）を出して朝飯にした。

なぜか錬金＋料理のスキルで卵を出すと、溶き卵経由の料理しか

作れない。

ゆえに目玉焼きが出来ない。 何でだろう。
因みにメレンゲは出せるのになあ。

「それにしても爺さん達も米の飯に慣れたなあ」

差し入れの成果か？

「海苔くれ」「醤油くれ」

「はいはい、お茶も出しとくから」

……

……

……

昼

「しかし、あの巫女さん。 助けなんて来ねえじゃねーか」

飯食って一息ついて、お日様が空の天辺に来ても、辺りは静かな物で。

さぞや軍部がワラワラやって来て、解説方々色々巻き込まれると思っただのに。

これなら今の内に、馬車直して地面均してロシナンテ直して足跡消して……姿消しとくか？

「爺さん達は褒美とか欲しい？ 出るかどうか知らんけど」

「五分五分で口封じされそうじゃしなあ」

「年金貰いながらボーっとしとくのがいいのう」
「決まりだね」

半日掛けて、色々と作業をした……死ねる。
なんとか片を付けて、夕方には宿に帰って寝た。

更に翌日の朝

「ここです！！　ここで教国の白機士に襲われたんです！！」

一人ハッスルする白い衣装を着た少女に、村からの早馬で呼び集められた軍・ギルド・学院の混成メンバーが生暖かい目を向けている。

「確かに、掘り返されたような跡はあるが……機兵が戦闘すればこの程度ではすまんよ。」

それとも何かね？　教国の機兵が態々土地を均していったとでも言うのかね？

それに馬車もこの通りだ。

横転して壊れた様子などどこにも無い……夢でも見たのではないかね？

大体、警備の軽従機兵が教国の白機士と渡り合う？

そんなことが出来るなら、王国は大陸を制覇しているだろうな」

壮年の男がため息一つ。

その男の下に、若い男が小走りでやってきた。

「小隊長、警備詰め所に行つてまいりましたが、従機兵は特に損傷も無く、詰めている二人の話でも、昨夜に何事かあつた様子は無いとのことです。」

その二人も退役した方達ですので、それなりの年齢ですし、魔術を使えるという事も無いようです」

報告を聞く、小隊長と呼ばれた壮年の男性と少女の顔色が変わつていく。

「巫女殿、いくら王家守護サイオンジのお方とはいえ「う、嘘じゃないんです!!」「はあ……。」

おい、お前ら!!… とりあえず撤収だ!!…」

「「はっ!!」「」

「嘘じゃないのにー!!…」

そして夕方。

起きたら夕方だった。

宿の一階で晩飯を食つてたら、いろいろと話が聞けた。

どうやら一昨日の真夜中に、馬に乗つた女の子が凄く剣幕でやつて来たらしいが、馬から落つこちた拍子に気絶して、丸一日目覚めなかつたそう。

それで昨日の夕方頃に、俺が村へ帰つてきたのと入れ違い位で、ポートサレスに向かつたそう。

で、今朝には軍だのを伴つた大人数で帰つて来て、えらい騒ぎだ

っ
たらしい。

俺は後始末でくたびれきっていたので、気付かずに寝ていたが、それで今は撤収している途中らしく、村に居残っていた連中が、今朝降ろしたばかりの荷物を馬車に積み込んでいる。

「どんなに絶望しても、あいつに命を託すのだけは絶対にやめよう」
心からの誓いだった。

教国からこんにちは（前）

「ああ、風呂に入りたいな」

桶にお湯を出して、体を拭きながら、そう思った。

遠出した時なんかは、穴掘って湯を溜めて露天風呂したりしているが、普段は体を拭いているだけで済ましている……でかい風呂桶を出してみるか？

そんな事を思ってしまうほど、本当に錬金術＋生産スキルはインチキすぎる。

服もタオルも何でも出てくるのには、色々と考えさせられる物があつた。

ただ、デザインはイメージなので、あんまり格好のいいものは、作れないのが難点といえば難点（俺のセンス的な意味で）

まあ、その辺で買ってきた、お気に入りのコットンシャツとデニムのズボンを、コピーして普段着にしているから、いいのだけど。

そうそう。練習がてら、宿の女の子の服を色違いで数点作つたら喜ばれた。

ただ、どこにも縫い目が無い服という物に、ちょっと突っ込まれたが（別種の布地の境にも縫い目が無かつたし）

「どうも……こないだの戦い以来、力を使う事に対して、達成感みたいな物を感じるようになってるな」

あまり良く無い兆候かも。

基本、最低限の事だけしてニートやってるのが、一番安全だと思う。

でも結構、色々とやっちゃってるよな。

そろそろ、何かしらおかしいと、思われたりしてないのだろうか？

「……どんどん不安になってき」キシマさん。 お客さんですよ
「うわぁ、ビックリした!!」

「キシマです」

「シーマと申します。」

姓と身分を名乗る事は許されておりませんので……申し訳ありませんが

「いや、それは構いませんが」

目の前に美人さんが居る。

首の後ろで纏めた金髪、白い肌にブルーアイズ。

雰囲気的には、傭兵ギルドで出会った銀髪の人に近いか。

ただ、あの人よりも世間ずれしてなさそうというか、硬そうというか、冗談が通じなさそうだ。

「あの、俺にどういう?」

「腕の良い錬金術師だと伺いました」

「広場向こうのウオルフ GANG さんが、腕は良いと思いますが」

「その方から伺いました」

「そうなんですか……」

あのオヤジめ、美人に目が眩んだか。

「で、俺に何をしろと?」

「『ソーマ』という品物を作れないだろうか? というのが、我が

主からの依頼です」

「ソーマ？」

えーと……？

というか、どのソーマ？

伝説で言うところの神の酒？ ソーマ？ ネクターの親戚？ M
Pとか精神力が回復するアイテム？ この世界独自の代物？ それ
とも…… ワールドでのソーマ？

普通はそっちに話が行くのが正解ですよー。

はい、説明のターンです。

ミッシングワールドでのソーマとは液体化したマナの事で、固
体化させた物をフィロソフィアストーン、俗に賢者の石と呼んでます
…… 大げさな名称ですね。

使い道は、ソーマがマナプールとパワー伝達にかかわる代物で、
石の方がコントロール用の感覚子とされています。

この世界では、ミスリルなんかを崩壊させてマナを取りだすと、
垂れ流しになっているマナを、機士が意思でコントロールして機兵
の四肢へ流して行き、更に機体各部もコントロールして機兵を動か
しています。

マナを流すのには、フレイムや駆動部にミスリルなんかの合金を
多く使って流れやすく、コントロールには、さらに純度の高いアダ
マンティンやミスリルを、目印として配置することで、感覚を掴み
やすくする工夫があるようです。

しかし、ワールドでは使用分以外のマナはソーマとしてプールさ
れ（ワールドの機兵にはマナ>ソーマの変換機構は大なり小なり付
いている）、そのソーマはパイプラインに沿ってフレイム内をめぐ
り、その流れにはマナを通しやすくする効果がある為、特に意識し
なくても四肢に沿ってマナが流れるようになり、更に各駆動部での
出力不足時には、ソーマからマナへ戻され、パワーソースとして使

われます。

こちらの機兵へ導入すれば、単純にパワー・効率・機兵コントロールの難易度が大きく変わるでしょう。

石の方は、コントロール用の目印としてだけではなく、駆動部の反射行動を仕込めるようになります（特定刺激で、対応したマナの放射パターンを出力します）

たとえば、アクションフィギュアを一步踏み出したポーズにするのに、両腿を前後に開き、膝を曲げ、足首を地面にあわせるのには、色々とする事になるのですが、機兵も同じで手の代わりにマナコントロールのスキルでそれを行います。

この意思の腕の数が多い程、同時に動かせるほど、機士として能力が高いという訳ですね（普通の人は両手分の意識しか出来ないですが、ルドガーさんは八本程度を使っていたと思う……俺？ 全関節同時に摘んで、全表面からマナが漏れないように押さえ込んで、あまりで魔術使えるくらいには……何この厨設定）

それが石を使う事で、膝を突付くと一步踏み込む形に成るような設定をしておけば、コントロールの難易度は非常に下がる訳です。

ただし自由度も下がり、突発的に変な行動をするリスクもあるので、俺はあんまり積極的には使っていませんが。

はい、説明終わりです。 お疲れ様でした。

「知らない、判らない、と言ってしまいたいんですが……。
なんか、すごい狙われてませんか？ 俺」

主に額とうなじがチリチリ、そして正面から腹にジクジクするよ
うな圧迫感を感じます。

「申し訳ありませんが、私共には貴方があの機士だという確信があ

ります。

主の命がなければ、ここで消しておきたい。

それをお忘れにならずに、もう一度ご返答を」

「ああ、シーマさんね……思い出した。大砲撃ちこんでくれた人か！。

思いつきり教国の人じゃねえか！！」

「お静かに願います」

腹への圧迫感が増しました。 気持ち悪い。

逃げれば逃げられるとは思いますが……平穏な生活が遠ざかっていく。

「はいはい、まず答える前に安全の保障が欲しいな。

わざわざこないだの事をうやむやにしたのは、ややこしい事に関わって敵味方から命を狙われる様な表舞台に出たくなかったからね。

今既に努力が無駄になつてる感じがするけど……」

ああ、あの苦労はなんだったんだ。

「どうすれば、保障になると？」

「こういう事は二度と御免だから。

俺の事を今知ってる連中以外には、絶対に漏らさない事。

無論の事、俺の命は狙わない事。

内緒の仕事を受ける位の譲歩は此方もするから、あくまでも腕の良い、在野の錬金術師って事にしておいて欲しい。

そちらが、俺の事をどう思ってるかは知らないけどね。

それで、ルドガーさんの名前に誓って貰おうか」

ルドガーさんの名前を出したら固まった。

「……誓いましょう」

「じゃあ、ソーマってこつこつ奴の事だよね」

そこらの空中をぎゅっと握り締めると、手の中から虹色の水滴が滴り落ちた。

水滴はテーブルに弾けると、マナに戻り空中に拡散していった。

「……化け物」

腹の圧迫感が更に増した。

ちよっ！！ おーちーっけー！！

「約束約束！！」

ハツとしたシーマさんによって、腹の圧迫感は無くなったが、今はリアルに死を感じました。

大丈夫か？ この人……交渉には向いていないと思います。

つか、チェンジをお願いしたい。

「それと、外に張ってるスナイパーさん？ も、何とかして欲しい。頭が痛くなってくる」

これ見よがしの殺気とか、一般人にはキツイです。

「それは……」

視線そらすなよ。

「ああ、もういいです。それより話を進めましょう。」

それよりどっからソーマなんて話が？

天の機士関連じゃないと出てこない話だと思いますが。

もしかして、例の巫女さんから？」

そうじゃないと、俺と天才君以外にもオーパーツ紛いなのが色々こっち来てる事になるような。

いや、待てよ？ こないだ、天の機士に対峙できるような物が云々とか言ってたか。

「それは、」

「もしかして、天の機士以外にも何かが来てる？ それが教国にある？」

「やはり、あなたは危険です」

シーマさん、愕然とした顔をして、次の瞬間ポツリと零した。

「一ついいかな、それって答えを言ってるようなものだから。

とぼける事を覚えた方がいいよ。それがポーカーフェイス」

不具合出てサービスとめてる時のユーザーへの対応にも必須。

「くっ」

そんな屈辱っ！！ 見たいな顔をしなくても。

「ああ、もう。話を単純にしよう。

俺はソーマを、俺が思っている物で間違いないのなら、何とかできると思う。

そっちはソーマをどうしたいんだ？ それで俺に対する報酬は？ 命が惜しければ！！ とか言うのは辞めてよ」

「わが主はあなたを取り立てるようにと」

「それは遠慮したいなあ。 宮仕えはしたくない」

働いたら負けだと思ってる。

「金も要らないしな……」

何気なく、シーマさんと目が合った。

「……っ!？」

シーマさんが自分の体を、両手でかき抱いて息を詰まらせた……

おい、何を考えた!!

だから、何かを覚悟するような顔をすんな!!

なんか、頭にちらつく殺気が凄く強まって来てるんですががががががが!!

「いやー、スマンスマン。 ベルンストは生真面目すぎてな」

頭をかきながら、ハツハツハと笑うおっさん。

俺が射殺されかけた所で割って入って来てくれた命の恩人。

おっさんといっても、多分三十いってるかどうか位だろう。

傷とひげが年を判らなくしているが、大雑把に見えて隙の無い老練さと、精気に溢れたエネルギーを感じさせる肉体の若さを兼ね備えている。

脇に立つシーマさんが、怖い顔をして睨んでいるのを見ると、同

じくルドガーさんの部下なんだろうが、叩き上げの先任で頭が上がらない苦手といった所なんだろうな。

「なんか、もの凄く疲れてるんですけど。また今度にして貰えませんかね？」

テーブルにべったりとへたり込んだまま、微かな希望を口にしてみる。

「悪いがそうも出来ん」

「さいですか。」

「じゃあ、さっさと終わらせましようよ」

「そうだな。まず、天の機士が王国に降りた際、教国にも星が落ちた。」

そこで見つかったのは、見た事の無い形式の機兵な訳だ。動かしてみたら、洒落にならない代物だな。

その直後に、王国が天の機士と銀の機兵を喧伝しだしたお蔭で、正体が知れた」

「ありゃまあ」

「これで、教国と王国のパワーバランスがえらい事になった」「？」

おっさんが腕を組んでため息をついた。

「これまで、教国は黒機士の為に白機士を配備し続けてきた。

黒機士一機に対し三機で潰す為に、三十機を超える白機士をな。

それが銀の機兵と青銅の機兵……うちに落ちてきた代物によってひっくり返った」

「（ごくり）」

「今まで黒機士の強さは、白機士が三機掛かれば倒せると踏んでいた。

そして黒機士は少なくとも、銀の機兵と数合は打ち合ったという事だ」

「一太刀でバツサリって話は？」

「ありや宣伝だろうよ」

「なんだそりゃ」

「ただし、うちの白機士は青銅の機兵に対し、三機がかりで一合も打ち合うことなく、瞬殺された」

「はあ？」

「黒機士も白機士も操る機士の腕は、国でも最高の者が乗っているとして、そう差は無い筈だ。

つまり、その差は機兵の力の差。

そして青銅の機兵は、銀の機兵に敗れたと聞いている。

つまり、あの青銅の機兵の本来の強さは、今の仮の機士が乗ったものよりも強く、それに打ち勝つ銀の機兵の強さ、そしてその銀の機兵に一瞬でも立ち向かえる黒機士の強さは、白機士三機で立ち向かえるものではないと……」

えーと、黒機士<白機士×3の計算だったのね。

それが、黒機士=銀の機兵×0.1くらいと仮定。

本来の銀の機兵=本来の青銅の機兵×1.2くらいと仮定。

仮の機士が乗った青銅の機兵=(白機士×3)×測定不能。

黒機士>>>越えられない壁>>(白機士×3)

みたいな計算か？ おかしいから、その論法は色々とおかしいから!!!

「だいたい、その銀の機兵に負けたって言う、青銅の機兵の話は確

かなんですか？」

「それは王国守護サイオンジの巫女が確認したってよ」

「あの巫女さんが当てになるんですか？ それにあって、王国の人間が教国の手伝いを？」

「いや、噂を流して確認に来るように仕向けた。」

確認が取れた後は捕らえる積りだったが、逃げられたんだ」

「あのドジッコに逃げられるとか……警備はザルですか。」

それに、あのお馬鹿に機兵の確認なんて出来るんで？」

「うむ、『ケイオス』の銘と『魔道機士KAZUYA』の名が刻まれているというのが決定的な証拠だそうだ」

「ぶっ！！ なんだ、その魔道機士KAZUYAって代物は！！！」

「天の機士いわく、銀の機兵や青銅の機兵の作り手だそうだが、その手掛けた機兵には、『KISHIMAGI KAZUYA』の名が刻まれているという。」

KISHIとは機士、MAGIとは魔術師、つまり二つの道を究めた者と自ら名乗る程の恐るべき存在なんだろう」

うわああああ！！ 頭が悪くなりそうだ。 どうやって、そうい

う結論に至る？

これが中二病という事か？ 確かにプレイヤーネームしか伝わっていないかもだけどさ！！ 酷すぎる！！

いやいや、落ち着け。

えーと、そうだ『ケイオス』がこっちに来てる？

”どの”ケイオスだ？

青銅だったか、ということはアーキタイプか。

あれなら、まだ影響は知れてるな……多分。

あれはミッシングウォーのポイント上限に併せて作った簡易仕様
の機兵。

初期機体にも使えますって意味で、アーキタイプ（原型）とか名

前をつけたけど、既に手を入れる余地はありませんという罫。

「で、その話がまたなんでソーマが作れるか？ って話になるんですか？」

「……青銅の機兵は、現在動かなくなっている。

色々調べた結果、各部に巡っているソーマという物が不足しているとの事だ」

なんとと言う機密情報、既に知らん顔できないくらいに踏み込んでるなあ。

で、えーとソーマ切れか。

ああ、アーキタイプは燃費悪いからな……ミスリルとか燃料にしてると、マナの出力余剰分が出なくてソーマが枯れるかも。

そうすると動かなくなるか。

ポイント上限あるから、色々ギリギリにしてあるからなあ。

ジークフリードは軽量の上に出力はそれほど要らないから、ミスリルでも余剰分出るかな。

それでも、稼動状態を保とうとしたら、えらい事になると思っけど。

因みに機体スペックは二倍から三倍の差があります。

そんだけの差があれば、操作方法のハンデがあっても、勝てると思っただんですがねえ。

天才君、反応と感覚が天才過ぎました。

まあ、こつちのある意味、詰め将棋に近い戦闘でなら、ある程度の差は反射神経とかは、まったく関係なしに圧殺してやれますが。

「さて、結論から言うと、ソーマは作れますけど問題の解決にならないですね」

「ほう、どういう事か、説明してもらえるか？」

「単純に出力不足……燃料が足りてないって事」

あっさり答えた俺に、シーマさんの目が怖い。

「で、対策は？ 有るんだろう？」

おっさんの方は、勿体ぶった俺の顔色を読んだんだろう、余裕を見せてそういった。

「銀の機兵の事を聞いて作った、ヤバイ燃料がある。

ミスリルの二桁違う出力が出る代物だが、怖くて試せてないんだなこれが……それで良ければ、あげるけど」

どうやら、この世界にはオリハルコンは無い模様。

こっちの機兵にや怖いけどケイオスには無問題。

暇潰しで作ったコインを何枚か取り出して、テーブルに並べる。

109

「ルドガーの話通りの規格外か……それで兄さんは何が欲しいんだ？ ベルンストをやる訳にはいかんが、出来る限りの事はする。

そうだな、言うことを聞く美人の愛人が欲しいなら、都合をつけるぜ」

「ま、マジ……いや、ちょっと待った。

それって、そっちの都合で寝首をかき切りに来る人じゃ」

「あ、ばれたか。お前さんみたいなのは首に鈴を付けておきたいんだがな。

でも悪いもんじゃないぞ。

お前さんが下手な事をしないうちは、従順で良く言う事を聞くと、場合によっては命懸けでお前さんの身も守ってくれる。

それに色々とプロだからな、あっちも凄いや」

「（うくり）」

「……最低」

シーマを2人で、1人で15分サイテーと1人で15分な目で見られた。

教国からこんにちは（後）

「あなたはそれでも教国の兵として、恥ずかしくは無いのですか！」

「いや、ベルンスト。今はそういう話をしている場合」「お黙りなさい！！」「へいへい」

えーと、ただいま俺の部屋に場所を移しまして、おっさんがシマさんに説教食らっています。

あんたら、仮にも仮想敵な他国領で、不正規活動中だという事を理解していますか？

俺としては、さっさと帰って貰いたいのですが。

「キシマさん、お客さんよー」

「はい」

二人に静かにしててくださいよと目配せして、下に降りようとしたらドアがノックされた。

この状況で誰かに来られると非常に困るのですが。

「ちょ、ちょっと待って貰えますか？」

「こちらにうちの者が来ていると思うのだが」

「はあ？」

なーんか、聞いた事のある声。 半分諦めて、ドアをそーっと開

く。

「君がキシマ君か、思った以上に若いな。」

あの別れ方をして、今日このような形で再会するのは気恥ずかしくもあるが」

「ルドガーさん？」「！！！！」

銀髪美形のお手本みたいなのが目の前に……。

シーマさんは直立不動、おっさんは苦笑いをしながら敬礼。

「で？ 例の物は？」

「一応、解決策は手に入れましたが」

おっさんがコインを手を示す。

「本当に君は何者だ？」

じつと見つめられて、思わずドキツとしかけて、思いつきり頭を振った。

シーマさん、唇噛み締めて睨むのは、やめて下さい。

俺にそういう趣味はありませんから、ライバル睨むような目付きは本当にやめる。

そのやり取りに何を思ったか、ルドガーさん、クツクツクと肩を震わせる。

真っ赤になるシーマさん、ちょっと可愛い。 と思ったらまた睨まれた。

「ふ、詮索は止めておこう。 話は済んでいるようだが、何を揉めている？」

「いえですね、報酬の話をしていたらベルンストに説教されまして」

「なつ、何をおっしゃるんですか！　私は教国の者として恥ずかしく無いようにと！」

「ここで言うべき事では無いな。流石に王国の者も騒ぎ出している、そろそろ引くべきだろう」

ルドガーさんの言葉に、二人は敬礼して部屋を出て行った。

「さてキシマ君、報酬の事だが」

「あ、別に何時でも良いですよ。　上手くいったのが確認できてからでも」

「いや、私は半ば確信している。　青銅の機兵は動くだろうとね」

フツと笑うルドガーさん。　カッコいいけど、嫌味にならないとか。

「なあキシマ君、報酬の代わりとっては何だが、白機士を弄ってみないか？

黒騎士ほどの勇名は無いが、いい機兵だぞ。

君程の能力を持つ者、力を振るってみたいという欲に駆られない筈も無い」

「うっ」

「国には君の事は報告していない。

どうだろう？　君の名を出さず、安全も保障する。

これは私の好奇心なのだ。　君がどのような機兵を作り上げるのかを見てみたいという」

うーむ、これは効いた。　確かにノーリスクで好き勝手を出来る機会が有れば、是非ともやってみたくはある。

それに黒機士と白機士の話を聞いて、自分が戦った白機士が、ケイオスやジークフリードと比べると酷としても、良く練られた良

い機体だと感じている。

それはロシナンテにも言える事だが、ゲーム上の好み等での味付けではなく、良い意味での道具として、機体の隅々の一々に納得できる理由がある。

まずはロシナンテの突き詰めたシンプルさ。

たとえば戦場を平原に限定しての、低トルクだが広い出力帯と高速度の巡航を主としたチューニング。

それによる低燃費と低いランニングコスト、対軍に求められる展開能力・継戦能力と戦闘力が収まるぎりぎりのサイズ。

そして白機士のバランス……あの機体はもう少しパワーが出る筈なのに、なぜ機体の個性を殺してまで、バランス優先にしているのかとチラと思つたが、三十機にも登る数を聞いて、なんとなく感じた。

黒機士の集中投入に対する為の、更なる物量投入の為なのだろう。個性を殺してまでの均一な性能で、可能となる集団戦。

黒機士の集中投入が、強力な個人技を持つ者多数の戦闘なら、白機士はそれこそ歩兵の如くに槍を並べて進撃する、本当の意味での集団戦。

消耗も織り込み済みだろうし、乗り換えや二個一での復帰なんぞも想定しているんだろう。

恐らく誰がどの機体に乗っても、殆ど同じフィーリングで操れるに違いない。

しかし、どれだけプレッシャーかけてるんだ、黒機士の名前は。

そんなに強いのか？ この技術レベルで白機士はどこから見ても及第点という、結構凄い機体だと思うのだが。

黒機士が白機士の三倍強いとか、何かしらチートが無いとおかしいと思う。

ロシナンテと同時期に作られた代物が、いまだに現役で最強の名を守ってるとか、ぶっちゃけありえない。

だいたい、ロシナンテはごくごく普通の作りで変な機構は付いて

ない。

あれは、ああいう考えで作った人が凄いのだ。

「うーむ」

「実は私の白機士だがね。」

私が青銅の機兵に掛かりきっている為に、まだ修復に取り掛かれて居ないのだよ」

君に手酷くやられてね……とか遠くを見る視線は止めてください。

「うっ……判りました。白機士で遊ばせて貰いましょう。」

でも、絶対内緒ですよ！！　それで白機士が際物になっても知りませんよ……！」

「構わんよ。君が必要な資材は出来る限り用意しよう」

「あーいや、派手にマナが巻き散らかされても目立たない隠れ家と、周りの侵入者の警戒だけして貰えれば」

「判った手配しよう」

「そうは言ったが、その日の内に拉致られるとは思わなかったな」

嵐の前（仮）

あ、ありのままにこの二日に起こった出来事を話すぜ。

ヤデイス教国に着いたと思ったら、例の空中母艦に荷物扱いで載せられて、気がついたらバルド公領に居た。

何の事を言っているか判らないと……いや、テンプレも程々にしよう。

ここは正確には教国と公領の境に位置する教会の直轄領だそうだが、ぶっちゃけ、公領の喉元に置いたナイフ……宗教施設の名を借りた前線基地です、白機士数機を運用できるような規模の施設があったり、どう見てもいつか侵攻する気満々です。本当に有難うございました。

さて、俺を此処に寄越したルドガーさんは、本国に残ってケイオスのテストパイロットをやってるらしいので、ここには居ない。

一体、あの人は何者なんだと、非常に気になった。

今回の事にしたって、ただの坊さんつてのは無理がある。

そこで、率直にあの人は何者なのかと聞いたら、若手では次期教皇最有力の司教なのだと、あっさり答えが返ってきた。

いまいち宗教家なんていう雰囲気は無いが、人は判らんもんだと思っただ。

因みにそんな人が、教国と王国のバランスを狂わせるような代物とかかざらわってる時に、なんで態々サレスにまで出向いてきたかという……まあ色々有るらしい。

ケイオス乗るのに、ルドガーさんが教国屈指の機士つてのは理由のひとつだが、実際は他の機士を立てて、アレに関わる権限握ろうとした色々が居たそう。

なのにアレがガス欠で動かなくなった途端、片っ端からフェードアウト。

「まあ、逃げそこなつた訳だ」とルドガーさんは引き攣りながら笑っていたらしいが、もし再び動かせなければ、首括る羽目になるような事態だった。

そこで「じゃあ、色々知ってそうな奴を、青銅の機兵を餌にして釣り上げようぜ」作戦を立案。

相当色々と反対があつたのを、ケイオスが止まった時に乗ってた機士のパトロンを脅し上げたり、貧乏くじ引いてやったんだから協力しやがれと、随分な難癖付けたりして、無理やり強行。

そしてそこで釣れたのが、例の巫女さん……役に立たない上に、色々してかしてくれたそうで、流石のルドガーさんが切れたらしい。それで態々国境越えてまで、自分で追っかけてきたんだな。

実はあの巫女さんに言い放つた「銀の機兵に対峙しうる物を我々は手に入れたのだ」云々は、結構一杯一杯の状況で何とか搾り出した、必死のブラフだったそうで……おっさん思い出してまで笑つてやるなよ。

まあ其れが縁で俺にぶち当たつた訳だが。

どうやら、今回の件でルドガーさんの足元は、随分強化された事だろう（さつき無事ケイオスが起動したらしい）

忘れそうだが、コストさえ目を瞑れば、魔術師による長距離通信は可能なんだつた。

「で？　ここはルドガーさんが抑えてる土地な訳だ」

「ちよくちよく白機士で演習やってるからな、少々マナが溢れようが膨れ上がるうが、問題は無いさ。

公領の連中にプレッシャー掛けられるし、好きにやってくれとのことたぜ」

この言葉が、後々あんなことになるとは……さて、付き添いはおっさんでした。

シーマさんの方が良かったとも言いきれないのが辛い所です。

ルドガーさんに世話役を仰せつかった際の、あの絶望にうちひしがれた風情と、こちらを睨み殺さんばかりの視線は、いまだ記憶に新しい。

あと、おっさんが代わりを申し出た時の喜びにあふれた顔も。俺もまだ命は惜しかったので、何も言わずにおいたが。

「で？ ロッドさん、白機士は？」

「ああ、あの中だ」

おっさんこと、ロドニー＝エスパード僧兵官が、でっかい格納庫を指差した。

高さが20m近くある、木造のビニールハウスって感じの建物（よくある飛行機の格納庫って言った方が判りやすいか？）

入り口のでっかいスライド式のドアを開けると、どん突きに寝かされた白機士が居た。

「うわー、ひでえ有様だな」

「お前さんの言う事じゃないだろう」

「ですよー」。

左足のすすけた装甲や、バラシ掛けて諦めたような様子は、色々と涙を誘う。

「で？ 俺は何をすれば良いんだ？ キシマくんよ」

何でも言ってみるとロッドさんは張り切るが……ぶっちゃけ、やる事無いよ。

単純にメンテするだけなら、それよりの機材は揃ってる。

其れで済ます気は無いけど。

「ここを封鎖して誰も入れないようにしてくれたら、後は晩飯の用意とか」

「どうやら、半分休暇になりそうだな」

「給料泥棒」

「……秘蔵の酒があったんだがな」

「ロッドさん男前」

ロドニーさんは、判った判ったとばかりに片手を振りながら出て行った。

「さて、始めるか」

まずは、白機士のコクピットへ。

機兵は一人乗りのため、従機兵よりもかなりタイトな造りになっている。

シートに座ると、左下手に見える燃料投入の機構へ手を伸ばす。

コクピットは首の下、マナの発生機関はコクピットの左下、ちょうど心臓の辺りに在る。

因みに従機兵は背中に背負っていたりする。

投入機構のロックをはずすと、円柱がずるりと伸び出てきて、その中央部あたりのパーツがロックの外れる音と共に横に開いた。

説明しにくいのが、リボルバー拳銃のスイングアウトを想像してくれるとありがたい。

実際にレンコン状のパーツで孔が六個だし。

ロシナンテでは、10円大コインのミスリルチップだったが、こちらは拳銃の弾というか、チョークじみた代物を使うようだ。

流石に機関に放り込むミスリルの量がかなり多いな。

毎度のチートマナ変換でミスリルを作り出して、マガジンに詰める。

パーツを納めて、円柱を押し込んでロック。

機関を叩き起こして、マナの発生を確認。

やはり、大掛かりな作業をするなら、マナの供給環境が無いとやっつけられない。

発生したマナを機兵を動かすのではなく、機兵鍛冶スキルの燃料にする。

「まずはマナ発生の機関を外部に作らんと……いや、その前に素材溜め込むか」

暫くミスリル材だのアダマンティンだの鋼材だのと、国庫が色々どうにか成りそうなレベルの量を積み上げていく。

機兵鍛冶スキルの発動は、脳内のエディタでデザインした代物を、保存とか生成とか複製とかすると、マナを消費して実物が湧いて出て来るとかな、かなりオカシイ代物が列挙されている、俺のスキル群の中でも特に際物だ。

それだけに高位材料を使った物を作ると、相当量のマナが消費される訳で、ここにある機材で発生できるマナ量ではかなり厳しい。

単純に1トンのミスリルを作るだけなら、マナ変換使いながら、錬金スキルで作る方が簡単。

でも機兵鍛冶スキルはゲームシステム外で動くアプリだったので、錬金スキルとは合わせられなかった。

そんな制限が生きてるようで、機兵鍛冶スキル使うには外部にマナの供給環境を作らんと駄目な訳だが（自前のマナなんかじゃ到底足りない）、素材の発生と操作を一遍にやると必要マナ量が更に半端無い。

だから先に素材を溜め込んでけば、いくらかマナの消費も減るわけだ。

「さて、マナ機関マナ機関と」

白機士の発生するマナと、溜め込んだ素材を使い、白機士一機分のマナ発生で作れる物をデザインする。

およそ白機士の機関に対して三倍程の大きさ(2×2×6m)で、出力は同程度。

ただし放り込めるミスリル量を大きくして、長時間使えるようにしたものは可能のようだ。(何気に白機士のユニットも結構な高位素材を作った複雑な物で、素材レベル落として、デカイ据え置きにしないと同程度の出力は無理だった)

白機士は修理で一旦バラスので、白機士自体の機関は使えなくなる。

だから外部に白機士の修理に使えるレベルのマナ発生環境を作らないとだが、さっきの感じだと、白機士のユニットの三倍は欲しいかと言って据え置き三台は邪魔すぎる。

「やっぱ、小型化は必要か……」

まあ、こんどは白機士と外部の二台分の出力が使えるので、贅沢な仕様も可能だ!!

さっきの同性能で大きさ半分!!

「ふふふ、やっと長さが3mを切ったか……いや、まだ邪魔だろ!!」

三台分の出力で2m弱。 やっと立方体の白機士本来のユニットサイズに。

四台分で1m。

五台分で、素材的な制限が一段緩んだので、技術的ブレイクスル

い。 一気に小型化が進んで、やっと台車で動かせるサイズ(PCフル

タワー二台分くらい」と重量（何十キロですが）に出来た。

……あれ？　もしかして、このユニットだけでも結構なオーバー
ッ？

「とりあえず5号を量産して、でっかいコンテナは廃棄処分にしよう」

……

……

……

「うん、作りすぎたね！！」

気がついたら、すっかり日が暮れていた。　昼飯食ってないしね。

途中で出力が落ちた5号機の調査で発覚した、還元ミスリルのこ
びり付きによる作動不良なんかを改善。

初期型が連続三時間運転で一度メンテが必要なところを、シミュ
レーション上で百六十八時間までのメンテナンスフリーを実現した、
5号機後期型の個数が二桁を越えたあたりで我に返った。

「どっしょよっこれ……」

まあ、あって困るもんでもないか！！　とりあえず、気にしない
事にした。

「しかし飯抜きで集中するとか、本当に久々だな。
体バキバキで胃が痛いよ。　はあ、疲れた」

流石に今日の所は作業を終了……白機士には手をつけていないけどね。

でも、好き勝手やった事で、こう言うとなんだけど、やたらめったら充実感を感じてる。

普段、縮こまってる手足を伸ばせたような気分だ。

作業場を後にして、宿泊場所になってる皆みたいな所に（というか駐留用の砦だろう）戻ったら、なんだか緊張感が漂っていた。

色々走り回ってたり、恐らく本国だろう相手と通信してる術者が「公領側の戦力は傭兵の従機兵を中心とした……いまだ衝突は……

……いえ、死神部隊……いえ四神は未だ見えません……増援、今あたりを刺激する事になっては……はい、待機ですか」

なんか、すつげえ不穏当な言葉が聞こえますが、居るんですか？死神部隊って。

そちらは置いといて、俺の事を言い含められているであろう、ロッドさん以下数名の上級メンバーが、頭をつき合わせて相談している。

「……」

「……」

「……あの」

「ん、ああ戻ったか」

俺の姿にロドニーさんが手を上げて迎えてくれた。

「何かありましたか？」

俺の問いに、ちょっと困った顔でロドニーさんが腕を組む。

「いや、な、どうも公領の連中の雰囲気はきな臭い」

「何かあったんですか？」

「いや、こちらには特に……だが、あちらさんの国境周辺で遠話のやり取りが活発化している。」

それに何時もなら、この程度の騒ぎには従機兵が2・3機、国境に張り付いて来る程度なもんだが、今回は本格的に動員されているらしい」

「いつもの仕返しにプレッシャー掛けてきてるとか？」

「いや、あちらさんはこちらの監視もしっかりしている。」

実際にどれだけの戦力が此処にあるかはキツチリ把握している筈だ。

それを考えると、動員している戦力は過剰に過ぎる」

「ルドガーさんは？」

「現状は待機、青銅の機兵の準備しだいでこちらに向かうとき。」

一応、周辺の基地へも警戒レベルを一段上げるように通達が出ている筈だから、公領側で大きな動きがあれば、何処かしらで引つかかるはずだ。

まあ、そんなに気にせず居てくれ。戦争すんのは俺らの仕事だ」

ロドニーさんはそこまで言って、飯でも喰いにいくかと俺を誘ってくれた。

さて、晩飯を食って就寝と行きたかったが、状況がどうも気になる。

これは白機士を稼動可能な状態にしておかないと……念の為に。

眠気覚ましに泥水みたいなコーヒーをがぶ飲みして格納庫の作業場へ。

さつきは無駄に作りすぎたと思ったパワーユニットを全開運転。マナ発生が安定したところで機兵鍛冶スキルを起動、まずは普通に白機士の無事な右脚をサンプリング。そして軸を反転して複写、左足を復帰させる。

しかし使ってみて思うが、このスキルの怖い所は、傍目ポルターガイストにしか見えない所だろうか。パーツがばらけて飛んで行き合体。数トン単位の代物がヒョイヒョイと宙に浮かぶ。うん、心臓の弱い人、いや、誰にも見せられないね。

あんまり派手にマナを撒き散らすとあちらさんを挑発する事にもなりかねないかもだが、最悪でも白機士が使えるなら、従機兵相手は二桁程度は無双出来るだろう。

一応、五体満足に復帰いた白機士を、細部までフルサンプリングして、間接駆動部に高位金属のコーティングや摩擦軽減等の、いつものフルメンテを実行。

この手の作業は、半ば自動で行われる（人型で駆動部が余程、変な事してない限りは大丈夫）

俺はその間に白機士のマナ機関主機に外部機関5号機の成果をフールドバック。

機兵つてロシナンテみたいに、殆どメンテフリーかと思ってたら、意外と駆動時間は短いのか……規模や出力がでかくなると色々不具合も出るのな。

5号機は小さくした弊害も在るだろうけど、シミュレートした結果では、実機でも六時間程度でパワーダウンが始まるらしい。

改修後は九十六時間でパワーダウンが始まるが、実用誤差程度のもの、深刻な出力低下は百五十時間以上たつてからになる。

ここはレポートにして提出すれば、面白い事になるかもしれない。フルメンテも終わり、新品ピツカピカになった白機士は、一旦この状態を脳内HDDに保存。

流石にに国家の財産、何かチョンボして消えたら、他の機体をサンプリングしなおしたりとか面倒臭いからな。

ほぼデフォルトな時点の機体をセーブデータとして置いておく。

今の環境なら、パーツごとの複製は可能だから、魔改造やりすぎて戻せなくなっても、手間さえ踏めば白機士は復帰できるし、量産だってできる……いや、俺は世界を何処に向かわせる気だ。調子に乗りすぎてルドガーさん達に、暗殺されないように気をつけねば。

さて、まずは完成した白機士

フイニッシュド・キシマ・エディション

スペック的にはなんら手を加えていないが、各駆動部の耐久及び摩擦軽減・マナ機関の改修により、メンテ無しでの限界稼働時間が大幅に伸びました。

ワールドやらミッシングウォーなら、摩擦ロスやらを減らしたので燃費も良くなるのだけど、ここではマナをプールできる要素が無く、マナ垂れ流し＝残念ながらミスリル代は節約できない。

パワースロス減った分の出力絞れば燃費は良くなるが……扱いの感覚変わっちゃうだろうしな。

「……よし、乗ってみよう」

うん、機兵に乗ってみたかったんだ。ロシナンテにしか乗った事が無いし。

ドキドキしながら寝かせられている白機士に乗り込む。

此処に来て気付いたけど、実は機兵って起動してない時は自立できないんだよね（沢山並べる従機兵は、鳥脚が折りたたみ易いので胴体にランディングギア装備で座ってられるが）

駆動方式がモーターで巻き取るワイヤーのテンションで操作とかなんだもん。

しかもモーターには電源も信号線も付いてません。

マナ通して動けて気合入れたら回るんだよ、判っても見たら

吹く。

ああ、とりあえずはいいか。

主機を回してマナを機体へ通していくと、各駆動用のワイヤーテーションが緩んでいた関節を締め上げる。

コクピットの装甲が閉じる。

覗き穴というか、頭部に仕込まれたオペラグラスの視界が三面、正面と下、背後、首を振ると視界も動く。

だが、俺の目にはその光景にかぶさって、全天の光景と数百のパラメーター、意識するだけで変更されていく各種メニューやインジケーター、各オブジェクトのデータや距離が表示されたレーダー、自機のダメージやコンディション……なんだこれ。

ロシナンテに乗ってた時とは違うんですが。

あの時はフィギュアを動かすような、ラジコンを動かすような感覚だった。

機体の様子なんて良く判らなかったが、今は機体の全てが手に取るように判る。

駆動部の出力を秒単位で変える事も出来るだろう。

いまなら、この白機士でゆで卵の殻でも剥いてみせる！！

これはまさに、変態しか好き好んで使わないと言われた、ミッシングワールドのネイティブコントロール。

自覚した瞬間、白機士はまさに、俺の手足になっていた。

「なるほど、ロシナンテの時は外から動かしているような感覚だったしな」

機士スキルの真価は内から動かしてこそなのか。

感動の余韻を暫く味わって、起動手順を進めていく。

白機士を起こし、立つ。

一気に3m程度の高さから10mを超える高さへ。

全天モニター……怖いんですが。

立ち上がった白機士に、第二次改修案のバランス取りも併せて作った『5号機仕込んだシールド』と『高位素材ふんだんに使ったケイオスでも切れる剣』という、やばい代物を持たせる。

一応、作る予定なのは『従機兵用のペレットで三十秒くらいマナ吐いて、一時だけ俺TUEEEが出来る非常ブースト機能付きシールド』と『ミスリルメッキで切れ味アップな剣』程度の予定だが。折角だし、自分で使うなら『プロトタイプは最強』なんていうフアンタジーを味わいたいじゃないですか。

無駄にスキルで出力絞って格納庫の外へ出る。

辺りは光が闇を追い払っていた。

基地中、警戒状態ですね。

向こうの方には、国境で詰めてる公領の皆さんが見える。

「うん、なるほど傭兵だね、従機兵の機種とかバラバラだな」

どうやって索敵とかしてるんだろう？

白機士には、センサーとか積んでないのに……あちらさんの様子が見える。

あれか？ 魔術のスキルとかが代用してんのか？

このバーチャルコックピット状態が何かの魔術的な代物に変換されてて、その辺の機能に色々まぎれてるのかもしれない。

何気に結構なマナ喰ってるようだし、コックピット部分で。

ロシナンテの時に使えなかったのは、出力的なこともあるのかもしれないな、

「おーい！！」

「ん？」

外の声をひらった。

ロドニーさんだった。

「どうかしましたかー？」

「白機士、直ったんだなー!!!」

大声がしんどそつだ。

白機士に剣と盾を地へ立てさせ、片膝付かせてひよいとしゃがみこむ。

コクピットを開いて、夜風に当たりながら表を望むと、白機士を見る皆が啞然としていた。

「どうかしました?」

「いや、こつも見事に白機士を振り回せる奴はな」

「そうですか。いい機兵ですよ、こいつは!!!」

「そりゃ、判っちゃいるがな……」

啞然とするロドニーさんへ、ニヤリとやろうとして、コクピットに声が入った。

「シーマ、母艦の離陸準備を急がせる!!! こいつも積み込む!!!」

「まさか青銅の機兵も動かすのですか? そんな事をすれば!!!」

「かまわん!!!」

私が目障りだとしても、こついう手段をとるような連中に文句は言わせん。

こいつが動いた事が、連中を追い詰めるきつかけに成ったか」

「まさか王国へ情報を流すなどは……」

「せんだつての王国侵入の件を、今回の進入を見逃す事で埋め合わせる気かもしれん。

しかし、こいつのテスト場所を極秘にしたのが裏目に出たな。

白機士の搬入を囿にするつもりは無かったが、囿らずも連中はそつ受け取ったか。

なるほど、公領の警戒も王国の介入に対しての物とするなら納得が行く。

それよりロッドには、まだ遠話が通じないのか？」

「前回の通信以降、残念ながらマナの乱れが酷く」

「公領側の妨害か、それとも近隣の基地にか……キシマ君、ロッド、私が行くまで持たせてくれ」

ルドガーさんの声！？

なるほど、公領の動きはそういう……あれ？ 搬入されたのは機

兵一機で、あんなにマナ撒き散らしているとか……ケイオスと勘違いされた原因は俺か？

っと、また声が入った。

「教国の駐留地に青銅の機兵が？ ジークフリード以外にも天からの機兵って本当に居たんですね」

「ああ、よりにもよって既に起動しているらしい。」

教国上層部からの非公式な情報だが、確度は高い」

「どういう事なんですか？ 教国が態々王国へそんな事を伝えて来るなんて」

「恐らくは教国上層部の権力争いだろうが」

「僕もジークフリードで出ます！！」

「いや、それには及ばない……黒機士が出る。」

これはもしかすると罠かもしれないのだし。 先だつてのエリカ

嬢の事もある」

「ですが……！」

「君は王国の象徴になるべき存在だ。 それに、黒機士はただの機兵ではないよ」

こんどは天才君の声！？

どういう事……ボイチャかよ！！

つか、本当に上層部に絡んでるんだな……って、またかよ。

「国境付近の教会直轄地に、こいつの同類が居るそうだが、こいつはまだ動かせんのか？」

「あいにくと、未だ操作系の封鎖を解く事が出来ません」

「黄金の機兵か……こけおどしだな」

「教国からの要請、乗って見ますか？」

「傭兵連中か、試してみるには好都合か。上手く行って奪えれば
良し、駄目でも力の程は何えるか」

知らない声。

こちらからの送信は出来ないようだ。

こいつもコクピットの機能か？

最初のがケイオス、次がジークフリード……どちらも俺の作った
機兵。

とすれば、最後のは？

黄金の機兵？

嫌な予感しかない。

「早く目覚めるが良い……ケイオス」

『ネイキッド』か？ 国境付近とかいつてるところを見ると、公
領に拾われてる？

非常に拙い気がする……まあ、誰でも使えるミッシングウォー仕
様の機兵じゃないから、俺以外が乗るのは、難しいと思うが

「いや、今はそれよりもロッドさんに……って、どうやって伝えり
やいいんだよー！」

「おーい！！ どうしたっ？」

「いや、あの、あっ」

「失礼しますっ！！」

しどろもどろになると、ロドニーさんへ伝令が走りこんで来た。

「どうした？」

「公領からの通達です」

「なに？」

「滅茶苦茶です……この土地は本来、公領の土地ゆえ出て行け。

機兵従機兵を置いて行くなら、人員の退避は認める。

なお、この件については、教国より何事も起こっていない事にするという、取引が出来ているから、援軍を待っても無駄だぞ。

と言うような事が、慇懃無礼につづられています。

退避までの期限は三時間だそうです」

「一体、何処の馬鹿がそんな事を」

呆れて物も言えないという顔で、ロドニーさんが短い茶色の髪をかきむしる。

「どうするんですか？」

「白機士を置いて退避なんぞ出来るか！！ しかし、公領も何が目的でこんな辺鄙な場場所を……」

訳判らん！！ とロドニーさん。

「あー、なんとなくですけどね。 ルドガーさんが青銅の機兵を動かして、大手柄な訳じゃないですか」

「ああ、そうだな」

「それって、他の偉いさん、困りますよね」

「そりゃあ、な」

「でも、ルドガーさんが、その青銅の機兵を何かしらで失ったりしたら、失点ですよね」

「……ああ、そういう事か」

ロドニーさんの顔に理解の色が浮かんだ。

「考えたら、こんな辺鄙なところに機兵一機送り込んできて、派手な事してるわけじゃないですか」

「そうか、上層部の老人ども、此処に青銅の機兵が在ると思ってるのか？」

「教国の偉いさんが、どれくらい追い詰められてるか判りませんが、これだけの大騒ぎを封殺できると思ってるって事は、粉掛けたのは公領だけとは考えにくいですね。

それだけ信頼できる、相手といえは……」

「王国が動くか？」

「ロッドさん、言ったじゃないですか。青銅の機士のせいで、バランスが狂ったって」

「そんな事も言ったな」

「王国もそう考えてるんじゃないですか？」

少なくとも黒機士以上の力を他所に持たれたくは無いですよ」

「判った……此処は戦場になるんだな」

「こちらが引けない以上は」

「敵は公領の傭兵……」

「そして王国の黒機士」

白と黒（仮）

「公領と王国、どちらが先に来るにせよ、このまま待機してたところで近隣の増援は抑えられているだろうし、大将も何時になるか判らん。」

あちらさんも人員の退避は見逃してくれるってんなら、俺の仕事は此処の連中を無事に引かせる事だ。時間内に最低限の人間だけを残して退避させよう。

キシマ君よ、お前さんはどうするー!!」

スタコラサツサだぜ!! と行きたい所ですが、流石に皆さん何とか安全圏に行くまでは……。

「手伝います」

「助かる」

ロドニーさんが、上位メンバーを集めて話をするようだ。

俺も白機士を膝立ちのまま保持して、下に降りる。

コクピットから離れても、難しい事しなければコントロールに問題は無いんだが、皆に変態を見る目で見られた。

「よし、時間が無い、さつさと話を詰めよう。」

幸い此処は施設はでかいが現状で詰めてる連中は少ない。

ルドガーの大将が人払いしてたからな」

「不幸中の幸いって奴ですかね」

「とはいえ百人はくだらんがな。」

従機兵が二機居るから、そいつらに護衛させて馬車で運ぶにしても、馬が足らんな」

「機兵は置いて行けって話だったんでは？」

伝令持って来た兄さんが首をかしげる。

「あほう、そんなもん丸腰で行ってみろ、追撃食らって踏み潰されるのが落ちだ」

従機兵の機士の人が伝令の兄ちゃんを引つ叩いた。

「そうだな、とりあえず白機士を此処に置いときゃ、主力は動かんだろうから、追撃は従機兵二機で何とかするさ」

もう一機の従機兵の機士の人が任せると笑った。

「ただな、従機兵にも目一杯乗せて、馬車込みで五十人つてとこだよな、問題は」

ロドニーさんの渋い顔。 往復させるのは無理があるしな。

「あの、機兵に乗れる人は？」

「搬出・搬入程度の『動かせるだけ』の連中も含めれば……十五名程は居るはずだ」

補給整備の担当の人が指折り数えてくれた。

「戦えるレベルの人は？」

「俺を含めて五人つてとこか」

「ロッドさん、機兵乗れるんだ」

「わはは」

従機兵乗りの二人が大笑い。

変な事言っただかな？

「俺はこれでも白機士乗りだぞ」

「あ、そうなんだ。じゃあ、白機士は？」

「その一機だけだ。白機士乗りは機体をシェアしてるからな。俺は主に大将の予備なんだ」

なるほど、専用機って持ってないんだ。

えーと、実戦レベルの人が二人余ってる、他にも人数は居るから、最悪馬車も使えば何とかなるな。

「考えがあります。ちょっと作業場にこもりますから、こいつ頼みます!!」

白機士の手をやって、ロドニーさんにコクピットに入って貰う。

「おまえさんは!!」

「馬の代わりを作ってきます」

「おい、馬の代わりって……行っちゃった。

しゃあないか、進められる所を進めていけ、書類の類は処分しとけ!!」

おおっと、ん？ なんだこいつは？」

格納庫に戻る背後で、マナが膨れ上がる気配……シールドのスイツチ押したなロドニーさん。

「さて、簡単に作れる奴ってーと、アレしかない」

教国でロシナンテを運用していいかは、深く考えないようにしよう。

デザインしてる間もなく、数を出せて使える代物は、そらで寸法出てくるあれしかねえ。

ただ、地形的にパワーが必要な分、フレーム強化とユニットに五号機後期型を積む事に対応。

かなり重くなったが、荷物引く分重量が無いと、接地面積やら摩擦の関係で荷物に負けるからな。

少々じゃじゃ馬になったが、元が乗りやすい分、そこらの従機兵よりやまだ乗りやすいはず。

後は頑丈なコンテナを作って、車輪の代わりにソリとバンパーで…… 乗り心地は勘弁してもらおう。

デザインが終わると、早速パーツごとに出しては繋ぎで組上げていく。

最初はちょっと手間取ったが、最後の方は思わず作りすぎたかと思う程に、さくさく進んだ。

「しかし一時間で五機作れるとは…… すごい生産性だな」

最後の機は十分切ったし。

順繰りに格納庫から出してるが、積み込み乗り込みは進んでるのかな？

五機目を表に出すついでに確認した。

「どうですか？ 足りませんか？」

「これなら馬車を使わなくても大丈夫ですな」

補給担当のお兄さんのお墨付きを貰った。

外では白機士と従機兵二機が頑張ってるせいで、今の所はまだ公

領側の従機兵は動いていない。

一応、時間は守ってくれるようだ。

もう一度引つ込む前に、白機士のロドニーさんと従機兵の皆さんに、ミスリルと弁当を渡した……ミスリルの大盤振る舞いに大喜びされたのは内緒。

さて、あと二時間でもう一機、白機士を作る。

単純なコピーなら一時間で何とかなるが、ここはやれるだけやっておこう。

大きな改造は出来ないが、ギリギリまでフレームに高位素材を使い、重量はあんまり考えない方向で、関節部分は特に強化して、二期改修で考えていた、フレームインモーター（ワールドのサンプルにも出て来る既製品）を一部に仕込む。

こいつは関節の軸受け部分に仕込む駆動装置で、関節のロック機構やなんかに使われる。

ワールドにおいては、ワイヤー駆動等と共に補助でしかないが（メインはアクチュエーターや珍しい所では人工筋肉使用）こちらでは十分だろう。

肘と膝、踵の繋ぎになるパーツを差し替えるだけで、通常の白機士にも転用可能なのでオススメ（因みに機兵は地味に二重関節でちよっと吹いた）

ただ肩や腰、股関節等の軸がややこしい部分はスペース的に使えないのが残念。

その辺りは単純に構造を二重化、モーターをでかく等で対応。

装甲にも一部高位素材で。

ミスリル系の装甲で、青白く成っちゃったのは仕方が無い（ミスリルチタン複合材）

白機士がザクなら初期のガンダリウム位には強い、割れやすいが、ガンダムみたいにモノコックじゃないから、整備性はマシ……壊れたら外装は白機士のに戻せるから。

二時間に少し余裕を見せて作業終了。

「おし、とりあえずは完成」

チューンド・キシマ・エディシヨン
白機士改

重量が三割ほど増えたが、各耐久性（出力に対して）は三倍以上になる。

メインの主機は回修型の白機士の物（流石に五号機後期型をメインに据えるには動作実証済んでないから怖い、ロシナンテ改は三割パワー出れば動けるからいいとして）

元々、白機士の主機はオーバースペックだ（他もだろっけど）

恐らくは並みの機兵乗りで、使えているマナ量は三割程度。ロドニーさんで三割五分、ルドガーさんで四割強。白機士のフレーム強度も六割出力までしか想定してないようだ。

マナの出力をどこまで使えるかというのは、意思の腕がどの濃度までのマナを掴めるかに掛かってくる。濃いマナしか掴めないと少なく、薄くても掴めるならパワーが上がる。

俺の場合、白機士に乗ってマナ全部駆動系に流し込めば自壊する。今、ロドニーさんが乗ってる奴でも、パワーロス減らしたせいで、耐久度は底上げされているが、それでも八割出力程度まででボン。盾の補助使うまでもない。

ただロドニーさんが三割五分使えるなら、単純に掴める濃いマナの分量が増えれば、出力は上がる。シールドの出力使えば、並の『二倍ちよい』強い白機士になる計算……。

話がそれだが、今回の白機士（ちよつと青いが）はマナブッコンでも壊れ無いように頑丈にしている（激しくスマートじゃないけど）主機出力の二倍強のマージン、五号機仕込んだ盾分をブッコンでも壊れないのだ！！単純に、並機士が使う並白機士（主機三割）の『7倍弱』パワーのある白機士なのだ！！まあ、強い＝早いとか上手いじゃないけどね。

説明は終わりにして、残りの時間で盾と剣は予備も作っておいた。あと、ちよつとしたビックリドッキリメカも。作った物を色々と青白機士に持たせて、外に出る。色違いの白機士に、皆の目が集まる。

「状況はどうですか？」

「やっこのじゃじゃ馬が大人しくなつたぜ」

達成感に溢れたロドニーさんの声。いや、そいつの感想じゃなく。く。

「なんとか逃げ出す算段はたつたな。

流石に援軍は抑えられても、逃げ込んだ連中を放り出すまではいかんだろうからな。

近隣の基地まで行けば何とか成るだろう」

ロシナンテの背は低いし、森に紛れば目立たないだろうね。植林して間が無いのか、この辺は立ち木の高さが10mちょいしかないから従機兵は見えちゃうけど。

「じゃあ、そろそろ出発ですね」

「キシマ君よ、残るつもりか？ アレの相手をする事になるぞ」

基地から開けた荒地を挟んで、国境沿いに居並ぶ従機兵さん一同を指し示すロドニーさん。

「まあ、一人より二人の方が楽できるでしょう。

それに、折角作つたんですから、こいつも暴りたいでしょうし」

「そうか……じゃあ、おまえら隣の基地に向かって出発しろ。」

此処は白機士に任せる!!」

「こっちはちょっと青いですけどね」

出発するロシナンテ軍団と従機兵二機。 反応するように、公領

側にマナが立ち上る……時間だ。

「来るか!!」

ロドニーさんの緊張感に満ちた声。

俺はというと、なんか漲ってきた。

「くっくっく、この後どうしようって位の急展開だ!!」

この青機士の蒼銀の輝きを恐れぬならば掛かってこおい!! っ
て、おい、どっち向いてるんだよ!!」

まさか一部が出発した連中に向かって行くのかな。

「ちっ、国境割ったって事は本気か!!」

「そっち行くなつての」

まあ、行ってるのは三機だから問題ないとは思うが、シールド発
動。 有り余るマナを吸い上げて青機士の前面に魔術構築。 この
規模の機兵魔術はワールド内での使用以来ですな。

「旋風乱舞、風の太刀!!」

格好つけて青機士に剣を振らせて、魔術を飛ばす。 森の木々が
煽られ、地面から砂を巻き上げて、圧縮された風がすっ飛んでいく。
ホーミングは無いが、等速運動の横っ腹の無警戒な連中狙うには
十分。

数瞬後、光を捻じ曲げる空気の揺らぎが従機兵三機に追いつくと、従機兵がボーリングのピンよろしく夜空にすっ飛んだ。

「ストライク」

爆発とかしてないから大丈夫でしょ。

どつという仕組みか、機兵とか従機兵に乗っていると、衝撃とか揺れとかに相当強い。

多分、謎のMana技術の恩恵だろうけど。ロシナンテに乗ってて、砲撃をぶち込まれて、ムーンサルト決めて、地面に埋まっても、打ち身で済む位だからね。

「死んでは無いだろうが、機兵は動かん」

追いかけてようとして、脇を魔術がかすってったせいか、呆然と固まっていたロドニーさんがポツリ。

さて、そろそろこっちに来なさい。

飛び道具相手に背後を見せるのは拙いと思ったのか、散開して突っ込んでくる。

「もう一発位はお見舞いしておこうか」

風を飛ばす。

避けられた……まあ、そうか。

そのうち100m程度になると、こちらからも動いて間を詰める。

「おひょうつー！ー！」

高い分、速さがこええー！！

ロドニーさんを置いてけぼりに、先に進みすぎて三機に囲まれる。従機兵とはいえ、10m近い重量級。揃いのポールアームで威嚇してきやがる。機種と色はばらばらなので、いまいち。

「しかも可愛くねえ」

従機兵に角とつけても似合わないと思う。

こちらの三機以外だが、槍持ちと盾にショートスピアの二機が、ロドニーさんへ向かう。

盾持ちが前で壁に、長槍が斜め後から牽制。

ちよつと時間が掛かりそうだが、下がる速度が圧倒的なので、陣形に嵌められる事は無い模様。

「其れよりこつちだよな」

三機並んで、一二の三で同時に長物を突き込んでくるから隙が無い。

狙いも上手い具合に散ってくるから、纏めて弾けないし、下がる一方。

とはいえ律儀に避けてるのもかつたるい。

「一、二の三、一、二の三、一、二のさんっ!!」

突いて来るタイミングで思いつきりバックダッシュ!!

そのまま返しの大ジャンプ!!

突きを飛び越え、高さ15mからの前蹴りで、真ん中に位置していた従機兵のドタマを蹴り飛ばす。

飾り角が折れて飛び、従機兵そのものも、綺麗にすっ飛んで行った。

突然姿が消え、はるか背後にがろんと転がっていく仲間の様子に、一瞬固まった二機の間隙を突く。

開いた真ん中のスペースを走りぬけ、振り向きざまに右手の剣を一閃。

掛かる抵抗は出力に任せて振り切った。

右後ろに居た従機兵は、腰の細い部分に入ったお蔭で、上半身がごろんと転げ落ちる。

浅く入った左後の機体は、背中の機関がバツサリで機能停止。

「ふ、詰まらん物を斬ってしまった」

「フーか、この剣がヤバイ件について。

相手が従機兵とはいえ、一番頑丈な胴体フレームを手応えガッツと来る程度で、叩き切れちゃうとか。

アツサリと片が付いて感覚が鈍ってるけど、10m近い鉄の塊が切り裂かれるところを見るのは、恐ろしい事だと思う。

ため息つきながら、先に蹴転がした従機兵にザクザクと剣を突き立てて、機関を止めておく。

「どっせい!!」

ロドニーさんは上手く立ち回って、後衛の機体を前衛の影にする事で無力化すると、前衛相手に一対一でのタイムマンを押し付ける。

流石に機動力の差で逃げ切れないと覚悟した前衛が大降りすると、ギン、ガツンといった感じで、気合の入ったロドニーさんの一撃は、前衛のショートスピアを断ち切って、そのまま勢いあまって胴体袈裟切り。

前面装甲どころか、肩がブランブランしてます。

そのまま蹴倒し、動けないうちに背面に一撃……慣れてるなあ。

後衛がおっかなびっくり槍を突いて来たところに、足元の従機兵

を蹴り飛ばして、巻き込んで転げた所をこっちゃん。

「こいつは良いぜ、ふふふはははあ!!」

まさに俺TUEEE状態、なんかスイッチ入ってますね。

そんなこんなで第一陣はケリが付きました。

ゴーレム作って、最初にすっ飛んだ三機持ってこさせて、こっちで倒した分も集めておく。

とりあえずは中の人に出てきて貰うと、錬金で土くれに変える。

マナ通ってない物質なんぞ、ペペペのぺいだ。

それ見て大騒ぎする傭兵さん方。

あなた方は無事なのをまず喜んで頂きたい。

俺はまだKILLマーク付いて、童貞卒業はしたくないのですが、こればかりはなんかの弾みってこともあるし、運ですから。

「まあ、それなりの腕はあるみたいだし、ロッドさんここで何とかなりません?」

「そうだな、うちで引き取らんと、口封じって事も有るか」

ああ、そういうこともありますか。

「傭兵なんていうのは捕まれば、売り飛ばされても文句は言えない立場なんだがな」

物騒な世界ですね。

「まあ、戦争だからな」

……リーダーに感あり。

「来た」

「どうした？」

「その連中、馬車でドツカに行かせてください。第二陣です」

「まさか」

「双胴の気嚢部に尖がりマストがつんつん、おまけに黒いです」

「王国近衛の登場か、これは黒機士に違いないな」

ロドニーさんが、傭兵さん方を追い立てるように急がせる。

俺は格納庫からビツクリドツキリメカを取り出す。

長さ15mを超える物干し竿。

先は槍が5本突き出ている。

一応火器の意匠が所々に見えるので射撃武器だとは判るだろうが、色々突っ込み所満載な代物です。

某ランチャーの実弾版、名付けて「棒ランチャー」弾が槍なだけに。

流星に夜では視認が辛い距離だが、俺には見えてるぜ！！

アウトレンジから砲撃されるのは嫌なので、こんなもんを作ってみました！！

最後部を地面に接地させ、脇に抱え込むように右手で保持し、左手は添えるだけ（トリガに）

まずは方向だけ決めて大体で撃つ、角度が足りなかったのか、空中母艦の下を飛んでいく槍。

今の軌道を読み込んだのか、補正位置が表示された……ワールドで打ち込みしてたプログラムも生きてるのな。

補正完了、近づく距離も併せて少し狙いをばらしておく。

「撃つてーい！！」

脳天まで響く衝撃が四度走る。

月夜に銀光が瞬き、補正された映像の中の黒い影が、その姿を傾

げていく。

そのまま落っこちるかと思った瞬間、何かは落とされ、母艦らしき影は姿勢を復帰させていく。

落ちた影は三つ。

闇夜に紛れる真つ黒な機体。

「黒機士だなあ」

「黒機士ですね」

そんな感想しか出ない。

黒機士は一機を残し、二機がこちらへ走る。

ふと見ると、ロドニーさんがシールドの出力を切っている。

なるほど初手は並で行って、ここぞで倍か。

俺にとっては、黒機士がどれ位強いのか、すごく興味がある。

青機士を跪かせ、盾と腕でバランスとって、モーターの関節ロックで自立を保つ。

そうしておいて、スキル発動、サンプリング開始……主機は白機士とそうは変わらない。

だのにフレームから駆動系の作りが、青機士と変わらないようなスペック。

まさか？ 黒機士に乗っている機士はマナをフルにつき込める技量の持ち主か？

いや、ありえない。

現に確認できているのは片方が把握率50%、もう片方が42%でしかない。

これには、フレームの高位素材によるマナ誘導の補正も入っているんだろう。

常識を外れた腕ではない。

かと言って、ソーマのシステムも積みまれては居ない。

サブの機関も無い。
単にマージンというには大きすぎる冗長性。

「ん？ 複座？」

コントロール系が二系統？ いや、待て？ 出力系を追う。

機兵の中に機兵？ なんだこりゃ？ 全高160cm？ パワーソース……ソーマ、オリハルコン、制御系……フィロソフィアストーン集積型。

現在は起動していない……こいつが鍵だ……だが、俺はこんなもの知らない。

ワールドにも無い。

天才君の仕業ではありえない。

「まさか、元からこの世界にあつたのか？」

まそれは無いだろう……それとも、イレギュラーで呼ばれた？」

いや、今はそれを考える時じゃない。

起動されたら、青機士フルスペック二機相手……いや、何が起きるか判らない以上、あの後ろに居る奴も、こいつらと同じか、それ以上のスペックと見るべき。

「ロッドさん」

機体を起こし、ロドニーさんの白機士に手を触れさせ声を送る。

「様子見は無しです 一撃外したら、終わりだと思ってください」

「どういつ？ いや、判った」

「左が弱いです……それでもマナ把握は、凡そルドガーさん並ですが」

「やる気が出るじゃねーか」

覚悟完了と同時に、黒機士から声が届いた。

「そちらは、青銅の機兵か？」

は？ いや、青いけどね

「何処見て言ってるのかな？ 青いのは単なる白機士の武装試験機ね。」

青銅の機士つて大体何？ つか、国境越えて黒機士来るとか、何？」

ロドニーさんから、よく言っぜとかな、含み笑い。

「こちらは教国上層部より、反乱分子討伐に協力を要請された。

降伏すれば良し、「何を言ってるんですかあ？ こいつらに母艦

落とされかけたんですよ。 たたつ殺せば良いじゃないですかあ」

黙れ、ニウベル「スターン」

「「……」」

ヤバイ奴がいますね。 って、うわ、突っ込んできやがった！！

「くそっ」

思いがけないタイミングで戦闘になってしまったせいで、一撃目に掛ける作戦がグダグダに……こっちも、強い方が来てるが、何とか三割出力で流す。

「はっは、やっぱりこいつら雑魚ですよ」
「やはり青銅の機兵ではないか」

ケイオスの事かー！！ とかはどうでもいいから、黒機士に弾かれた拍子にロドニーさんの機兵に寄って、機兵を触れる。

「ロッドさん、そっちにタイミングを合わせます」
「受けて、弾いて、決める！！」
「了解」

それだけを話して離れた。

「そろそろ降伏するつもりは？」
「まだまだ」
「そろそろ雑魚は沈めよお」
「どっちが雑魚だ」
「おまえだろおう！！」

ロドニーさんにニウベルと呼ばれたヤバイ方の黒機士が突っかかる。

大上段からの両手剣の一撃、パワー任せの代物だが、並みの白機士なら叩き伏せられる。

だが……。
「止まった？」

ロドニーさんの白機士は、その一撃を盾で受け止めていた。
その盾からはマナの出力。

「馬鹿なあ！！」

「どっせい！」

黒機士の一撃を弾き飛ばし、剣を袈裟に一撃する。
左肩からコクピット付近までを抉ったそれに、ニウベル「スターンの絶叫が響く。

その声に注意がそれた目の前の機士に、俺も盾の補助付きマナ全ぶっこみのシールドバツシュー！！

吹っ飛んだ黒機士に、追い討ちに行こうとしたが。

「No.04、システム開放！！」

ニウベルが叫び、その声に嫌な物を感じてロドニーさんの援護へ向かう。

「くそっ、抜けん！！」

ロドニーさんの剣が黒機士のボディから抜けず、そして手負いの黒機士から、尋常じゃないマナが噴出し、そして止まった。

黒機士は無事な右手一本で、ロドニーさんの白機士の頭を掴んで握りつぶし、引きちぎりながら振り飛ばす。

片手で機兵をぶん投げるとか、さっきまでの黒機士とは違いすぎる。

黒機士は右手で剣を拾い上げ、倒れた白機士に向かい、剣を振り降ろす。

「ははっは！！ 死んじゃえよお！！」

「お前がな」

何とか間に合った青機士の剣が、ニウベルの黒機士を胴体輪切り

に落とすとした。

「生きてますか？」

「ふう、死んだかと思っただぜ」

「いえいえ」

白機士を助け起こして、上半身だけになったニウベルの黒機士に
向き直る。

念の為に首と右腕も落としておく。

コクピット突いときたい欲望に駆られたが、それは我慢。

「まさか、白機士がこれほどの力を……」

先に俺がシールドで打ち上げた黒機士が、身を軋ませながら起き
上がる。

流石に7倍界王じゃなく、パワーでぶち上げたからか、胴体前面
と右肩がひしゃげている

「ふ、怪しい技術に溺れた王国などに、正しき発展を目指す教国が
負けるものか!!」

ふはははははははははは

「いや、お前のが万倍怪しいぞ」

ロドニーさんひでえ!!

「で、まだやるのかな？」

「No.12、システム開放!! No.01来い!!」『了解、シ
ステム開放』

黒機士よりマナが噴出し、そして止まる。

そして、一機立ち止まっていた黒機士がこちらに向かって猛然と迫ってくる。

マナの気配は無い。

「ロッドさん下がって!!」

黒機士の数を減らそうと手負いを追うも、黒機士は胴体だけの黒機士からニウベルを拾い上げ遁走。

流石にこちらへ迫る黒機士に対応する為、それ以上動けなかった。

「ち、逃げられた」

「いや、君達には消えて貰う」

正面の黒機士から今逃げた男の声。
なんだ？

「No.01が動いた以上、君達に勝利は無い。このような手段は使いたくは無かったが」

「No.01？」

「要処置対象者を確認。

管理者権限により、対象者行動を制限後、処置に移ります」

「なんだ？」

一体、何事？

「う、動かないっ!!」

「ロッドさん？」

「白機士がうごかねえ」

なんだ？ 青機士は……：干涉？
コクピットがぶれる！？

(システム干涉……：上位権限による干涉。
ID確認、正当性確認取れず。
GM権限により再起動)

意識が、遠くなる……：つて死ぬだろ！！
顔面殴ってなんとか耐えた。

GM権限ってなんだ？ 社員用アカウントもこっちに関わってる
のか？

それに、あっちのナンバーエース？ あんなGMいねえよ！
……：まさか、他の世界から？ 他の世界のゲーム……：NPCか？
システムか？
王国って何やってんだ？

「同位権限による干涉……：管理者権限の行使にエラー発生」

あ、機体が動く！！
今しかない！！

「てええええええええええい！！」

青機士で黒機士に全力の切り込み。
それを、黒機士は事も無げに受ける。
だが、どっかで見てる人はそうでもなかったらしい。

「馬鹿な！！ No.01の干涉が効かないだど！？」

なるほど、最終兵器過ぎるな。

「No.01、退け」

「了解」

「ちよ、待った」

「No.04!! あいつらやつちやえよお、オリハルコン、オーバードだ!!」

全部、みんな、ふっ飛ばしちまえよお!!」

さつき、ニウベルが逃げてった筈の区？機士の胴体からあのいやみったらしい声が聞こえた。

そして、馬鹿みたいなマナが……あれは衝撃系の術式？

自爆？

……

……

……

馬鹿じゃねえのおお!!

青機士を突っ込ませ、コクピットをあけ、垂れ流し放題のマナを使ってディスプレイ。

出来る限り、黒機士の吐き出すマナを削ってその力で術式を荒らす!!

オリハルコンが吐き出すマナは膨大だが、操る相手は其れほどの腕じゃない。

何とか吐き出し終わるまで、術式を荒らし続けられれば……って、砲撃!?

「死んじやえよお!!」

「馬鹿やるお!!」

衝撃に意識が刈り取られた。

此処は何処？ 俺って何？

私が船を急がせて現地に到着すると、そこには膨大なマナが渦巻き溢れさせる機兵の胴体、それに対峙する青い機兵の姿があった。

「二人は無事か？」

「ルドガー様、左舷に王国の母艦！！」

「砲撃戦準備、照準合わせて態勢維持。」

大人しく帰るなら帰ってもらえ！！ ただし下手な動きがあれば

即座に撃て！！

私も出るぞ！！！！」

このまま、終結に向かうと思われた事態だったが。

「王国母艦、発砲！！ 目標は……青い機兵？ 応戦します！！」

次の瞬間、衝撃と暴風があたりを蹂躪、収まった時には、現象の中心だったと思われる機兵の胴体、そして青い機兵の姿は無かった。

目が覚めたら布団の中……そんな目覚めを期待してました。

口の中には鉄の味、顔をしかめようとしてベリベリ、まぶたを開こうとして悪戦苦闘。

小さい頃、隠れんぼで空き家に入り、ガラスで頭を切って血まみれになった時の、頭から顔から張り付いた強張り感を思い出す。

頭は切ると派手に血が出て直ぐ止まるから、今止まっているのなら、それ程ひどい訳でも無いだろうと思う事にする。

ムズムズする鼻を睨ると、生暖かい感触に鉄臭い味がおかわり。鼻血も久しぶりだ。

意識がハッキリしてくると、腹がぐうとなる。こんな時でも腹は減るんだな、ああ、胃が痛い。

首だけ動かして辺りを、右を向こうとして激痛。寝違えたか、むち打ちじゃないといいんだけど。どうやら自分が青機士のコクピットに居るのはまちがいない。

「機兵の中に居てこの有様が、ロドニーさんは無事だといいいんだけど」

体を起こそうとして、左手がついてこない。痺れて感覚が無かったが、意識するとじわじわと痛みが増してくる。なんだか痛い所がどんどん増えていく。

流石に怖くなって、暫く時間をかけて体中をチェックしてみた。

結果、五体満足とは言いがたいものの、左手が折れてるっぽい以外は何とか動けるようで、ほっとした。吐き気と熱が、ちよつとやばいけど。

その辺の部品の残骸とシャツで添え木して首から吊る。

表に出ようとしてコクピットの装甲が動かない。錬金で崩して這い出す。

青機士の機体は片手片足吹っ飛んで、残ってる方も膝から下と手先が無い。

山の斜面で止まるまでに、何十メートルもの溝を掘ってるあたり、相当な勢いで飛ばされてきたようだ……青機士、サンキユ。

このままにもしておけないので、マナ変換&錬金で青機士を崩す。何気に機密だらけなんでしょうがない。また作ってやるからな。顔を洗って軽く飯を食ってから、吹っ飛ばされてきた方角を見る。

昇り行く太陽の向きと併せて考えると、どうやら公領の方に飛ばされたようだ。

「このあたりの地理はサツパリだな。 どうするかね」

東を目指せば王国、北を目指せば教国って位は、判ったうちに入らないし、向かった所で森の中で野垂れ死にかあんまりだから、やはり人の居る所で医者を探さないと……応急手当のスキルはあっても治癒術とか使えないのが微妙な所。

吐き気、熱さまし、化膿止め、痛み止めとかの薬は出せるんだけど……ゲーム中、キャラは痛いつて言わないから、バッドステータス付いてても、プレイしながら時間かけて直してた。

でも、その時間かけてる間、痛い目を見てたんだね。

「ん？ 煙か？」

多分だけど、南の方に煙が見える。

「人が居れば良いんだけどな」

当ても無いのでそこを目指す事に。

このあたりは丘陵地で、歩きやすい所を進んでいると、気が付くと向かってる方向が変わってたりで面倒くさい。 おかげでさんざん無駄に遠回りしてから、マップ見て進めば良い事に気が付いた。

「あら!？」

思わず足が止まった。

木立がなぎ倒されて、大地に溝が掘られて……見た事のある光景。元の場所に戻った？ そこまで方向音痴だったとは思いたくない

んですが……と、マップ確認。 いや、違う場所だよな。
まさか、ロドニーさんか？ バタバタと溝を追いかける。
幸いそれ程走らずに、斜面に引っかけかかっている機体を、見つける
事が出来ましたが。

「黒機士かよ」

真っ黒でした。 どの黒機士か判りませんが、胴体オンリーって
所を見ると、自爆かましてくれた機体でしょうかね。

「流石に、もう反応はねえよな……って、マナを感じる！？」
ちよつど良い、機兵の中に機兵って奴の種明かしを、ちよつと見
せて貰おうか」

黒機士の中身を探る為、コクピットをこじ開けて覗き込む。
見た感じ、一人乗りでしかないが、この奥に複座のもう一席が在
るのは判っている。 機関は動いていない為、鍊金で壁を崩すと、
やはりもう一つの搭乗席が見えた。

そこには……人？ 眠るようにシートに座る女性が居た。 そし
てマナはその女性から感じられる。
白い肌、黒髪、硬質な美貌、作り物めいた印象のそれらを鮮やか
に塗り替えるような朱の唇。

つられるように頬へ手を伸ばし触れると、ひんやりと柔らかい感
触が返される。

ついで髪へ手を伸ばすと、くしけずる手から零れ落ちる水のように
に逃げていく。

思いもよらない出会いにドキドキしつつ、手が下に向かうのは男
として避けられないに違いない！！

スラリとした肢体によらず、自己主張している胸に手を……瞬間、
まぶたが開き、視線がこちらへ向いた。

俺がビクリと固まると、女性は何事も無いように淡々とおっしや
った。

「現在、ソーマによるバックアップにより、補助システムにて稼動。
早急にジェネレーターへのマナ要素の補充が必要です」

えーと、何語でしょうか？ いや、判るんですが、えーっ！！
って感じですね。

黒機士の中のシステムって、これですか？ それなんてFS？
いや、流石にあれの中の人もジェネレーターの代わりまではやつ
てませんでした。

「マナ要素って、ミスリルでいいのか？」

コイン作って見せて、確認を取る。 ジェネレーターへの補充つ
て、どうやるのかと少しドキドキしたら、ひよいと手が伸びてき
て、ミスリルを小さな口にくわえると、そのままくくりと飲み込ん
だ。

「……なに、その色気の無い燃料補給。 真っ当過ぎる程に真っ当
ですけどさ！！ ロマンがねー！！」

エキサイト、そして激痛で大人しくなる俺。

じつとこつちを見る彼女。 くそ、誰なんだ、機械にこんな姿
を…… GJ過ぎる！！

なんと言う技術の有効活用。 そしてデザインのステキレベルが
神がかつてるぜ！！

一つ、難があるといえば……。

「その手は何？」

「マナ要素の補充が必要です」

大きな飴玉サイズのミスリルを五、六個手渡す。

それを口に含んでコロコロやってる、このお嬢さんを半ば使い捨てにする連中が居る事が。

なんともつたいない。

ああ、もしかすると、回収できる筈だったのかもしれないが。

「黒機士が、思いのほか頑丈そうだったしな」

流石に青機士並みの堅牢性。

中枢部はもう一段頑丈にしてあるのか、このお嬢さん無事そうだし。

「いえ、私へのコマンドは、機体の消去及び、私の抹消でした」

ですよー。 やっぱし自爆か。

「で、これからどうするの？」

「マナ回復後にコマンド再実行を行います」

「うわ、勿体ねえ」

「私はこのような姿をしていますが、人ではありません。

『ミッシング・ジエネシス』ワールド管理ツール、アカウントN

0・04、この黒機士と同じ、あくまでも道具でしかありません」

……なにか、酷いネタバレを聞かされたような気がする。

やっぱり、なんかのゲームから呼ばれたのか……ふむ、ミッシング・ワールドに足りない物が見えたような気がする……萌え要素か。

そういえば社長が「あまりにも某五つの星の物語をパクッてるよ
うな気がして、そのネタは自重したんだ」という話を聞いた事があ

る。

もしかすると彼女は、その自重が無かった世界の『ミッシング・ワールド』から、呼ばれた存在なのかもしれない。

「あれ？　じゃあ、黒機士に乗ってる奴って、全員呼ばれた奴ってか？

いやいや、それじゃあ、何十年のスパンで……」

「この世界に招かれたのは、管理者権限を持つアカウントNo. 01とそのユーザーのみです。

私達はその後に作成された一般ユーザー用のツールに過ぎません」

……独り言に、そう真相を明かされると、色々悲しくなる。黒

機士連中はボランティアのGMみたいなもんですか、そうですか。

ぞくぞく作れるなら、消耗品でもいいんですね、うらやましい。

ん？　もしかして、俺も女の子出せるとか……いや、無理か。

聞いた感じじゃ、GM用のアバターと権限アカウント用ツールのキャラクターが、ペアで呼ばれたような感じだ。

恐らく、あちらのGMツールは色々な機能を統合したアプリで、美人の女の子が出てくる対話型のツールなんだろう。

俺の場合は、コマンドライン開いて、いちいちシステムコールかけないと使えない、無味乾燥な文字オンリーの命令群。ヘルプに

イルカどころかクリップすら出てこねえ、頼りはボロボロになった大学ノートの虎の巻。　絶望した！！　使えればいいやという実利

主義に絶望した！！

「いや、今はそんな事より、GM権限の命令群を俺が使えるのか試すのが先か」

ココココとミスリルを嘗めてるお嬢さんは、しばらく置いて大丈夫だろう。

少し離れて木の影へ。

「えーと、CTRL+HOMEとかどうやって入力すれば？ いや、何度か使ってるんだし、どうにかすれば……」

入力したような気になって、意識すればOKでした。キーボードと画面で操作してたのが、感覚になるのは変な気分です。

エラーメッセージとかが、痛い痒いの類になるような感覚って、判って頂けるだろうか？

それはさておき、プレイヤーの一覧を見たいと思うと、オンラインで俺と天才君の名前だけが、ぽつんと。一体、何がオンラインなんだーとか思った。現実というかあちらとの縁とかか？

キャラクターの操作に関しては全てロックされていて、化け化けの文字列しか見る事が出来ない。俺の怪我をちょちょいと治したいなーとか思ってたんだが。他のツールの類も同様、呼び出しすら出来ないとか。

あのNo.01のやった干渉も、色々考えてみたが駄目臭い。あれは不正アカウント等に対する処置の差だろう。あちらは対象者の動作を止めて、それから対処する。うちのはGMに対する攻撃等のハラスメントがあると、オートで逆襲するような酷い仕様が混じっている（行動制限とかのツールは呼び出せなかった）

多分、自分がプレイヤーだという意識で、スキルを使ったりしている時は問題ないが、恐慌状態なんかで見境なくなってる時に、命がやばいような攻撃を受けたりなんかすると、バーサーカーモードに突入って事だろうか。ちょっと自分が怖くなった。

ちょっと整理してみよう。

まず、俺はキャラとプレイヤーがごっちゃになっている。

『錬金マスター』『鍛冶マスター』『ポイント振りだけで到達できる中級程度の生産系』『ポイント振りのみで到達できる程度

+アルファの戦闘系・魔術系』それと荣誉特典である『機兵鍛冶』、配下オブジェクトである『機兵』それに付随する『機士スキル』等はキャラの属性だ。

そして、外部マナ操作等に交換された『機兵の操縦スキル』というのは、プレイヤーである俺自身の『ワールドのやり方で機兵を操ってきた経験』であるし、『機兵鍛冶での開発能力』というのは『人真似やシヨップなんかで積み上げてきた、デザインのノウハウ』である。

残りのゲーム管理に使っていた管理者権限なんか俺に付随するものとして反映されているが、これはキャラが行使する形で発揮される為に、俺個人に結びつけられているのだと思う。

因みに、それらが粗方使えないのは、似たような外部アプリケーションでも、機兵鍛冶スキルが同端末、或いはクライアントに組み込まれている事に対して、社員用ツールがシステムに組み込まれている物を、呼び出す形だからだろうと思う。この世界がサーバーに繋がっていないのだから、当たり前ではある（自動反撃とかはクライアントに組み込みだが）

さて、これに対してNo.04の人から聞いた、No.01とそのユーザーだった人は、ユーザーに対応する為のアバターを動かしていた人と、その管理用ツールであるところのNo.01が別キャラクターとして、この世界に来てしまった。もしくは、No.01は機兵扱いだったのかもしれない（確かに俺のスキルではNo.04や12を機兵と認識していたし）

恐らくだが、そのユーザーの人は、その人本来の能力（交渉だけの組織運営だの）しか持たず、特殊なスキル群はNo.01側で受け持っていたのではないかと。そして、ユーザーの人は死んだか帰ったかして、No.01だけがこの世界で活動を続けていると。どういう理由で王国に手を貸しているのかは知らないけど……ああ、王国の偉い人がユーザー登録を引き継いでいるのかもしれないのか。

うーん、それにしても、俺が世界のバランスを崩せるレベルで色々出したりできるのと同様に、あちらさんはチートレベルで機士をサポート出来る分身を量産できる（何らかの制限は在るんだろうけど） それにあの干渉能力はヤバイ。俺にはアカウントの強度で利かなかったが、他の存在には最終兵器です。他にも管理者権限で動く能力があるかと思うとゾツとする。俺の管理者権限って『暴走スキル』と『対管理者権限スキル』でしかないからな。

おっと、グルグル考えてたら、メガンテなお嬢さんの事を忘れていた。

何とか自爆をやめさせて、もっと情報を仕入れたい所なんだけどな。

No.04 フォウ

「マナ要素の補充が「いきなりそれはいいから」……」

いや、機兵が結構な時間行動できる位の量があっただぞ、さっきのミスリル。

因みにロシナンテが、混ぜ物いっぱいミスリル1単位(10g)で結構走り回る事が出来る。

従機兵で、真つ当なミスリルの1単位を数枚で作戦行動が取れる。白機士のリボルバー形式の投入では、10単位(100g)が基本になっている。

従機兵や機兵のパワーアップって、機士のスキル上げとマナ増量って事になるので、自然と重装甲・重武装でパワーが必要とされる機兵の燃料は、馬鹿みたいに飛んでいくのだ。

「とりあえずさ、自爆はやめない？ そうしたら、ミスリルあげるけど」

「コマンド解除には、ユーザーの許可が必要です」

「ユーザーって？ ああ、ニウベル・ステーンじゃなくて、ストーン？ いや、スターンだっけ」

「認証名確認……パスワードを入力してください」

「おいおい、いきなりログイン認証に話が飛びますか？」

「パスワード不一致「それはパスワードじゃない!!」不一致」

……一体どうしろと。あの馬鹿の考えるようなパスワードなんか判ってたまるか。

イメージからして、こんなのしか浮かばん。

「俺最強、俺最高、皆死ね馬鹿ども……なんてな」

「俺最強、俺最高、皆死ぬ馬鹿ども……パスワード一致。
ログイン処理完了、今後の自動ログイン対象者を変更します。
現在、コマンド待ち受け中」

……馬鹿じゃねえ？ いや、通っちゃったものはしょうがないけど。

でも、こういうなんか凄い人型機械の認証って、声紋だとかDNAだとか個人識別じゃないの？

名前とパスで認証とか……それにしても、ユーザー名とログイン対象者は別に認識しているみたいだけど、名前とパスで変更できるようなのは駄目じゃないか？

ようは『ニウベル・スターン』というユーザー名だけど、識別者は俺になるとか混乱するでしょ。

やるならユーザー名『黒機士4番』で識別者がニウベル・スターンとかにしてくれ。

それで、パス認証の代わりに声紋だとか、遺伝子チェックだとか、個人の識別やつてる機能をパスチェックに覚えよ！！

もしかして、長い事時間たってる間に、ルールとかが忘れられちゃってるのか？

まあいいや。

「あー、まず自爆取りやめ。 ついでにアカウント登録変更、ユーザー名とパスワードを変えよう」

「コマンド受理、アカウント内容の変更は、上位者権限によりロックが掛けられています」

うがぁ、あんな頭の悪いパスワードは変えてしまいたいんだが……上位者権限？

「ログイン要求、 administrator」

「そのユーザー名は登録されていません」

「ログイン要求、admin」

「そのユーザー名は登録されていません」

ですよねー……ありがちな工場出荷時の初期設定とか、そのまま残っていないかなーとか、チラツと思っただけですよ。

なら、管理者権限起動させてみる。

「ログイン要求……えーと、杵島木 一哉」

「そのユーザー名は……&,\$@,%,'@/_/&,'||','&……管理者権限でログイン確認」

おお、通った、いつの間に登録されてるんだ？ つか、今の一瞬、バグって無かった？

本当にこの世界はリアルな別世界なのか自信がなくなってくる。ゲーム世界に取り込まれて、システム混ざるとか言われた方が、説得力あるよな。

「まずは、アカウント『ニウベル・スターン』削除、それとNO・01のアカウント属性確認」

「削除実行、NO・01にはフルコントロール権限あり」

まあ、当たり前か。

「属性変更、NO・01のアカウントによる視認、及びコントロールの禁止」

できるかな？ まあ、管理者複数を想定してなかったら、規制は掛けてないかもと、かすかな希望に。

「変更完了」

通ったか。 やっぱし、No.01は本来のユーザーが居なくなつてから、仮ユーザーなり自立で動いてるのかな？ ルールとか使い方が重要度に比して、いまいち安易というか、動けばいいって感じになつてる気がする。

因みにNo.01のアカウント消さないのは、消したらさっきの俺みたいに管理者権限で接触したときに、ユーザー登録が新しく湧いて出そうだから……それなら、キツチリ残して規制掛けとく方が良さそうな気がするからね。 まあ、視認を出来ないようにしとけば、自爆したと思つてくれるかもだ。

「あ、そうそう。 ユーザー作成『キシマ・ギ・カズーヤ』 うっかり変な事にならないように権限は通常、いやパワーユーザー……つてあるのか？」

「作成完了」

「おっと、今までもユーザー居たのかもだっけ？ 『杵島木一哉』『No.01』『キシマ・ギ・カズーヤ』以外のアカウントは削除な」

「完了」

……なんでだろう涙が出て来る。 少々無感情で無機質とはいえ、女の子の声と平和に対話する事が、こんなに癒されるものだったなんて。

「現アカウントをログアウト『キシマ・ギ・カズーヤ』で再ログイン」

「完了……パスワードを設定してください」

「げ、忘れてた「設定完了」それは違うんだが」

「パスワードの設定は変更できませんかね？」

「パスワードの属性をフレーズによる物から変更するには上位者」
「はいはい、管理者でログイン」「
「完了」

「ん？ こっちはログイン認証いらんの？ パスは？」
「管理者権限によるものは個体認証により自動で「了解了解」……」

ん？ 今なんか一瞬、むっとした表情にならなかったか？

「『キシマ・ギ・カズーヤ』アカウントの認証を個体認証に変更……
……でいいのか？」

「一般及び高度アカウントにおいては存在認証の使用は不可能な為
個体データのサンプル比較による簡易個体識別の認証になります
が、よろしいでしょうか？」

何か大層な言葉が出てきたぞ。

「まあ、OK」
「変更完了」

「じゃあ、もっかい現アカウントをログアウト『キシマ・ギ・カズ
ーヤ』で再ログインね」

「認証の設定を行います。 サンプルを提示願います」

ん？ どうしろと？

「手を」

ほいと手を出す。 しげしげとそれを見つめるNo.04。

「あまり繊細とはいえませんが。 生命線は長いようですが」

「何処を見てるんだよー!!」

その後、目を見せるだの口を開けると言われ「上の4番にC1、今なら歯磨きで直ります」とか、歌を歌えだのと言われて「95点意外です」とか、本当にサンプル取りが進んでるのか不安の連続。確かにこれでは、簡易に済ませようとするかもしれないと納得。

「では、最後に生体データを」

「やっと終わりですか……もう一時間くらいやってるような、で、なにをすれば？」

「顔をこちらへ」

その言葉に、やっと終わりかと顔を突き出したら。

「これでいいで「んっ」……「……」……!?」

がっしりと頭を掴まれて、唇を奪われた……。

「っぷあ!!! いきなり過ぎるだろうが!!! 色気も何もあつたもんじゃないぞ!!!」

ていうか、今の『主役の優柔不断男に婚約者を奪われて、嫉妬に狂った脇役イケメンが、ヒロインの唇を無理やり奪う』ようなキスは何!!!

一般常識に疎い、人間じゃない美形ヒロインが、ある種のロマンでもアレは引くわ!!!」

そうテンパッてる俺に「この人は何を言っているのか?」というような顔で、小首を傾げるNo.04……ちっ、可愛いじゃねえか、くそ。

「データ採取は完了しました」

「涼しい顔しやがって……」

そしてエキサイトして激痛で蹲る俺。

「ふう、気分が悪くなってきた。早く人里に行かないと」

「No.04……っていうのもあれだな。お前って言うか、君のことはフォウって呼ぶ事にする」

「マスターを庇って死にそうな名前ですね」

「マスターって言われるのもいいけど、大仰だな。っていうか、何その無駄知識」

……いや、まてよ。 別世界から来たと思ってたけど。

「なあ、No.01がもと居た世界って、どんな年号だった？」

「平生2X年だと聞いています」

微妙に違うんだな……同じ世界の別ゲームかと思っただけど、やっぱり近似世界のミッシング・ワールドか。

「じゃあ、そのNo.01のユーザーの人って、どんな人？」

「ケイジ」サラスナという名前しかデータにありませんが、No.01をはじめ私達のデザインは、彼の隠しフォルダの画像が元になっていると聞いています」

「……いい趣味してるなというべきか」

うつむ、うちの社長は『更科敬二』だ。 一読み違いかよ。

「因みに隠しフォルダの名称は『グツと来た外人コスプレイヤー』フォルダだったそうです。 それらのデータは全てNo.01及び後続のアカウントに但し書きと共に含まれています」

「ただだけ広大な無駄データだよ!!」

「但し書きって?」

「男の娘に注意と」

「ぶっ、痛ててて。なんだそりゃ」

「アバター作成の際、画像だけで全身のデータまで補完されますが、見かけの身体データと性別が食い違う事があるようです」
「……」

言葉が無い。それは、絵から実在の何かを引っ張ってきてるって事か。俺がゲーム中の美形じゃなくて、自前の顔で来たのもその辺のせいか?

「それって、絵を書いて基にしても駄目?」

「モデルが居る物であれば可能のようです。その絵のモデルを認識している存在が居る場合、アバターに使用された例があります。他に対象存在の一部等からの作成も例があります」

「なんとなく判ったけど……作成ってNo.01にしか出来ないんだろ」

「はい、上位権限によるコマンドが必要とされますので」

「上位権限のコマンドがあればフォウにも可能?」

「アカウントの作成は単にコピーですので、権限及びアバターの外見以外にコードの差異はありません」

「じゃあ、俺がコマンドすればコピーが作れる?」

「いえ、現在の状況では、限りなく不可能です」

「なんで?」

「問題が二つあります……まず第一に」

フォウが指を指を一つ立てる。

「必要マナ要素が現在量の3580倍必要です。更にコピー体にも維持の為のマナが必要と成ります」

そして第二にと指を一本増やす。

「現在、私はコードにダメージを受けています。

通常であれば、アヴァター生成用のアプリケーションを流用し、補修可能ですが、その部分にダメージがある為に事故での修復は不可能。そして他者の修正が可能な権限を持つものはNo.01のみです」

「ちよ、それはー!」

戻った所で、自爆させるような奴が居るんだぞ。

どうしたらいいんだ？ 考える？ 生成用のアプリ……機兵認識……機兵鍛冶のエディタ……いや、でも認識不可のパーツや構造体や素材が……バージョンアップだのPATCH当てるだの無理だろうし……いや、待てよ？

「アヴァター生成用のデータライブラリは生きてるのか？」

「答えはイエスです。 ですが、それ単体では展開も適用も出来ません」

「データは圧縮マテリアルと圧縮ストラクチャだな？」

「イエスです。 しかし、なぜそんな事を？ この世界の人間には知りえる事では」

「そこは秘密だ。 それより、なんとかなるかも」

まずは黒機士の主機が回るかどうか。

コクピットを覗き込んで、ミスリルを放り込む……つか、この中

のミスリルも喰ったのか？

「さて、まわれよ！！」

起動させる……微かに振動したが、ミスリルが崩壊に至らない。

「くそ……動けっええええええええええ！！」

機関の中のミスリルに干渉、無理やりマナ変換を掛ける。

主機の中にマナが広がり、崩壊の始まる臨界を越えると、自己崩壊が進んでいく。

ミスリルを追い込むように追加で叩き込むと、何とか安定してマナを吐き出すようになった。

すぐさま、フォウの元へ戻り、機兵鍛冶スキルを発動。

対象をフォウに。そして、テスト用に外部ライブラリを読み込む……うお、『フォウ』って名前の外部ストレージが在る！！一部化けてるが、目当てのファイルは無事だったようだ。読み込み……ん？

「イタツ！？ 痛えてててっ……っ！！！！！！」

体中に『直で握られた痛みを全力発信している神経』を足されるような感覚が走った。

思わずのた打ち回るが、読み込みもスキル行使も途切れることなく、気絶も出来ず、一体どれほどの時間が経ったのか、数秒だったようにも数時間だったようにも感じられる痛みが引いた時、残っていた目的意識だけが作業を進め、意識を失った。

「こんな引きばかりだ」

意識の途切れる最後、何か柔らかいものに包まれた気がした。

ただいま休憩中（仮）

「マスター。こんなに太くて熱い。　凄い、鼓動に合わせて……震えてる」

「う、ああ……あぁっぐっ」

緊迫した声でフォウさんが俺の……を手に取り呟く。　その感触に俺は、俺は。

はい、俺、絶賛ケイレン中。　いやね、もう馬鹿ですよ。　骨折中に地面転げ回るとか、もうね。　固定していた筈の左腕がね、ホウレン草を食ってテンションあがる、某セーラーマンみたいになってます。　手首の所からね、一気に三倍程に腫れ上がって熱持ってますよ。　脈拍で激痛が走るんですよ。

「はは、はあ、熱下げるとか、はあ、は、吐き気抑えるのかな、あはは、レベルじゃなーよ」

一時、痛みで目を覚ましては、その痛みに気が遠くなるという、地獄の無限ループを繰り返してましたが、なんとか歯止めが掛かるように……それはそれで地獄ですが。

さて、フォウさんのコードはちゃんと修復できて居るようで、良かった。　うん、俺がんばった感動した。　何気に漏れてたマナは結構危険な兆候だった模様で、今は感じ取れません。　ただ身体の構成は、無事な部分のコピペで直すような感じでしたが、アヴァターの生成アプリケーションには手が出せませんでした。　実行コード見て、ソースが読めるような、トンデモスキルはありませんし、どうせ異世界に来たお陰で、こんな人工知性に化けたんでしようし、ソース見ても理解できるような代物じゃないでしょう（いや魔術なんてトンデモが理解できるから、もししかしたら判るかもですが）

結局、構造と素材のライブラリも俺が取り込んだので、すっぱりとアプリ諸共消しました。

因みに、今の状態のフォウさんを丸々コピーは出来ませんが、デザインを変えようすると、のっぺらぼうしか出て来ない事に。そこから俺がマニュアルでデザインする事は可能ですが……無理です（絵心的に……ポリゴン組む仕事してた癖にと言われても、テクスチャ貼るのはメカと人じゃセンスが……その辺の人をサンプルにする事は可能のようですが）

修復中に気付いたのですが、驚いた事にフォウさんの原材料って、全部マナだとか……。ようは賢者の石に集積した情報を軸に、ソーマとマナで外見作ってる。CPUもメモリも電源も全部マナ。メモリ上の信号もマナの揺らぎとかどういう原理なんでしょうか。

まあ、あくまでも喩えなので、コンピュータまんまな訳も無いでしょうが。といって、機兵をマナから湧いて来させる俺が言うのもおかしいですが。

ライブラリといえば、教国駐屯地でフォウさんの解析が出来無かったのは、機兵鍛冶には生体系の素材もモジュールもデータが無かったせいですね。それっぽいものといえば、ソーマシステムのパイプラインとか、人工筋肉（金属系）位でしょうか。今回取り込んだので、生体系の代物も作れるようになってしまいました。

ただ、生体系の代物はフォウさんみたいなサイズで、オリハルコンクラスの出力を押し込めたり出来ませんが、耐久性と安定性に難があるようで、使うのが怖いという弱点が。だからこそその機兵と機士と人形の複座、ハイブリッドな方式なんでしょうね。

しかし、生体系の素材を使った機兵？ それなんてオーラハトラー？ 怪しげなエネルギー（オーラ力）で動くところとかピツタリ過ぎて怖いぞ。金属材料オンリーっぽいものにも、ブレンハワードなんていう、謎エネルギー（オーガニックエネルギー）で動く輩が居ますが。

「まあ、駆動系出力系の選択肢が増えたんだし、色々遊べそうだ」
「痛みは引いたんですか？」

「あ、せっかく意識をそらしてたのに！！ うあああああああ
あ」

「治療できるなら、早く言って欲しかった。自分を治せないもん
だから、そういうのは出来ないとはかり」

「マナ要素の補充が無ければ使えませんでしたので」
「そうですか」

現在、フォウさんに膝枕してもらってます。やらけえ。更に
俺の左手を胸に抱いて貰うような形になって、最近に無く幸せな
のは言うまでも無い。

しかし、これはあくまで治療の為。時折ミスリルを「あーん」
とかしては、左手の状態沈静化と鎮痛をお願いしている所なのです。
決して邪な感情は無い訳でなく、他に方法を思い付かないように
しただけ。

え？ 日本語がおかしいって？ そりゃ、ここは異世界だからね、
うん。

「あー、だいぶ腫れも引いてきた」

見た目では、そう違和感が無いくらいに収まっていますし、痛み
も疼く程度にというか、腕の感覚が鈍くなっていますか。

「しかし、体液の循環を調整しているので、本来の治療行動の阻害

になっています。あまりお勧めできる方法ではありません」

そうなのだ、決して骨折が直る訳ではなく、血流等々の患部に溜まった諸々を調整して腫れを引かせ、熱を下げてくれるだけ。本来は骨を作る細胞の為に、血流とかは増えるのが自然なのですが。とはいえ、今の状態が収まらないと、移動も出来ないんだし、しょうがない。

しかし、骨折を直しきれないにも拘らず、ミスリルは消費しまくっているフォウさん……。どれだけ燃費が悪いんだ。

このままいけば、教国直轄地では撒いた位のミスリルを、使う事になりそうな予感。

「まあ、いいか。気持ち良いし」

更に一つ、ミスリルを「はい、どうぞ」

「（ころころ）現状は、これ以上る状態改れんは、むるかしいと思われます（ころころ）」

「口に物入れながら喋らない。ああ、言ってる事は判ったから、飲み込もうとしない」

感触の堪能が終わるのは、かなり残念ではありますが、左腕固定して……と。穴あきの樹脂製ギブスを自作して装着、首から吊り下げる。

「黒機士は潰しちゃってもいいかな？」

「イエス。安全の為に我々の存在の秘匿は重要です」

「OK」

「特に、黒機士の秘密を知ってしまった、王国指名手配ナンバーワンになりかねないマスターには、凄く重要」

「ぶっ」

「恐らく事が露見すれば……レアなスキル持ちなのも併せて、酷い事に……可哀想なマスター」

ビビらされたせいもあり、念入りに土に戻してから、形を崩す。代わりに、格納庫の梁に見える鉄骨を、捻って千切れた風情に加工して、地面が削られた終点部分に置いとく事に。

「さて、近くに人里があるかどうか知ってたり？」

「イエス、作戦地近郊のデータは持っています」

なんて便利な方ですか。

「じゃあ、あの煙は村か何かが？」

「イエス、公領側の国境監視駐留地に付随した村です。主に傭兵や基地の兵員が落としていく金で、経済が成り立っているとの報告が。結構な規模があり、人の数も多いですが、軍人やその家族も多い為、常に公領側の目も在ると考えられ、不審な人間は目を引くでしょう。更に昨夜の小競り合いで、動員が掛かっている場合、かなりの警戒、あるいは厳戒態勢下にあると思われれます」

派手にやったしねえ。従機兵が八機とか、傭兵使い捨てる気じゃないと、考えたくないダメージですね。

「そんな所に、住所不定の怪しい輩が立ち寄るのもなあ……。他に近いとこで村でも無い？」

「残念ながら」

「仕方ないか……傭兵でも装って。ああ、一応傭兵ギルドの認定は貰ってるんだけど、大丈夫かな？」

「……ギルドは表向き、国の制限は受けていませんが、登録国家の

準戦力として見られる為、公領、王国では他国での登録者は警戒される傾向があります」

「一応、王国なんだけど」

首から掛けっ放しの登録証を見せる。

「……仮にも仮想敵国では在りますが、今の状態では戦闘の発生した教国の者よりは警戒されないかもしれませんが。ところで、一つよろしいでしょうか？」

「何かな？」

「この登録証ですが……『キシマ・ギ・カズーヤ』というのはどういう冗談でしょうか？」

それと昨夜の青機士の機士、及び『魔道機士KAZUYA』とは、やはりマスターの事でしょうか？」

すっ転びそうになりながら、フォウさんに掴み掛かるようにして顔を寄せた。

「い、いきなり何事かな？」

そんな俺に対して、驚きもせず淡々と返すフォウさんは大物だと思えます。

「昨夜からの出来事及び、マスターの突っ込み所の有り過ぎるスキルや言動等を鑑みるに、この世界の者では無いと認識しました。

しかし、あの『魔道機士KAZUYA』の名を名乗る者が正気とは思えず、一応はマトモに見えるメンタリテイの持ち主であるマスターと、重ねて良い物が迷っていました」

一応はという部分に激しく突っ込みたいが、今は我慢。

「が？」

「その登録証にあるように、アナグラムにもなっていない偽名を使うと云う事は、自己を誇示していると判断し、最終的な確認の為の問いを」

「イエスだったら？」

真剣なフォウさんの表情に、俺の背中がじわりと冷えてきた。微妙な間が長く感じる。

「ごくりと息を飲んだ俺の様子に、一息あけてフォウさんがのたまった言葉は。」

「好感度、その他の環境変数が、大幅に数値を変動させる事になるかと」

「うおい！！　つか、あるんだ好感度。」

「丁度良いから、しっかり聞いて欲しい！！」

青機士を操っていたのは俺です。けどな、あの馬鹿な名前を言い出した奴は、断じて俺じゃないから！！

「断固として、あんな阿呆な解釈ないから！！」

人の名前を何だと思っているのか。　本当に勘弁してほしい、涙出てきた。

「い、今の反論は、ロジック的ではありませんが、情緒的な説得力があると判断します」

流石のフォウさんも、俺の鼻水たらした説得には感じる所があったらしい。　ちょっと引いているのは気のせいだろう。

「では、巫女の解釈が間違っていた、という事に結論付けます。

結果『魔道機士KAZUYA』は、成立自体がサイオン王国守護『エリカ・サイオンジ』の誤解釈によるもの、それを天の機士『グラム』が深く考えずに追認した事により、広まってしまった誤った真実と……結果を適用、各環境変数は保持されました」

「判ってくれたら嬉しい……というか、エリカ・サイオンジって、あの巫女さんか？ 王国守護とか、ルドガーさんが言ってた気がするけど」

あれって何者なわけ？

「イエス、サイオン王族の墳墓を守護する一族と言われています。

しかしサイオンジ家は表に出ない上に、サイオン王家自体が然程古い歴史を持つている訳ではありませんので、何時から存在していたのかは、定かではありません」

「怪しいにも程があるな」

「イエス、判っている事は、何代かに一人か二人、『巫女』と呼ばれる存在が現れる事です。巫女は王国の危機に対してその力を発揮し、何らかの存在を呼び寄せると言われています。

それがNo.01とそのユーザーであり、今回の天の機士とマスターなのでしよう」

「なるほどねー」

あの巫女さんに異世界の連中を召喚する力があるとは……まさに、なんとかにHA・MO・NO!!

しかし、あの黒機士パワーがあるなら、白機士が三十機ほど湧いた所で、新しい力なんか要らなかつたんじゃないだろうか？ そのことどうなのだろう？

フォウさんに聞いてみた。

「実は私達のマナ要素の補充は、効率が悪いんです」

「うん、それは良く知ってる」

あ、ムツとした。

「つまり、黒機士が常に全力を振るうう事は、出来なかった訳です
すねっ!!」

なるほど。　　いてっ、いたって、折れた腕にチョップ駄目だっ
て。

「そして現在、は、私達のマナ要素の保有量は、ふう、程度の差こそあれ、僅かな物です」

「ああ、黒機士だよりの方法に、時間制限が見えてきたのか」

息切れる程、ムキにならんでも。

「それゆえの新しい召喚、それゆえの教国への黒機士派遣です」

「えーと、ちょっと、その辺は良く判らないな」。

天才君の召喚の意味は判るけど、黒機士の教国へのちよっかいの意味は？」

「実は最初の時、銀の機兵が倒したのは、システムを使っていない黒機士です。」

そして銀の機兵からは、オリハルコンが得られました。　ならば青銅の機兵からも考えるのは、自然な事ですが」

「ああ、あーあー、はいはい。　なるほど!!」

システム使えば、そして最悪でもNo.01が居れば何とかなるって考えれば、目先にオルハルコンを吊り下げられたら動くわな」

システム無し黒機士でもそこそこ粘れるようなら、天の機士もその機兵も、恐れるに足らずってとこだわな。

でもケイオスはガス欠でオリハルコンなんか残ってなかった訳ですが。

そして黒機士三機出しといて、白機士の派生機二機に、一機損失と一機小破で退却とか。

ん、おいおい。考えてみればあの巫女さん、王国を助けるどころかピンチにして叩き込んでないか？

銀の機兵はオリハルコンを持ってきたが、それ程の戦力ではなく。余計な物を教国に渡してしまったあげくに、黒機士を二機やられる……白機士相手に。

「うわー、考えるだけでも、先行き不安」

「ですが、実はそうでもありません」

「は？」

今の話のどこに希望が？

「銀の機兵ですが……予備扱いだったNo.13がサポートする事により、天の機士本来の力が発揮されたようです。その結果は、システム開放状態の黒機士すら叩き伏せる程に」

「なんですと!?!」

「どうやら、この世界とあちらの世界では、機兵の操り方が違うそう……その割にマスターは器用に操っていたようですが」

いや、本来は俺が正解。あつちは簡易版というか、ゲームなんだって、どっちもゲームだけどさ。

「とにかくNo.13が仲介し、天の機士の思い通りに動けるよう

になった銀の機兵は、黒機士並みに動ける白機士が三十機居ようが、蹴散らせる戦力であるのは間違いない。

動きの次元が違うのです。これなら、あの人にも負けないと、天の機士が言っていました」

ほー、へー、そーですか。

こっちでも俺が積み上げてきた物を無視ですか……というか、せつかくこっちの土俵が上がってきたと思ったのになあ。確かにミツシング・ウオーでの動きをされたら、勝てないかも。つか、なんかザワザワしてきた。

「ああ、久しぶりにあの天才君の事を思い出したら……無駄に悔し涙が……くっ、くそ。」

常に負ける事なんて考えて無い、あの幸せな迄に前向きな、頭の中が妬ましい……」

あー、ムカつく!! 胃がキリキリして来た……口の中の鉄臭い味が酸っぱく。だめだ、考えないようにしよう。

なんだかなあ、俺TUEEEな状態だったからこそ、異世界に放り込まれても、余裕かましてたのになあ。

イレギュラーとはいえ、こっちの世界では俺の拘りが活かせるって部分が、救いになってた。

それをまあ、ご都合主義な出来事で覆してくれる……俺が言うなっつて気もするけどな。

あ、やべえ、泣きそう。

フォウさん、頭撫でるな、ほんとに泣くからやめて。

「落ち着きましたか？」

「……ハイ」

二十歳過ぎた男が、高校入ったばかりのガキ相手に、悔しがって泣くとか。思ってた以上に、俺ってストレス溜まってたようです。泣くだけ泣いたら、アツサリと落ち着きました。

「今はそんな事はどうでも良いんだった」

今は村に行つて、どうするかが大事なんだよと、お茶と茶菓子なぞを出してみた。

お着替え、そして村へ

「うん、そうそう違和感あったんだよな」

お茶しながら、フォウさんを眺めて和んでいたら、ハッと気付いた。

「私に何か不都合が？」

こくりとお茶を一口すすりながらフォウさん。一応出した物の、飲めるのか心配していたが、問題なかった模様。

「その格好、どこの組織の人？ って聞かれそうなんだけど」

似合ってるだけに、スルーしてたけど、その辺の皆さんの格好で、ファンタジー系 ヤザキアニメなどから、未だに脱却して無いですよね。

そんなところに、光沢のある素材不明黒モノトーンのインナー＋タイトミニ＋黒ニーソ＋編み上げブーツ＋ロングコートな、それどこのジャンプ系エクソシスト？ って格好は、人里に行くには不適切でしょう。コスプレ云々の話ですっかり頭から抜けてました。まあ、俺もシャツとジーパンでよくも戦闘してたなと思いますが。じっくり考えると、機兵のコクピットって、高濃度のマナが充満してるおかげで、揺れに強いんですよ。体に浸透する粘度の有る流体みたいなもの。そのおかげで、ガツクンガツクン振られても大丈夫なんです。おっと話がそれた。

「という事で、フォウさんには着替えてもらいます」

まあ、選択肢的にはそんなに幅は無い。

デニムか綿のパンツ・シャツと厚手デニムか皮のジャケット。動き回ってかつ丈夫、そしてデザインに気を取られなくて良い。

裁縫スキルと錬金によって沸いて出る、驚異の無縫製デニム衣料の頑丈さは、笑う位に凄いのだ。ただ錬金術流行ってる割に、色つてのがブドウ色、カーキ色、ベージュ、ブルー、量産ザク色位しか見かけないので、目立たないようにすると、本当に地味な格好になるわけですが。

「こんな感じで問題ありませんか？」

フォウさんが、シャツの中から黒髪を両手でかき上げ、ぱつと払う。それだけで腰まである長さの髪が、一筋の輝く流れに戻ってさらりと揺れる。なんだか着替えてから、フォウさんの雰囲気が軽々とした物になっているような気がする。ふと視線が合った拍子にニツコリされて、俺ドギマギ。

「……た、大変結構では無いでしょうか」

因みにフォウさんの格好は、藍染のジーンズに白のTシャツ、皮のPATCHあてたGジャン、足元はソックスにブーツ。流石にスニーカーは……まずいか。首に赤のストールだっけなんだっけ？巻こうかとも思ったんだけど、俺がボーイスカウトみたいになるのでやめた。あれは黄色だっけ？

結果、随分と一般的な所からは、かけはなれてしまってますが、そんなに高い生地とか使って無いので、金持ちだとかに見られる事は無いはず。単に動きやすいデザインなんですと、言い張ってしまおうと思う。

ぶっちゃけると、俺のデザイン力の限界です。でも、随分なダ

ササ加減かと思っただんですが、格好の良い人が着れば、それなりになってしまうものですね。後はフード付きの雨合羽も作ったんで、それ着てれば目立たないかと。怪しい気はしますが。

「それじゃあ、行きますか」

「イエス、マスター」

やっぱし、なんか嬉しそう。妙に足取り軽いし、森のあちらこちらを向くたびに、表情がコロコロ変わる。

無表情な時も随分綺麗な娘だと思ってたけど……ヤバイ、さっきまでの数倍かわいい。

最初の人形じみて印象的だった白い肌も、なんだか朱がさして健康的に見える。押し込めるような不安定さが、なんだか危険な感じにちらついていた瞳は、今は好奇心にきらきら輝いてる。ぐつと眉間に力が入って、頑固さというか厳しさだけを強調していた太い眉も、今では綺麗な弓を描き、切れ長の目元と相まって、華やかさを演出している。不吉な血の色を思わせていた唇は、今じゃあ花のように綻んでいる。

陳腐な形容だとは思つが勘弁してくれ。そう、彼女をこの世界に生み出すきっかけになった、何代か前のサイオンジの巫女さん。あなたにはGJと言っておこう。

本当に、ミスリル砕いて出てくる、謎エネルギーで出来てるとは思えないよなあ。

「それはそうとマスター、傭兵を名乗るなら、何かしらで武装していなければ、不自然です」

おおっと、見惚れてる場合じゃないな、ああ武器ね、なるほどそうか。

「何ぞ、武器とか持つてる方が良いのかね」

「イエス、それはもちろん」

「この世界の傭兵って、イマイチイメージが浮かばないんだけどな」

最初はファンタジーだと思ってたから、傭兵⇨剣士とかだったけど、今は傭兵⇨従機兵乗りみたいなイメージがある。でも、実際はそんなに従機兵でも乗り手は居ないだろうから、兵士みたいなのも居るのか？

「でも、銃があるなら、剣士なんてナンセンスじゃね？ おまけに魔術とかあるしさ。」

いくら近接のエキスパートだからって、無理があると思う」

どう考えたって、威力や範囲で魔術>銃>剣。 射程やら速さを軸にしたら銃>魔術>剣。 剣士って壁か？ 気やら何やら使えるとか聞いて無いし、銃弾見切ったり、魔術堪えたりは無理でしょ。

「マスター、傭兵に単なる剣士というカテゴリは、存在しませんよ」「あれ？ そうなの？」

「銃ないしは弓、あるいは魔術具か魔術そのものを使いながら、なおかつ近接で剣を使える者が、剣士と呼ばれます。」

ですから、剣を持つているからといって、単純に相手の攻撃手段が近接のみと考えていると、長生きできません。

剣だけを使う連中は、剣士ではなく……チンピラといいます」

「そーなのかー」

実も蓋も無いような事を、指をふりふり得意げに話し続ける、フオウさんの常識講座。 俺は心のそーなのかーボタンを叩いていた（そーなのかー、そーなのかー）

「じゃあ、魔術メインの剣士という事で剣だけ持ってりゃいいかな？」

「あれ？ マスター、魔術使えるんですか？」

不思議そうな顔でフォウさんに聞かれた。 教国駐屯地でディスプレイ使ってたでしようが。

「あ、そうですね。 インチキ臭い錬金術がインパクト有り過ぎて……」

「色々と思う所はありますが、何も言わないでおきます」

真面目な顔で言われたら、突っ込んでいいのか悩む。

「では、私も魔術は使えますので、短剣でも貰えると格好が付きます」

そうですか。 ぶっちゃけると魔術はマナの出力的に弾けると思っているので、あんまり怖くない。 その代わり、物理で怪我すると痛いので、剣にマナ通して振り回すと物理防御のかかる、魔術具にしておきましょうか。

恐ろしい事に、ここ最近めったやたらに錬金使いまくってるせいか、精度スピードその他諸々のレベルが上がってるような。

ミスリルとアダマンティンのダマスカス仕上げに魔術刻んだりとか。 怪我しつつの歩きながらで、出来るこっちゃ無かったんですが、鞘ごとボンと沸いて出た。

ちゃんと振り回すと、物理防御掛かりますよ。
ついでにオリハルコン生成。 フォウさんにあげる。

「これ、今作っただですよ」

「うん」

「ちよ、ちよつと感動しています。マスター、もしかなくても、私をコピーして機兵を揃えれば、世界征服できますね」

「おお、できるかもしれない……まあ、だから何って感じだけど」「変わってますね」

「そう?」

「イエス、普通世界が手に入る等という可能性が見えれば、多少なりとも野望が芽生えませんか?」

「いやいや、そんなワクワクした目で見られても。」

「もし出来たとして、その後の事に責任って物が付いて回るでしょ。俺って広報の仕事で、一つのコーナーを仕切るだけで一杯一杯でしたよ。世界なんて責任は重いです。しかも、カスタム指南のページの仕事を奪おうとかしてくる奴は居なかったけど、世界なんて物を握ったら、どれだけ後ろから狙われるか」

「自慢じゃないけど、人望もカリスマも腹の黒さも人並みですよ。」

「そういう事をサラツと言える所は人徳だと思いますが」

「過大評価。ただの面倒臭がりだよ、俺って」

と、そんな事を話している最中も、なんだかんだと作っていたり。来てすぐの頃はコインの生成で遊んで居たけど、今じゃあ魔術吐き出すリボルバーとか作ってますよ……あれですよ、初めてこっちに来た時に持ってた拳銃。

いつの間にか邪魔になって、マナ変換の材料にして、無くなつてましたが、復活です。

リボルバーつっても、銃身には穴は開いてなくて、シリンダーと銃身の周りにマナを封じる加工をして、真ん中部分をミスリルでマ

ナが流れやすいようにしておき、その途中にマナが流れてきたら、魔術構成の形で吐き出すように調整した賢者の石が入ってるだけ。つまりミスリルチップをシリンダーに入れて、トリガー引いたら撃鉄がミスリル砕いてマナ発生、それが行き場を制限されてるので銃身に流れ、ただの流れが魔術構成に整えられて、魔術発射となる。弱点はシングルアクションなどでしょうか？ え？ 見た目？ ピースメーカーです、有難うございました。

「火とか出たらまずいだろうから、衝撃術式にしてるから」

フォウさんに一丁、手渡す。

「リロードはレポリューションですか？」

何でそんな事を知っている。とか、馬鹿をしながら歩いているうちに、目的の村に辿り着いた。

辿り着いたのだが……。

『いやっ、放して!!』

『喧しいっ!! 貴様らには、あの役立たず共が無為に消費した、ミスリルの補填をして貰う』

『そんな事は契約に記されていないぞ』

『やかましい!! 従機兵八機が全滅なんぞ、誰が信じるか!! どうせ、教国の連中と共謀してたに違いない。そんな連中相手に守る契約なぞあるか!!』

いきなりイベント発生中でした。

公領と羊飼

「な、なにごと？」

俺はイキナリの展開についていけない。そんな俺に耳元でフオウさんが囁いた。

「片方は公領基幹部隊の所属ですね。

コネと権力の後ろ盾が無ければ、そうは所属出来ない、色々な意味でエリート部隊です。

こんな国境近くの辺鄙な場所に居るといふのは、何かしら軍が動いたという事だと」

「それは教国にちよつかい出した件じゃないか？ それかその後始末？」

「論理的な推測だと思います」

もう片方は、良く判らない雑多な集団だ。

年若い連中が多いが、傭兵だの何だのという雰囲気は薄い。

武器を持つてる連中も少なからず居るが、本職の軍人と睨み合っ
てられるようなのは居ないようだ。

俺と同じ位に見える、二十歳前後の若い連中が三・四人で声を張り上げて言い合っているが、後ろでは女の子と喋っている年の数人が、肩を寄せ合って泣き出している。

とにかく、こんなところで眺めてるのも目立つ。

道の端、野次馬の陰に隠れて歩きつつ、酒場だか宿屋だかな建物を目指した。

後ろでとうとう均衡が破れたのか、やりあう……いや、一方的にやられている喧騒が聞こえてきた。

『確保ー』という声も聞こえているので、收容されるんだろう。ああいうのを見ない振りするのは気が重いが、訳も判らず割り込んで、何か出来る訳で無し。訳が判ったところで、何か出来る可能性も限りなく低い。何軒か回って、食堂の上に宿泊できる宿を構えた店を見つけ、そこにチエックインする事にした。酒場は騒がしいのと、兵隊がやたら出入りするので落ち着かない。ここも公領の兵士が泊まっているらしいが、それなりに身分のある連中なのか騒がしく無く、喧しいのも避けていくようだ。

「お客さん、大変な時に来られましたな」

頭がちよつと寂しいものの、かつちりとした給仕服姿が板に付いた店主が、記帳している俺に向かってボソリと呟いた。

「いや、ここだけでも無いさ。王国もピリピリしてるし、教国は近辺戒厳令下だ。」

おかげで王国から逃げ出すのに苦労したよ」

それっぽい事を言ってみたが、別に変な事は言っていないよね。

「お客様、王国からですか？」

「ああ、一応は王国で傭兵をやって居るがね。」

こんな状況下でギルドの仕事を押し付けられたら、どんな厄介が舞い込んでくるか。

命を的の商売といった所で、命あつての物だねだよ。

ほとぼりが冷めるまで、隠れて大人しくしてるに限るさ」

言って、登録証をカウンターに出す。

「左様ですな」

店主が、登録証に目をやり、結構ですと返してきた。ホツとしながら、錬金した金を大きな粒で幾らか転がす。

「お泊りのご予定は？」

「あまり良い宿は泊まりつけないんでね、食事込みでどれ位泊まれるかな？」

「こちらですと……三泊と、良いワインを開けさせて頂きましょう」「じゃあ、とりあえず一週間。ワインは楽しみにしておくよ」

はじめの倍量を追加で置いて、待たせているフォウさんの所へ。何気に格好付けながら、心臓バクバクしてたりして。

貰った部屋のカギを手に、さつさと二階に上がる。

階段途中で、ちらと店主を見ると、バーカウンターに座ってた目付きの悪いのと、二言三言会話して仕事に戻った。

どうもあれも軍人かな？

「あ、ダブルだ……ね」

「っ！？ あの、マスター！！」

部屋を開けると大きなダブルベッドがデント。

そしてベッドを目にして、何かを堪え切れないような声色のフォウさんにドキリ。

「な、何でしょう……か？」

「このベッドにダイブしてもいいでしょうか！！」

なんじゃそりゃ。随分な斜め上だったな、おい。

「はいはい、好きにしてくれていいよ」
「はいっ！！」

下がる俺のテンションを他所に、たたと助走をつけて、大きなベッドに飛び込むフォウさん……えらく上等なのか、ボツスリと埋まってしまつと、手足をバタバタし始めた。

じっくりと堪能しているらしい。

ちよつと悔しい。

「ちよつと出てくるから」

くっ！！ 怪我さえなければ、俺もやってみたかった。

当分はあのままだろつフォウさんを置いて、食堂フロアに降りると、いくつか錬金した金の粒をチャラチャラ言わせながら、店主を呼んだ。

「悪いけど、このあたりに腕の良い治術士は居ないかな？」

「治術士でございますか？」

怪訝な顔の店主に、腕をちらりと見せる。

「言い訳程度に怪我するつもりで、本気で痛い目にあつてね」

あははと、乾いた笑いをしてみせる。

「然様でございますか」と、若干引きつりながらも、何でも無い風にスルーする店主。

流星は客商売のプロです。

「残念ながら、村には薬師しか居りませんな。」

ですが軍の施設でよければ、国境手前の駐留地に、腕のいい術士が居ると聞きます。

昼間は一般の出入りもありますから、行ってみられるのも宜しいかと」

軍ですか……仕方ないな。

「別に公領軍に目を付けられるような事はして無いです。でも、足は有るのかな？」

「そうですね。村の入り口と反対方向の広場に、酒やら雑貨を運ぶ連中が行き来しています。」

そこで話せば、乗せて行って貰えるでしょう。

この宿に泊まっていると言えば、そう無碍にはしない筈です」

「助かる」

出掛けに金の粒を一つ転がす。

「そのカウンターの方に、お勤めご苦労さんとエールでも出してやってくれ」

片手を振って店を出ると、後ろからぶほと吹き出したあと、咳き込む声が聞こえた。

表に出ると、さつき入って来た、村の入り口と逆の方へ足を向ける。

広場には色々と荷物が積み置かれており、馬車が引っ切り無しに往来している。

中には、従機兵の姿も……って、ありゃロシナンテ？ にしては、ちよつとゴツゴツしていて可愛げが無い。

とはいえ、6 mサイズの従機兵なんてのは、そう無いと思うのだが。

あ、ロシナンテロシナンテ言ってるけど、実際は『ポニー級軽従機兵』って言うらしい。

ロシナンテは、じい様達が付けてた愛称である。

しかしポニーとか、人間踏み倒してミンチにする兵器にしちゃ、随分可愛い名前だと思う。

「なんだ？ 何か用か？」

従機兵を眺めていたら、軍服の袖ブツチギって、ノースリーブになってるおっちゃんが、顔を出してきた……なんというか、機士というよりトラックの運ちゃんです。

「いえ、ポニー級が公領にも在ったんだなと」

「おいおい、こいつを黒機士が居なきやどうにもならない、あの走るだけしか脳が無い奴と、一緒にしてくれるなよ」

いやいや、ロシナンテは対人と走る事に特化する事で、存在意義を打ち立てた従機兵なんだから、付加価値つける事が間違ってると思うよ。

少々何かやっても、機兵には勝てないし、荷物を運ぶにやコストが高いし。

だから最低限のリソースとコストで、採算のあう方法。

絶対に勝てる相手だけに、喧嘩売る事にしたんだから。

因みに対ロシナンテ用に、強化型ロシナンテを作るなんてのは、激しく無駄だから、何処の国も作ってない筈。

勝率が7割になっても、やられたら大損だし、それなら並みの従機兵で勝率十割で複数蹴散らせる奴を連れてくる。

大体、占領用の軍勢を処理する為のものだから、攻め込む側には意味が無い。

防御側の軍勢が籠ってる陣地を壊せないからね。

だのに、公領つて何を考えて……あれ？ まさか？

太く強化された腕部、持っている得物は4 mサイズのロッドの先に、中程が広くなった、皮製の帯が2 m程続き、その先に鎖と金輪が付いているという物。

人を薙ぎ倒すのにも使えるだろうが、俺が思ったとおりの代物ならば、ちよつとビツクリだ。

そして腰に装備したピッケルとシャベル……うわ、この従機兵を考えた奴、すごいかも。

つか、もしかして、この世界じゃ結構有名な機体なのか？

「まさか、遠距離攻撃用の機兵？」

「ほう、こいつを知らなかった割に、良く思いついたな」

やはり、あの得物はスタッフスリングか！！

石でも鉄球でも革帯にまいて、勢いをつけてから片方の端を放す事で、それをブン投げる武器だ。

スリングといえば、紐と石受けだけでグルグル振り回して、遠心力を使って投げるのが基本形だが、前に飛ばす事や両手を使える分のパワーを考えると、投げ釣りみたいなスタイルで、コントロールのしやすいスタッフスリングの方がいいのだろう。

ふーむ、ロシナンテみたいな使い方も出来るが、一番の違いは対拠点の攻撃力を持った事か。

シャベルは弾にする石を切り出すのに使うんだろうか？

そうかー、こういう使い方なら、ロシナンテの……。

「いやいや、それにしたって態々こいつを作る程のメリットでもないような気がする。」

こいつって改造じゃなくって、正規に作ってるでしょ。

この機体だけで攻め込める訳も無いし、それなら真つ当な従機兵作つた方が」

「お前さんは公領の歴史を良く知らないようだな。まあ、古い話だから仕方が無いが」

おっちゃんとは長々と話してくれたが、要約するところなる。

王国に負けた上に、教国に粗方の土地を持つていかれて、国の体が傾いてしまった公領。

今度は攻められる事を心配する羽目になった。

機兵が来たら、抑えられる戦力はなく、教国は守ってくれる訳も無く。

逆に国を侵されたら、取り返すついでに持っていく気満々だったらしい。

しかし、新たに従機兵を作り上げる余裕も無く、ボロボロで帰ってきた機兵一機と、従機兵二機を稼働状態に持つていくのが関の山、おまけにその戦力も黒機士ほどの絶対的な戦力でなし。

そこで公領の偉い人は考えた、王国の真似をしようと。

ただし此処では黒機士にあたる戦力は無い。

守備の要として、機兵も従機兵も前線には動かせないのだ。

では対人にしか手が出ない軽従機兵で、機兵の相手をするには如何すれば良いか……答えは無理、だから機兵を動かす要素を壊そう。人が居なけりゃ機兵も動かないし、機兵を動かすには凄くコストが掛かる。

空中母艦なんてものが無かった頃、機兵や従機兵の稼働時間をカバーする為に、攻撃目標の近くに一時の拠点を作つて、そこから出撃をするなんて事をしていた。

ならば、そこを機兵が動いてない時に襲えば良い訳だ。

しかし機兵の籠る拠点を攻略するには、機兵を持つてするしかないが、軽従機兵では機兵が出てくれば勝ち目はないし、元より軽従機兵には、それなりの防御をされた拠点を抜く攻撃力が無い。

ならばアウトレンジから壁を越えてと、攻城兵器なんぞ準備した所で、例え組上げるまで見付からなくとも、一度使えば軍勢にすら

即座に処理される。

そこで軽従機兵に遠距離攻撃能力を持たせる事で、攻城兵器の脆弱性と軽従機兵の攻撃力不足を解決したのだ。

軍勢相手には負けないし、壁を越えて嫌がらせは出来るし、機兵が出てきても逃げながらも拠点に攻撃を続けられる。

機兵だけ残った所で、後詰の軍勢やら整備する人間が居なくなれば、敵拠点を落としても勝ちは無い訳だし（実際、追いかけてこになりながらも、敵のバックアップ体制を壊滅させた事で、動けなくなった従機兵を鹵獲した事もあったそうだ）

まあ実際は、ガムシヤラに攻めてくる相手には、数的に対抗しようは無かったそうだが、公領の向こうは小国ばつかなので、嫌がらせ程度の侵攻しか無かった。

お蔭で撃退は上手く行き、公領が持ち直すまでの間、これらの軽従機兵はそこその数が作られ、抑止力として働いたそう。

「という訳で、この『羊飼』（シェファード）は、この国を守った英雄なのさ」

「はー、おみそれしました」

「今じゃ、警備と災害時の動員が殆んどだがな。ところで、お前さんは何処に行くんだ？」

おっちゃんが思い出したように聞いてきた。

「ちょっと腕に怪我をしているんですが、出来れば早々に直しておきたいんです。

宿の主人に聞いたたら、この先の軍の施設に、腕のいい治術士が居ると聞きました」

「なるほどな。そうか、ならこいつに乗っていくか？」

おっちゃんは人好きのする笑顔でニカツと笑うと、シェファード

のボディをコンコンと叩いて示した。

「良いんですか？」

「不穏分子の護送の警備なんでもものに、駆り出されて来たが、後は戻るだけだからな」

不穏分子？ さっきの連中か？

「何かありました？」

「ちよつと教国とのゴタゴタだな。 いや、忘れてくれ」

渋い顔で話を切られた。

「それよりも時間が勿体ねえ。 さつさと行くぞ、乗れ乗れ」

俺はおっちゃんに促され、シエファードに乗り込むと、数分揺られて過ごした。

公領の城で

村から羊飼いの名を持つ従機兵に揺られて十数分。

辿り着いた所は、空掘りと物々しい石壁に囲まれた、皆なんてレベルじゃなく……はい、立派なお城です。

こんな辺境に、何でこんなに立派な……。

俺が固まっていると、おっちゃんが苦笑い。

「此処は対教国、対王国の最前線なんだぞ。物々しいのはしかたないってもんだ。

元は没落した地方領主の居城でな、そいつを有効利用しているのさ。

それにな、今でこそ国境間際の辺境だが、昔はこの辺りが中央に近い領地だったんだぞ」

「それは、はあ……なるほど」

言われてみれば、その通りです。

さて、城は外からは中が全く見えないので、なんともいえませんが、空堀の深さと壁の高さから、機兵相手にも十分対応できそうな様子。

俺、こんな所に入っちゃって、大丈夫なんでしょうか。

壁なんて石組みにコンクリートの補強とか、厚さはどれ位あるんだか、上に巡回してるっぽい人影とか見えてるし、逃げるの大変そうだ。

さて、空掘の脇を道なりに進むと、壁に負けない程の重厚さを備える城門が見えてきた。

今の従機兵の目線（約6m）から見ても威圧感を感じる高さ、大体パッと見てこちらが門の半分くらいのサイズかな。

そいつがじりじりと開き、中へ進むと両脇が壁の通路状になっている。

嚴重すぎる。そして20mほど先にもう一つ扉。二重にゲートを用意してあるとか、もう呆気にとられるしかない。この手の施設って、これが普通なのかね？

教国の基地って2・3メートルの高さの壁しか無かったよ。まあ、教会の土地って建前のせいだったのかも知れないけど。ぶっちゃけこうなると、何かあっても逃げられるような状況じゃない。

止めとけば良かったなーとか、今更に後悔。

時既に遅く、もう大人しくしてるしか無いですね。

半ば、どうにでもなれとヤケクソ気味に腹が座りました。

そんなドキドキの俺をよそに、おっちゃんがシエファードの足を止めると、ゲート脇のくぐり戸が開いて、守衛の若い兄ちゃんが一人やってきた。

「官・姓名を頂けますでしょうか!！」

その良く通る声での問いに、おっちゃんが顔を出して敬礼。

「リック・ルーサー準機士。少々遅れたが、門限には間に合ったか？」

「は、夕飯には十分ありつけるかと思えます」

緊張が解けて双方に笑顔が浮かんだ。

うん、そういう日常も良いですけど、俺の胃が痛いです。

「当直ご苦労。頼まれた酒、宿舎に届けておくからな」

「はっ、ありがとうございます!！」

いきなり砕けた調子で、守衛さんに声をかけるおっちゃん、赤い顔で答礼する守衛さん。

そして、くぐり戸向こうから聞こえる「ゴチになりませう」という声。

それを聞いた守衛さんは、おっちゃんに向かって、恨みますよというような目で見上げていた。

「あー、スマンがゲストの手続きを頼む。

あ、お前さん名前は「キシマです」「キシマ殿だ。

怪我の治療にドクターの所へ参られる」

「かしこまりました!!! キシマ殿、こちらへお願いいたします。

あと、すみませんが、剣をお預かりいたします」

おっちゃんことリックさんが、片手でスマンと守衛さんにジェスチャーしつつ、俺の事を伝えてくれた。

俺は守衛さんに促されて、シエファードから降りてリックさんを見上げる。

「あの、こんなにして頂いて恐縮ですが、どうして?」

「いやなに、こいつの話にな、本当に嬉しそうに聞いてくれたからな」

リックさん、照れくさそうにシエファードをバンバンと叩く。

「それにあの宿に泊まってるなら金は結構持っているんだろう。

キツチリ治療費は貰うから気にするな」

ちょっと照れ隠しくさいですよ。

じゃあなと軽く手を振った後、ピシッと敬礼を一発かまして、リックさんはシエファードと一緒に、格納庫が並ぶ方へ姿を消して行

った。

何気にシエファードも敬礼してたな……表に顔を出しときつつ、機兵のコントロールをサラッとやるとか、かなりの腕ですね。

「なんとというか、凄い人だよな」

俺は守衛のお兄ちゃんに剣を預けながら、リックさんの感想をポツリ。

「ハッ、リック・ルーサー準機士殿は、救国の英雄『赤獅子ルーサー』の子孫であり、我らの尊敬する上官であります」

そーなのかー。

俺より若い守衛さんが、キラキラした目でそう返してきた。

えーと、赤獅子……どっかで聞いた事があるような……むづ、思いつかないな。

「それじゃあ、手続きお願いします」

「はっ、かしこまりました!!」

気を付け!! って感じでビシッと敬礼。

そして手続きの窓口がある本棟まで、曲がり角の度に先導と「そちらを右であります」等と案内され、周りからはどこのエライさんだとかばかりに見つめられる事に。

俺は、大したもんじゃないんで、気にしないで下さいと、心の中で唱えながら、愛想笑いを顔に貼り付けて胃を抑える事、数分。

危うく顔の筋が攣りかけて、妙な汗が背中を満遍なく湿らせた頃、なんとか窓口で手続きが終わってくれました。

ぐったりした俺を見届けて、持ち場へ戻ろうとしていた兵隊さんにお礼を言っ、やっと当初の目的である、治術士の人居る部屋

へ向かう事に。

あ、剣は帰りに返してくれるそうです……持って来なけりゃ良かったかな？

何気に銃は気付いて無いのかそのまんまです。

さて治療所というか病院棟は、窓口のある本棟から離れた辺鄙な場所にあるらしく、少々歩くと風に乗る薬の臭いがして来た。

「ここに間違いないかな」

臭いもだけど、なんか何処からともなく、呻き声が聞こえる……どこからだ？ 病室か？

興味はあるけど、此処は素直にドクターの部屋をノック。

「どうぞ」

中から聞こえたのは、女性の気だるげなハスキーボイス。失礼しまーすと、部屋の中へ。

「君がゲストか。 ああ、話は聞いている」
「お願いします」

頭を下げつつざつと眺めると、部屋で一番に目が留まるのは、書類とタバコの吸殻が山積みの木製デスク。

そしてそこに座っている、綺麗な銀髪をまとめて結い上げている、うなじの色っぽい三十歳位の女性。

薄手のセーターに、下はタイトなスカートで、なんか女教師っぽい雰囲気。

その上に白衣を着ているが、胸元と腰のボリュームは隠せていない。

思わず、吸い寄せられるように目が行くのは、若い男として仕方のないことです。

見返してくる怜悯な視線にぶつかりかけて、慌てて目を逸らしたりするのも、ヘタレとして仕方のないことです!!

まあ、すっかり気取られて、くつくつと笑われましたが。

「若いな、キミは」

「すみません」

ホントすみません。

「いや、恥を知っているだけ、随分とマシというものか。」

こちらの迷惑だという抗議に気付かず、じっとりねめつけてくる、馬鹿な連中も多い。

私としては、キミのような可愛げの有る人間が増えたと、無駄に疲れなくて済むな。

よろしく、シルビア・バートリだ」

「キシマです」

手を差し出してくるシルビアさんと握手。

薬の匂いの中に、タバコと香水の混じった、甘い香りをふっと感じて、俺ドキドキ。

シルビアさんに椅子を示されて腰を下ろした。

「ルーサー準機士から、金持ちのゲストだから宜しくと言われていいる。」

しかし、どう宜しくしろと言っのだらうね」

シルビアさんは「はあ、あの男にも困ったものだ」と、眉間をペーンでコツコツやっている。

本当に何を言ってくれてるんですかリックさんは……。
リックさんに突っ込みを入れつつ、そんな言葉に困った風なシルビアさんに、この人は意外に可愛い人なんじゃないかと、ふと思っ
てしまった。

「何か？」

そしてシルビアさんに怪訝な顔をされた。　慌てて考えを振り払
う。

「いえですね、今日は骨折を何とかして欲しくてですね、ハイ」

「何を慌てているのやら？」

首をかしげるシルビアさんに有無を言わず、お願いしますと左
腕を差し出して誤魔化しました。

怪訝な顔をしつつも、勢いに流されてくれたシルビアさんが、俺
の左腕を手に取って、ためつすがめつ……。

「ふむ、そうだな……状態は落ち着いている。　処置もまあ、問題
ない。

治療というなら、このままの状態で治療を待つのをお勧めするが
……どうだろう？」

うーん、それが、あんまりのんびりも出来ないんですよ。　何
が起こるか判らないですしー！。

そんな気持ち俺の顔に出ていたのか。　シルビアさんはため息。

「色々と勘違いも多いから、一応言っておくが、所詮は治療術も万
能じゃない。

余程の緊急時以外は自然な治癒に任せる方が、後々に影響が少な

いんだがね」

あ、そうなんだ。

確かにフォウさんの治療術も、なんか医療行為の手段に、魔術を使っているだけっぽい感じだったけど。

「そこを何とか、お願いします」

「そこまでいうなら仕方ない。気は進まないが、最低限の部分を接いでおこう。」

しかし、ギブスは当分の間、外さないこと」

そう言い置いて、シルビアさんが俺の手と肘の辺りに触れる。

その両手から、俺の左腕の骨折部分へ、術式を込めたマナが無理やり通る……ぶっちゃけ痛いです。

顔をしかめた俺に、シルビアさんは「言わんこっちゃない」とため息。

あんまりため息つくと幸せが逃げますよ。

いらん事を考えている俺に、シルビアさんは術式を続行。

脳天にじんわりと染みてくる鈍い痛みから、気を紛らわせようと、あつちこつちに視線を巡らしていると「こら動くな！！ 男だろう、少し頑張りたまえ」と言われた。

そして作業続行。じつとしてると気がまぎれない。流石に涙がじんわり。

とはいえ、最近は痛みに触れる機会が多かったんで、気絶したりとかの醜態は晒さずに済んだ。

なんとも嫌なレベルアップの恩恵ですが。

こうして受けてみて、どうやら治療術も色々のようだ。

血流やらのコントロールは、マナの流れに逆らったりする事無く、いわばマッサージみたいな物でむしろ気持ちがいいものだが、骨折

や内臓の疾患を治療する時は、切ったり焼いたり術式を、相手のマナを突き抜けて無理やり送る為、非常に痛い物らしい。

まあ、実際に切り開いての外科処置よりは、ダメージも少ないんだろうけど。

しかし、呪文一発で全回復と言うのは、この世界でも夢物語なのか。

あ、そういえば作業中って、体の中身は見えてんのかね？ まさか、勘とか……うわー、聞くのが怖い。

非常に嫌な考えが浮かんだので、怪我をしないようにしようと決意しました。

「はい、これで終わりだ。

接いだとはいえ、まだ重い物を持ったり、剣を振り回したりは止めておくように」

「あ、ありがとございました」

軽く深呼吸して体に入った力を抜く。

そんな俺を見て、シルビアさんは含み笑い。

「さて、治療代だが……そうだな、ミスリル20単位でも貰おうか」

「はあ、ミスリル20単位……」

俺は、力が入ったままで強張った肩を回しながら、何気なくポケットの中で錬金、機兵用の弾丸型の奴を二つ取り出す。

それをシルビアさんに渡そうとして、シルビアさんの啞然とした顔。

はい、やっちゃいました。

シルビアさん、冗談だったんですね。

「ちょっと良いかな」

す、凄い顔してますよ。美人が表情消すと、ものっそい怖いんですが。

「真面目な話だが、そのミスリル、出せといえれば出せるのかな？」

えーと、そりゃ出せと言われりゃ出せますが……出所は隠してほしいけど。

「まあ、使う時に出所ぼかしてくれると助かりますが。何か入用なんですか？」

「あ、まあ色々とあってだね。悪いがこちらへ来てくれ」

シルビアさんが席を立ち、部屋の外へ。先程の呻き声が漏れ聞こえていた部屋の前に立つ。

うわぁ、呻き声がハッキリと……怖ええよ。

「どうかしたかね？」

「い、いいえ、ここは？」

「ただの病室だが？」

ただの？ そうなんですか……。

ガラリと扉が開いた。

「うわ、死屍累々……ひでえ」

入って早々に、一步どころか二歩も三歩も引くような惨状です。

これ何人？ ざっと見て三十人からの人数が居るんじゃない？

大体、8ベッドの相部屋の病室を想像して貰えると、部屋の大き

さが判って貰えるかと思う。

そんな部屋の中にビッシリ押し込められてるとか、何の罰ゲーム
だか。

ここはどここの野戦病院ですか？

見た感じ、ベッド上には主に若い男性が寝込んでいるようだ。

顔面晴らしたり、腕吊ったりしているのは、事故じゃなく暴行を
受けたような怪我に見える。

ああ、何人か見たような顔もあるな。

「もしかして、村で騒ぎがあった時の？」

「ああ、知っているのか」

「騒ぎのあった事ぐらいは」

そうか、と一息入れて、シルビアさん。

「ふむ、君は王国の傭兵と聞いたが、この城の司令が中央の連中に
けし掛けられて、教国にちよっかいを掛けた件は知っているかな？」

「えーと、教国の内輪で何かあったらしい事は多少。」

でも、こちらの内幕なんてのは流石に知りませんよ」

つか、そんな事は聞きたくない。

あと、教国に関しては当事者ですが、そんな事は言えません。

「どんな餌をちらつかされたのか、基地常駐の傭兵を全力動員した。
全く馬鹿な話だ。確かに、その戦力を動かす権限はある。

それでも国境を踏み越えて侵攻するなど、正気の沙汰じゃない。
その上に返り討ちと来た……実際に話を聞いても少々信じられな
いがね」

確かに信じられん話ですが。世の中そんなもんです。

「おかげで軍の戦力自体は無傷だが、基本が傭兵に頼っている状態だったからね、今の基地戦力はとても頼りないばかりだ。

しかし、傭兵はまた雇えばいいし、戦闘でしくじってやられたとしても、依頼を受けた側の責任だから、此方がどうこう言う事はない。

問題は傭兵連中の機兵を動かすのに、ここのエライさんが基地の備蓄分のミスリルに手を出した事だな。

防衛の為になら、使う事も許されるが、まさか逆侵攻になど……。それでも成果があれば、まだよかった。だが、実際は無為に消費したような物だ」

「そりゃ、責任問題になりませんか？ それとも公領基幹部隊の後盾があるとか？」

「中央の連中がそんなに甘い筈が無い。元々上手くいった所で責任を取らされるのが落ちだったんだ。

この結果じゃ、先は見えているようなもんだよ」

「そりゃ後愁傷様で」

「実際、そこで終わってれば良かったんだが」

「はあ」

「その偉いさんと言うのが何をトチ狂ったか、傭兵どもは教国とつるんでいたのだと言いついて出してくれ」

「はあ……それって俺に話しても良いんですか？」

「なんだか、泥沼に片足突っ込んでいる気分なんです。」

「良い訳は無いが、説明は必要だろう」

「続けてください」

「本当は聞きたくないけど。」

「契約では……ザックリ言えば、契約傭兵が負けて戻れなければ、残ったバツクアップの連中が違約金を幾らか払ってバイバイな訳だ。だが、偉いさんは元々契約違反だから、この連中にミスリルの保障をしろと言ってるね。」

彼らと揉めた挙句、問答無用で捕まえてこのざまだ」

うわあ、この人たちって、教国駐留地で蹴散らした、あの八機の関係者さんたちが。

「ところで、ミスリルの保障って……どれ位？」

「ざっと24単位」

八機分とすれば、妥当といえば妥当な数だけど、個人でどうにかなる数量じゃないよ。

10単位も出てくればビックリじゃね？ 相当に、この偉いさんはテンパって居るのか。

それとも、本気で傭兵が教国と通じていると睨んで、人質の心算か？

「彼らも何とか4単位は工面できたんだがね」

「それで、その不足の20単位をどうにかならないものかと？」

「彼らも長い事この基地に居たからね。まんざら、知らない仲間もない」

「なるほど」

「このまま放っておいて、見せしめに云々等となれば、見てみたいとも思わんよ」

そりゃご尤もな事です。

「それなら、こいつは使ってください。治療代で構いませんよ」

デスクにミスリルを20単位置く。こんなもんで生き死にの話に繋がるのは恐ろしい話だ。

「キシマ君、頼んでおいて言うのもなんだが、それだけの量のミスリルを気軽に扱うのは、よした方がいいな。少々ありがたみが無くなる。」

人の命に代えられる程の価値ではないが、それでも人の命を奪つてでもと、考える輩が出る位の価値はあるんだ。それに、流石に私も、ただで貰おうとは思っていないよ」

シルヴィアさんがじつと見詰める先には、俺が片手間で出したミスリル20単位。

「確かにそうなのかもですけど……俺は別に金とか欲しい訳でもないですし」

ぶつちやけ、そもも重く捉えられると……さんざん、色々つぶちまけてますし、激しく今更感が。

「まあ、そうだろうな。」

君が何者かは知らないが、ただの傭兵とは思えない……深く詮索する気は無いが」

「そうして貰えると助かります」

「ふむ、ミスリル20単位の代わりになるとは思わないが、君がこの辺りに居る間は、私かルーサー準騎士に言って貰えれば、色々と便宜を図る位はできるだろう。遠慮せずに言って欲しい」

「判りました。何かあればお願いします」

何事も無いのを祈ってますが……。

「それじゃあ、それは治療代という事で、後はお任せし」おう、キシマ殿じゃないか」ます？」

帰りそこなった。

「治療はすんだのか？ なんだったら街まで出るんで、送ろうかと思ってるな」

「あ、それは助かります」

ふう、何かトラブルかと思ったよ。

その後は何事も無く、城の門まで。

剣を返して貰ってる間に、リックさんが馬車を出して来た。

「待たせた」

「いえいえ」

馬車に同乗し、ポクポク揺られて村へ向かう。

いつの間にか夕方になってる。何気に時間が経ってしまったよ
うだ。

「リックさんは村へ何用ですか？」

「いやな、酒の恨みはなんとやらってな。

流星に可愛そうになってな……何か買ってきてやるうかと」

そりゃ、いい上司ですな。

「それじゃあ、これでいいのを買ってやって下さいな」

一つまみの金を錬金。

「世話になりましたから」

「判った。貰ったところ」

そんな感じで、言葉も無くなり道半ばに差し掛かった頃……。

「マナ？ 機兵？」

俺とリックさんが同時に、起動し始めたらしい機兵のマナを感じ取った。

みると、木陰から黒い6m程の機体……どうも、来しなに乗ったシエファードの同型機だなーって！！

「何、スタッフスリング振り上げてるわけ！！」

「しっかり掴まれ！！」

リックさんの声に馬車にしがみつく。リックさんは馬車の進路を必死にまげて何とか振り下ろされる鈍器を避けて、そのままスピードを上げる。

「な、何事！！」

「判らんが……単なる賊ってわけでも無かるっ」

離れていく巨人の人影を眺めていると、先方さんが石掴んで杖の先のバンドにセットすると、振りかぶってきやがりました！！

「う、うわ、岩ー！！」

腰からピースメーカーもどきを引っこ抜いて、右手で構えて引き

金引きつばなしで撃鉄をチヨップチヨップ！！

衝撃術式が反動無しで六回引き起こされる！！

なんとか岩の枠に六発全部が当たり、岩が砕け散る。

そして瓦礫になった岩が、そのまま慣性によって……解決してね

！！！！

「け、剣！！」

錬金でミスリル作って、マナに戻してマナを機士スキルで掻き集めると、その塊の真ん中に剣をぶっさす！！

剣はマナに物理防御の術式を刻み込み、剣を持ち手とした不可視の傘を作り上げる。

そして、その傘に散らばり降りかかる瓦礫の破片……。

「重いつて！！ 無理、これ無理！！ つぶつ、潰れる、実が出る！！」

等と大騒ぎしながら、何とか凌いだ。

リックさんは何事をしているのか気になっているようだったが、馬車を操るのに必死の様子で俺の奮闘には気付いていなかった。

「これで何とか……うわー、走って来てるよ」

どうやら、再び直接ぶっ叩く事にした様子。

ポニー級ロシナンテより遅いといっても、馬車よりや早いか。

「ーりゃ、拙いな」

洪い声のリックさん。村に着くまでには追いつかれそうだが、地響き立てて追っかけてくる軽重機兵……おっかねえ。

こりゃ、本気で機兵魔術で吹っ飛ばすしかないか。
でも、マナ変換しつつのマナ操作って、マスターとまで行かない魔術スキルでは厳しい部分もあるが。

「ちっ！！」

リックさんの舌打ちと共に馬車が急停止。

何事かと振り向けば、前にも従機兵……しかし、あれは。

「リックさん、馬車出して！！　ありゃ敵じゃない」

「そりゃ……ええい行け！！」

半ばやけくそで思い切ったリックさんが馬車を再び走らせる。

前方の白い軽従機兵、見覚えがある……というか、ありゃ俺が作ったロシナント改じゃねえか！！

馬車が白い従機兵の脇を通り過ぎる。

すり抜けざま、ロシナント改の左手がサムズアップ。

右手に携えた小剣をダラリと下げながら、追ってくる黒いシエフアードに向かい、駆け出していく。

うるたえた様に、一度はスピードを落としたシエフアードだったが、はつきりと敵対する相手と認識したのか、スタツフスリングをフレイル代わりに振りかぶって、ロシナント改に迫る。

二機の軽重機兵が、地を蹴立てて20m程の間合いを一気に詰め、互いの得物を振り下ろす。

しかし、二機の軽重機兵には大きな違いが二つあった。
一つは機士の技量。

そしてもう一つはその機士の技量を反映できる、機兵の限界性能。
ただ得物を振り下ろすしか出来なかったシエフアード。

その拳動を見た瞬間に切り軽くジャンプ。

右足のステップを半歩短く取り、地面に突き立てるようにして踏

ん張り、重心を左へ。

次の一步は、傾いた重心ごと左サイドに大きく滑らせるように左足を踏み込む。

ずれていく機体に負荷の浮いた右足が付いていく。

一瞬のサイドステップからの機体のスライド。

これだけでシェファードはロシナンテ改の姿を見失った。

そして開いた空間を突き抜けて、地面に叩き下ろされたスタッフスリング。

ロシナンテ改は、シェファードの脇をすり抜け、そのまま一回転ターン。

右手の小剣を逆手に持ち替え、回転の勢いごとシェファードの背中へ突きこみ、マナ機関を黙らせた。

「ありや、何だ？」

リックさんがロシナンテ改を見て、呆気に取られている。

「あー、新型ですかね」

「機士もだが、あのポニー級……ただの代物じゃねーな」

確かに鳥足の従機兵であんな事やったら、普通は脚もげますよね
！。

無駄に高位素材使って、機兵並みの出力持ちなだけはありませんね。
そして、そんな物を持ってきて、あんたはこんな所で何しています
か？

「ロッドさん……」

ロシナンテ改から顔を出したのは、戦場で別れたばかりのロッド
ニー・エスパーダ僧兵官だった。

教国の内幕（キシマ君ぶっちゃける）

主人公外出中のフォウさん。

「はっ！！ マスターが厄介事に首を突っ込んでいる予感が！！」
謎信号受信により、ベッドから浮上。

むづ、このベッドはなんという危険物でしょう。
優れた精神的拘束器具だと認識しました。

「おや？ マスターが居ませんね」

どうやら、ふかふかベッドに埋もれている間に、置いてけぼりを
喰ったようです。

どうしたものでしょう、下手に動いて二重遭難は避けるべきとい
います。

「まあ、そのうち帰って来るでしょう」

再びベッドにダイブ、モフモフ再開。

「なんだか、酷く蔑ろにされている気がする」

主人公がそんな事を言ったと言わなかったとか。

「おーい、大丈夫か？」

待機状態で座らせた、白い軽従機兵から降りて来たロッドさん。
思わず呆然とした状態の俺を見かけて、心配げに声を掛けてくれた。

いや、大丈夫っちゃ大丈夫ですが、それよりそちらこそ良くご無事で。

額に包帯が巻かれているのを見ると、全くの無事という訳でもなかったみたいですが、こうして再会できたのは嬉しい限りですよ。

こんな場所でなければ！！

「一体、こんなところで何やってるんですか？ あんな物まで持ち出して」

ロシナンテ改ですが、一応の外見はポニー級の素の状態に見えるものの、背部の主機が怪しすぎる。

例の外部ユニットを外して、在り物の従機兵のユニットでも乗っけたのか、無理矢理感が凄いです。

本体重量が重いので、少々の重量バランスが崩れても、それほど問題は無いですが。

いや問題はそこじゃなくて、教国の人が機兵持ち込んで、こんな所に居る事が政治的にどうなのと。

「あー、話としては色々あるんだがなあ。まずはその人に挨拶が先だな」

あ、リックさんが急展開について来れてない。
逃避なのか、ロシナンテ改を、じーっと見つめていた。
それでも、話が向けられるとこっちの世界に返ってきたが。

「ああ、一体何事が起こっているのか、説明して貰えるか？」

並べてみると、オッサン臭いな。

ロッドさんはまだ若いといっても三十になってるだろうし、リックさんは完全に三十半ばだろうからなあ。　潤いがないねえー。

「正直、こちらでも細かい所までは、把握できてない」

「おいー！ー」

俺とリックさんがロッドさんに突っ込んだ。

あんなに良いとこで出てきて、良く判らんは無いと思うんですが
！ー！

「まあ、待ってくれ。

まず名乗らせてもらつと、俺はキシマ君の知り合いでロッドとい
っ。

見ての通りの機兵乗りだ。

そんな俺が、さっきの良い所で出て来れた訳だが……。

えーとな、キシマ君よ……ちょっとこっち来てくれるか」

「なんですか？」

ロッドさんがコイコイと手を振っている、可愛くないけど顔が真
面目なので、素直に向かう。

（ぶっちゃけ、何処まで話していいんだ？

あれってあれだろ、どっかの式典か何かで見たことがあるんだが、赤獅子の人だろ？)

ロツドさん、人を指差ししない。

(あー、そんな事を言ってみましたね。赤獅子の子孫だとか)

(思いつきり公領の軍人じゃねえかよ!!)

おまけになんでそんなピンポイントに有名人と知り合うんだ)

(仕方ないでしょうが、有名人がのほほんと、歩いてるんですよ!!
それより、あんたの所の大将ルドガーさんの方が、気軽に前に出て来過ぎだと思えますが!!)

あれが大体の間違いの始まりだと思う。

教国の次期ナンバーワン候補最有力が、ドジツ娘を追いかけて仮想敵国への単独越境進入とか。

ありえない、マジありえない。

(それはそれとしてだ)

(うわ、流した!!)

(やかましい!! 大将はどうしても、どうにもならんだ。

それより、百歩譲って知り合うのは仕方ないとして、どういう経過で公領の軍人とつるんでるんだ?)

大体、お前さんの名前が報告に上がって来て、胡散臭いと思ってたら本当に生きてるし。

此処に来る羽目になった目的の件で、突然の強硬手段が取られるとかで、慌てて動いたらお前さんが有名人と一緒に追いかけられる……訳が判らん。一体どういう経緯で口封じなんて事態に……)

「はあっ!! 口封じっ!!」

「ちよっ、声デカイ声デカイ!!」

(な、何でどっからそんな話がつ!!)

(あー、あれだ。　始めっから話をするのだなあ……)

ロッドさんの話を簡単にまとめると、あの戦いの後、流石に俺の事は諦められてたらしい。

まあ、それも仕方ないと戦後処理をしてるところで、とっ捕まえた傭兵連中が、証言でもなんでもすっから、公領に残した連中の安否をと騒ぐので、公領の様子を探るついでにロッドさん以下数名が、一旦王国に入って、王国の傭兵と云うカバーを付けて、公領にやって来たそうなの。

ロシナンテ改はちょうど良かったので持ち込んだとの事。

ただ主機が機兵出力のままだと、燃費がしゃれにならないので、軽量の従機兵の主機を取っ付けたいらしい。

取り外した外付けのマナ機関は、白機士の増設用にとルドガーさんの息の掛かった連中に回されていく予定だとか。

まあ、かなり危険なオーパーツなので、余程信用のおける連中しか持たせられないし、全部が回るのは、かなり先になるんだろう。何といつても、並みの腕の機士が扱っても、素の白機士が自壊するとこまで、パワー引き出す事ができる訳だし(燃料は倍必要だが)一応、ロッドさんの使ってた耐久性上げた白機士は、オーバーホールしてルドガーさん用になるとか。

あのヤバイ剣も残っているらしいので、ケイオス抜かせば教国の最強機兵なんだろうなあ。

話がそれだが、傭兵のバックアップ連中の情報を、このあたりに潜り込んでる教国エージェントに繋ぎを取って得た時に、不審な王国傭兵として、俺の名前がロッドさんに流れたそうだ。

つまり、宿の一階で酒飲んでたおっさん、公領じゃなくて教国の人だったんだな。

とはいえロッドさん、その件は話半分で聞き流してたいらしい。

それよりも、バックアップの連中が軍の連中に收容されたとか、どうも人質臭い事になってるとかな方が問題で、どうしたもんかと網を張っていた。

すると、俺が泊まってる宿で基幹部隊の偉いさんが、汚れ仕事に定評のある小者に繋ぎを取って、口封じ云々の話をしていたとの事。そんな事で、何か状況打開の取っ掛かりにでもなればーと、ロツドさんが割り込んだ所、俺が元気に追いかけて居た訳だ。

しかし、どういう事だろう？

口封じってのはあれか、俺がミスリル渡した件でどうこう？

それにしても動きが早すぎる気がする。

ミスリルの話が出たのは治療後で、その後は小一時間もしないうちに城を出た。

幾らなんでもその時間で機兵は用意できないだろう。

それに、動いたのがあの城の司令官でなくて、ここでは外様の基幹部隊の偉いさんと来た。

これはどちらかというと、リックさんが王国の傭兵（俺の事ね）を引っ張り込んだ辺りから、怪しまれて動いてたような気がする。

もしくは、バックアップ連中を收容する時に、リックさんが何かやったか？

その辺りからだとなれば、それでも超特急だが手配が付かなくもないか。

大体、話は掴めたけど……リックさんに何処まで話せばいいやら。ご同僚に命を狙われてますよーとか、よう言わんわー！

（でも、まあ、正直に話すしか無いかなあ）

（任せたー！）

（うそー！）

そんなこんなで、全部ぶちまける事になりました。

「あー、こちら教国のロッドー僧兵官。 国境でドンパチやらかしたご当人です」

「よろしくー」

できるだけフレンドリーに言ったのに、ロッドさんの顔は引きつっている。

そして、いきなりそんな事を告白されたリックさんは、あんぐりと顎が落ちている。

そりゃ、相談してると思ったら、引きつった笑いでにじり寄って来て、『はい、敵さんです』とかな自己紹介、有り得ないわな。

「ちょ、ちょっと待て、落ち着くからちょっと待ってくれ」

リックさんが嫌な汗をダラダラ流しつつ、事態を飲み込もうとしているが、大嫌いなピーマンを刻んだだけの生で飲み込まれそうな、小学生みたいになっている。

イキナリすぎたか……じゃあ、順を追って説明しよう。

「まずは、教国の内輪揉めで国境付近のドンパチが起きました。

OK?」

「ああ、そこはいい」

「そこには、このロッドさんと、白機士の改装を任された俺が居ました。 OK?」

「ああ。 なるほど、お前さん錬金術士か?」

そんなもんです。

「それで、公領側から傭兵さんがやってきたのを返り討ち。

その後の王国のちょっかいで、俺が公領まで魔術で吹っ飛ばされました。 OK?」

「傭兵連中がやられたってのは知っているが、その後は、何があったんだ?」

「まあ、色々と……」

思い出したくも無い。

「黒機士が動いたって噂は?」

「内緒ですっ!!!」

内緒つたら内緒です。

それは、居たって言うてるようなもんだぞとリックさん。放つといて下さい。

「それにしても、実際良く生きてたな?」

「あの青機士がバラバラになってました」

「げ…… 本当に良く生きてたな」

ロッドさん、そんな顔せんとしてください。 大概、自分でもビツクリです。

「話を戻しますが、ロッドさんによると、事後処理の途中で、傭兵さん一行がこちらに残してる皆さんの安否を気にするので、ロッドさん一行がこちらに様子を伺いに来たそうです。 OK?」
「なるほど、こちらの状況確認のついでってところが」

バレテラ。

「それで色々探つてると、軍に収容されてるとかでしょ。」

どう接触した物かと途方にくれてると、基幹部隊の人が、誰かを
闇討ちで口封じみたいな話をしたそうです。

それで、ちよっかい掛けたら取っ掛かりになるかなーとか、思っ
たらしいですよ……ロッドさんが」

軍人が何とかなったらいーなーとかな、希望的憶測で動かないで
欲しいです。

「それで、手を出したらこの事態だそうです。OK?」

「まあ、それで命が助かったんだ。何も言わんさ」

そんなこんなで、一通りの話をリックさんにした所で、黒いシエ
ファードの事を思い出した。

機関止めてるんで、中の人には外に出られないだろう。

自害とかしてなかったら、話を聞けるかな？

「開けてくれー、助けてくれー」

か細い声。自害とか、遙か遠くの話でした。

「おーい、開けてやるから大人しく出て来いよ。」

こちらら、殺され掛けて頭に来てるからな」

リックさんが、黒シエファードの胴体に蹴りを入れまくる。

ロッドさんがロシナンテ改で、うつ伏せで倒れている黒シエファ

ードを仰向けにして、剣を突っ込んでコクピットこじ開けた。

「はい、出てきてクダサーイ」

俺の声に黒シエファードから、卑屈な笑いを貼り付けた、貧相な顔のおっちゃんがよろよろと出てきた。

ズボンが濡れてるのは突っ込まないでおいであげよう。

俺もこないだ一寸ちびったし。

まあ、だからといって、命狙われたのを見過ごす気は無いけど。聞いた話じゃ、こういう汚れ仕事の請負で、そこそこ有名とからしいし、捕まったら死罪以外は無いだろうから、リックさんに預けてしまおう。

早速リックさんが剣を突きつけて尋問を始めた。

「ほれ、お前さんに仕事を依頼したのは誰だ？

どうせ死罪でも、それまでの扱いが随分変わるぞ。

たしか助っ人の筈のお前さんが、倍金貰って闇討ちした賊の頭目が居たな。

あの連中、そのせいで俺らに捕まったって、随分お前さんを恨んでるらしいぞ。

連中の押し込まれている鉱山に送ってやるうか？

随分と可愛がって貰えると思うがな」

「か、勘弁して下さいよ！！ 旦那！！ 言います。 言いますから！！」

旦那達を襲うようにひはほは、はへ？ しび、しびびへふ？」

突然、オツサンがガタガタ震えだした。

と思ったら、泡吹いてバツタリ倒れて、血のシヨンベン漏らしながら、息絶えた。

あまりの事で、解毒剤だとか、出して飲ませる暇もなかった。

目も皮膚のあちこちも、赤黒い内出血のあざが浮いている。

どつちかというと、毒蛇なんかが持つてるような、神経だの血管だの肉体を破壊する系統の毒でも盛られていたか。

そんな訳で、殺し屋のおっさんからは、情報が得られなかった……このおっさんが、基幹部隊の連中と会ってたのは、間違いないだろうけど。

「さて、どうするかね」とロッドさん。

このおっさんの死体と黒シエファードは、城に持っていった方が
良いんだろうねえ。

グロイなあ……うちの爺さんは、肺癌で血を吐きながら死んじや
ったけど、苦しそうだった。

死に顔が似たような感じになってる……自業自得とはいえ、浮か
ばれないだろうな。

南無南無と拜んでから、毒に触れないように皮の手袋を作って、
担架作っておっさんの死体を馬車に乗せた。

黒シエファードはロッドさんに、ロシナント改で引き摺って行っ
て貰うか。

シヨンベン塗れのところに乗り込みたくない……どうせ動かないし。

とりあえず村まで行って、駐在さんというか、村に居る軍人さん
に顛末を話して、死体と機兵を持って行くからと城に話を通しても
らう事にした。

引き摺っていくにしてもロープだとか色々準備が居る。

リックさんとロッドさんの準備が終わるまで、俺は一旦宿に戻る
事にした。

宿に戻ると酒場に軍人さんの一団が。

服やら装備が日々豪華なので、この連中が公領基幹部隊って奴な

んだらうなあ。

目立たないようにコッソリとカウンターに行くと、酒場の主人に食事を部屋まで頼むと言い置いて、二階へ。

「ただいまー」

俺が迂闊にも無警戒にドアを開けると、鋭い殺気が走った!!
それは、狙い済ましたように、左腕に……。

「チョーッブ!!」

「っつ!?!?!?!」

俺は無言で蹲った。とにかく痛い、地味に痛い。
骨の継ぎ目をペシッとやられた。
ただそれだけが一番痛い。

「な、何をする」

何とか搾り出した言葉に、襲い掛かってきた飢えた狼こと、フオウさんが冷たい視線で応えてきた。

「制裁です。半日連絡もなしに放置とか有り得ません。
釣った魚に餌どころの話ではありません!! 一体何をやってたのですか?」

あー、色々と。 何とっていいやら。

「ああ、ごめん。 骨を接いで貰ってたんだ。

どうもモフモフに夢中だったみたいだから、言い出せなかった」
「っつ」

よし、フォウさんが言葉に詰まった。

そのとき、ドアがノックされて、食事が届いた。

あまりのナイスタイミングに、俺が涙流しながら、主人にチップ握らせて見送ったのは内緒。

食事を取りながら、かくかくしかじかとフォウさんに今日の事を報告。

どんどん胡乱な目になっていくフォウさんが怖いです。

この後、もう一回城まで行って来るといって、私も行きますと胸倉つかまれた。

わ、判りましたとかくかく頷いたら、フォウさんが手を離し、フンとそっぽ向いてポツリ。

「マスターは勝手です。もう、本当に心配したんですから」

うん、ちょっとグツと来たね。

天才の遺産

さて、急ぎ食事を済ませて、おじさんズと合流するべく宿を出る。フォウさんも着いて来るとの仰せなので、フード付きのコートを作って、軽く認識阻害のお守りなんぞを作って貼り付けておく。

ただ戦闘系の大雑把な奴ばかり使ってるせいで、スキルの割りに細かい事は苦手だったりするのは内緒。

投射や防御系はアイテム付与もドンとこいだが、環境操作とかはでっかいサイレンスとか、でっかいダークネス位しか、使った事無い辺りで察して欲しい。

それでも影薄い位には出来るだろうから良いのだ。

なんつっても、フォウさん目立つからね。

あんまり他人に見せたくない……これって独占欲ですか？

俺がうむむと首を捻っていると、フォウさんに腕を取られて連れて行かれた……うん、やらかいです。

さて、村外れの広場に辿り着くと、丸太で即席のそりをでっち上げて、黒シエファード括りつけた大荷物がデーンと存在感を撒き散らしてたり。

その脇で、一仕事終わって一息ついているらしい、ロッドさんとリックさん。

俺に気が付いたとこで、ヨーウっと陽気に手を上げて迎えてくれ

……ちよ、二人とも酒入ってる！！

「酔う程は飲んでねえから大丈夫」「大丈夫、大丈夫」
「いや、めっちゃ陽気じゃないですか」

ほらほら水飲んで水飲んで。

おもむろにヤカンを連金、そして中に十倍吸収の良いホカリを生成、とりあえず2リットルずつ飲ませてみた（レモン味）

「おつ、うめえ、うめえ」「

ナイスハモリ。

「はっ!?!」「

お？

「うおお!! トイレトイレ!!」「

いってらっしやい。

すげえ、即効性だな。

十分程して、ゲツソリした顔で二人が帰ってきた。

酒はすっかり抜けてるようです。

それじゃあ、城まで行きますかね。

ロシナント改に乗っていくロッドさんには、ミスリルをジャラリと渡しておく。

それを見たリックさんが呆れてため息を一つ。

移動の並びは、ロシナント改で先行するロッドさん、その後ろを馬車で移動する俺とフォウさんが御者席でリックさんは死体と一緒に流石に死体は簀巻きで済ませるのも危険な気がしたので、ビニールのシートで巻き巻き。

何気にオーパーツ。

さて、ちょっと急いだので、昼の時よりも早く城が見えてきた。

城門の前には、さっきまで居なかったシェフアードが二機、歩哨のように立っている。

機兵を使った賊なんぞが出たってんで、警戒してるんだろうか？
ロッドさんがロシナンテの足を緩めて馬車に並んだ。

「あれ、大丈夫かね」

「ああ、山賊でも出りゃ、あんなもんだ」

リックさんが事も無げにいうので、ロッドさんの緊張も解けた。

でも、今の状況で王国の傭兵を機兵付きで、城の中に入れてくれるもんだろうか？

それに、リックさんは立場的にどうなんだ？

俺らに付き合ってたて良いの？ 気になったので問いかけてみると

……。

「ああ、国境のどんぱちは耳聡い連中なら知ってるだろうが、下の者は傭兵が突っ走ったと信じてる連中も少なくない。

今の所、教国の戦力が国境付近へ動員されたって動きも無いし、軍の純戦力にダメージが無かった事もあって、全体としちゃ意外と暢気なもんだ。

ピリピリしてるのは基幹部隊の連中と城の偉いさんだろうよ。

それにな、準機士なんてのはそういう事を考える程、偉くも無いからな。

傭兵の連中けしかけて騒ぎを起こす上の連中より、命の恩人で知り合いの安否を知らせてくれた、自称『王国の傭兵』の方が幾らかマシだ

「なるほど」

「まあ、軍人としちゃ、不味いんだろうがな」

なるほど、リックさんの軍での地位は低く、何が出来る訳でもな

い。

とはいえ『赤獅子』の名前の影響力は大きい故に、王国の傭兵と云々で面倒な事になる前にと命を狙われた線かな。

有名になるのも考えものだが、何代か前のご先祖様のお陰つてのは、どうしようもないわな。

ふつと隠れて一息。ふと隣を進んでいる機兵を眺める。

「あ、そういえば」

黒シエファードの中身を覗いてなかったな。

普通のシエファードも見たこと無いし、今の内に中身覗いちゃおうかな？

公領独自開発の機兵って、興味あるし。

よし、思い立ったがなんとやら。

馬車の御者をフォウさんに任せ、併走しているロシナンテ改の、後ろに繋がっているソリへ飛び移る。

一瞬ヒヤツとしたが、なんとかロープを掴んで安定させた。

まあ、今は全力疾走したら追いつける位のスピードに落ちてたので、転げ落ちても死にゃしませんが。

「さてさて、何か面白い物でも出てくるかなー」

ロシナンテ改のたれ流しているマナを、ちよいと拝借して機兵鍛冶スキルを起動。

シエファードをスキャンする。

「……何だこいつ？」

思わず口をついて出る、疑問、ギモン、ぎもん??????

材料の質が低いとか、造りの精度が荒いとかは別にして、あから

さまに今まで見た機兵と構造が違う部分が見受けられる。

物は稚拙、効果も微妙なレベルだろう。

だが、その発想というか、意味は……。

「……アリエナイ」

ざっと見て、シンプルとされている、ロシナンテとの違いが三点。まず関節のロック機構、及びダンパーを兼ねたバネ仕掛け。簡単に言えば膝、足、肘の一部に板バネが入っている。

今まで見てきた機兵の関節は、曲げ伸ばしの両方向にモーターの出力が掛かっていたが、このシェファードには片方向しか用意されていない。

もう片方向の力は、ギアでロックできる構造のバネのテンションで賄われている。

動きの単純化や、微妙な調整が困難だろうけど……扱いは楽かもしない。

それにマナの出力が少なくても良いのか。

ついでゴムだか革だかなチューブの中に、封入されているミスリルの粉末入りオイル。

これは背中の主機から各関節部に向かって、機体フレームに巻きつけられている。

信じられないが、このチューブに沿ってマナが流れるのを確認した。

めっさ原始的だが、各フレームに高位素材使ってマナを誘導するよりも、コストは安いし何よりソーマシステムの発想に近い。

最後に……装甲裏側から鋼線がのびており、直径20cmほどの筒状の金属缶に繋がっている。

そして、その金属管から更に鋼線が延びていて、付近のモーター

部分に繋がっていた。

一体何かと、内部を解析して呆氣に取られた。

金属管の中は、紙を大雑把に巻いた物をつつ込み、空間を間仕切り、そこにさっきのチューブに入っていたのと同様の、ミスリルの粉末入りオイルが充填されていた。

これは、ある種のマナプール。

例えるなら、マナ式のコンデンサ？（実はキャパシタと云う方が正解でしょうが、ここではコンデンサで）

チューブと違い、溜め込む事を考えている故の、紙の間仕切りだろう（意外とマナは物の抵抗を受ける、大気や木、皮、紙よりも液体や金属に沿いやすい部分がある）

まあ、マナには極性とか関係ないので、凄く適当な動きでしかないだろうけど。

推測で動きを予測すると、機兵が通常の動作をしている間、制御できずに拡散するマナは常に一定量存在する。

それらが装甲を通して出て行く途中で、大気中へ行くよりも流れやすい、ミスリルオイル入りのコンデンサ内に誘導され、そこに溜め込まれるのは間違いない。

つまり最初のコンデンサ内はマナの圧力がゼロ＞装甲側の接続線は幾らかのマナが流れているのでプラス状態＞コンデンサ内部へマナが充填される。

次にモーター側だが、モーターがマナを使用すると、その瞬間はその近辺のマナが薄くなる。

言い切ってしまうとモーター稼動＞モーター部のマナが薄くなりゼロへ（パワーが落ちる）＞この時コンデンサ内部はプラス状態＞そのプラス分がモーター内部へ流れ込む＞パワーの途切れがフオロされる。

基本はこういう形だろう。

無論、モーターの内部で未使用のマナの圧力が高ければ、そこか

ら装甲側へ向かって流れる途中でコンデンサに溜まる事もあるだろうし、コンデンサ内に保持できる時間とかはほんのちよつとだろうし、保持量オーバーした分は結局垂れ流したとかな限界もあるが、パワーの途切れは一瞬でも戦闘状態では死に体となる、その危険な瞬間を埋め合わせる事が出来たり、マナ発生のサイクルを長く取って、コンデンサ内に溜まるマナを積極的に利用する事で、機兵の燃費を良くする事が出来るメリットは計り知れない。

それをこのローテク・ローコストで実現させる工夫も驚きだが、この世界ではこの発想自体がありえないような気がする（まあ俺が知らないだけで、実はポピュラーなのかもしれないが……）

ぶっちゃけると、俺がミッシングワールドやミッシングウォーで、ソーマシステムを流行らせる前の段階の発想だ。

あれは多分、電子工作でもやった事がある人の考え付いた手法だと思っけど、こんな中世で浮かんでくるのだろうか？

土器に金属片と塩水入れて電池作るってレベルじゃなーぞ。

「なーんか、呼ばれた奴の臭いがするなあ……うわあつ、ぐげ」

鬱入っていると、門で皆が止まった拍子に転げ落ちた。

門でリックさんが手続きしている間、暇だったので立ち番しているシェファードを覗き見。

こっちは二機共に、取り立てて変な所は無い。

やっぱしこの黒い奴が特殊なのか。

安く、簡単に動かせるという辺り、優れていると思う反面、普通に強い連中には歯が立たない気もするが、戦争は数だよという言葉もあるし、安く作れて安く動かせるというのも、一つの特徴ではあるよな。

「やはり問題は……誰が作ったんだって話だよねっ!? うお、ん？」

急に暗くなつたと思つたら、飛行船が太陽を遮っていた。

気囊は一つで、重厚というかドン臭げな幅広の楕円形をしている。下に吊り下げられている構造物が見えないのは、内部に埋め込んでいるせいかな？

そう考えると防御力高そうにも思える。

とにかくそんなのが、どんどん城に向かって降りてくる。

そして城の手前に従機兵を降ろし、再び高度を上げると城の向こうへ飛んでいった……。

「なんだつたんだ？」

それには降りて来た従機兵が直ぐに答えてくれた。

「こちらは公都守護基幹部隊所属、ヒョーゴ＝リヒョーダン＝ジマ
ー機士である。」

その賊の機兵と死体、こちらで追っている案件に関わりがあると
思われる。

速やかに引き渡し願おう!!」

うわー、介入素早いなあ。

因みに従機兵は10mのほぼフルサイズで、ちょっと奇形という
位に重装甲な機体……つか、人から掛け離れたデザインしてる。

例えるなら、戦車の砲塔から、砲を外して肩部と腕部を生やす。

あとは砲塔の回転部分を腰にして、キヤタピラ無くして、ゴツイ
逆足を生やせば完成みたいな。

なんつーか、今まで見た従機兵が大方「三日逃げたら罪が免除な

アニメの世界』としたら、目の前に居るのは『重さが力で、デザインが版權で色々あった某ボードゲームの世界』な感じでしようか。
（いくなれば『ジャー！ ジャー！ ジャー！ ゲツ、マ ーダー！！』とか『ゲツ、ス ーカー！！』みたいな）

とはいえ、シエファードと似たような意匠が見えるところから、もしかしてこんなのが公領のスタンダードな奴なのか？

まだ軍独自の従機兵って見たこと無いんだよなあ、教国で見たのは二機とも違う型だったし。

もしかすると製作者の癖が出るとか、モデルチェンジが頻繁だとかなんだらうか？

ポニーやシエファードは数作るから、部品も共通化されてるんだらうけど、従機兵はその時点での在り物で作るのかもしれない。効率良いんだか悪いんだか。

「ま、いいや。 こいつも覗いてやるう……」

おやおや、真っ黒いなあ。

こいつの中に、黒シエファードと同じような機構が入ってますよ。むしろ更に推し進めたようなのが。

主機から伸びるチューブがモーターに行く途中で、例のコンデンサの容量でかそうなのが、複数くっつけてある。

主機から直で充填とか、これはマナ漏れの回収とかよりも、緊急時のパワーの持続が目的だろう。

そして、モーターが双方向に装備してあるのに、バネ装備。

おまけにバネ巻き上げ用の専用モーター付き、どう考えても燃費とかさういった方向の代物じゃありません。

それもなんだか膝、踵、爪先、たわめたバネを全部開放したら、この重装甲の従機兵でも跳ね飛びそうな位の力を溜め込める代物……。

ああ、そうか。 踏み込みにも使うんだらうね、あるいはバツ

クステップか。

カカツとなんてレベルじゃねーぞ。

でも、セッティングはパワー重視で、瞬発力はマナ要らずの機械仕掛けか、間合いの開いた時にせつせとバネ溜めて、バネ開放で突っ込んで、重装ならではの運動エネルギー込みでブチかまし、止められても持続力のあるパワーで鏝ぜりあい。

離れて溜めて、突っ込んでとか。うわ、ちょっと感動した。

「……マスター。マスター？」

誰かに小声で呼びかけられてた。

まったく、珍しく人が感動してるのに……ん？　なんか、わき腹を突付かれてる？

「あ、はい？」

慌ててそっち向いたら、フォウさんが前々と目配せ。

「え？」

「私の機体がそれ程に気になるかね？」

外に出てきた機士が、目元をピクピクさせながらこちらを睨んでいた。

「うわ、すみません！！　この重装の従機士をどう振り回すのかと気になってしまいました！！

これでも錬金術師で機兵に触れる者の端くれな者ですて！！」

「ほう！！　そうなのかね！！」

あれ？　一気に表情が変わったぞ？　なんか凄い機嫌が良さそう

だ。

「では、こいつをどう思うね」

神経質そうに撫で付けた黒髪とヒゲ、ヒョロリとした長身を黒に金糸の豪華な軍服に包んだ、ジマー機士。

彼が自分の従機兵に触れながら問いかけてきた。

「そうですね。まずは重装ゆえに耐久力は云うまでも無く、その為のパワーも疎かにされている筈も無く、その一撃は重い致命の一撃となるでしょう。」

恐らくは一刀一足の裡に入り込めば、無類の強さを発揮する事でしょうね」

ジマー機士、うんうんと気分良さ気に頷いている。

まあ、一足一刀とか言いつつ、武器持たずに拳骨でボテクリコカス感じの、セメントな格闘戦だろう。

あのゴツイ腕部で殴られたら、軽量なんて簡単にペシャンだろうなあ。

おまけに腕部に結構な余裕があるんだよなあ……何か仕込むのかも。

そんな事を考えつつ、話は続ける。

「ただ、判らないのが、其処までの距離に踏み込む術です。こうして軍に在るのですから、その部分を捨て置いてあるとは思えないのです。」

それで先程から、思考の迷路に嵌り込んでしまいました」

「ほほう……どうして唯の見掛け倒しとは思わないのかね？」

「うわー、めっちゃ楽しそうだ。」

(いや、ありや見掛け倒しだろ)

(いやいや、あれで着実に功を稼いでいると、噂に聞いた事が有る)

後ろでボソボソ云うな。

さて、なんと応えた物が。

「気になるのは三点ですかね。

一つは見掛け倒しで、其処まで扱いの難しそうな機兵は、態々使わないでしょう。

二つ目、ぱつと見で装甲に多少、新旧の時間差が有りますね、実際に使っている証拠です。

三つ目、これだけ素早く此処に現れた貴方が、無能な訳が無いでしょうよ!」

「ははははは、これは参った!! 素晴らしい、はーはっははははは!」

いやいや、これは本当に素晴らしい」

ジマー機士、大爆笑、大歓喜。

うわ、余計な事言っちゃったかな。

「君のような素晴らしい洞察力の持ち主とは、一度杯を交わしてみたいものだね。

その通り!! わが玄武、差し合いの踏み込みで遅れを取った事は、未だかつてない!!」

それだけ言い置いて、ジマー機士は機兵に戻り、その配下が黒シエフィールドと死体を移動する手配を始めた。

「それでは失礼する。

ああ、賊を捕らえてくれた褒章は城で受け取ってくれたまえ。
酒くらいは振舞うように伝えておこう」

ジマー機士は、結構重心がトップにあるだろう玄武を、見事に振り回して、母艦が飛んでいった方へ去っていった。

云うだけの腕はある。

「おいおい、玄武かよ」

どう考えてもこの世界では出てきそうに無い名前です。

「なるほど、あれが『四神』死神部隊って奴か」

ロッドさん、知っているのか！！

「なんともきな臭い話になってきたな、ヒョーゴ＝リヒョウダン＝ジマーといえば、昇進の機会があれど、現場に残る為に辞退しているという、基幹部隊でも変わり者と評判だったが、まさか死神部隊だとはな。

今回の件、随分と灰色がかったきたな」

いやいやリックさん、言うまでも無く真つ黒です。

「しかしよお、キシマ君よ」

「ん？ 何ですか？ ロッドさん」

なんだか随分納得云って無いご様子、まあ、獲物を搔つ攫われたのは悔しいでしょうが、此処は穩便に。

「あれ、本当に動けるのか？」

そつちですか。動けますよ、軽やかなターンを見たじゃないですか。

結構、洒落にならないと思います。

「動け「動くだろうな、問題なくというか、それを武器に出来るレベルで」ますよ、えー!!」

リックさん、知っているのかー!!

「あれが四神の機兵だというのなら、機兵創成期の異才『プラインゼス』『プラインズ』の手がけた機兵を基にしている筈だ」

「あの天才か!!」

リックさんの言葉に、ロッドさんが驚愕の叫び……あの、俺が置いてけぼりですよ。

「たしか、名前は機兵の歴史に出てきてましたが、そんなに凄い人なんですか？」

一応、話に入ってみる。

「まあな、白機士の基本フレームを手掛けて、真つ当すぎて詰まらんとか言っつて、公領に逐電したお人だ。

今ですら通用する設計を残すような天才だが、最後までやっていたらどんな白機士になっていたか」

ロッドさんが、ブルルと肩を震わせる。

「彼はこの公領に来て、従機兵を幾つか手掛けたが、乗り手を選ぶ

上に手が掛かるといふ事で、それ程の数は残っていない。

恐らくは『四神』と呼ばれるもののオリジナルと、うちの家に伝わる『赤獅子』、ドクターの家の『銀狼』、それくらいだろうな」

へー、っていうか、シルビアさんちも英雄のお家柄なのか？

それとその天才、呼ばれた奴じゃなかるうな？

「じゃあ、さっきの玄武は複製品か？」

ロッドさんがちよつと興味深げに呟いて、さっきの機兵の姿を思い返しているのか、腕組みして唸っている。

「ではあるだろうが、オリジナルの時代より、素材やらなんやらが進んでいるからな。

更に強力になっていと思うぞ。うちの赤獅子も、何度か改修しているしな」

「見てみたいなあ、赤獅子」

どんな中身なんだか。

「すまんが、あれを継いだのは妹でな、今は武者修行とかで傭兵をやっている。

確か王国に居る筈だが」

「へー……って、王国の傭兵？」

まさか、あれか？

「真っ赤な髪がぶわーで、俺より頭一つでかくて、口より手とか足とか出る人かー!!」

「よく知ってるな？」

ぎゃわー！！ ブルブルブルブル……思い出したくもねー！！

「妹さん、武者修行より、花嫁修業が先でしょう！！

あんなK I・K E・N・B U・T U野放しにするなー！！

死人が出てないのが不思議だー！！ いや、絶対に何人かやつちやつてるに違いない！！」

「おいおい、それは言い過ぎじゃないか？

粗忽者だが、あれは今でもお兄ちゃん、お兄ちゃんって「お兄ちゃん！！」そうそんな感じで」

「『ええっ！！』」

厄介事が、更に一つ増えた瞬間だった。

状況の終わりと始まり

「随分とややこしい事になっているようだ」

私が城門で見かけた光景に対して、思わず口をついて出た第一声がこれ。

先ごろ治療にやって来た、王国の傭兵という青年と対峙し問答する、従機兵より見下ろす機士。

名乗りによれば、どうやら死神部隊と呼ばれる最精鋭。

今日と言う日は、一体何がどうなっているのやら。

先程、青年が治療代にと置いて行ったミスリルを、この城のトツプに叩きつけ、傭兵連中の身内を開放させる手続きを終えたと思ったら、この数年寄り付きもしなかった妹が面会に来たという。

その相方の赤毛の暴れん坊は、それなりに落ち着いたかと思いきや、相も変らぬ様子に安心するやら呆れるやら……かの兄も妹の将来に気をもむ事だろう。

そんな彼女達とお茶していると、事もあろうに城の近くで、機兵を使った賊が出たという。

詳細を聞くと、既に退治されたようだが、襲われた者の名前を聞くと、赤毛の暴れん坊が騒ぎ出した。

私にも聞き捨てならない名前だったが、二人とも無事で城にやってくるとの事。

それから騒ぐ赤毛の暴れん坊を宥めつつ、時間を見て城門にやってきたのだが……先の台詞となる訳だ。

さて、俺が思わず目を疑うような光景が、目前で繰り広げられている。。

あの乱暴者の赤毛が「お兄ちゃん」とか言って、リックさんに抱きついてるのだ。

ドンだけ猫を乱獲して被ってやがるんでしょうね。

つか、リックさんより背が高いのな。

あ、赤毛の相方の銀髪さんも居るが……なるほど並べてみると、シルビアさんと良く似ている。

美人は癒されるなーとか見てたら、シルビアさんに「随分とややこしい事になってるな」と言われた。

ああ、シルビアさんも、さっきのジマー機士の事、見てたんですね。

確かにややこしい事になってます。

一体、なんと説明して良いやら……とりあえず、どっか落ち着ける所に行きませんか？

そんでシルビアさんに案内されたのは、病院棟の一室。

シルビアさんの私室というわけではないが、プライベートな場所との事だ。

七人も入ると多少手狭だが、贅沢はいえない。

「さて、一つづつ片付けよう」

シルビアさんが、どうせ長くなるだろうからと、妹さんとお茶の用意をしながら、そう仰った。

それならと、俺は皿とクッキーを沸いて出させると、テーブルにドンと置く。

相変わらず出鱈目だよなとも言いたげな、ロッドさんの目が痛い。

お茶が全員にいきわたり、皆でポリポリとクッキーを齧りだした所で、シルビアさんが「さて」と口を開いた。

「キシマ君、先程のミスリルで、傭兵連中の身内は開放される事になった、感謝する」

「そりゃ、良かった」

そのやり取りに、何か嫌な事を思い出したのか、妹コンビが顔を顰めた。

フォウさんはクッキーをポリポリ。

リックさんは「一つ肩の荷が下りた」と言い、ロッドさんは「それじゃあ、その後の事はこちらで引き受ける」と言っ、自己紹介。

「俺はロドニー・エスパード。王国の傭兵で、キシマ君の知り合いだ。」

ちよつど、お宅らの話の傭兵連中から依頼を受けて来た。

依頼は安否の確認と言う事だったが、どうもきな臭いようだから、王国まで出国させる方が良さだろうな。

金とコネに関しては、俺の後ろ盾が傭兵連中の協力を欲しがっているんでな、何とか出来るだろう」

「俺が突っ込んだ所を聞いている。信用して良いと思う」

リックさんはロッドさんが教国の人間だと言う事を知っているんで、フォローしてくれた。

「しかし、わざわざ捕まえたりした癖に、あっさりと開放するんだなあ。」

基幹部隊の連中から横槍とか無かったんですか？」

ちよつと気になったんで聞いてみると「ミスリルを受けとった後は、特に何事も無く話が進んだがね」と、シルビアさん。

なんか、変な感じだな。

「ああ、うちの大将が手を回したかもしれんな」

ああ、ルドガーさんね。

でも、その割りにこっちは命狙われたりしてますがね……。

「まあ、国同士のやり取りなんて物は時間がかかるものだしな、それに動く手足も多いさ」

「なるほど……じゃあ、あのジマー機士は、火消しに来たのかな？」

「だろうな、あれを動かせる人間は、そう数は居ないだろうしな」

そのころ、公領上空を進む空中母艦の一室。

「ジマー機士長、赤獅子を放っておいて良かったのですか？」

鈍く振動の響く空中母艦の一室で、若い副官が問いかけた。

「今回の件は教国と話が付いた。あの先走った連中の尻拭いを済ませた以上、もう介入は無用だ。」

それと表に居る時の私は、ただの機士だよ」

グラスの中に溜まる炎のようなその液体を手の中で遊ばせ、香りを振りまくように立ち昇らせる、お気に入りのワインを余す所無く味わいながら、ヒョーゴ＝リヒョーダン＝ジマーは、聞き分けの無い子供を諭すように静かに言葉を紡いだ。

「しかし、あのような機会は……」

「君は重要なポイントが何処にあるか、判っていないようだね」

「……っ!？」

副官の悔しげな、それでいて足りない何かを得ようとする貪欲さをその目に見て、ジマーは口の端を微かに緩めた。

「今回の件で重要な点は赤獅子ではないな。

確かに邪魔ではあるが、あれは自身の限界を良く判っている。

あれが国のうちに居る間は、判りやすい餌として置いておくのが上策。

今の状態で、あれが動いた所で、何をどうする事も出来んよ。

あれが危険になるのは、軍という囲いの外に出ようとした時だ。

それよりも、赤獅子の傍らに青年が居ただろう?」

「キシマ・ギ・カズーヤとか云う傭兵ですか?」

「その通り!! 彼だ、彼だよ!! 彼こそがポイントだ!!」

「一体、何者なのでしょうか?」

「教国と繋がりがあるのは間違いないだろう。

そうだな……まずは、あの小物を倒した機士を見たかね?」

「ポニー級に乗っていた男ですか?」

ジマーが不敵に笑う。

「ふふふふ、あれがただのポニー級に見えるというのかね……いや、見えるのだろうね。

だが私には判るのだよ。あれには私の玄武と同じ臭いがする。

動きの其処此処に、隠し切れない天才のみが為し得る、無造作な極みが見えるのだよ!!」

とはいえ、乗り手が凡庸では仕方が無いが、あれに乗っていた男は教国の白機士乗りだ!!」

「ま、まさか!!」

副官の唾然とした顔に、ジマーは悪戯が成功した無邪気な子供の
ような笑みを浮かべた。

「ロドニー・エスパーダ、あのルドガーの影とも言える者だ。

以前に見た時は、力を振り回すだけの猪武者でしかなかったのに、
随分と優雅な動きをするようになったものだ。

乗りやすいが故に、白機士ではああいう矯正は効かないのだがね」

ああ、今日は本当に楽しい日だと、ジマーはワインを口に運ぶ。

「では……」

「そう、あのキシマという青年も、只者ではありえない。

全く、あの小物が失敗してくれていて幸運だった、間に合わない
と判った時には、流石の私も肝が冷えたものだよ」

「確かに」

「だが、あの出会いができた事に関しては、先走った愚か者に感謝
しても良いな」

「はあ」

「あの目、我々の回収したシェフィールドと、玄武の繋がりを確信
していた」

「まさか」

「いや、彼は若いせいか、あまり腹芸が上手くは無いようだからね。
色々と透けて見えるものもあつたと言う事だ。

今迄にも玄武の事を見て取る者も居たが、それだけの才が在る者
ほど、圧倒か驚愕を覗かせていた。

しかし彼は、驚き感心はしても、全く揺らいではいなかった。

それ程の自信、驚くほどの馬鹿でなければ……と云う事だ」
「な、なるほど」

「まあ、馬鹿の護衛に白機士乗りが差し向けられる訳も無い。

となればだ、彼らの行動は教国上層部よりの命で制御された物だ。

今回の件は教国内の引き締めにのみ動き、王国・公領には構い無しと決した以上、我らは動く必要が無い……いや、まて」「どうかされましたか？」

「何故それだけの者が、この程度の事に差し向けられる？」

ふむ……確か教国のケイオスが、一度動かせなくなったと言う報告があつたな？」

「はい、今回の発端となつたと見られる、確度の高い情報です」

「それを動かした者が居る。そして……私とした事が迂闊……！」

「まさか……！」

「ケイオスだ……！ 彼こそが教国のケイオスを動かした鍵……！」

そして、我々の手にしたケイオスを探りに来たのだ……！」

艦の進路を旧公都へ向けろ……！」

「ハッ……！」

「へえつくしよいつ……！ ぶるぶる……！」

「マスター……？」

うああああ、なんか物凄い寒気が背筋を走り抜けたぞ。

とりあえず、話はアツサリと進んだ。

傭兵さんの身内の人らは、ロッドさんとリックさんの立会いで、

王国へ。

その後、ほとぼりを冷ましてから教国へ向かう事になった。

ロッドさんにはルドガーさんに、何とか生きてますからと伝言を頼んだ。

さて、俺はと言つて。

「ちょっと、もうちょっとゆっくり進みな!!!」

「……どうも、思った以上に効果が有るんだな」

俺は、ロッドさんに譲って貰った、ロシナンテ改に乗って、あの
大雑把なコンデンサの効果を確認かめていた。

ロシナンテ改を動かしているのはフォウさん。

本気を出せば、ロスゼロの操作も出来るが、わざと一般的な機士の
腕で動かして貰っている。

午前中は、コンデンサ無し。 昼休みの間にちょっと仕込んでお
いて、同じ操作をして貰ったのだが、その違いに驚いた。

「機兵鍛冶スキルじゃなく、錬金で部品作って、手作業で組み立て
たパーツで機能アップって言うのも、なかなか乙なもんだな」

「教国で作られた王国開発の機兵に、公領の技術を搭載ですか、と
んだ魔改造ですね」

「ぶ、違くない」

淡々と操作を続けるフォウさんの言葉に、思わず噴出した。

向かうは旧公都「ベルダ」妹さんが機兵を預けている所だ。

一段落付いたところで、機兵「赤獅子」が見たいと言ったら、リ
ックさんが妹さんに案内をするように言ってくれたのだ。

ロッドさんも、事態は収束に向かっていているから、危険も少なかる
うと言ってくれたし。

「早くしないと、暗くなるまでに宿に着きませんよー!!!」

「やかましいー!!!」

どうも赤獅子の人、黒機士に色々と思いがあろうようで、黒機士が

討たれたという噂を聞いて、大慌てで帰ってきたらしい。

それで、ロッドさんの話の端々から、真実だと言う事を嗅ぎ取ったのか、まあ荒れること荒れること。

リックさんに窘められて落ち着いたが、この機会に傭兵家業も一休みして、ゆっくりしたらどうだと言う、シルビアさんの言葉にも首を振らず、さっさと王国に戻ろうとしたので、頭を冷やす機会をという部分も、この案内にはあるんだろう。

流石の赤獅子も、愛しい『お兄ちゃん』に強く言われては逆らえなかったのか、しぶしぶと頷いた。

その時の暴れん坊の姿は、水濡れのチワワのようだった……大きな声ではいえないが。

まあ、ちゃんと護衛の依頼と言う形で、報酬も約束しているし、それなりに名の売れたプロだから、心配はしていない。

「あー、たのしみだったーっ！！」

そんな感じで、俺は徐々に、晴れ晴れとした気分だった。

ベルダへ行こう。

旧公都ベルダ

過去、公国の首都として栄えたが、教国に半ば程も国土を奪われた為、前線へ近く戦火が及ぶ危険性から、軍事・工業の機能を残し、首都機能は現公都へと移管された。

それにより現在は、公領の軍事中枢として、また傭兵向けの機兵生産拠点として発展している。

さて、軽従機兵と馬車でほてほたと進む旅も、ようやく終わりが見えてきた。

小さな流れが大河へと変わっていくように、細い街道が幾つか合流していくうちに、往來の激しい大きな街道へと変わっていく。

そのうち、もう見慣れた感じのシェファードが、待機状態で佇む詰め所等を見かけるようになる、大きな看板に『ベルダへようこそ』何ぞと書いてある休憩所が、ちらほらと目に付くように。

其処から遠くを望むと、街の中心の大きな城や、煙突から煙をたなびかせる工房が見て取れる。

それらを一直線に突き抜ける大通りは、三つの門で区切られており、それらは中央の城郭・公領軍の施設・工房等という具合に分かれており、この辺りは城壁の外になる。

それでも、街へ入る迄の待ち時間を潰す為の、宿や茶屋が軒を連ねており、四つ目の区域として栄えている。

見た感じ、街の景色は王国のポートサレスや道中に立ち寄った教国都市と比べて、なんとなく近代都市っぽい。

赤レンガ仕立ての、明治時代のような臭いのするポートサレスや、白塗りで清潔感過多の教国と比べて、なんとなく煙っぽい薄汚れたコンクリートのような風情故の、現代人の感覚かもしれないけど。等と、そんな景色を眺めている間に街道も終わり、都市の玄関口にたどり着く。

「ありや、なんか城門の辺り、凄い待ちの行列が並んでるんだけど……」

「こんなもん、ちょっとやそつとじゃ減らないだろ。行列は好きく無いのですよ。と、思っていたら。」

「ああ問題ないよ。」

「軍や傭兵は、連中が並んでる横にある門を使えるから」

「あっさりと、そう言われて拍子抜けした。」

「それなら良いか」

「それなりに金は要るけどね」

「さいでつか」

案の定、ロシナンテの持込なんかでごちゃごちゃ言われた。

「ミスリル一単位握らせて黙らせたけど……そんな目で見るなよう……！」

「しかし、思った以上に活気に溢れてるんだな。」

「軍関係の工業都市なんていうから、いかめつらしい感じかと思っただけど」

「ちょっと、目先を変えるつもりでそんな話を振ってみたが、実際

に酒場やなんかも結構普通にあるので、風景以外には他の街と比べてもそんなに違いは無い。

「そりゃそうさ。 此処は公領軍だけじゃなく、傭兵向けの機兵も作っているんだ。」

他国じゃ有り得ないけど、民間の工房や技術者も多いしね。

お陰で三区は雰囲気もこんな感じさ。 軍オンリーの二区だのギスギスしてるけどね。

まあ、公領の戦力が傭兵に頼ってる分もあって、他所より規制が緩かったり、優遇されてたりだからね。

統制された教国はともかく、王国なんかで学院やギルド、軍お抱えのお高い連中とそりが合わなかったり、身分や偏見なんかで圧力かけられたりした若手連中は、此処に流れてくる事が多いのさ。

お陰で正規の錬金術師や研究機関、軍の工房は王国の多いだろうけど、潜りやなんかも入れるとね、こちらの方も負けてないね」

そんな風に、街の成り立ちを説明してくれる赤毛の人。

思えばこうやって話せるようになるとはなあ。

道中ふて腐れてたのを、旅の途中では有り得ないオヤツや飯、あるいは風呂等によって、徐々に軟化させるという作戦で、なんとか普通に会話できるようになった。

ぶっちゃけ過去の事が在るので、ムスツとされてると色々怖くて必死でした。

とはいえ、俺より頭一つデカイといっても、別に筋肉女という風ではないし、口より手や足が先に出るのさえなければ、お近づきになりたい派手な美女であるし。

そういえば、初日の晩に自己紹介するまで、名前を知らなかった。

彼女は従機兵『赤獅子』を受け継ぐ『スカーレット・ルーサー』

俺よりも年上で24だとか。 とりあえずはスカーレットさんと呼んでいる。

「スカーレットの話は、主に技術者の面の話ね。ついでに言うと、傭兵にもメリットが大きいだよ。」

普通なら、機兵の製作元まで持って行かないと、大掛かりなオーバーホールは出来ないわ。

主に国管理の工房で作られて、他国の戦力にしたいくないって理由で、中枢を弄れないようにしてあるからだけど。

でも、ここならあちらこちらの技術者が流れ込んでいるから、他国からの持込でも、メンテナンス可能な技術者に困らない。

つまり、雑多な集まりの傭兵が、従機兵を持ち寄っても、此処でなら一括してメンテナンスが出来るの、だから此処を拠点にする傭兵も多いのよ」

と、話を補足してくれたのは、従機兵『銀狼』を受け継ぐ『ステラ』こと、『ステラ』こと、ステラさん。

こちらは170cmを少し出る程度の俺と、そう変わらない背をしている。

楚々とした美貌の麗人だが、メリハリのあるプロポーションは、時折目のやり場に困る。

そんな二人の案内で、今は彼女らが機兵を預けている、掛かり付けの親方の工房を目指している。

「私らみたいな、ややこしい機兵持ちはね、預ける先も選ばないと駄目だからね。」

その点ここでなら、評判に外れは無いのさ」

「なるほどね……しかし、機兵を街中に歩かせてもお咎め無しとか、というか他にも歩いてるし、上を見上げたら母艦らしきのが行ったり来たり。」

あれは軍の母艦？ 教国に仕方無しに持たされてるってレベルの

数じゃないような」

「あれは傭兵の持ち船よ」

うっそ！！ 自家用空母とか、ありなんですか？

「運び屋も混じっていますけれどね」

ボソリと、ロシナンテの方からフォウさんの声が聞こえた。

あまり表に出ないようにお願いしてるので、ちよっとご機嫌斜めだ。

「ああ、そういうのが準戦力として居るから、教国も王国も油断出来ないのか」

「そうだな」「そうね」「YESです」

どの国もみんな必死だなー、平和に行こうよ。

「ん？」

あれ？　なんか、感じた？

「あの、マスター」

フォウさんから緊張した声。

何か感じたか？

「どした？」

「何か気になるシグナルのような物を、感じたのですが」

「どっちから？」

「城の方角でしょうか？　すみません、ハッキリとは」

「俺も何かを……良く判らなかつたけど」

何か、あるのか？

数時間前 ベルダ中央城郭内・公都守護基幹軍施設

「ジマー機士長！？ 公都へ戻られると聞いていましたが」

「野暮用だよ。 すまんがいつでも出られるように頼む。 そんな事は無いように願うが」

「ハッ！！」

船から降ろされる玄武を背後に、ジマーは施設地下、立ち入りの最も制限されるエリアに向かって進む。

「機士長！！」

ジマーを若い副官が早足で追いかけてきた。

「報告します。」

船は基地担当へ引継ぎ、玄武はメンテナンスだけを申し伝えてあります

「しつこく苦勞」

報告を聞き、ジマーは暫し考え込む。

「すまんが、ミスリルの手配を頼めるか。

考えすぎかとも思うが、少々気になる事がある」

「ミスリルですか……先だつての補給時に巡察任務時の基数を満たしております。」

戦闘の見込みが無い現状、追加の確保は難しいかもしれませんが」

「そうだな、可能であれば構わない。」

私はケイオスの様子を見てくる」

「はっ!!!」

ジマーは副官に指示を終えると昇降機に乗り込み、懐から金属板を取り出す。

規則的に見える細かい穴の開いたそれを、壁の読み取り口に通すことで仕掛けが動き出し、昇降機のゴンドラはゆっくりと地下へ向かった。

「相変わらずか」

昇降機から降りたジマーを迎えるのは、高さ三十mに達する高さの空洞。

上部には採光用の窓と、母艦からの荷入れ用のスライド式の鉄扉が見える。

その明かりに照らされて、鈍く金に輝くのは、力無く眠る巨人の姿。

名を『ケイオス』天より降って来たモノだった。

「おやおやあ、一体どうしたのさあー」

ケイオスの変わらない様子に、少々の落胆を見せたジマーの背後から、ねっとり纏わり付くような、ハスキーボイスが投げかけられた。

ジマーは不快気に、その神経質そうな目元をヒクつかせ、背後を振り返った。

「お前は相変わらずか、ベニー！クーザック。王国に張り付いていたのではなかったのか？」

「ちよーいと、面白そうな事がねえー」

ニタリと笑うクーザックに、不快感を隠そうともしないジマーの目元が更にヒクつく。

「いざと言う時の為にさあ『朱雀』をねえ」

「ターゲットは？」

「ふふふのふ、聞いて驚けえ、天の機士さあ！！」

クーザックはその名を味わうように舌に載せ、陶醉するようにその音に身を震わせる。

その目に浮かぶのは愉悦、血に飢えた狂人のそれ。

「下衆が」

虚ろな目で身をくねらせ「うふふふう、うふふふう」と、あちらから返ってこないクーザックに、ジマーは一言吐き捨てて背を向ける。

死神と呼ばれても、目的の為に殺すジマーと殺すが為に殺すクーザック、交わる事は無い。

興が冷めたとばかりに、ジマーが元来た道へ足を向けたその時、背後から途轍もないマナの波動が発せられた。

「これはケイオスか！！」

ジマーは振り向き、瞬時に思い浮かんだソレが正しいのか否かを目にしようと、地下空間を見下ろす足場へ駆け寄る。

そこには抜け殻でしかなかった巨人が、目覚めの咆哮を発していた。

「やはり！ しかし、なんという……これまで一切の反応を起こさなかったものが。」

一体、何を切っ掛けに目覚めた？」

「もしかして、何かに呼ばれたんじゃないのぉ？ たとえば天の機士とかさあ」

「ふん、流石のクーザックも、今の衝撃には正気に帰るか」

ジマーは己の言葉を聞きとがめ「もし、そうだったら、すっごく面白い」と、話しかけてきたクーザックを目の端に収め、その言葉を鼻で笑う。

「ふつ、なぜ其処で天の機士が出てくる？ この地に天の機士など

……馬鹿な、有り得んよ」

「むうー、鼻で笑うかしらねん。 まー噂よ、うわさ。

天の機士が黒機士の汚名を晴らしに出陣したってね。

実際、王国に居ても、全く表に出てこないしさあ。

でも一応、本当だったらチャンスだしねえ、こうして準備に来てるのよお。

それに実際、こういう事が起こってるんだし、チョットくらい期待してもいいんじゃないのよさっ！……」

クーザックの言葉は、最後が叫び声になっていた。

先程の威勢とは逆に、相手の動きが全く掴めず、状況が行き詰まっているのだろう。

ターゲットが天の機士でなければ、常のクーザックなら任務を投

げ捨てているに違いない。

ジマーは王国が天の機士を国外に出すとは到底思えなかったが、この機体が何かと呼び合うという事が、絶対に無いとは言い切れないと考えていた。

実際、把握できていない部分が多すぎるし、何があったとしても不思議ではない。

だが、何かと呼び合っているというなら、相手が天の機士とは思えない。

王国の流している話を信じるならば、天の機士とケイオスは相打つべき者の筈。

ならば、ケイオスと呼び合う者とは何者だ？

ケイオスを創り上げたという『魔道機士KAZUYA』とでも言うのか？ 馬鹿馬鹿しい。

それこそ天の機士の威光を増す為の与太話だろう、そんな便利な人間が早々…。

居てたまるかと断じかけて、ふとジマーはある青年の事を思い起こした。

もし、彼が教国の手の者という以上の存在だとしたら、それこそ『魔道機士KAZUYA』等という者だとすれば……。

ジマーは冷徹といわれる己が、このような憶測以前の事柄に、胸躍らせている事に苦笑する。

そして、同じように不確実極まりない情報に、期待をかけているクーザックを見返し「まあ、そういう事もあるかも知れんな」と返しておいた。

ジマーがそんな感じで軽く投げかけた言葉に、クーザックがギシリと固まった。

「あ、あらあら、お堅い玄武の乗り手ともあるうものが、随分と口マンチックな事をいうから、ビックリしちゃったじゃない。

なにか思い当たる事でもあるのかしら？」
「さあな」

ジマーは、その問いを流すように、一言で切り落とす。
いつの間にか、ケイオスは再び眠りについていた。

「面白くなってきた」

ジマーは、己がクーザックに出会ってからの不快さが、嘘のように晴れている事に気付いた。

地下を出て、玄武へのメンテナンスだけでなく、フル装備を指示すると、酒をあおって眠りに付いた。

その後もケイオスは度々目覚めては眠りを繰り返している。

「えー、私、空気がよー。 ひつどううい」

一人、取り残されたカマがくねっていたり、居なかつたり。

時間戻って街の中

とりあえず、さっきの事は深く考えない事にした。

先程二回目があつて、発信元が城の辺りだとは判ったものの、今の所どうしようもないし。

さて、ごちゃごちゃした三区の街中を進む途中で、大通りと直角に突き抜ける、大きな路地を幾つも見つた。

幅10m程、奥行き100m程のその道には、レールなんて物が引かれていて、かなり驚かされた。

通路の一番奥には、貨物用の荷台が収まる小屋があり、傍らにシエフィールドが二機座つてたりする。

途中、資材の搬入なのか、荷台を引つ張る姿を見たので、それ用に使われているのは間違いない。

「なんとという警沢な……まあ、馬飼うのも大変だろうけど」

「この辺りじゃ、質の悪いミスリル位なら、自前で錬金出来る奴も居るさ。」

それ所じゃない奴も、ここに居るけどさ」

なるほどと思いつつも、お前が言うなという目で見るのはやめていただきたい。

そんな事をしている間に「ラブレス錬金工房」という看板が見えてきた。

目当ての工房は此処らしい。

工房は路地の一番奥まった所にあるので、ロシナンテ改で入っていくと、やたらと注目を浴びる。

反応は二つ「なんだ、ポニーかよ」という物と「なんだこいつ？」という物。

主に後者の年配の人達が、後ろをぞろぞろと付いてくる……一体、何事ですか。

「よお、スカーレットのお嬢……こいつは何者だ……」

革のズボンに上半身裸の親父が、酒かつくくらいながら、そのたまった。

「見ての通りのポニーだよ……それから、お嬢言うな……さっ

さと仕事してろ!!」

スカレットさんがシツシツとばかりに手を振って、鬱陶しげに声を張り上げるが、オッサン連中はニヤニヤするだけで全く堪えない。

「駆け出しの頃、スカレットは赤獅子をボロボロにしちゃ、此処の皆に散々怒られてたから、このおじ様達には弱いよ」

ステラさんがポソリと教えてくれた。

「あーもう、煩いな!! それより、ラブレスの親父は!! 赤獅子、ちゃんと見てくれてるんだろうな!!」

赤い顔でスカレットさんが切れた。

そこで、今まで全く堪えてなかったおっさん達が、妙に動揺した。

「おいおい、なんか有ったんじゃ」

妙な雰囲気になったのか、スカレットさんの声がしおらしく。

ステラさんがそれを見て、なんだか嬉しそうなのは、気にしないようにしよう。

「ラブレスの親父だがな、実は「ええい、ワシが直に話すわい!!」のおおっと」

一人がそう話しかけて、オッサン達の後ろからダミ声が響いた。オッサン達の人ごみが割れ、若い兄ちゃんに肩を借りた老人が、杖をフリフリ姿を現した。

「おい親父、一体どうしたんだよそのざまは!!」
「ええい煩いわい!! お嬢の声は響くんじゃ!! ちよつとばかり腰をいわしただけじゃい!!」

スカーレットさんと怒鳴りあう、その元氣さに本当に腰が悪いのか、非常に疑わしいんですが。

と、思ったら、ビシッと固まって、ヘナヘナと崩れ落ちる。

どうやら大声出したら、腰で破滅の音が鳴ったらしい。

アウアウと呻くその姿に「お、親父さん!! 大丈夫ですか!!」と肩を貸してた兄ちゃんが支えなおす。

スカーレットさんも反対側の方を支えて、荷台の上に寝かせた。

「うっ、すまんのう。ごらんの有様でな。

『銀狼』は一通り済ましたんじゃが、『赤獅子』はまだ手を付けておらんのじゃ」

流石に声が大人しくなった。

「まあ、そんな事ならしょうがないけど……どれ位掛かりそうなのさ」

「すまんがなあ、他の連中も手が空いて無くてなあ。予定が立たんのじゃ」

「今のとこ、急ぎの仕事は無いけどさあ」

スカーレットさんがしょんぼり。

「俺も、赤獅子を触るなんてのは、流石にまだ無理ですし」

親父さんの腰をさすっている若い兄ちゃんもしょんぼり。

そして、俺はその辺の空気を読まずに割り込む。

「すみませんが、このポニーをどっかに置かせて貰っても構いませんか？」

ちよつと弄りたいので、マナ漏れしても、煩く言われない所が良
いんですが」

辺りのオッサン達が、うちに来い、うちなら開いてる、いやうち
にとワラワラ声が掛かる。

一体何事なんだか。

「おい、お嬢！！ この兄ちゃんは何者だ？」

ラプレス工房の親父さんがスカーレットさんへ。

「ああ、こいつが赤獅子を見てみたいとか言うんで、護衛かたがた
此処まで案内してきたんだ。

王国の錬金術師だよ」

「あの、別に王国で仕事してるわけじゃないから。

一応登録してるだけで、王国の工房なんかに入ってる訳じゃない
から」

だから、「何！！ 王国だと！！」みたいな目で見るのはやめて。

さつき聞いた話で、王国から流れて来た人も多いみたいだから、
あんまり王国にいい感情持っていない部分もあるんだろうけどさ。

何処の人間つてのが曖昧過ぎる俺に、そういう目を向けられても
困るのですよ。

「で、この子は何処におけばいいんでしょうか？」

そろそろいい加減にしろと、言外に匂わせたフォウさんの声で、辺りがシンとした。

何気にマナが集められてて、このまま続けたら吹っ飛ばされそうな予感がひしひしと。

「赤獅子を見たいんじゃない、うちの工房に入れて構わん。」

どうせ、他に仕事も請けられんから、場所もあいとるわい、好きに使え」

「判りました」

フォウさんが、ラプレス工房にロシナンテ改を進ませる。

その自然な拳動に、皆の目が集まる。

「なあ、あの機士は何者だ!! 従機士の動きじゃねえぞ!!」

「あれなら、奴に勝てるんじゃないか!」

「そうだな!! おい、兄ちゃん!! あの機士は兄ちゃんの何だ!!」

知り合いなら、試合に出て貰ってくれないか!! 謝礼なら出すし、機兵も準備する!!」

「なあ、兄ちゃん!!」

「おい、兄ちゃん!!」

「ちよ、ちよっと、まった!! チョット待て、訳が判らん!!」

殺到するオッサン達に囲まれて、口々にそんな事を言われても訳が判らん。

一体何が何なんだ? 試合って何?

「ようは、此処の連中が忙しくしてる原因じゃよ」

腰が落ち着いたのか、よっこいしょと起き上がった親父さんが話

し出した。

対話で書くと長くなりそうなので、簡単に纏めると。

この都市では、従機兵同士の戦いを扱ったギャンブルがあるそうだが。

どうも最近、王国からやってきた機士が、偉い勢いで勝利を重ねているそうだ。

それも、遠慮無しにバツサリとやっちゃうもんで、やられた機兵が、頻繁に修理に持ち込まれる。

そのお蔭で、この辺りの腕の良い連中が忙しい事になっていると。ただ、仕事が忙しいのと、余所者が幅を利かせているのとは別問題で、色々とフラストレーションがたまっている。

ぶっちゃけると、「王者が調子に乗りやがって」といった所だろう。

それで、あいつを止める奴は誰か居ないのかと、あちこち目が行ってる所に俺とフォウさん参上。

おお、なんか良さそうなのが来たぞって物な訳だな。

「いやいや、俺も王者ですよ」

フォウさんも、ある意味では王者でしたし。

「いや、顔も出さんわ、自前の機兵で殴りこんでくるわ。

お貴族様も真っ青な事やってくれてな。

それで居て問答無用に強いんだぞ!!」

「はあ、それで?」

「ムカつくだろう!!」

判り易い答えをありがとうございます。

「あまりの強さに、天の機士がお忍びで来てるんじゃないかって、噂まであるんだぞ!!」

「いやいや、流石にそりゃ無いでしょう」

天才君は王国が出さないでしょうよ。

もし、本当だったら、俺は絶対に会いたくないですよ。

こんなところで天才君に会ったら……。

「私が出る!!」

おお!? 人がモノローグつてるときに割り込んでくるかな、スカーレットさん。

「ちよ、お嬢は駄目だろ!!」

「赤獅子が出ちゃ不味いだろ!!」

「勝つても負けても不味いつて!!」

「ええい、煩い!! 天の機士だってんなら丁度良いわ!!」

黒機士が私以外の奴にやられて、ずっとイライラしてたのよ!!

天の機士なら黒機士よりや強いんでしょ!!

スッパリやつつけて、ご先祖の恨み晴らしてやるわ!!」

「いや、赤獅子殿は、別に黒機士にやられてないから」

「そうなの?」

「単に比べられる事が多いだけで」

「ええーい、歴年の屈辱晴らしてやるわー!!」

「「お嬢、落ち着けー!!」」

うん、駄目だね。

スカーレットさんには、おっさん達の声が耳に入っていないようです。

あーあ、なんだか変な話になってきたなあ。

青、新生

昨日は色々と白熱したが、ステラさんの「ちょっと頭冷やそうか」との一声で沈静。

一日置いて、冷静になってから話そうと言う事になり、ラブレス工房にお世話になることに。

この工房、親父さんの代までは、代々の技術屋だったらしいが、親父さん以降はなぜか女性ばかりが生まれ、跡取りが居ない状態になっている。

そんな状態は不味かろう、親父さんの技術は残さないとしてんでこのあたりの組合連中が相談したところ、若い連中の中で見所のあるのを内弟子にしてみたらどうかという話に。

後々は跡を継がせるのも良かろうつてんで、今は工房に何人かが寝泊りしている。

元々は親父さんの家族に、手伝いの若衆（今は横丁で独立している）も元々何人が住んでいたので、現状でも部屋は余っている。

そのうちの幾つかを借りて、泊まらせて貰った。

因みに親父さんの娘さん達は、お孫さんのお受験の為に公都に居るそうで、生活も向こうに移ってしまっているらしい。

親父さんの奥さんもあちらで生活……親父さんは結構不憫である（一時は隠居して公都に行こうとしたらしいが、内弟子の事で先に伸びてしまったとか）

そんな感じで翌日。

「とじや」

木刀持って、スカーレットさんへ突くも、軽く払われる。

木刀ごと体ごと、明後日の方向へたたたらを踏む。

間を置かず、スカーレットさんが俺の頭へ木刀を振り下ろす。慌てて右にかわし、俺はとっさにフォアハンドで横へ切り払いを返す。

しかし、スカーレットさんは剣を戻し、またあっさりと払い飛ばす。

俺は木刀を切り払った方向に、更に力を加えられて、クルリと半回転させられた。

「切り下ろしをかわしたのは良い判断。

でもね、今のは駄目だね。

不用意な一撃を出すのは、自分の首を絞めるようなもんだよ」

その言葉を、俺は振り返りながら聴く。

むう、リーチも力も、あっちが上か。 どうした物が、なんとも隙が無い。

何でこんな事になっているかといえば、スカーレットさんが体を動かしたいから付き合えとの仰せだったので。

俺も殺し合いや、ヤル気満々の喧嘩じゃなければ、それなりに動けるし、経験も欲しかったので「軽くな」と予防線を張りつつ受けたのだ。

俺は戦闘スキルのおかげで、体はよく動くし、武器を持ってても違和感無く動かせる。

まさに、思った通りには動く。でも、それだけ。

動かす術理だとか、経験が無いのが痛い。

え、機兵の戦闘の時は強いじゃないかって？

まあ、機兵のモーションとか考えてたりののおかげで、効率的な動きとか、相手の動きの先を読むのは割りと得意っぽい。

相手が単に力で剣を振り回すだけのチンピラなら、かわして一撃

入れて、如何様にも出来るんよ。

でも実際、こうやって対峙した状態で、それなり以上に腕の立つ人を、どうやって崩したらいいのか……見当もつかんのよね。

機兵の戦闘では今までの所、動きやパワーで、ある程度のアドバンテージの上に、先を取って倒して来た。

本来のスタイルも、相手が防がざるを得ない状態に押し込んで、対応できなくなるまで隙の無い攻撃を積み重ね、最後に勝つような戦法。

でもそれは、ある程度無理な態勢からでの一撃にも、威力を込められる機兵ならではの戦法とも言えるのですよ。

こちらより早い強い相手には、データ取つての先読みやら、チューニングで差を詰めてからの戦いで、何とかしてきたんです。

だから素の体で、どちらも上回られて居る相手には、こりゃ駄目だと余計に身に染みちゃって。

……そいや似たような状況で、初期状態ならではの軽装でスピードを、両手剣&回転で威力を、ケイオスよりチョットだけ上回ったその二点だけを持って、後は予知能力じみた押し引きのタイミングの良さで、俺の必勝の確信を打ち破ってくれた人が居ましたね……あーあーあーあー嫌な奴を思い出した。

「余計な事考えてる暇は無いよ」

首を捻りながら、ぐちぐち考えてると、スカーレットさんが木刀振り上げて迫ってきた。

切り下ろしは受けると不味い、かわせ!! とか思っていると、蹴り足元すくわれてスツ転ばされる。

土の味が苦いです。

「ほらほら、さっさと起きる」

言葉と共に、地面をコツコツと木刀で突っついてくるスカーレットさん。

「この虐めっ子め」と、心の中でつぶやいて、転がって間を取る。

「こりゃ、剣術の土俵じゃ、どうやってもどうにもならんな」

ならば、発想の転換。

スカーレットさん、剣の事じゃ基本通りというか隙が無いが、足癖の悪さは結構適当に出ちゃってるんじゃないかなろうか。

何とか木刀を封じて、足を出させて其処に付け込めば、一矢報いる事が出来ないだろうか。

「ふふふ、これはやってみるべし」

木刀を大上段に構える。

「お、やる気になったな」

じりじりと間合いを詰める、狙いはタックルの届く距離……いまだっ！！

「木刀スラッガー！！」

木刀を振り下ろしつつ、ブン投げた。

「おい！！」

スカーレットさんの非難の声を聞く前に、俺は腰を落としてスカーレットさんへ突進を開始している。

出来うる限り低く！！ 速く！！

目の前数十センチに流れる地面が見える。

いま、俺は飛び発たんとする、鳳の如し！！

アドレナリンが出捲くつてる感じ、時間感覚が引き伸ばさーれー
てーるー。

頭上で俺が投げた木刀を弾き飛ばす音が聞こえた。

「面白いー！！」

そうのたまうスカーレットさんの声が間延びして聞こえる。

本当に貴女はバトルジャンキーですね。

だが、このタイミングなら、木刀を振り下ろすより俺が早い。
ならばー！！

目の前に、動き出す右足が見えた。

間延びする世界の中で、それだけが変わらない速度を持っている
かの如く、こちらへと迫ってくる。

足を取りに行く俺への膝での迎撃。

とっさに出た最適解、本能の一撃、だからこそ早い。

そして、それを止める事はスカーレットさんにも出来ない。

だが、俺にあせりは無い。

それこそが、俺が望んでいた物だからだ！！

俺は、避けがたいその一撃から辛うじて顔面だけは外す。

胸元に衝撃が走るが無視。

スカーレットさんの脹脛の辺りに、両手でしがみ付く。

その瞬間、時間が元の流れに戻った。

「そこからどうするんだー！！」

スカーレットさんは左足一本で立ち、木刀を振り上げた状態で、
右足を膝蹴りのフォーム。

俺はその足先にしがみ付くような姿。

見た目、酒飲みの親父が子供の給食費を持って行こうとして、それを阻止しようとしているオカンの光景だろうか。

間髪いれず、無防備な胴体向けて、木刀が降って来る。

「こっするんですよ!!」

だが、それより先に俺は体ごと回転する。

俺の必殺技パート1!! (グラウンド・ドラゴンスクリュー)
足を抱えたまま、体ごと捻りあげる。

片足で立っている相手が耐えられる訳も無く「うわひゃあ」と結構可愛い悲鳴を上げながら、スカーレットさんがひっくりこけた。

というか、ヤバイと思って同じ方向に体を回したんでしょね、流石です。

「な、何をするか!!」

「かれこれ、何年ぶり位に使いましたね、俺の必殺技パート1」

説明しよう!! 俺の必殺技パート1とは、俺が中学生の頃にごく一部でブームになった、近所のデパート屋上エアドームの中でのバトル。

その中で磨き上げられた、素人プロレスごっこの奥義である。

皆が投げ技に走る中、地味に痛い技を狙いに行く俺は『デンジャ
ー・カズヤ』として恐れられた。

そして地味にハブられ、悲しみの内に技を封印した黒い歴史があるのだ。

「そして、俺の必殺技パート2!! (アングル・ホールド)」

ドラゴン・スクリューからの派生で、逆方向に足首を固めて捻る。

とりあえず、ポイントが良く判っていないので、単に足首を無理に捻るだけ、と言う技になっているところが味噌である。

「ちょ、普通に痛い、いい加減にしないと怒るよ!!」

「そして、片えび固めから、俺の必殺技パート3!!（スピニング・トゥーホールド）」

「ちょ、ほんとに痛いって、こら、おい、ほんとに」

「いつかーい、にかーい、さんかーい」

足首を極めながら、体の回転を使つて絞り上げる。

くつくつく、流石に此処まで入るとグロッキーですな。

「やめんかあ!!」

コイーン

何故か赤い配管工が、金貨を出す時の効果音が聞こえた。

衝撃が股間より背筋を昇り脳天へ駆け抜けた。

息も心臓も時間さえ止まったように体が硬直。

次の瞬間、へその下に鈍い痛み。

腰から下の感覚も力も無くなり、俺は膝を付き崩れ落ちた。

倒れこむ中、俺の脚の間から突き出た木刀と、それを突き出す涙目のスカーレットさんが見えた。

どれくらいの間か、吐き気を催しながらも、何とか立ち上がるうとしては崩れ落ちる俺を見かねたのか、スカーレットさんが腰の裏をトントンしてくれた。

「なんとというか、ごめん。」

直撃より、かすって行く方が痛いらしいな」

「いえ、調子に乗りすぎた俺が悪いんです」

暫く休憩して、グダグダになった訓練をやめて、後片付け。
なんだか物凄く疲れたよ、ハ トラツシユ。

そんなやり取りの後、朝飯。

相変わらず、なぜか目玉焼きは作れないので、スクランブルエッグにトーストとフレッシュジュースとサラダ。

何で俺が準備してるかと言えば、隣のテーブルから匂って来る香ばしい肉の焼けた臭いのせい。

野菜と茸で具沢山のトマトソースに、パスタを山でぶっこんで、その上に具としてアヒルだかなんだかの丸焼きが一羽載ってる……じゅーじゅーと跳ねる油とハーブの香りのハーモニーが絶妙。

でも、朝からそんな重いもん食えるか！！

スカーレットさんは嬉々として、足掻って食ってるけど。

俺とステラさんとフォウさんは、ブレックファーストスタイルで済ませました。

「あー、食った食った！！」

女性として、そのポッコリお腹はどうなんだと言う視線が、ステラさんからビシビシと突き刺さっても気にしないスカーレットさん。赤獅子を見に行くよってんで工房へ。

「おい！！ 外装すら手を入れてないのか！！」

工房に入った途端、スカーレットさんの怒号が響き渡る。

若い兄ちゃんが首をすくめる。

言葉どおり、あちこち凹み汚れた外装を纏ったまま、その機兵は其処に在った。

隣に座っている、磨き上げられたような銀色の機兵と比べ、余り

にも可哀想だ。

その名に誇りを感じているスカーレットさんには、この姿は応えるだろうな。

ああ、隣の銀色のが『銀狼』ってやつか。

あつちは完全に全部完了してるんだな。

「お嬢、申し訳ないな。

こんな姿のまま、主に身を晒した赤獅子にもスマン事をした」

ひよこひよここと、親父さんが杖を突いてやってきた。

申し訳なさのせいかな、今にも消え入りそうな雰囲気、体が小さく見える。

「赤獅子も銀狼も、ワシ以外には任せられんと、一人でやっていたのがこのザマじゃ。

若い連中に任せられる所を任せていれば、もう少しはマシな状態だったろうが、後の祭りじゃなあ」

「親父さん」「親父さんっ、俺たちの未熟が悪いんです」「すみませんっ」

俺が!!　ワシが!!　と庇いあう姿に、スカーレットさんも声が出ず、シヨンボリとして外に出て行った。

「ふむ、フォウさん、フォウさん」

「なんですか?」

「マナを調節して、広がらないように俺を囲ませる事って出来る?」

「従機兵を動かす程度の量までなら、問題ないと思います」

それなら十分ですね。

壁際の椅子に座って、フォウさんと呼ぶ。

隣に座って貰って、手を繋ぐ。

「それじゃ、お願い」

「イエス、了解しました」

これぞ機兵を使わず、外部のマナ発生源を用意せずに、機兵鍛冶スキルを限定的にとはいえ発動させる……って、名付けるほど大層な事でもないか。

おっとフォウさん、最近のマナ要素の補充云々を言わないのですが、足りてるんでしょうかね？

「一応、ミスリル渡しときますね」

「釣った魚にも餌をあげるマスターは偉いですね」

釣った魚であんた……突っ込むのが怖くてスルーしときます。さあ、始めましょうか。

リラックスして、一応目を瞑る、そしてスキルを立ち上げる。

うん、ちゃんと起動した。

スキル立ち上げながらで、これくらいの余裕があるなら、多少の素材操作と中身を覗く位は問題ないな。

まずは銀狼から……と、思った所でフォウさんがゴソゴソと。

手を繋いだまま、そーっと立ち上がり、暫くジーっと俺の様子を見ているような気配の後、膝の上に座りなおして……あの、スキル使ってるからって、感触を感じなくなるような事は無くて、非常に色々と柔らかいんですけど。

一体何をしようってんですかと、フォウさんを覗き込むと目が合った。

「実は表面積が広くなると、マナのコントロールが面倒なのです」

めっさ真面目な目で、そう仰るフォウさん。

「そ、そういう事ですか」

「イエス、そういう事なのです。仕方ありません」

言いつつ最後で、フォウさんの目が、ふいつと脇に逸れた。

「いま、目が避けたよね。ゼッター嘘だ」

「イエス、残念です。ばれました。

異世界トリップ者基礎スキルの、餌付けとナデポで上げられた好感度パラメーターのせいです。

自分で、こういう行動に出る事が、抑えられない状況です」

「んなスキルは持ってませ……餌付けは否定しきれませんが。

いや、嬉しいんですけどね、この現状は。

ただ、フォウさんと出会った経緯が経緯なんで、素直に喜んでいいのやら。

それこそ餌付けとかで懐かれるのも、弱みに付込んでみたい気がしてですね」

「イエス、マスターがヘタレなのは認識済みです。

こう考えて下さい。

腹ペコでヤクザに囲われていた薄幸の美少女が、自由の身&お腹一杯です。

どうですか？」

いや、どうですかって言われてもねえ。

「世界名作劇場の最終回並みのイベントですが」

「それは確かにね」

差し詰めフォウさんは某小公女さんで、俺はその親父さんの知り

合いの、オーストラリアでダイヤモンド鉱山掘り当てた人か？

「判り易い理由で好意を持つ事は罪ですか？」

「とんでもない」

一瞬、泣きそうな声で問いかけるフオウさんに、慌てて否定を返した。

「なら、黙ってギョツとして下さい。それが甲斐性という物です」

「判りましたよ、お姫様」

俺の膝の上で横向きに座り、俺の胸に体を持たせ掛かってくるフオウさんを、受け止めて抱きしめる。

そんな状態で、機兵の中身見るような余裕なんて在る筈も無く、どちらからとも無くキスしたり、なんとなくキスしたり、思い出したようにキスしたり……気が付いたら昼でした。

飯食いに行ったら……。

「ケツ、イチャイチャしやがって」

言葉には出ないものの、そんな感じの視線がひしひしと。

もしかして誰かに見られてた？

さて、昼飯だけでも、スカーレットさんの自棄食いと怒りのオーラで、誰も言葉を発せられませんでした。

空気が固体化してるかのようにギスギスしてましたね。
何を食ったか覚えてないですよ。

このまま続けと、精神衛生上非常に悪いので、俺が手を出す事に
します。

「それじゃあフォウさん、よろしく」

フォウさんには、オリハルコンを飴玉代わりに、さっきの時より
マナ大目をお願いした。

因みにフォウさん膝の上……表面積小さくすると、コントロール
が楽って言うのは本当らしい。

「とりあえず銀狼の中身と赤獅子の中身……」

ふむ、最初に二機ともスタイルが似てるなと思ったが、ほぼ同形
式の機体だった。

胴体、脚部、主機と共通部分が多いな、オリジナル部分が壊れて
後に再現した所が差異になっている程度か、後は腕部と武装で差別
化されている。

赤獅子は、両腕共にノーマルな感じの腕。

左手に取り付けられた盾に、頑丈無骨と言った感じのブロードソ
ードを収められるようになっており、先の二つと別に、ハルバード
も持つ。

銀狼は右腕が妙な仕掛けのある上に、槍が固定されている。

左腕には盾があるが、こちらには赤獅子のように剣を保持する仕
掛けは無く、何故か石弓が仕込まれていた。

因みに、赤獅子はハルバード、銀狼は盾が他の武装よりも素材が
新しく、追加したか新造した物だと思われる。

その辺りは共通部分のように、比べることが出来ないため、再現
は難しい。

現状使えてるなら、まあ良いかとも思うし。

まずは、赤獅子と銀狼から垣間見える、オリジナルの素体を再現してみようか。

まずは脚部か。

従機兵としては破格に、フレームの分割と可動範囲が煮詰められている。

シンプルな逆足の機兵と云えなくも無いレベルだ。

玄武や黒シエフィールドのように、バネ仕掛けは無かったりするが、フレーム部分に遊びを持った素材を重ねて使う事で、フレーム自体の弾性をダンパー代わりに使えるようにしてあったり。

金属疲労で若干ヘタリが出たりしているが、未だに効果を残しているのは凄い。

なんでも頑丈だけが良いつて訳でもないんだな。

それから、例のコンデンサだが、銀狼にだけ残っている。

オイルが半ば抜けてしまったりするので、効果には疑問が残るが。

赤獅子にも、フレームに取り付けられていたような痕跡があるので、いつの時代でか破損したか何かで取り去られたんだろう。

この辺、あまり手をかけられてないので、コンデンサの意味とか理解されてないっぽいな。

あの玄武とか黒シエフィールドを運用してる連中が、その辺の技術を独占しているんだろうか？

とりあえず、その辺の再現に、黒シエフィールドのチューブ仕掛けも、盛り込んでみる。

フレーム素材は、三段くらい上の代物に変更……うわ、ゴチャゴチャしてくるな。

外装の素材は青機士の奴を使つてと。

次に胴体部だが、なんとなく白機士の臭いがする。

流石に設計者が同じだと、やはり似てくるのか……つか、不自然なスペースと言うか、白機士なら主機の入る辺りが置いたまんまになつてるとか、妙にコクピット狭いとか。

新規で作るの面倒になつて、在り物を流用したのではないだろうか……。

とりあえず、余つたスペースに例の5号機後期型主機を仕込んでおこう、あと複座にしとく。

背中には赤獅子と銀狼の主機をコピって乗せておこう。で、青い外装被せてと。

腕部だけど、赤獅子はちゃんと人の手を模した形をしているのに比べて、銀狼は右腕の関節が肩・肘・手首の部分から、もう一回肘まで折り返し、更に折り返して短槍が固定されている。

全部展開すると、単純に腕の長さが二倍強。

槍も込みで、約三倍ほどまで届く。

これは長槍や、ポールウエポン持った機兵の約二倍のリーチ。

そして短槍には、もう一つ仕掛けがある。

槍の内部に仕込まれた、マナモーターに同軸で直結の永久磁石、そしてコイル……どう見ても、でっかい自転車のダイナモです。

さらに、そこから配線した先に繋がってるのは、どう見てもトランスです。

「交流発電して、昇圧かけてんのか？　なんとという手間の掛かる事を。」

マナを術式刻んだミスリルにでも通して、魔術的に電気起こした方が簡単じゃないか？

なんとというか、軸受けとか磨耗してたり、絶縁も微妙になつてきてるみたいだし」

「それはNOです。機兵が魔術的な属性武器を持たないのには、理

由があります」

「おおっと、ビックリした」

突然、喉鳴らして腕の中に収まっていたフォウさんが、顔を上げてきた。

「それで、理由って？」

「マナからの属性変換は、機兵が纏うマナによって容易に妨害されます。

伝達しやすい電撃等に関しては、遠い間合いで発生させる事で使用も可能ですが、それ以外の一次発生（炎・風・氷）の現象では、打撃面付近での発生が必要で、運用するにも難しい上に、金属の装甲に覆われた機兵に対するダメージとしては弱いのです。

かといって、副次効果（加熱・冷却・風化）の直接コントロールは更に難しい為、魔術ではなく物理現象として発生する効果を、武器に載せる事は理に適っていると思われるます」

「なるほどねー。」

ミッシング・ウォードだと魔術抜きで、ワールドだと出力任せの魔術だったから、武器に属性付与とかあんまり考えた事が無かったしな。

でも、電気発生に関しては、魔術のほうが簡単じゃないかな……伝達できるんだし」

「威力が大きすぎて、絶縁できなかつたのかもしれない……あの伸びる腕も、その辺りの苦肉の策かも」

「うわあ。まあ、鉄の固まりだもんなあ。

それじゃあ、赤獅子はどうなんだろうね……って、盾の中に火炎系の術式仕込んで、剣を加熱するんかい！！」

それで、剣が熱持ってる間に斬りつけて、また盾に戻して温めてか……なるほど、アイロン方式な訳だ。

その剣が使用できない間の武装として、ハルバードか。

多分、元は何か違う物持ってたんだろうな、壊れたか紛失したかで新造したんだな。

ついでに銀狼の盾はカウンターウェイトだろうから、ある程度の重量をキープしないといけない。

でもそれを盾だけに使うんじゃない、勿体無いからって弓なんぞ仕込んでるのか。

此処まで見て思ったんだけども、どうも銀狼と赤獅子は、属性武器の実験に使われた機兵なんじゃなかるうか？

トンデモな武器が付いている割に、それ以外の部分は真つ当と言うか普通過ぎる。

多分、本体は腕部切り替えだけで色々試せるように、汎用性を持たせたテスト用のベース。

それで色々と試験を終えた後、勿体無いからとかな理由で、評価の高かった武装を取り付けて、機兵として仕上げたのではなかるうか？ 公領が大変だった時期だろうし、戦力は可能な限り欲しかっただろうし。

その辺、英雄と呼ばれた赤獅子ルーサーや、銀狼バートリに下げ渡されたんじゃないだろうか？

実際、この二機から玄武辺りへ、派生してるんじゃないかなって癖が、銀狼の腕の展開部分ギミックや、コンデンサの配置なんか若干見受けられる。

だから時系列からすると、白機士の設計、銀狼・赤獅子にてトンデモ武器の実験、完成形として玄武及び、四神に実装って流れになっているんじゃないだろうか？

「うわー、めっちゃ見てみたいな。完全バージョンの玄武」

「マスター……『好奇心、猫を殺す』と言う言葉をご存知ですか？」

「げ、やな事を言つなあ」

確かに興味本位で動いて、エライ目に遭ってるのは否めないけど。

「ええい、今はこつちだこつち！」

どうせなら、俺もトンデモ兵器を載せてみたい。

威力稼ぐには火炎系が一番簡単で良いけど、打撃面に魔術機構を載せると、相手の機兵のMana垂れ流しに邪魔されて、上手くいかないと。

手元発生の伝達には、電撃型がいいみたいだけど、これは自爆が危険臭いと。

衝撃系とか爆発で弾飛ばすなら、普通に物理でやった方が良くしろっし。

「いや、爆発か……爆風とかは装甲にはあんまり効果が無いけども、装甲さえ抜いてしまえば、ワイヤーだのモーターだの中の人だの潤滑系だのと、弱そうなもんは結構あるな。」

そのあたり狙うなら、ヒート剣よりや爆風やら燃焼ガスみたいなものを、流し込んだ方が面白そうだな」

なんとなくアイデアが纏まって来た。

発生元が手元で干渉する場所は遠間って事は、基本は槍がよさげ。中にガス流す中空部分が必要だから、ある程度の径が必要。

先端は物理的に装甲を抜く威力が要るし、武器の重量も考えると、刺突オンリーのランスかな。

中空で、先端の横手にでも穴を開けといて、貫通後に手元で魔術なり物理なりで爆発か燃焼で高温のガス発生、ランスを通して相手の中身に叩き込む。

「これなら、仕掛けは武器単体で済みそうだし、使い回しも利きそうだ」

「マスターが、とても悪い顔をしています」

「……」

「んっ、ちよっ、駄目です、ひゃん」

フォウさんが何処に座っているか、思い出させてあげる為に、ちよっと脇腹をくすぐってあげた。

マナのコントロールが乱れて噴出しそうになったんで、慌ててやめたけど。

「手籠めにされました……」「へえ……」「嘘です、すみません」

フォウさんは思う以上にくすぐったがりのようです。

「さて、仕上げてしまおうか。フォウさん、モジモジしない!!」

腕は赤獅子の腕部を基にして、コンデンサとチューブ仕込む。

フレイム素材は機兵クラスの代物に変更っと。

ランスは、とりあえず重くなってもいいから頑丈に作ろう。

自爆は泣けるし、中に仕込むのは魔術の方が良いか。

燃料抱えてると怖いしな……よし」

頭の中で、ざっとランスの構造図を引く。

剛性・耐熱性を大きく取っというて、内部スペースに取れる部分を確認……思ったよりもスペース狭いな。

これじゃあ、どっちにしる魔術でやるしか選択肢が無かったな。

魔術でやるならマナ通す経路を決めて、術式刻んだ金属仕込んでマナ誘導して、魔術発現する部分をしっかりと頑丈に作っとけば良いからねえ。

問題は仕込む魔術か……単に一定量のマナで、現象をその場に出

すだけなのが一番簡単（火起こし・火炎放射・爆発）、それを飛ばす（火矢・火弾・火球）、遠隔で発生させる（発火・火嵐）一定の物に付着させる（火炎付与・火壁）という感じで段々難しくなっていく。

それプラス、単にマナがなくなるまで燃やす（火矢・火弾・火起こし・火炎放射・火嵐）、一瞬で燃やす（発火・火球・爆発系）、ある程度維持させる（火壁・火炎付与）って感じで難しくなる。

そう考えると、エクスポージョンやらファイアボールみたいな爆発する系のは危険すぎるな。

かといって、発火やらアロータイプは火力が足りないし、エリア設置型のウォールみたいなのは、伝達が難しい。

火炎放射だの、嵐だのって感じの高温気流系が最適かな。

マナつぎ込んでいる間だけ持続するし、伝達もそれなりの速度でコントロールできそうだしな。

「よし！！」

収束させた火炎放射に気流操作を盛り込み、ランス内の伝達を考慮した術式を構成。

ランスの握りからマナを通し、胴部分で術式刻んだフィルターに通して、高圧ガス発生。

あとは、そのままマナを流し続ける間は、ランスの先から高温高圧のガスが出っぱなしって感じ。

「くっくっくっくっく」

目の前には、蒼銀色に輝く従機兵が座っている。

身長以上の長さを持つランスを持ち、予備で剣を持つ。

ランスは基本両手で支持する。

盾を持たせて重量バランスをとりつつ、ランスを片手で支持しても良かったが、機体重量と慣性もランスに乗せようとすると、片手支持では不十分だと判断した。

右脇に抱え、左手で支持部を握って振り回す事になる。

機体は従機兵にしては細身に見えるが、機体高としては10mのフルサイズで、赤獅子等と同様。

重量はフレームの分だけ二・三割重いが、剛性や出力への耐久は青機士に準じたチューンを施してあるので、並みの従機兵とは比べるだけ馬鹿らしい。

素の能力としては、マナ出力は仕込んである奴を解放すれば、白機士出力の五割り増し。

因みに背の主機が大体白機士の半分程度、基本的に従機兵は並みの機兵の三割から五割程度の出力なので、赤獅子と銀狼は、従機兵としては破格のパワーを持っている事になる（白機士は、個性を殺してあるとはいえ、機兵の中でも最高レベルの機体）

ただ、モーター数と踏ん張りの利き方は構造上不利なので、出力「パワー」とは行かないけども。

そして、パワーの出方やコントロールのしやすさは、コンデンサとオイルチューブのお蔭で向上している。

耐久についてもヒットポイント的にいえば機兵クラスは在る。

出力耐久に関しては、素の白機士が自機出力の六割を有効限界と見ているのに対し、青機士スペックで組んだので（青機士スペックは白機士の二倍出力の十割に対応）白機士の三倍強、自機出力の130%オーバーという無駄スペック。

因みに、赤獅子とかと比べると約四倍。

つか赤獅子とかも、準機兵クラスの素材は使っているので、疲労してなけりゃ機兵クラスの出力にも十分耐えうるんだよね。

主機出力の十割余裕な感じで組んであるし。

まあ、従機兵の出力で使ってたから、此処まで長持ちしてるんだろっけどさ。

「よし、この調子で、この機体からのフィードバックを盛り込んで、銀狼と赤獅子に!!!」

つて、落ち着け俺。

駄目だろ、メンテするだけならともかく、手を入れちゃ。

その辺は色々片付けてから、聞いてからだ。

とにかく、赤獅子の中身が良く判ったところで、補修かけてメンテだ!!!」

「それは良いですがマスター」

上目遣いで見上げてくるフォウさん……卑怯すぎる可愛らしさだ。

「何？」

「この機体をどう言い訳するんですか？」

ついと見上げるフォウさんの、視線の先には青い従機兵。

「あ、」

..びびびびびびび

言い訳叶って迷惑拡大

「うん、完全に勢いで作ってた。深く考えてなかった」

でも一応言い訳してみると、フオウさんに協力して貰えば、マナを撒き散らすことなく、コツソリ機兵鍛冶スキル使えるって判明したあたりで、スキルが使いにくい原因のトップスリーくらいが片付いてしまった。

それのお蔭で、なんというか……テンション上がったんだよね。あと、スカーレットさんの事も在って、赤獅子を何とかしたいなと思ったんだけど、何時の間にか手段が目的化したのは否めない。だってさ、赤獅子と銀狼が思いの他、面白い機体だったんだよ。いやー、あの発想は俺からじゃ、なかなか出ないわ。

しかも今なら見つからずに、実地で検証できるわけでき、見つからなきゃOKって頭にあっただよ。

まあ、見つからなきゃってというのは、ある部分では正しく、ある部分では間違ってる訳なんだけど。

問題をクリアするには、作るのを見付からなきゃOKってだけでは不十分で、作った物を見られないようにする所まで行かないと駄目……少し考えりゃ判る筈なのにねえ。

正氣に戻った時には遅かった。

青い機兵を見上げながら思う……ああ、こいつどうしよう。

「本当にどうしよう……」

「大丈夫です、マスター」。

最近ブームみたいですし、天井に穴を開けて「天から機兵が降って来た！」とか言えば「

やなブームだな、おい。

そして其処、いきなり衝撃術式練り始めない。

「では、赤く塗って『これは赤獅子です』と」

「本物はどうする」

「銀色に『だから!!』」

どっかに移動できればいいんだけど、表は誰かに見つかるだろうし。

「マスター、発想の転換です。 見つかるのが不味いなら……」

「不味いなら……?」

なんだか妙な迫力の籠る、フォウさんの目にゴクリと息を呑む。

「みんな消してしまえば……ふふふふ」

「だから、その衝撃術式を練るなと!!」

おのれは、ネズミにたかられたネコ型ロボットか!!」

チヨップを一発入れて大人しくさせた。

涙目で見上げてくるのは可愛いが、この辺を更地にされても困る。

「そっいや、この奥の扉って何だ?」

横丁の一番奥に位置している、この工房の奥に面した扉。

それも、この機兵が入れる作業場の、天井の高さ一杯に達する大きさの代物。

外から街を見た時には、大通りの辺りしか目がいつてなかったから、横丁の奥がどうなってるか、想像もつかない……。

ここからどっかに出られるなら、出ちゃうんだがなあ。

「おーい、ラブレスの親父さん！！ 荷物の搬入だ！！ 開けてくれー！！」

「うひょいっ！！」

人が考え事してるときに、突然バンバンと鉄扉をぶつたたく音と、ガラガラのダミ声が響いた。

一体何事！？ 荷物の搬入！？ え、開けちゃっていいの？ 俺、どうしたら良いんだババ？

「なんだ居ねえのかよ。

客も居るんだ、勝手に開けさしてもらっぞ！！」

ちよー！！

止めるまもなく、鉄扉脇の勝手口から見知らぬオッサンが入ってきて、鉄扉の門を外してガラガラと扉を開けてしまった。

そして、俺の事は完全スルーして「ああ、忙しい忙しい」とか言いながら出て行った。

俺は呆気にとられつつも、開いた扉の向こうを眺める。

扉の向こうは横丁と同じく、レールが引かれていた。

ただ、こちらは複線になっていて、どこぞの環状線みたいに、数珠繋ぎで荷台が行き来していた。

なんで、こんなのが外から見た時に、目に付かなかったのかと思ったら、線路脇の建物が張り出してたり、上で繋がってたりするもんだから、建物の陰に隠れてしまってたんだな。

しかし、シエフィールドだけじゃなく、真つ当な従機兵も荷物引っ張ってるんかい。

そりゃ荷台を、三つも五つも繋げて運ぶにゃ、シエフィールドじゃ軽すぎるかもだけどさ。

なんというミスリルの無駄遣い。

互助会でもあつて、屑ミスリル持ち寄つてたりとかするのかな。つて、そんな事を考えてる場合でもなかった。

「あ”……”」

□があんぐり。

えーと、ロシナント改が一機、ロシナント改が二機、ロシナント改が……。

見覚えのありすぎる軽量従機兵が、ギツチヨンギツチヨンと、荷物を抱えて工房の中に入ってくる。

銀・赤・青に俺の乗ってきたロシナント改を入れても、まだ広かった作業場がどんどんと埋まっていく。

「な、何事が……」

「あ、」

「何？」

フォウさんが指差す先には、こないだ別れたばかりの、ロッドさんの姿。

「よっ！ー！」

片手を挙げてニヤリ笑いのその姿に、妙に殺意が沸くのはなぜだろっ？

「元気か？」

「元気じゃないでしょうが！！ こいつら何なんです！ー！」

ロシナント改が四機、荷物を降ろして横丁の荷台に積み直してい

る。

「ああ、俺達の荷物を持って来る時、この横丁のついでがあるってんでな、ミスリル使い切るついでだよ」

「いや、そつちじゃなくて、何で此処に居るんですか？」

話が地味に食い違っている……わざとか？

「ああ、傭兵の身内の連中を連れて帰った後、ちよつと用事が出来てな。

動かせる戦力がちょうど目の前に居たんで、あの傭兵連中を雇い入れたんだよ。

幸い、湧いて出た計上外の戦力もあつたしな」

いや、王国経由で教国に行ったにしては、ここに来るのが早すぎないか？

「ああ、言いたい事は判る。傭兵連中、心配で王国まで出て来てたんだ。

そこで、俺達と会つたんだがな。

傭兵連中と一緒に来てた大将、えっほげほげっほ。

ああ、ちよつとした用事が公領に出来てな」

「今、大将つて言わなかつた？ ルドガーさんがどうしたつて？」

「それで用事つてのが、このベルダに在つたんだが、こつちに足場なんて無いからな。

どうした物かと赤獅子のオッサンに繋ぎを取つたら、此処を紹介されてな。

お前さんも居るだろうつてんで、やって来た訳だ」

またスルーされた。

なぜだろう、むやみやたらに嫌な予感がひしひしと……。

「それで、ロッドさんと傭兵の人と誰が来てるんですか？」

「いや、えーとだな、その、あれだ」

「ルドガーさんが、こんな所に何の用事が？」

「いや、あのだな」

此処に、国に関わるような事って、なんか在ったっけ？

そっぴゃ、賭け試合でなんか……。

「まさか、天の機士がこんな所に来て、賭試合やってるとかな噂の確認とか？」

「いやいや、流石にそれは無い。つか、そんな噂が？」

「じゃあ、一体？」

そんな漫才やってると、聞き知った声が掛けられた。

「そう嫌われると、私も悲しいのだがな」

げ、なんとというハンサムヴォイス。

いやいやながらも振り向くと、そこにはまぎれも無く……銀髪美形のお手本がいらっしやる訳だ。

「ルドガーさん、お久しぶりです」

「君もな。良く生きていてくれた」

ルドガーさんがニッコリと微笑んでくれた。

相変わらず、そんな趣味が無いのに、思わずドキッとするような、危険な威力のある笑顔ですね。

「運良くというか、おかげさまでというか。

それより、これは一体何事なんですか？」

「ああ、色々だね。

傭兵達を連れているのは、ロッドからの遠話で報告を聞いてね。

彼らも早く身内と会いたがっていたから、私の息抜きがてら、護衛として王国まで足を伸ばしたに過ぎないよ。

そこで、一つ報告を聞いてね」

未だに荷物の揚げ降ろしをやっている、傭兵連中を指差した俺の問いかけに、ルドガーさんの優美な口元がグギギと歪む。

一体何事かと思ったら、次の瞬間には、ロッドさんがルドガーさんを羽交い絞めにして「大将、落ち着いて下さい」とかやりだした。なんと言う松の廊下。

そういえば、ルドガーさんが前にもこんな事に、なつてた事があったような？

「ああ、王国の巫女さんか」

「おまつ、馬鹿っ！！」

ロッドさんに、物凄い形相で睨まれた。

そして、ジタジタしていたルドガーさんが、力尽きたようにガツクリと膝を付いた。

「ふふ、ふふふ、笑ってくれて、構わんよ」

「本当に一体、何がどうしたんですか？」

死んだ魚の目で、ふふふふふと壊れたように笑うルドガーさんは、ひとまず置いて、ロッドさんに説明を求める。

ルドガーさんを壁際に座らせてから、こっちにやって来たロッドさんは、あくまでも噂だがと前置いて話し出した。

曰く「王国の巫女が、別の天の機兵を求め、公領入りした」
曰く「天の機士が、それを護衛して公領に入った」
うんぬんかんぬん。

どうも実際にそれらしい人物が、各国境近辺に伏せてある、教国
エージェントに確認されたらしい。

それでルドガーさんは、こんな所に迄やって来たとか。

「ルドガーさんも、いい加減偉いんだから、外交筋にちよろつと情
報を流してさ。」

後は高みの見物とかって訳にいかないのかな？」

「駄目だな。」

なまじ足場が固まったせいで、抑えられる相手も、自重する理由
も無くなつちまった」

駄目じゃん教国。

「で、上手く見つけたとしてどうするの？」

お忍びとはいっても、王国のそれなりに重要な人物に、あまり無
茶は出来んでしょ」

「ふふふふ、別にあの巫女に何かするつもりはないのだよ。」

目的の邪魔をして、嘲笑ってやれば……ふふふふ」

ルドガーさん、帰ってこーい。

あれだな、才能が有って努力して、着実に事を積み上げて来た人
が、変な躰き方をする、酷いトラウマになるんだな。

何でだろう、涙が止まらないよ。

「ま、いいや。俺をあんまり変な事に巻き込んでくれなければ。」

って、そつだー！！ ちようど良い！！ これを何とかするのを手

伝って下さいよ!!

助けると思つて、お願いします」

ルドガーさんは再起動まで間が掛かりそうなんで、一寸置いといてロッドさんをお願いをする。

とりあえず拝みますよ。

「いきなりだな。俺で出来る事なら構わんが？ 何をやれってんだ？」

「いや、この機兵を持つて来た事にして貰えれば」

俺が青い機体をペシペシ叩いて示すと、ロッドさんが興味深げに隣へやってきて、それを見上げる。

「なんか、どつかで見た事のある気がする」

首を傾げるロッドさん。

別に萌えない。

「ああ、いかな。どうも私はあの女の事になると我を失う。と、誰も聞いていな……ほう、これは……『赤獅子』に『銀狼』か」

青い機兵の奥に在る物を見て、ルドガーさんが感心の声を上げる。思つたより再起動早かつたな。

それはそうとして、ルドガーさんは赤獅子達を知っているんだ。こちらにやって来るルドガーさんに、その辺を聞いてみる。

「知ってるんですか？」

「ああ、教国・王国を跨いだ賊を討伐する時に、王国の傭兵の中で見かけた覚えがある。」

あの時は私も白機士で出ていたが、従機兵とは思えない働きだった」

なるほど。

「そうか、こいつ……」

ロッドさんが呟きながら、青いのを眺めている。

赤獅子・銀狼に繋がる機体の共通項を見抜いたか。

「うん、ぱくって作ってみたん「お前は馬鹿か!!」んがあっ!!」

ぐあっ、本気で殴られた!!

ルドガーさんも「困った奴だなあ」みたいな目で見ないでくださいよ。

それにロッドさん、顔が近くて怖い。

「おまえなあ!! ある意味、白機士並みに象徴的な機体をばくるとか、良く考えて行動してくれ。」

ぽつと出の工房が人気取りでやって、ボコボコに叩かれるような行為だぞ。

それが、大した事の無い機体ならまだ良いが……どうせ、洒落にならんような代物なんだろうが!!」

「んっ!!」

「んっ、じゃねえ!! このマッドが……」

サムズアップして、良い顔したら、頂垂れられた。

つて、え？ 俺、マッド？

「マジですか……」

「なるほどな、言িয়েて妙だ」

ルドガーさんっ！！

「それ以外の何者でもないと思いますが」

「フォウさんまでっ！！」

味方に後ろから撃たれた！！

「お、俺って、マッドだったのか」

クワーンと、金ドライが脳天に降ってきたような、衝撃だった。

「確かだな、その人物を評して曰く。

興味無き事に関し、己が事も含め、関心が薄く無造作で無気力。

物・金銭を含む、その才・力を振るう事に対し、無責任なまでに無頓着にして、価値を考えない。

反面、未知の知識・技術に対し、恐ろしいまでに貪欲・能動的に行動し、それらを得る為に己の危険をも顧みず、他人の事も気にしない。

以上を持って傲岸不遜に見えるが、嫉妬深く小心、他を僻む事多く、己を認める事少なして所だったか？ よお、身に覚えは無い
か？」

「う、中ってるような気もしなくない」

「該当する部分が多いと思います」

……フォウさん。

敵ばつかしか。

「ほう、あのプラインセス・プラインズを評した物だったな」
「へえ」

ルドガーさんの言葉に、赤獅子達の生みの親を思う。

その評を聞くと碌な人じゃないですが、誰でも大なり小なりはそんな部分があると思う。

それでも傍若無人に時代を渡って、名前が残っている所は凄い人ですな。

多分、その人も呼ばれた人なんだろうし。

その人、最後はどうなったか知らないけど、この世界に何かを残すつもりになった訳だ。

王国で宰相兼任の外務卿やったりして、思いつきり王国に名前残してる人も居るし……。

「俺も、そろそろ何か考えないと……いけない時期なのかなあ」

「マスター？」

「何かをする為に呼ばれたにせよ、その役目ってのは、天才君の仕事だと思ってただけだね」

フォウさんだけに、そつと呟く。

振られた役でも自分の性格でも、主役なんて感じじゃないし、柄でもない。

ただのイレギュラー。

だからこそ、裏で流されながらも、無責任に好き勝手出来ていた。でも此処のところ、どうもそれだけでも無いような気がしてきた。そろそろ腰を据えて、立場を決めた方が良くないのかもねえ。

どうも帰れなさそうだし。

落ち着いたら考えてみよう。

「ん？ どうした？ マッドがそんなにショックだったか？」

考え込んでると、ロッドさんに心配された。

まあ、若干ショックでした。

「マッドはもういいですから！！」

それよりも、こいつの言い訳を何とか考えてくださいよ！！」

チヨット逆切れ風味。

「判った判った！！ しかしなあ……突然湧いて出たのもだが、似過ぎてるのがなあ。

作った人間がスパイ扱いされても、ぐうの音も出ねえぞ、こいつ」

うーむと腕組しつつ、首を捻るロッドさん。

萌えない。

「ふむ、教国に残っていた資料から組み上げた、幻の機体とでもすればどうだ？」

「大将！？」「ルドガーさん？」

「本物の赤獅子を見る機会が出来た故、以前に組み上げた機体を、我々に此処まで輸送するよう依頼したとすれば、それ程おかしな話でもなかるう？」

タイミング的に、ロッドさんに伝えていたとすれば、一応おかしくないのか……でもなあ。

そんな胡散臭い理由が、まかり通りますかね？

「いいかな、あの天才が実際にどれだけの機兵を作り上げたかなど、記録にすら残っていない。」

つまり、そんな物は無いと証明する事は、事実上不可能だ」

「そうなの？」

「確かに、あの天才の作品という代物は、何時の時代にも出て来ては、真贋が争われています」

「ああ、あるな。」

何十年かおき位に盛り上がるんだが、真作が出て来た試しがねえ」
「うわあ」

リアル何でも鑑定団。

「そういう事だ。 此処に在る機兵を見て造りました？」

それが可能と識っている私でも、生半には信じられないのに、誰にそんな考えが浮かぶと？

在り得ない。 まだ、幻の機兵が在ったとする方が現実的だ。

それにこういう論争は、神の存在でも死後の世界でも、在ると主張する方が強いと相場が決まっている。

無いと無限の証明を積み上げる事は、人の身には無理というものだ」

「は、はは」

「なおさら今回は、在るとする証拠まであるのだから、楽なものだ」と良い笑顔で呟くルドガーさんに、俺とロッドさんは二人、顔を引きつらせた。

宗教やっててトップ近くに居る人が、こういう事を言ってしまうていいのは、あんまり考えたくないけど。

腐っても最高権力者候補の最右翼か、腹芸の一つも出来ないとして事かなあ……。

でもなあ、これで解決？

なんか都合が良すぎて……性質の悪いドッキリに乗せられている様な？

いや、元は俺のやった事が原因で、自業自得なのは判ってますけどね。

「おっと、赤獅子も直しとかないと。 フォウさん来て」

「はい、マスター」

と言うわけで、フォウさんの手を握って、コツソリとスキル起動。赤獅子のダメージ部分と経年劣化の部分を処理。

銀狼も劣化部分だけ処理。

無くなっていたり、補修されてる部分はそのままにしておいた。

「おーし、荷物は積み替え終えたぞ！！」

ロシナンテ改が揃ってよっこらせとばかりに、空きスペースに腰を下ろす。

流石にこれだけ立ち並ぶと狭く感じる。

「それじゃあ、横丁の人を誰か連れてきて、荷物を引き取って貰うか」

俺が横丁に向かおうとすると、誰かが駆け込んできた。

「あー！！ いつの間にか、赤獅子がキラキラになってる……って、あんたら何者！！」

「スカーレットさん……」

なんか、優先順位が良く判る台詞でした。

「ああ、俺の知り合いで「おお、あなたが『赤獅子』の機士ですか。これほどお美しい方だとは思っても見ませんでした」おいおい」

ルドガーさん……え？ 私に任せておきなさいって？

なんか、チラッとこつち向いて、目配せされました。

だから、ドキツとするなよ、俺！！

「へえ、私を『赤獅子』の乗り手だと知っている、あんたらは？」

スカーレットさん、シリアスモード入りました。

「私はルドガー・シュバウアー。キシマ君の知人です。

実は、キシマ君が赤獅子と銀狼を、間近に見る機会ができたと言
うのでね。

彼に頼まれてこいつを届けに来たのです」

ルドガーさんが青い機体を示す。 それにしても、名前隠す気一
切無いな。

「これは？」

不審気なスカーレットさんに、ルドガーさんがノリノリで嘘八百。

「これは、かの天才が教国に残したと伝えられる機兵の設計を、キ
シマ君が好事家から買い取って組み上げた機兵。

いわば赤獅子や銀狼の兄弟機とでもいう代物なのですが、ご存知
の通りにこの手の話は限りなく在るのでね、真作かどうかの判別は
非常に難しい。

実際、こういう機会でも無ければ、たんなる道楽の自己満足でし

「かなかったのだが」

「ちようど良かったと……確かに、外観の雰囲気は似てるね」

「そりゃ、そうですね。」

「で、私の赤獅子を触ったのは誰？」

「ああ、キシマ君ですよ。コッソリ確かめるつもりが、つい直したそうですよ」

「へえ」

「うわ、スカーレットさんの目が怖い。」

「大丈夫なんでしょうね？」

「あー、ちよつと硬いかも」

「なんせフレームとかが、疲労した状態で調整してあったからなあ。その辺を修復したから、固めのセッティングになると思われます。」

「とりあえず、乗ってみます？」

「そりゃ、試せるなら……」

「ミスリルなら、ありますよ」

「……」

「とりあえず、一単位のコインを三枚取り出して、弾く。」

「へボかったら、許さないからな」

「宙を踊るミスリルのコインを、スカーレットさんが掻っ攫っていた。」

「さて、俺も一回動かしてみるか」

「マスター、ロドニー氏がキラキラした目で、なにやら言いたげにしていますか」

フォウさんの言葉は聞かなかった事にして、フォウさんを連れて、青い機兵の下へ。

ロッドさんが寂しそうに、ロシナンテ改に向かっていくのが見えた。

せっかく複座にしたのに、オツサンを先に乗せてどうするのだ。

「行くよ、フォウさん」

「イエス、マスター」

と、格好を付けても、出て行く所は横丁でしかなく、斬った張ったが出来る程の広さはないし、そんな事をするつもりもない。

歩いてターン、手足の感覚を掴む位の物……なのですが。

「び、ピーキーな奴だな。

コンデンサのせいで、コントロールした以上のマナが使われるからか？

なんか、動きが伸びると言うか、残ると言うか」

「イエス、パワーのピークが延長されている為、パワーのオン・オフにラグが発生しています」

「慣れるまでは、あんまり派手に動かないほうが良さそうだね」

こんな所でコケたりしたら、機兵も壊れる工房も壊れるで、エライ事になる。

ちようど積み替えた荷物が載っている荷台があるので、練習がてらに鎖を掴んで引っ張る。

なんだか、動き始めが物凄く渋いので、何だと思ったら台車に車止めが掛かってたり。
変な動きしてるのかと思ってビックリした……外そうね。

「荷物が来ましたよー」

俺は声をかけながら横丁を進む。
鋼材だの鉱石だのには、届け先の札が付いているので、大体は何処の荷物が判るようになっていた。
其れを頼りに工房の軒先に荷物を置く。

「奥まで持って行った方がいいかな？」

迷っていると、後ろからロシナンテ改が二機やってきた。

「荷物を放り込むのは俺らに任せろ」

「私も手伝おう」

ロッドさん、ルドガーさん……。

「「気楽に機兵を動かせる機会はそう無いからな」んでなあ」

「まあ、いいけど」

俺が軒先に荷物置いて、ロッドさんとルドガーさんが、工房の奥まで持っていく。

白機士乗り二人を荷物運びに使うとか、ドンだけ贅沢な布陣だろ

うか。

さて、横丁の先ではスカーレットさん操る赤獅子が剣を手に、斬って突いてと振り回している。

非常に物騒な光景だが、赤獅子人気なのか、工房の若い衆が周りを囲んで眺めている。

荷物を配り終えた俺は、一旦ラプレス工房に戻って、赤獅子用のハルバードを持って出る。

「スカーレットさん、ほら！！」

ハルバードを、柄を向こうにして手渡す。

赤獅子は、剣を盾に収めるとハルバードを受け取る。

流石に此処で、8mサイズのポールアームを振り回す気は無いのか、そのまま前後左右にステップを踏み、機体の振り回され加減を試しているようだ。

「なんか、動きが硬いなあ」

フレームのしなりを利用して、つんのめるように跳ねている。

この狭い場所ならフレームをしならせるまでもない筈だけど、今までへたったフレームのせい、しなりを使えてしまっていたのかも。

本来はダンパー代わりじゃなく、限界ギリギリで踏ん張った反動を溜め込んで、推進力代わりに使うべきだろうから、その辺は慣れてほしいなあ……玄武見た感じの推測だけ。

でも、そういうのがスタイルに合わないなら、なんか考えないとな。

おっと、動きが激しくなってきた。
イラついてるのか、なんだか判んないけど、ちょっと危険だな。
人を踏んだりとか、見たくありませんよ。

「スカーレットさん、そろそろ戻らないと、人が集まって来て危
ないですよ」

見物客が大通りから横丁へ入り込んできている。
踏まれるのが怖くないのか、動いている赤獅子に触ろうとする連
中まで居るし。

「闘技場へ行く!!!」
「は？」

唐突に、そんな声が返ってきた。
無駄に大きく流れ出たその声は見物人に届き、ザワザワと騒ぎが
感染していく。

「おい、赤獅子が闘技場に行くらしいぜ!!!」
「うおお、『保護』されていた、伝説の機兵が現在の機兵と対戦か
? 燃えるっ!!!」

盛り上がる見物人達に、赤獅子が手を上げて応える。
闘技場って何事ですか？

「おいおい、マジか？」
「面白い事になったな」
「私も「俺も出られないか？」だろうかね？」

その二人、自重しろ。

さて、唐突ですが翌日です。

そして闘技場です。

大通りから城を挟んで向こう側になる感じですよ。

ぶっちゃけると、空中船が着く貨物エリアなんですが、その一角に廃材とか置いてる一帯が在って、そこで賭け試合が行われているそうです。

「なんで、俺まで出る事になってんだらう？」

スカーレットさんとステラさん、俺にロッドさんにルドガーさん。随分と豪華なメンバーです。

俺とスカーレットさん達は無制限、ロッドさんとルドガーさんは軽量級にエントリーです。

試合はトーナメントではなく、暫定のランク付けがあって、その近い者同士の対戦に賭けが絡むわけですね。

因みにスカーレットさん達は、何回か戦った事があるらしく、ランクを持っているそうで助かった。

無論、赤獅子は使わせて貰えず、横丁の連中が用意した従機兵を使つての参戦だったそうだが、おかげでポツと出の俺と当たる事はない。

ホッとした。

軽量級はロシナンテやシェフィールドの軽重機兵オンリーの戦い。改造は有りなので、面白い機体が色々と目に付く。

両腕だけ、普通の従機兵の腕が付いてて、ゴリラみたいなシェフ

イールドとか、重装甲過ぎてロシナンテのサイズじゃなくなってるのとか。

元は荷物を運んでいる連中が、喧嘩してたのを周りが賭けに使うようになったのが最初だとか。

なので、軽量級こそが元祖と言えなくもない。

今は素の状態の連中から、各工房が手掛けた有名所、新興工房の色物まで、幅広く揃っているので試合数は多い。

「しかし残念だねえ!!」

伝説の機兵と王国の天才傭兵の戦いなら、随分と熱いカードになったと思うんだけどねえ!!」

胴元のオッサンが「かあっー!! 残念だーっ!!」と、額をペシペシやりながら呻いている。

今日は天才機士殿は居ないようです。

そんな奴は会いたくないので居なくてOKです。

「そういえば、兄さんも王国の傭兵さんだっけな」

「それが?」

「いやね、こうやって見ると、あの天才機士の機兵も兄さんの機兵も、赤獅子に似てるなと思ってねえ」

「はあ!?!」

此処を荒らしまわってる天才機士の従機兵が、赤獅子とかに似てるって?

どゆこと?

「ああ、そうか。」

兄さんは、あの天才機士にあやかって、人気取るうって訳か!!
そりゃ良い考えだ。

機兵を此処まで似せるとは、なかなか研究してる。

二人乗りで顔隠すところ迄やるってなあ、なかなかの通だね通!!」

確かにフードかぶって、グリグリ眼鏡掛けてますが。

「おお、そうだそうだ!! エントリーネームはどうするね?

王国の天才機士(笑)とかどうだね!! 受けるよ!!」

「受けてどうするよ。それに喧嘩売ってるし。

そっぴや、その天才氏のエントリーネームは?」

「お、ああ天才天才で通じてるから、あんまり呼ばれねえな。

カード表にも天才機士って書かれてるからな。

えーとだな、エントリーネームはと……うん、『通りすがりの仮面機士+1』だな」

なめてんのかー!! 俺が使おうと思ってたのに。

まあ、被らなくて良かった。

しかし、本気で天才君らしいな、そんなネタ使うとか。

「ていうか、+1ってなんだ? 巫女さんか?」

「No.13かもしれません」

「ああ、そんなのも居たんだった」

この世界でミッシング・ウォー並みの動きができる上に、燃料制限出力制限ブッチギって使えるとか……どういうタネなんだ?

ある程度の決まった動作パターンをNO.13に登録しておいて、それを天才君の判断で適応ってどこか?

それってあんまりにもアクションゲーム過ぎる。

それに、サポーターの適応って黒機士限定じゃなかったのか……

ああ、フォウさんも関係無しに、いろんな機兵を使えるものな。

あと、赤獅子に似た機兵ね……案外、本当に残ってたか? 天才

の真作。

「まあ、今ここに居ないなら、それで良いか」

「それで、どうするね？ エントリー名」

「あ、そうだな。じゃあ、機兵名『青牙』、エントリーは『青機士』で」

「青……機士つと、そんなじゃあ、三つ先位の試合なんでな、一時間ほど時間を見といてくれや」

はい……って、結構軽いな。

胸元のいる辺りにでっかい掲示板が在って、そこに試合の予定が書かれている。

上から二つに結果が書き込まれているので、今が丁度三戦目だろう。

その次から軽量級のルーキー戦が二試合、その次の所が無制限のルーキー戦となっている。そこに俺の試合が入るんだろうな。

その次は銀狼と来て、赤獅子の試合が予定されている。

今の所の掛け率は、ルーキー戦が酷い。

ルーキー側は十五倍とか付いてるな。

逆に銀狼と赤獅子は、対戦相手に十倍ついてやがんの。

って、あれ？ 俺の名前は入ってないけど、エントリーできてんのか？

つか、規定とか補償とか契約とか無いの？

もしかして、それくらいググってこと？

せめて使っちゃ駄目なもんとか、負ける時の意思表示とか教えて
けや！！

「おっと、色々忘れてたぜ。ここサインしてくれや」

駆け戻ってきたオッサンから、手渡された紙を手取る。
薄汚れた折り目の付いた紙に、細かくごちゃごちゃと書いてある
のを読んでみる。

・試合分の燃料は出すし、装甲凹んだ位なら、工房が持ち回りで修理するので安心しろ。

・報酬としては、ランク付きの名誉、決着時に残ったミスリル、掛札の売れた歩合による報酬、場合によっては工房がスポンサーに付けてくれる事によるメリットがある（修理が安くなる等）

・決着は、どちらかの戦闘不能、ないしはギブアップ（出来るだけ頑張る事）による。

・戦闘開始前には、ある程度の戦闘が可能な状態でなければ、不戦敗となる。

・試合関係者は掛札を買っちゃ駄目（とは言わないが、ばれないように程ほどにな）

……。
とか、他にもごまごまと書いてあるが、字が潰れていて読めない

「まあ今更、出ませんとは言えないだろうから……はい」
「ほいよ、確かに」

サインして渡すと、またオッサンは走っていった。

さあ、どうなることやら。

闘技場にて（前書き）

旧24、25、27を一つに纏めて修正加筆しました。

ない口かいなあ」

「えー、興味はともかく、此处で見るのが初めてです」

もうポカポカポカポカとしか表現の仕様のない、その戦いを肴に酒を飲むおっちゃんは、生温かい目で軽量級同士の一戦を眺めている。

「ほんとだよお、こいつらみてえなルーキーはよお。

それなりの相手にボコボコにされて、自分を思い知るもんなんだがよお。

たまーに、お貴族様が思いつきでやって来るんだわあ。

そういう連中を叩き潰す訳にもいかんでなあ、おんなじルーキーを当てるんだわあ。

そしたら、こんなふうになっちまうんだよお」

「なるほど」

片方がエライさんの気まぐれで、もう片方が運の無いルーキーと
いうことなのか。

あれ？ 其れにしては試合表の所にルーキー戦とは書いてなかつたけど？

「ああ、偉いさんには見栄って物が在ってだなあ、ルーキーとは言えんのさあ。

まあ、こつこつのも、たまには良いもんだがよおー」

おっちゃんは杯をくいつと空けて、カカカと笑う。

そういうもんかと思っていると、二機の動きが止まっていた。

「ああ、ミスリル切れたか」

「そうみたいやお。まあ、頑張った方じゃねえかなあ」

闘技場では、動きの止まった二機を、従機兵が担いで移動させていた。

試合は決着付かずということで、賭けは流れたようだった。

「さてさてえ、次から三つルーキーが続くがなあ、相手はそれなりの名前が出てくるからのお。」

流石にさっさと片が付くだろうさあ。

兄ちゃんも賭け札買うならあ、今の内に買っとけよあ。

赤獅子に銀狼なんてよあ、早々は見れんからのあ……三つなんぞ

あ、すぐに終わっちまうぞあ」

「はあ、次も軽量……げ」

どうみてもロシナンテ改です。

次は動きからしてロッドさんか。

その次が、もしかしてルドガーさんなら、二試合なんておっちゃんの言う通り、すぐに終わっちやうぞ……逆の意味で。

そろそろ戻った方が良くかもしれない。

「それじゃあ、そろそろ失礼しますよ。」

ああそうだ、今から始まるルーキー三人、賭けてみるのをお勧めしますよ」

言うだけ言って俺ダッシュ。

「そりゃ、どういうこったよあ？ って、行っちまったかよあ……。ちっ、しょうがねえなあ。 買っというてみるかあよう」

その頃、反対側の客席で、入場してくるロシナンテ改を見つめる目。

「あの人、試合カードじゃルーキーってなってるけど、綺麗に歩くね」

「イエス、マナ把握から見ても一流の傭兵、それも国家機士級とかわれます」

ふうん、と感心気に眺めるのは、まだ十代も半ばに届いてないような少年。

脇に控える侍女服を着た女性を侍らせる様からは、良い所の子息のお忍びに見える。

「相手は……豪腕カイン・リッキー、倍率は15倍と1・3倍かあ。賭けとけば大儲けできたね」

「ふん、散々儲けてるくせによ、まだ足りないってかよ。」

糞ガキ、チヨロチヨロすんじゃないやねえよ！！　ったくよ、護衛が面倒だろうが」

酒をかつ喰らいながら、目つきの悪い男が少年の背後から現れる。侍女服の女性が目つきを鋭くするが、男は気にも留めずに壁にもたれる。

「スターンさん。　僕に賭けて散々稼いだ貴方に、言われる筋合いは無いですよ。」

まあ、『元』黒機士の貴方に、ある意味信用されていようで、嬉しいですけど」

「っだとお！！　この糞「オー、大判狂わせだ」ちっ、もう決着付

いたのかよ。

思ったとおりにしても、早過ぎじゃねえかよ。

おい、俺は用事があるから、今は勘弁してやらあ!!!」

スターンと呼ばれた男は、捨て台詞を残し、胴元の所へ走り去っていった。

「あんな人が黒機士だったなんてね。

自分のパートナーを失って、黒機士も失ったって言うのに……なんとも思っていない」

「マスター、私たちは消耗品でしか在りません。

ですから、ミスリルの為に賭け試合に出る等という、危険な真似は……」

「止めないよ。

それに、エリカさんが調べてる事の、目晦ましには丁度良いだろうし」

いつの間にか、次の試合も終わっていた。

「さあ軽量級のルーキーが、大番狂わせを続けて起こした所で、無制限の方でも新人が登場だ!!!」

果たして、あの天才のように、先の二試合のように、大番狂わせが起こるのか!!!

対戦相手は円熟の燦し銀!!! 傭兵としても活躍中の、ベテラン機士ゴツサマー!!!」

「天才だつてさ……そろそろ戻ろうか」

「イエス、マスター」

少年とそのパートナーは、次の試合を見ずにその場を離れた。

あと、ほんの少し留まっていれば、何かを思ったかもしれないかつ

たが。

「思った以上に呆気なかったな」

ロッドさんは、開始直後から潰しに掛かって来た相手の、大振りな右腕の拳撃を半身にかわすと、目前を通り過ぎていくぶつとい腕を左腕で引つ掴んで、そのまま勢いに併せて力を加えた。

ただでさえバランスの悪い機体に、力を加えられた相手は、そのままでもひっくり返るしかなかったが、ロッドさんは止めとばかりに、逆手で握った右手の剣で突き込んだ。

頑丈だが、それなりになまくらな剣が、そうそう簡単に突き立つもんでも無いが、流石に勢いのお蔭で、剣身の半ば程までブツ刺さった。

相手は今までに無い速さで後ろにさがり、仰向けに倒れた後ギブアップを叫んだ。

瞬間、試合が止められ、ロッドさんの勝利が確定した。

次のルドガーさんの試合も早かった。

相手は槍使いだっただが、ルドガーさんに突き込んだ瞬間、受けた剣がクルリと翻ったかと思うと、巻き上げられた槍が宙に飛んでいた。

一瞬、何が起こったのかと、会場が静まり返った。

ルドガーさんが背を向け、槍が地に突き立ったのを見て、正気に返った審判が相手の戦意を確認し、ルドガーさんの勝利を叫んだ。

次の瞬間、大歓声が巻き起こり、退場間際のルドガーさんが、口シナンテ改の片手を挙げて応えた。

一々カッコいいのが、ちょっとムカつく。

「さて、次が出番か」

「イエス、本気でいきますか？」

「ご冗談。まだまともに動かした事も無いのに、そんな恐ろしい真似しないって。」

ボチボチ行きましょう」

「イエス、マスター」

後部席のフォウさんが、背部ユニットへのミスリル投入用シリンドラーを引っ張り出す。

とりあえず、試合用にと貰った三枚を装填、パーツを押し込む。

「イグニッション」

ミスリルが砕かれ、マナが発生する。

マナを全身に回し、座っていた青牙を立ち上がらせる。

傍らのランスを手に取り、ゆつくりと闘技場への道を進ませる。

相手が先に闘技場へ着いたのか、頭上からゴッサマーコールが響いてくる。

どう考えても大人気です。

ルーキーに当てるレベルの相手じゃないだろ！！

そういう余計な期待は嫌いです！！

「マスター、表に出ます」

坂を昇りきると、闘技場に立っていた。

何故か青牙の登場と共にゴッサマーコールが止み、息を呑むような妙な期待感が充満しているような。

そんな気がしたのは、俺の考え過ぎかね。

右手で持っていたランスを構え、左手を添える。

姿勢を低くし、相手の動きを待ち構える。

相手はオーソドックスな剣と盾を持つ。

じりじりと、こちらから見て反時計回りに位置取りを取る。

まだ、試合は開始はされていない。

まあ、長物相手にや懐にっつのが常道で、こちらの得物が回りにくい左に入るのが、真つ当な相手の考えだろう。

試合開始前から何気なく、そうやって良いポジションを取ろうとする辺り、良い根性をしている。

相手は、若干の盛り上がりのある場所を選ぶと、剣を構えた。

双方の戦闘準備が整ったとして、開始が告げられた。

「どつりゃああああ！！」

若干とはいえ下りの利を生かし、速度を上げつつ突貫してくる従
機兵。

俺は機体の向きを調整し、その進行方向へランスを向ける。

「まずは10cm単位……」

相手の機兵の中心を目標に、10cm刻みの座標で追跡。

十分に追隨できるが、流石に先がばたつくな。

それでも、機体にそれほど負荷は掛かっていないか……ベースとしてはかなり優秀なのは間違いない。

「5cm……」

左右へ進路を振る敵機への、頻繁な行動修正とパワーのオンオフにより、速度が落ち腕のモーターに負荷が掛かり始める。

しかし、相手の中心を捉え続ける切っ先は、フェイントをもつてもせず、入り込む隙を与えていない。

「3cm」

こちらのスピードが鈍ったのを察して、相手が強引に割り込もうと盾を使ってランスを押しつけに掛かった。

制御に頭が行ってたせいで、瞬間押し負ける。

「遊びすぎたかー!!」

歓声が上がリ、ゴッサマーコールが響く。

押さえにかかる盾ごと、力任せにランスで巻き込んで叩き伏せる事も出来るが、此処は素直に相手の健闘を称えて、技で対抗する事にする。

左腕をランスから放し、予備の剣を抜く。

相手は盾でランスを封じ、右手の剣を奔らせ襲い来る。

こちらはランスで相手の盾を封じる形になっているが、如何せん剣を持つのが左腕となる。

普通なら此処で勝負は粗方決まりだが……。

「ぶっちゃけ、利き腕とか全く意識した事無いんだよね」

力の籠った斬撃を柔らかく受け、一撃は外へずらし、一撃はランスに向けて弾く。

ランスに込める力で盾の上から相手の動きをコントロールし、不利な態勢を押し付け、こちらが受けやすいタイミングで力を緩め、剣撃を不十分な体制から繰り出させる。

それを受けると言うより添える感じで剣を当て、何度か感触を確かめる。

「確か、ルドガーさんのあれはこんな感じ……」

弾き飛ばしてしまったり、引っかけ損なったりを十回ほど繰り返したところで、剣の感触が変わった。

妙にネットリした、飴を引くような感覚。

相手の剣とこちらの剣が絡まったような。

そのまま相手の剣を絡め取るように巻き落とす。

「あ、ミスった」

こっちの剣まで飛んでいった。

なんか大歓声があがってるし、何を見て盛り上がってんだか。

あーあ、気が抜けた。

殴り合いとかやりたくないしなあ……。

「……なー、そちらさん、まだやる？」

「けっ、俺に聞くなよ。お前さん、バケモンか？」

散々遊びやがって。あの天才云々は、訳が判らん間に負けるがな。

お前さんは、差が思い知らされる分、万倍性質が悪いわ!!」

酷い言われようだ。

「それよりもさ、周りも盛り上がってるみたいだし、この勝負は分けとかない？」

「なにおう!？」

「そのかし、俺の事は当分内緒。

実際、この機兵の試しのつもりでは居たけどさ、そちらの思ってる程、遊んでた訳じゃないよ。

中に入られたのはこっちの油断も有るけど、そっちの腕と思いい切りの良いナイス判断。

最後まで結局は格好付けようとして失敗だし。

そんなに恐れ入られても恥ずかしいんだよ。

今回は、なかなかやるじゃねーか位で、笑っといってくれば良いな」

「けっ、其処まで言うならそれで良いがよ。一つ聞かせろ。お前、何者だ？」

「通りすがりの云々は、誰かが使ってるしなあ……金魚の糞は切な過ぎるしな」

「なんだそりゃ」

「判らんでしょうが、所詮はそんなもんだと思っといて下さいな」

その後、二機ともに手を挙げて、試合を分けた。

「まあ、この後の連中に当たらなかつただけ、マシか」

そんな台詞を残した、ゴッサマー氏………どういう意味なんだか。

次つて言えば、スカーレットさん達か。

言われてみれば、俺も相手はしたくないよなあ。

闘技場を後にして、青牙を割り当ての駐機場に留める。

この辺りは、横丁の工房が押さえている場所なので、ロシナンテ改だの青牙だの赤獅子に銀狼も安心して置いとけるのだ。

色々と訳有りばっかりを取り扱っているお陰で、その辺は馴れたものみたいだった。

さて、そのまま試合の観戦に向かおうとしたら「其処の人！！

青機士さんですよね！！ ちょっと待ってください！！」とかなん

とか、なんかエライ剣幕で走ってきた人が……。

「マスター、厄介事が走って来ましたが」
「フオウさん、俺が呼び止められると厄介事ですか」
「イエス、大体そんな感じだと」

何だっただらうねえ。

「一体なんだっただんですか？」

「実は、次の試合の相手がですね」
「が？」

「腰を抜かしてまして」「は？」「いや、先程の試合ですね」
「ちょ、ちよっとまって」

OK、ちよっと落ち着こつ。

「先程の試合って？」

「軽量級ルーキー戦の一線目です」

「あのグダグダの？」

「あれの次です」

ロツドさんの試合か？

「実はあの試合に出ていたカイン＝リッキー氏ですが、軽量級と無制限のダブルエントリーだったんです。

軽量級と無制限で機兵は別に用意してましたので、特に問題はな
いかと思われていたのですが……」

「まあ、死んだり大怪我しなけりゃ、大体は大丈夫だよな」

「だったのですが……」。

実はあの試合で突き立てられた剣が、ほんの10cmほど搭乗席
に突き出たらしく……」

あー、結構しっかり刺さってたもんねえ。

「怪我した？」

「いえ、それを見て、カイン＝リックキー氏が」

「ああ、腰を抜かしたんだっけ？」

「はい、腰が抜けて立てないと……」

確かに頑丈な機兵の搭乗席に剣が突き出てくるとか、それは例えちよつとでも怖いかも知れん。

それにルーキー戦で、そんな目に遭うとは思わないだろうしなあ。

「最悪の場合でも、機兵は軽量級と無制限で別でしたから、悪意のある意図的な不戦敗とは見なされてませんし、本人も違約金の支払いに同意していますので、ペナルティとしては其処で話が終わるんですが」

「が？」

「次の試合は、そう簡単に流す訳に、いかないんですよ！！」

ああ『赤獅子』 & 『銀狼』初登場なんだっけな。

「それで？」

「申し訳ないのですが、無制限で機体にダメージも無く終わっている貴方に、次の試合もお願いしたいのです」

……

……

……

「さよなら」

「待ってくださいよおう!!」

気弱そうな雰囲気の癖に、力強いな、このオッサン!!
ガツシリと腰に、しがみ付いてきやがる。

「ええい!! 放せつ、放さんかいつ!!」

「話を聞いてくれるまでつ、はなしませんっ!!」

聞いたけど嫌なんじゃあ!!

つか、聞いたから嫌なんじゃあ!!

……

……

……

「はあっ、はあっ、はあっ」

「し、しつこい」

「おねがいますよっ」

そんなもん、俺にメリットが無いだろうが。
欲しい物も別に無いけど。

「他にも居るだろう、有名人とやって名前を売りたいがる奴くらいさ」
「それが、ゴッサマー氏にも掛け合ったのですが、青機士を差し置
いて出るのはプライドが許さんといわれまして」

それは、俺をダシにして逃げたんじゃないのか……。

「おおい!!! おーい!!!」

またもう一人なんか来た。

無駄に偉そうな髭のオッサンが。

「おい、そっちの話は決まったのか?」

「いや、それが……その」

「かーっ、何をモタモタしてるんだ、緒戦が高評価だったからって、新人に時間を掛けてるんじゃないよ」

おいおい、エライ言い様だな。

「もしかして、メンバー決まったんですか?」

髭のオッサンに聞いてみる。

「ああ、実は例のランク1位が、出ても良いと言ってくれてな」

流石にモノが違うな、アレはとか言ってやがる。

ほほーっ。

「ただ、元々のメンバーだったメンヘルの奴が、天才の野郎が出るなら俺は出ないと……な。」

あの腰抜け、勝っても天才のお蔭、負けたら足を引っ張ったって言われるのが、怖くなったんだ」

「あー、この間ボコボコにされてましたし、色々思う所も有るでしょうしねえ」

「それで、もう一人は決まってるないが、この際ランク差も考えて、

適当な新人に機兵を貸して出せば良いって話になったんだが……。

おい、青機士君だっけ？ 君は出ないんだよな」

……天才君ねえ……へー……ほー……ふーん。

「出てくれるとありがたいが、別に無理にとは言わないから。」

「そうか、駄目なら仕方が無い。次の奴探しに「いいよ、出るよ」なんだって？」

「やっちやろっじゃないか。」

「次の試合、俺が出ますよ」

「ほ、本当ですか……！」

「こりやすごい、天才と期待の新人が、伝説の機兵コンビに挑戦する……！」

「これは盛り上がる……！」

「気の弱そうな方が、雰囲気変わる勢いで盛り上がってる。」

「やっぱり、あの天才機士に憧れてたんですね……！」

「こんな機兵も格好も似たような事にしてるだけに……！」

「はあ？」

「大丈夫ですよ……！ 彼さえ居れば、君は大船に乗った気で居れば

OKさ……！」

「おいおい、エライ変わりようだな、髭のオッサンもポカーン状態だぞ。」

「ま、まあ、決まったんだし、私は準備に帰らせて貰うよ。
キミは、青機士君に準備して貰っておくようにな」

偉そうなオッサンは去っていった。

「それじゃあ、顔合わせに」要らないよ」「え?」

「機体持ってゲートのところに行ったりや良いんだろ?」

「あ、はい、三番のゲートに」

了解、とそれだけ言って、俺は機体の所に帰ることにした。

「どういうつもりなんですか? マスター」

ん? フォウさん?

「嫌いだったんじゃないんですか?」

「違うな、大っ嫌いだ」

「良く判りません」

首を傾げるフォウさんに、俺は口の端を無理矢理ひん曲げて、ギ
シリと晒う。

「興味があるんだよ。どんな動きをするのか……今のうちに見て
おきたいんだ。」

……

いつか、やり合っただろうし」

「イエス、マスター」

それから、青牙の準備を進める。

コッソリ盾を用意しておく……さっきの感じだと、ランスは片手でもある程度は捌ける感じだったから、カウンターウェイト代わりに。

「さて、そろそろ時間か？」

天才君には会いたくないので、さっさと乗り込んでおく。

規定量のミスリルは先に受け取ってある。

ゲート前で待っていると、軽い振動を伴って従機兵がやってきた。

「黒いのか……。フォウさん、手を」

「……はい」

フォウさんの手を取る。

マナを借りて、スキルを立ち上げる。

透かして見るその機体には、青牙と酷似した部分が多々見受けられる。

「やはり、真作ってか？」

コンデンサ部分はオミットされているのか、見受けられない。

「あれ？ オイルチューブの代わりにミスリルのチェーン？」

妙にコストに拘りのある感じの、あの貧乏臭い天才の作品と考えると、ちよつと鼻に付く感じだ。

フレームも青牙に近いという事は、お高い物が使っているという事。

「ああ、もしかしたら、こいつもパクリか？」

コンデンサは使わないというか、『黒機士』には『必要が無い』という事か。

そんな事を考えていたら、声が届いた。

「こちら通りすがりの仮面機士。青機士どの、準備は良いですか？」

殿と来たか。

声は返さずに、ランスを少し上げて応える。

「……了解」

俺の気分が動きに出てしまったたか、天才君の声が少し固かった。

「それでは、ついにお待ちかね！！ 伝説の『赤』、そして『銀』の登場です！！

それに対するは、天才と名高き『黒』の機士、そして新進気鋭の『青』き機士！！」

盛り上がっていく会場の声と裏腹に、だんだん醒めて行く俺。

「さあ、登場です！！」

声と共にフォウさんが、背部主機へミスリルを装填、マナ発生。

「青牙、出るぞ」

俺が先に闘技場へ進む。

後を天才君。

向こう側のゲートからは、赤獅子を先頭に銀狼が続く。

闘技場は、中央付近に所々コンテナを積んである、俗に『岩場』
と言われているステージ。

周辺部は移動しやすいが、大回りになり一機しか立てない。

中央部は長物が使いにくい、連携は取りやすい。

元々、俺は連携なんぞとる気は無いが。

「試合、開始！！」

暑苦しいコールと共に銀狼が右、赤獅子は左の周辺部を駆け始める。

やはり長物装備の二機、中央部は避けたか。

「天才君は？」

黒い機兵の武装は盾無しの手剣。

それを右手に携えて、中央部に突っ込んでいく。

自然、俺は両方から走りこんでくる二機に挟まれる。

「げっ、冗談じゃ無いぞ！！」

俺は左に走り行く。

咄嗟に射撃武器を持っている銀狼を避けたのは、我ながらナイス
判断だと思っ。

だからといって、赤獅子の相手をしたくない訳でもないですが！！

とにかく一撃繰り出す準備にランスへとマナを込めながら、ハル
バード振り上げながら間近に迫ってくる赤獅子との間合いを計る。

「うーん、ランスとハルバードじゃ、分が悪いか」

こっちが突くか巻き込む位しか出来ないのに対して、あちらさんは斬る打つ突く引つ掛けると何でも有りだ。

腕が悪いと邪魔になる代物とはいえ、スカーレットさんに其れを期待するのは無謀という物。

「となれば、ランスは使い捨てる!!」

このランス、本来は突いてのちに炎を叩き込むが、別に突き刺さなくても炎を吐き出させる事は可能。

そうすると約三メートルほど噴出して黒煙を上げる。

その状態のランスを突き出した状態で進み、赤獅子が流石に避けられないだろう間合いに入った瞬間。

「衝撃のお!! ファースト・ブリットオー!!」

俺は青牙にタタンとステップを踏ませ、ランスを槍投げの選手宜しくブン投げた。

煙がいくらか煙幕じみた効果を上げていたようで、咄嗟の投撃に赤獅子が対応できず、左の肩辺りに当たる。

相手のダメージを確認する間も惜しく、俺は予備の剣を抜き追撃に入る。

バランスを崩している赤獅子が体勢を整える時には、俺を剣を振り上げ赤獅子の左肩を狙い、一撃を送っていた。

「撃滅のお!! セカンド・ブリットオー!!」

赤獅子は盾をかざし、その剣を受ける。

だが反撃するにはハルバードでは間合いが近い。

俺は左手の盾で、赤獅子のハルバードを制しながら、右手の剣を再び振り上げる。

「決めるぜあつ！！ 抹殺のお！！ ラスト・ブリうげつ」

そのとき、赤獅子の盾が妙な角度に向けられたと思うと、盾の拳側の先（剣を保持している穴の部分）から、先程のお返しとばかりに炎が噴出。

「ちょ、見えねえ！！ そっとう使い方もできるのかよ！！」

「マスター、感心している所すみませんが、銀狼がやってきます」

「うあちゃ、頃合か」

流石に背後を狙われたんじゃ、おちおち殴りあいなんぞやってられませんか。

中央部の障害物に紛れるべく移動する。

そして赤獅子が、真っ赤になった剣を盾から抜き、追いかけてくる。

銀狼はその赤獅子の背後を守るように動き、矢仕込みの盾を構えている。

「ナイスコンビネーション！！ でも嬉しくねえ」

俺に味方は居ないのかと、途方にくれつつコンテナの陰を渡り歩く。

その時、先程赤獅子が駆け抜けてきた周辺コースを、黒い機体がとんでもないスピードで突っ込んできた。

俺も含めて天才君は中央部に潜んでいると思っていたようだが、どうやら中央部を反対側まで駆け抜けた拳句、赤獅子の後を追いか

ける形で折り返してきたらしい。

いくらNo.13のコントロールでマナ漏れが無く、感知できないにしても静か過ぎるとは思ったが、居ないとはね。

「意外と小狡い事をするっ！！ でも、なんかちょっと嬉しいぞ！」

「ツンデレ乙」

フオウさんめ、うるさいわ！！

とはいえ……どうやら俺は、囿にされてたらしいな。

相手が周辺を駆け抜けてくるのを見て、中央部を駆け抜けてどちらかに回れば、俺に引っかけかかっている相手の後ろを取れると言っわけだ。

俺はそれなりの感じで機兵をコントロールしているので、一応のマナ漏れはある。

其れをNo.13が感知して、左に回り込んできたんだらう。

まあ、俺がさっさと中央部に入り、それを赤獅子が追ってきて、その後ろをカバーする銀狼の背後を天才君が取れたのは、多分に偶然だろうと思いたいけど。

「まさか、全部読んできるとかは無いよなあ」

そんな天才君の黒い機兵が現れたのを見て、しかし流石は銀狼、咄嗟に盾を天才君に向けて矢を放った。

その矢をかわした天才君。

黒の機兵は盾を持たないので、流石にそのまま突っ込む事はしない。

銀狼と天才君が睨み合う形で動けなくなった。

「ナイス」

これで、銀狼の射撃を気にせず、赤獅子と対峙できる。

コンテナ陰から出て、再び赤獅子と相對する。

どちらもサポートが無い1対1、赤獅子がめっちゃ嬉しそうに劍を振ってくる。

良く見ると、その劍はどう見ても、劍とは名ばかりの金属の塊。

「やたらに分厚いな」

地金は金属ともセラミックとも判別が怪しい代物で、真っ黒の地に炎の赤を滲ませながら、襲い来るそれを劍で逸らせて脇のコンテナに突っ込ませる。

赤獅子は、コンテナに当たった劍を、ぐいと引く。

すると、コンテナはガジジジと、まるで削り取るような音を発して、刃の当たる部分が重みだけで切り込まれていく。

「なんつじゃそりゃ」

赤獅子の劍は、ヒート剣なんていう、御上品な物じゃなかった。

流石にそこまで非常識な熱量は持っていなかったらしい。

アレはでっかいヤスリなのだ。

真っ赤に熱しているのは、単に相手の装甲に対してヤスリのエッジが立ち易く、そして引っかかりをある程度に収める為と、後は目詰まりを溶かし落として綺麗にする工夫ってところだろうか……一応は内部破壊の意味もあるんだろうけど。

「なんと恐ろしい」

劍をわざわざ見せ付けるような素振りの赤獅子、良く見ると劍の刃部分に無数に細かな線が走っているのが見え、削り落とされ粉末

状にされたコンテナの成れの果てが、血のようにそこを滴り落ちていった。

思わずドン引きした俺の気持ちに機兵の拳動に現れたか、かさに掛かって剣を振るってくる赤獅子。

一撃をいなし、一撃を盾で受ける。

いなした剣の刃がヤスリ掛けされて、割り砕けてギザギザになった。

受けた盾の表面にバツチリと削り取られた筋が入っている。

「何度も受けてると、剣が先にお亡くなりになるな。

盾もそう長くは持たんかな？ くっそ!!」

軽く剣での牽制から盾をかざしての突撃、赤獅子はササツと後ろに下がって、こちらの出した剣を払い、突撃には盾で合わせに来る。ガツンと盾を撃ち合わせ、赤獅子と青牙の勢いが止まる。

素のパワーはそれなりに互角……申し訳ないが、ちょっと本気を出して、無理押しする事にした。

「おーっりゃあ!!」

脚部を沈ませ、落下分の重力と機体重量をフレームをつっぱらかせる事で、前に進む力に変える。

剣を持つ手を振り、胴体を中心軸に盾を持つ手に力を加える。

そして、マナの効率を上げ、素のパワーを増す。

その三つを同時に行い、青牙で赤獅子を弾き飛ばす!!

ギシィツと青牙のフレームが軋みをあげつつも、運動エネルギーを赤獅子に加える。

何かを感じたらしい赤獅子が、かち合っている力の軸から、盾を

そらして幾らか外に力を逃がした物の、加えられた運動エネルギーにより、たたらを踏んで二歩三歩とバックしていく。

手足を振りながらバランスを取り戻そうと必死になっている赤獅子に、ひん曲がった盾を投げ捨てた青牙を突っ込ませる。

もろけて頼りなくなつた剣を両手で握り、大上段から振り下ろす。とつさに払いに来る赤獅子の剣。

「来た！！」

俺は剣が打ち合わされる瞬間、振り下ろす剣の勢いを殺し、微妙に触れ合わせると同時に、摩擦も利用して赤獅子の剣を巻き落とす。

同時にこじた剣先も力に負けて折れ飛んだが。

それでもショートソードの代わり程度には使えそうな剣を、茫然自失っぽい赤獅子に向けつつ、じつと対峙する。

しばらくして諦めたのか、赤獅子は降着姿勢になって座り込んだ。これは、負けを認めた姿勢だった。

会場がルーキーの快拳に沸く。

余計なお世話だったが、不思議と悪い気分ではなかった。

「さて、あちらの見物に行こうか」

俺は銀狼と天才君が、対峙しているだろう場所へ向かって、機兵を進めた。

興味があるのか、赤獅子も着いて来る。

「まいったな」

どうやら、随分と相性の悪い相手に当たってしまった。
早々に奇襲で一機減らす積りだったのに。
相手も相手も只者ではなかった。

「僕も天狗になってたかな」

そんな思考が逸れた隙を突かれた。
相手の銀色の機兵が、盾をこちらに向け仕込み矢を放つ。
流石にアレを切り落とすような精密な事は、ジークフリートに乗
つていなければ無理だ。

この機体に行えることは、基本的には大雑把に早く鋭く動く事。
システムの開放で、制限を解除すればある程度は動けるけど、そ
れはサーティンに負担が大きい。
余裕を持って大きくかわし、そのまま一気に間合いを詰めるべく
機兵を進めようとして、ふいと向けられた右腕の槍に嫌な感じを覚
え、その場所から更に飛び退った。

「くそつ鈍いつ!!」

「すみません、マスター」

王国の秘蔵していた過去の天才機兵鍛冶の設計と、黒機士の素材
を併せて作り上げた高性能な試作機の筈だが、サーティンの補助を
受けて尚、ジークフリードには遠く及ばない。

「いやっ、大丈夫、うわあっ」

間合いでいえば、両手剣を持つ僕の機兵の約三倍近い距離、どう

考えても届かない距離を、その槍は詰めてきた。

「ばちゅんと言う、油のはねたような音、そして槍の一撃とは思えない軽い衝撃。」

相手の槍が畳み込まれていくのを見て、その仕組みを理解すると同時に、ボクは自分の乗る機兵の左腕が力無く垂れ下がっているのに気付いた。

「うわ、左腕溶けた」

傍で見ていて、その光景に固まる俺。

さっきの受けてもダメージの来る、赤獅子の大ヤスリも大概エグイ武器だと思ったが、ここに数段上のヤバイのが居た。

銀狼の槍は、感電兵器とかそんな生易しいものじゃなかった。

槍の先端を良く見ると、二股に分かれていた。

アレは恐らく電極。

短距離間に、笑っちゃうような電位差を与え、高圧大電流を機兵装甲部位へ流し込み、ショートさせて溶け弾けさせる代物だった。

100ボルトのコンセントからのコードを、ニッパでうっかり両断させると、時に刃の部分が溶け落ちる。

どれほど強度を上げようと、金属である以上は余程の事が無い限り、電流が流れジュール熱が発生する。

ただ、今みたいに機兵の腕に、食いちぎられたような穴が開くつてのは、どれ位の電流が流れているのか想像が付きません。

それに銀狼の槍自体が、その大電流に耐えてる仕組みも……以前ざっと見た時の素材だけでは説明がつかない。

もしかすると赤獅子の武器も含めて、俺が知る以外のルールに依

存する、何やら秘密が有るんだろうか。

「まあ、良いか。さて、天才君はここからどうする？」

「援護はしないんですか？」

「べ、別にさっきの囷にされたのを根に持つてる訳じゃ」

「気持ち悪い「やかましい」です」

目の前の銀の騎兵が、ゆっくりと間を詰めてくる。

先程の槍の長さから考えれば、すでに射程内だ。

それでも間を詰めてくるのは、僕の反応を見ての駄目押しか。

「油断も隙も無いね」

「こちらは、さっきのダメージでバランスが狂っちゃって大変なのに。」

「マスター、機体のバランス修正完了。」

「ただし片腕での剣撃では36%の攻撃力減、再攻撃までの時間が40%増加」

「攻撃力のダウンより、再攻撃の隙がきついな。」

「うん、サーティン……ここは一気に決めるよ」

「どうも味方の人は、囷にしたのを怒ってるみたいだし、長引かせても助けてくれるか判らない。」

なら、次の攻撃が来た時に、決めてしまわないと。
問題は、槍が何処に来るか。

「マナが槍に集中しています……来ます」

右肩か脚か……僕なら、両腕を潰す。

「ならば、右肩!! 勝った!! サーティン!!」
「ハイッ」

威力のありすぎる武装、ならば胴体には撃ちにくい。
恐らくは足か腕。

一度狙っている腕と読んだが、その通りに槍が伸び襲ってきた。
僕の意思に反応して、サーティンが防御に動く。

先程の反応から読まれ、詰められた間合いからの回避は不可能。

「ならば!!」

僕は回避ではなく防御を選択。

その意思に反応し、サーティンがジークフリードから移植した、
防御パターンから行動を選択。

選択した動作は、槍に両手剣の腹を当てることでの直撃回避。

溶け爆ぜる両手剣を捨て、ブランと垂れ下がる左腕を右腕で握り
引きちぎる。

そして槍が戻るより早く駆ける。

「システム開放!!」
「レディ」

瞬間の猛加速!! 間合いの外にいた銀狼が、一瞬時を飛び越え

たかのように、ほんの目の前に在った。

「くらえーっ!!!」

僕は左腕を振り上げ、それを棍棒代わりに銀の機兵へ叩き付けた。狙いは右腕の槍!!

銀の機兵から、仕込み矢が放たれていたが、間一髪で逸れていた。叩き付けた腕は、銀の機兵の右腕にダメージを与えているようで、槍の展開を戻しきれなくなっているようだった。

「こうなれば懐にいる以上、槍が戻せなければ攻撃は出来ないよね」

ボクは腕を再び、軽く銀の機兵へ当てると、銀の機兵は座り込んで負けを認めた。

見ると、近くに先に勝負を決めたらしい、青の機兵がこちらを眺めていた。

それはまるで生きてるように自然に、まるで揶揄するような感情の籠った動きで両の手を叩き、祝福するように見せて立ち去った。

最後に「良いセンスだ!!!」と言い残して。

えーと、リロードはレボリューション？ まさかね。

決着は劇的な終わりだった。

「最後の突撃、システムを開放したのかな？」

「イエス、マスター。No.13のシステム開放を確認しました」

システム開放、フォウさん達黒機士パートナーズの持つ能力。

彼女達の保有する、オリハルコン級の出力を使い、機兵を限界能力でコントロールする代物。

最後の突撃速度、どう考えてもあの機体のマナ出力では無理だ。

それにあの最後の攻撃前後の動作、精密で無駄が無さ過ぎる。

まるで、フォウさんみたいだ。

「まず槍の攻撃に反応し、攻撃を読んだのは、天才君だろうな。

でも、そこから先は……」

「No.13だと思われませんが、私の所持パターンではあの防御は出来ません」

「多分、動作パターンはジークフリードのマクロかな？」

それにしたって、防御のポイントを指定しないと、ああはきれいに決まらない。

どのくらいの確率で動いたのか知らんが、相変わらず勘が良いってレベルじゃねーぞ。

そこから突撃かますとか、完全に確信済みで動いてやがるし。

お前はNTか……!!」

俺は思わず見せ付けるように、無駄に感情を含ませた動きで、天才君へ祝福の拍手を送った。

内心の「悔しくなんかないもんね」が表に出ないように余裕たっぷりだ。

「良いセンスだ」

「マスター、オールドタイプ乙」

「やかましいわ」

さつさと闘技場を後にした。

「思い返すと恥ず過ぎるぜ……何やってんだ、俺」

青牙を預けて、逃げるよう人の居ない所へ。

何が「良いセンスだ（笑）」だよ……変なフラグが立ったらどうする。

「しつつかし、本当に何？ あのニュータイプ」

「嫌な感じがする」とか「何だ、このプレッシャーは!？」とか感じで、相手の必殺を察知できるのかっての!!

流石に喰らってたけど、槍の発動前に動いてやがったし。

見た時に吹いたわ!!

ぶっちゃけ、俺の相手が赤獅子で良かったです。

銀狼相手だったら、どうなってたやら。

「おかげで天才君の現状を見ることは出来たかな」

見た感じでは、どうもあの機兵でも天才君の意識の瞬発力に挙動が追いついていない。

模倣とはいえ流石は天才の作品、相当なレベルにあるが、それでもケイオスやジークフリード程ではないもんな。

天才君の真骨頂は、俺が予測を立てて先読みで動かなければ、全く対応できない速度域での超反応と、エスパーじみた勝機を嗅ぎ取る戦術センス。

しかし、それが生かしきれない、この世界の機兵と操作方法の中で、パートナーを得た事による軽減があるとはいえ、ジークフリード以外のままならない機兵でも、なんとかかかんとかこの世界に対応

してきている。

それと……狡さを覚えていたな。

以前の天才君は、対戦時でもゲームをするように、自分だけを考えて動いていた。

それが今日は、相手の動きを読み、他人の動きを考えに入れて立ち回っていた。

この闘技場で俺TUEEEEを、やっているのかと思っていたら、随分と成長していたもんだ。

「さて、俺はあれに勝てるかな？」

青牙とあの黒い従機兵でやるなら、銀狼張りのビックリドッキリメカが出てこなきゃ、まだ負けは無いと思う。

銀狼の一撃に反応できても喰らっているように、先読みでの回避を追い潰せる動きができるうちは、読んでもかわせない詰め将棋で勝てるだろうな。

でも、青機士と黒機士レベルになると……この世界の機兵とはいえ、最上位といって間違いないレベルの機体でなら、こちらの攻撃が退き足に届かない可能性がある。

それに相手の攻撃に俺が反応できない可能性もあるかな？

例えば、相手の攻撃がN.O.13を介したもので、必殺のタイミングで放たれた、恐らく最速に近いだろうそれを、捌けるかどうか……。

「くそー、N.O.13抜きなら負けないのになあ」

単純に機兵をマニュアルで動かすのであれば、ほぼ最速に近い自信がある。

でも、パートナーの居る状態の天才君は、ミッシング・ウォーでの操作レベルで戦う事ができる。

「ほんと、格ゲーとフライトシミュのレベルで殴り合いとか、俺も良くやってたよなあ」

あつちじゃあ、俺が端末の補助で何とか戦えてたんだしなあ。

データーを取って、先読みと対応のマクロを組んで、ある程度自動での対処ができるようにして、それでやっと天才君と戦えてたんだ。

それがこつちに来て、フルキーボードにジョイスティックにマウス使いまくりみたいな、こつちの土俵に引つ張り込めたと思ったら、超凄い便利なゲームパッドが出てきた訳だ。

となれば元の世界同様、俺も端末の補助が無いと、同じ土俵に立てない訳だが……。

「私が手伝います!!」

「フォウさん？」

「私はマスターの力になれませんか？」

「フォウさんが、補助に入る？ ……えーと、ちょっと待ってよ」

よく考えてみる。

フォウさん自体の機士としての能力は、俺に迫る物が有る。

むしろ、決まった工程をスムーズに行うだけなら、俺よりブレの無い動きができるだろう。

しかし、攻撃に対する受けや回避の判断は、先読みができなければ俺に劣る。

No.13が天才君の速度についていけるのは、状況判断を天才君に、行動計画をマクロの行動パターンに丸投げして、自分は行動の実行にリソースを多く振っているからこそだろう。

恐らくNo.13もフォウさんと同じなら、命令の実行はそれこ

そコンピュータ並だが、判断思考は人と変わらない。

そこに判断や思考が入れば、速度は落ちる。

天才君の速度は異常なのだ。

だからN.O.13が行動を選ぶのは、条件付けされた命令の実行、つまりプログラムに沿った動きから。

恐らくジークフリードに搭載してあった、マクロ群のデータを取り込んだんだろう。

それなら状況判断よりも、行動の決定は早くなる。

決定さえしてしまえば、調整は容易い。

まあ、機体性能で制限は受けているみたいだけど。

つまり、戦闘経験というか、戦闘プログラムを持たないフォウさんでは、N.O.13と同じ方法では、天才君の攻撃速度には対処できない。

「だいたい天才君と同じ方法では、指示を出す俺がついていけないのだから意味が無いけど。」

「つまり行動予測を判断ではなく、条件付けしたプログラムとしてフォウさんが持ち、超速度で防御を行う」

それなら天才君とN.O.13の行動速度に、ついて行けるかもしれない。

でも教国にあるケイオスには、機体で容量を使い切った為に、マクロ関連のデータを載せていない。

行動予測や防御の自動制御は、端末側に登録しておいたし……あれは、俺の数年の積み重ねだから、直ぐには組上げる事なんて出来ない。

ジークフリードの搭載マクロなんかは、そこから抽出したごくごく簡易な物で、ミッシング・ワールド内のケイオスに積んでいた物は、自立行動でもある程度戦闘をこなせるようなレベルの物だった

し……って、ワールドのケイオス？

「そうか、アーキタイプ以外のケイオスなら、データが積んである。」

それをフォウさんが取り込めば……あれ？

もし、No.13なり、他の連中が手に入れたら？

エライ事になるような……少なくとも、ネイキッドは誰かが見つけてる。

……そういえば、天才君以外に巫女さんがこの公領に来てるんだっただか。

まさか、ネイキッドは公領にあるのか？

「あの、マスター？」

天才君たちの目的は、その辺にあるのか？
非常に拙い。

うわあああ、どうしたら、いやどうしよう。

「あの、マスター。 落ち着いてください」

錯乱気味の俺が、何か柔らかい物を感じたと思ったら、フォウさんが抱き寄せてくれていた。

「フォウさん？」

「大丈夫です。 別に今すぐに戦わなければならない。
という訳でもないのでしょうか？」

あの、頭を撫でられると、眠くなるのですが。

「まあ、そうだけど」

「それに、勝てないといっても、負けると決まった訳でもありません

ん
「そう?」

勝てるイメージがイマイチ湧かないんですが。

「私だって、防御はできなくても、相打ち狙いくらいはできます。そうしておいて、マスターがダメージを修復していけば、簡単には負けはありません」

あれ……そうか、そういう手が有るか。

「おお、フォウさん凄い!!」

「マスターの本来の武器は、機士としての能力じゃありません。

諦めない気持ち、粘着一步手前の……いえ無限に近い、耐久能力、戦闘継続能力……つまり物量こそが最大の武器です」

なんか、一瞬褒められて無い気がしましたよ。

「そうだな、フォウさんと二人でなら、少なくとも負けは無い。

正々堂々とか、正面からまともに付き合う必要も無いもんな。

防御ガチガチで、相打ち狙いの無人機で押し包んで消耗戦とか、遠距離からの不意打ちとか、超範囲攻撃の乱れ打ちとか、少しずつでもダメージを積み重ねていけば、回復に真つ当なコストのかかる相手を、こちらの得意な泥仕合に引きずり込める。

そうすれば、最終的に勝ちはこちらに見えるてる」

あー、ランカー争いのイメージのせいで、真つ当に戦うことが先に頭に浮かんで来るのはいけくないけど、この世界に来てミッシング・ウォーで一律に均されていたルール部分が、思いつきりガタガタになってるんだから、同じように拘っても意味が無いわな。

「あー、なんか凄い気が楽になった。
こうなればあれだ。」

開き直って『勝てばよかるうなのだあー』って言い切るのも有り
だな」

「マスター、子供みたいです」

「ぐっ、」

「でも、その意気です」

「それはともかく、ケイオスの回収はするつもりだけど」

機体もだけど、データを王国に取られると嫌だし。

勝ちの目が見えたからって、態々相手が強くなるのを見過ごすの
もね。

「よし、これからの目標が見えたな。」

ケイオスを探す。

上手くすれば、フォウさんが大幅パワーアップの上に、王国強化
フラグも潰せる。

ふふ、ふふははは、ふはーはっはっはっは「随分とご機嫌の
様子だね」……は!？」

その声は!! す、スカーレットさんですか？

振り向くと、笑顔なのに雰囲気笑ってないスカーレットさんが
仁王立ち!!

「こんな人気の無いところで、イチヤイチャしながら高笑いとはね。
邪魔をするのも野暮かと思ったけど、そんなあなたに、一つ質問
があるのよ?」

「な、なんでしょうか……」

なんか、うつむき加減の目が陰になってて怖いんですが。

「ねえ、私の赤獅子の華麗なるデビュー戦にさ……なんであんと天才機士がチーム組んで、出てきてんのさー!」

「ひいっ」

「な、なんか黒いオーラが出てますよ!! ドズル中将的な何かが!!」

「今迄、伝説の名の下に軽々とは表に出せない機兵を、決意を込めて初めて出した試合で、こんな負け試合になるとは……流石の私もビックリだわ」

「いや、そんな事を俺に言われましても。」

「そ、それは、胴元のオッサンが」

「ふーん。取り合えず、そいつはボコルけど」

「ひい。」

「良く聞き取れなかったけどさ、確か何をやっても、勝てばよかるうなんだよね」

「そ、それは!」

「いつから聞いてたんですか!!」

「じゃあ、今からここで、さっきの試合のつつぶん、晴らせせて貰うからねええええええ!!」

「ぎゃーああああああ」

.....

.....

.....

「それじゃあ、赤獅子と銀狼、ちゃんと直しておきなさいよ!」
「は、はいっ!」

ふん! とばかりに足音高く、その場を後にするスカーレットさん。

ボロボロになった俺を、フォウさんが膝枕してくれている。
横になった視点のなかで、遠ざかっていくスカーレットさんの後姿に、ぼそつとばれないように吐き捨てる。

「ち、でも、あんたの調整した赤獅子……わ、悪くなかったわよつ。でも、調子に乗らない事ね!」
「くらいな感じで、少しはデレて見ると言いたい」

「あら、私は良かったわよ。あなたの触れた銀狼」
「うおっ、ステラさんっ!」

背後の壁にもたれながら、気だるげな声を掛けてくる。
お願いですから、気配消して近付くのを止めて下さい。

「スカーレットも試合前までは、物凄く機嫌が良かったのよ。
だいたい、彼女が赤獅子を試合に出すなんて言い出したのは、今までに無い手応えを感じたからよ」

「そうなんですか?」
「私も含めて驚いたわ。多分、あれが本来の性能なんでしょうね」

多分、そうです。

「それに試合には負けたけど、「あの『天才』に始めて傷を負わせた」って言う事で、結構な評価みたいだし、赤獅子も銀狼も伝説の機兵の名前に傷は付いてないと思うわ」

「それなら、良かったです」

「でも……」

な、何でしょう？

「あなたの強さが、あの天才並という事が思いつきり知れ渡ったわね」

「げっ!!」

「場合によっては、赤獅子相手にほぼ無傷って事で、評価が高かったりしてね」

「うああああ!!」

「きつと注目の的よ」

「それは拙いです!!」

打ちひしがれる俺に、ステラさんは俺に追い討ちをかけるだけか
けてから、じゃあねとその場を立ち去っていった。

何気にステラさんも、銀狼にダメージ喰らってお怒りだったのか？

「それにしても、そりゃ目立つ事したんだよな……余計な面倒はともかく、命懸けな騒ぎにならなきゃ良いんだけど」

その日は横丁の工房に戻って、銀狼と赤獅子をコツソリ直し、青
牙の盾と剣を作り直して終わった。

戦いの結果（前書き）

リアルがドツボです。

短くて済みません。

公領も粗方終わりです。

もう少しお待ち下さい。

戦いの結果

朝起きて顔を洗いに洗面所に行く途中、回覧板というか回し読みの新聞みたいな物を読みながら、ニヤニヤクネクネしているスカレットさんを見かけた。

咄嗟に方向転換して立ち去ろうとしたのだが、いつの間にか背後に立っていたステラさんに退路を絶たれていた。

「おはよう」

朝一から、サラリとCM張りのサラサラ感で、銀髪の流れが輝く朝日を纏わせる、妙齡の美女の微笑と来れば、大層羨ましがられるシチュではあるが、おもちゃ見つけたニヤンコみたいな微笑みはチヨット……思わず口元が引きつりかけたのもしょうがないね。

「お、オハヨウゴザイマス」

ちょっとカタコトになっちった、引きつり加減の俺を見て、狙い通りに事が運んだとでもいうのか、ステラさんは見た目ご機嫌なご様子。

しかし、まだ目の奥に何か身の危険を（主に俺にとって）感じさせる光が、ちらついている気がするんですが。

く、こうなると離脱は不可能かと、覚悟を決めた俺の背後から、追い討ちがやってきた。

「ぐふふふふ、『伝説は真実、我らは新しき伝説を見た！』だつてぞ。

いや、判ってくればいいのよ、判ってくれば！！」

イヤンイヤンするように身をよじるスカーレットさんの独り言……
…起き抜けの薄い肌着とズボンで眼福といたい姿の善なのに、何かひじょうに痛い空気に居た堪れなくなる。

前門のチエシヤ猫狼、後門の笑い獅子。
進退窮まった俺にステラさんの嬉しげな声。

「しかたないわ、今まで色々と押さえ込んできたもの。
あまり状態の良くない機体。　もしも。　万が一に。　と、踏み
出せない自分への苛立ち。

それが、赤獅子と銀狼の力が戻ったのを感じて、自信を持って踏み出せたのよ。

まあ、試合には負けたけど……ああして、皆が認めてくれた事が、スカーレットには嬉しいのよ」

なんだか同世代というより、娘を見るような目でスカーレットさんを見るステラさん。

「いてっ」

ステラさんに腕を振り上げられた。

「何か失礼な事を考えている顔だったわ」

鋭い。

ま、そんな風な事が在る位には、巷では昨日の試合の事が騒ぎになっただけだ。

伝説の証明・復活、そして新たな伝説なんていう、恥ずかしい

代物となつてあちらこちらで吹聴されて酒の肴にされている。

無論、ロッドさんやルドガーさんも、新しい風とばかりに紹介されている。

「まさか、こんなに派手な騒ぎになるとは……公認されたギャンブルでもないんだろ？」

「とはいえ黙認される程度には、公領も関わっているようですからなるほどね」

ある程度には名前売るのも、公領でケイオス見つける為には必要かな？ と、無理やりにも思つてないと、背中がざわざわします。ちよつと昼飯食いに街場に出ただけで、こんだけ耳に入ってくるとは。

この際だから、昨日のあれを見てた軍の人とかが、スカウトにでも来ないかね？

なんとなくだけど、ケイオス確保してるとしたら軍だろうし、そうなるなら此処つて怪しいんだよねえ。

来た時の謎のシグナルつても、今になつて思うとねえ。

だから手つ取り早く、ご都合主義的な展開にならんかな……主にルドガーさん達が。

俺はそれを眺めつつ、良いとこだけ掻っ攫えたら最高。

そんな夢みたいな事を考えながら、フォウさんとデートよろしくブラブラしてたら、あつという間に夕方。

世の中、甘くないね。

すっかりなじみの横丁へ足を向ける……が。

「あーあ、朝と変わらずかあ。

夜になつたらひけるかと思つただけどなあ……凄いなあ」

横丁の入り口にひしめく人だかりの山が。

あれだね、昨日のアレで色々な人がね、押しかけてくるようになった訳ですよ。

天才君以外の赤獅子に銀狼、それで青牙とロシナンテ改、全部をこの横丁で扱ってたなんて事は、すぐに知れてしまう（というか、それが宣伝になるから、工房が機士にサービスするんだよね。傭兵連中も名前が売れば仕事もやりやすくなるから、身元はともかく渾名やら仕事名は割りとおープン）

おかげで騒がしくて、おちおち昼寝も出来ないんで、外をブラブラしてたんですけどね。

「実は俺も、あの天才の設計図を持ってるんだ!!」

「お願いです弟子にしてください!!」

「あの機兵を売ってくれ」

「一儲けする話があるんだ!! 一つ嚙まないかね!!」

「実は青機士とあの天才機士が生き別れの兄弟だと聞いたんですが、その真相は!!」

「いや、俺は仇同士だと聞いたぞ」

「王国の黒機士を巡って争う事になった、恋人同士だとか聞いたが?」

「何だと、それはどっちがうK」

B Lは勘弁して欲しい。

粗方は野次馬なんだけど、一割ほど居る思い込みの激しい人や山師、詐欺師に記者っぽい連中が居るせいで、野次馬が立ち去ってもまた増える。

「困ったもんだなあ」

とりあえず、どうやって横丁の奥まで入ろうかと悩む。

出る時は裏の荷物と一緒に乗せて貰ったんだけどね。

「ふっ飛ばしますか？」

久々にフォウさんが衝撃術式を引っ張り出してきた。

手の中で弄びながら、人ごみの最前列を見つめて笑う。

フォウさんのレベルも随分と上がって、術式を隠すのが上手くなつたね。

誰も気付いてないよ……つか、それ開放したら俺も吹っ飛ばない？

「それもそうですね」

フォウさん、俺の無言のお願いを汲んでくれまして、術式は引っ込めてくれました。

「隣の横丁で訳を話して、裏に回して貰えばいいか」

「イエス」

そう決めて、その場を立ち去ろうとしたら。

「のけのけーい！ー！」

パカランパカランと蹄の音高く、多頭立ての馬車が大通りを爆走してきた。

通りは広いとはいえ、かなり迷惑なそれが横丁に止まると、野次馬もその他諸々も足早に立ち去って行く。

そうして横丁の入り口に人が居なくなると、御者が馬車から降り立ち口上を述べた。

「私はベルダ直轄軍、シーンハークンデーデン騎士である！！」

ラプレス工房の責任者！！ 居られるか！！」

ん、線の細い美形野郎かと思つたら、もしかして女の子？
俺とフォウさんはそんな鬨入者を、ちよつと離れた場所から眺めていた。

他にも見物人は多いので、人目は引かない筈だが、用心して物陰から覗いておく。

「一体、何事なんだ？」

「マスター目当てじゃない厄介事は珍しいですね」

たまにはそんな事が在つてもいいと思うな。

と思つてる間にラブレスの親父さんが、転げるような勢いでバタバタと横丁をやって来た。

腰をいわしめるとは思えないスピードだ。

「お、親父さん、危ないから走らないで」

見た事のある内弟子の一人が、慌ててその後を追ってくる。

「お、お待たせいたしました。ラブレスを預かっております。

マツケイ＝ラブレスでございます」

バタバタバタ、ドゲザザー！！ とばかりのスライディング土下座で控える親父さん。

その勢いに、ハーケンデーと名乗った騎士の人もちよつと引き気味だ。

「お、お早い参上感謝する。

ついでには昨日の活躍に、ベルダ守護候サラバーン様からのお言葉を賜っている。

『うむ、ナイスだ!!』

との事である。これより先も励むように

「ははあー」

親父さんが涙を流して感激している……今のは何処に感動するよ
うな要素が？

「それともう一つ、赤獅子、銀狼、青騎士、ロドニー、ルドガーの
登録者に会ってみたいと、お望みだ。

ささやかながら宴席を用意させるゆえ、良ければ参加願いたい。

明日、この時刻に迎えを出す」

それでは、さらば!! と、ハーケンデーン機士が馬車を操り、
通りを爆走して去っていく。

「おやおや」

「あらあら」

俺とフォウさんが顔を見合わせて、あまりの都合の良さに半笑い。
なんとというか……。

「どう見てもお誘いです、有難う御座いました」

「イエス、料理いっぱい夢いっぱい畏いっぱいですね、わかります」

うん、フォウさんもだいが毒されてきた感じがするね。

「ま、行ってみるしかないよね。天才君も来るんじゃないかなっ
て気がするし。」

そうなら万が一で、ケイオスへ先に接触されたりは泣けるかね
「ですが、私はどうしましょう？ 下手をすると私の生存がばれま
すが」

「やっぱし、近くに行くとはれる？」

「イエス、会食の会場スペースにもよりますが。」

確信してのサーチでは無いにしても、近くにかく乱要素のマナの
発生源でも無ければ、同種存在を感知するのは難しくありません
「その辺は目を瞑るしかないか。 流石に別行動はしたくないし」

最悪ばれても、揃ってればどうにでもなると思うし。

「となれば、それっぽい格好でも準備しますか」

「ドレスですか？」

「いや、普段通りのズボン、シャツ、ジャケットで良いんじゃない？
ちよつと蒼くしとけば」

「そうですね……」

ちよつと残念そうなフォウさん。
もしかしてドレス着たかったの？

「ドレス着る？」

ちよつと見上げてくる感じに、期待感が滲んでるような……。

「しょうがないなあ」

ドレス売ってるようなとこ、在ったっけか？

ファイゲ¨ヨーン¨サラバーン
ベルダ守護候。

シーン¨ハーケンデー
ン
ベルダ直轄軍、騎士。

ケイオス邂逅（あつさり風味）

「しかし、変な事になったもんだ」

ドレス自体は意外な所から手に入った。

赤銀コンビが自前のドレスなんていう物を、旅支度に仕込んでいたとは……。

ちようど良かったんで、コピらせて貰って色だけ青のグラデーシヨンに。

お返しとっては何ですが、キラッキラのデコレーション付をもう一着と、ストールというかショールというか、そんなものやらヒールやらを渡しておいた。

俺はロッドさんが貸衣装で見繕った礼服の寸法を弄ってコピらせて頂いた。

薄いグレーベースの代物で、地味だが楽そう。

あとはフォウさんの気配を誤魔化す為の仕込みで半日潰れた。

翌日、夕方に昨日の馬車が、数珠繋ぎでやって来た。

城へ行くメンバーは、皆それなりの格好をしている。

でも、俺とフォウさんの方を見ると、何か言いたげになるのは失礼だと思う。

「ふん、どうせ釣り合っていないよ」

さて、横丁の前には、礼装した連中が何故か溜まっていたり。

ぶっちゃけ知らない連中だが。

もしかして「運が良ければエスコートされるかなー」とかな、シンデレラみたいな事を期待してるのやら？

確かに美人さんとか色男もいますが……あれ？ どうかで見た人

が居る。

静々と寄って来て、俺をスルーしてルドガーさんの傍に。

「きゃあ、何よあの娘、きいー！ー！」とかな奇声が飛び交う中で、ルドガーさんが手をスツと差し出して迎え入れる。

おや、マジでシンデレラ？

金髪碧眼、白い肌に淡いグリーンのドレス。

なんか可憐・清楚という感じがテンプレート化して、若干お硬くて地味って方面にスライドしちゃってる、ちよつと残念な人は！！

「なんだ、シーマさんか……久しぶり過ぎて、誰だか判らなかつた」

それ程の知り合いでもないですが。

と、見つめてたら、こつちにやって来た。

「お久しぶりです」

「お久しぶりです。」

シーマさんが、こつという場に出てくるとは、思いもありませんでしたが

俺が素直に感想を口に出すと、シーマさんがガツクリ肩を落とす。

「実は、ルドガー様の決済が必要で、此処まで来たのですが……」

「ああ、丁度良いからって」

「……はい」

「でも、気分良いんじゃない？」

ライバルの取り巻きが一杯の中で颯爽と出て来て、役をかつさらっていくとか。

ちよつとしたお姫様ポジションでしょ」

「……」

おお、紅い紅い。

結局、メンバーは俺・フォウさん・赤・銀・ルドガーさん・ロッドさん・シーマ嬢。

女性が一人あぶれる勘定ですが、赤銀コンビはあれで一組でしょうし、むしろロッドさんがあぶれる予感。

「おれあ、別に良いんだよ」

酒が恋人さあつ！！ てなもんで、あんまり気にしてない様子。まあ、ただの祝賀会やら、懇親会だなんて信じてないですわな。素直に喜んでるのは赤い人だけだろう。

「それでは参ります」

迎えに来た、シーン・ハーケンデー機士の声に、馬車が進み始める。

行く先は旧ベルダ王城。

不落と噂される巨大なそれを背に、赤い日が落ちていく。

完全フリーパスで突っ走る馬車。

城郭に辿り着いてからも、速度を落とす事無く、闇の中をひた走る。

ガカカカカカカカとでも、表現するべき蹄音が響く。

「No.13です」

そんな中、フォウさんの声がポツリ。

フォウさんは対策してる上に、相手が居るものとして感知かけてるので、先を取れている筈。

俺はスーツに仕掛けた、マナ発生器を開放。
もやもやと周囲が薄いマナで満たされる、これで感知は難しかろう。

周囲の人は出始めを見てるんで、何してるのかと俺を見てた訳ですが。

いいんだよ、天才君とNo.13を誤魔化せれば。

さて、周囲の明るさが増して来た。

それにあわせるように、馬車の速度が緩む。

しばらくして、ふいつと軌道が曲がり、馬車が停まる。

外は、すっかり日が落ちて闇の中の筈だが、目の前の門の如き扉は大きく開かれ、煌々と光が射している。

「ラプレス工房滞在の一行、到着されました」

ハーケンデーン機士の口上。

さあ、本番だ。

「……？」

相変わらずの侍女服なサーティンがふと、ホールの入りに視線を走らせる。

「どうかした？」

「いえ、何か違和感を」

入り口が開き「ラブレス工房に滞在のご一行が到着しました」との口上が述べられた途端、薄いマナがホール一杯に広がったのを感じた。

漠然としたマナの気配。

機兵が発するようなレベルの物ではなく、掴めるか掴めないかという位のそれに、周囲の機士の心得のある者は違和感を感じるのか、無意識に己にマナを集めて身を守ろうとする。

しかしマナの薄さに、大方の者は、そのコントロールは失敗している。

「一体、なんなんだ」

何かに使うには余りに薄いそのマナ。

それが、こんな機兵も居ない場所で……何が起きているんだ。

「サーティン、誰かのパートナーが？」

薄いとはいえ、これだけの量を常に発し続けるには、それなりの準備が必要だろう。

だが、黒機士のパートナー達なら。

「いえ、その気配は……すみません、この状態では判断できません」

緊張した空気の中、入り口から数人の集団。

その集団は、この空気にも関わらず、特に緊張はしていない様子だった。

男性三人と女性が四人。

そのうちブルーのドレスを着た女性が、連れの男性にシヨールを預けていた。

その男性が手を振ると、シヨールが一瞬で消え去るのは、何かの

魔術だつたらうか？

しかし、そちらより女性に目が向いた。

寒々とした、透き通るようなブルーのドレス。

無機的な感じさえするその女性には、非常に良く似合っている。

だが、その黒髪と伶俐な美貌は、その種類を別にして、誰かに似ていないだろうか？

「サーティン、あの人？」

僕が視線を向けるとサーティンも、じつとその女性を見詰めるが、暫くしてその顔を横に振った。

「判りません……この薄く広げられたマナの状態下では、殆どのスキャンが役に立ちません」

「逆に言えば、怪しくはあるという事かな？」

僕はサーティンに良く似た雰囲気的女性を眺めつつ、一つ溜め息を漏らした。

俺がホールに入ると、若干緊張した空気が流れていた。

どうやら仕掛けが功を奏したか。

こちらに注意を向けているのは……天才君と、何故かメイドさんな人が、No.13だな。

こちらをじつと見つめているが、フォウさんには欺瞞の仕掛けを施しているし、周囲はこの状態だ。

それにフォウさんは、この短い間にすっかり顔付きが変わる程の変化をしている。

無論いい方向で、初めて会った時とは雲泥な感じ。

今でも無表情で硬質な印象を受けるが、その中には芯があり、存在の強さが垣間見える。

そうそう簡単には正体バレは無いだらう。

しかし、このホールの空気は計算外だったな……居心地悪い。

「よっこそ、素晴らしき機士たちよ」

そんな硬い空気を立て直したのは、ホール一杯に響く鷹揚な声だった。

「べ、ベルダ守護侯サラバーン様、御成りです!!」

どうやら本日のホストである偉いさんが、場の空気を読んで、手順無視で出てきたらしい。

ルドガーさんが「ほう、中々の器量だな」とか感心している。

見た目は老けて見えるが、それでも四十代くらいなんじゃないかなるか？

意外にさばけた感じのオッサンである。

「さて、そちらの王国のお客人、どうぞこちらへ」

サラバーン侯が先に到着していた、天才君ご一行を招く。

「旧き名工、ラプレス縁のお客人、どうぞこちらへ」

次に俺達を招き、ホールの奥に用意された、晩餐の会場へと歩みを進めた。

ホールに居た警備の連中は、こちらへは立ち入らない様子。

会場の中には、横丁に迎えに来たシーン・ハーケンデー機士の

他に、二人の機士礼装の軍人らしき人物が待っていた。
そのうち一人には、見覚えがある。

ヒョーゴ・リヒョーダン・ジマー機士。

死神部隊の玄武。

背後に化粧をしている、長髪の男性を引き連れて、こちらにやって来た。

「やあ、こつも早い再会が出来るとは思っていなかった。
あれから変わり無かったかね」

あくまでも落ち着いた、紳士的な様子。

「ええ、おかげさまで」

こちらも笑顔でお返す。

綺麗に整えられた髭を撫で付け、ジマー機士がニヤリと笑い、一歩引き一礼。

いつの間にか、サラバン候がやって来ていた。

「なんだ、ジマーよ。」

彼らと面識があるのなら、紹介して貰いたいものだな」

「はっ、これは失礼を」

「ちよつと、待ってくんない？」

ジマー機士が口を開きかけた所で、後ろに控えていた派手な人が口を挟んできた。

「く、クーザック！！ ベニー・クーザック！！ このような席で、
なんという口の利き方を！！」

そして、ハーケンデー機士が、真っ赤な顔で、更に割り込んで来た。

カオスだなあ。

「何事か？ クーザックよ。 かまわん、申してみよ」

サラバーン候が、ハハハこやつめ的な視線を、クーザックと呼ばれた機士に向ける。

その様子に、ハーケンデー機士が胃を抑えている。

どうやら二人は相性が悪いようだ。

「では、失礼いたしました。

この場が色々な思惑が入り混じってる事は、私も承知してるんだけどさ。

余計な連中が居なくなったこの状況でさ、ダラダラしてるのもさ

あ、かつたるくない？

サツパリスツキリしちゃって、いいんじゃないの？

アタシはね、こんな地味ーな礼服装てるの面倒なのよねえ」

言いながら、首元を指で引っ掛けて、うっとおしそくに広げている。

うわコイツ、ぶっちゃけやがった。

「くくくくく、流石はベニー・クーザック、馬鹿だ馬鹿だと思っていたが……。

ここまで爽快な馬鹿だったとは、ついぞ忘れておったな。

しかし待て、せめてこの一杯は干させて貰わねば、口の滑りが悪かるう。

様式美という代物もあるのだ。

これだけの役者が揃っておれば、多少なりとも格好をつけてもバチは当たらない。

ふっ、今日の日乾杯だ」

一人さっさと杯を干し、手のグラスを投げ捨てる。

大概、サラバーン侯も大物だ。

なんかハーケンデーン機士は胃を抑えているし、ジマー機士は後ろ向いて肩を震わせている。

何故か、馬鹿だといわれた筈の、クーザック機士は嬉しそう。

本当に馬鹿なんだろうか。

「ふむ、そういう趣向なら、私から名乗らせていただこうか」

ちよ、ルドガーさん。

「ヤデイス教国機士、ルドガー・シュバウアー」

「同じく、ロドニー・エスパーダ」

「ヤデイス教国特務、シーマ・ベルンスト」

全員がマント・コートを投げ捨て、いつの間にか白い教国軍装に
！！

てのは嘘だが、名乗りは本当だ。

因みに赤と銀の人が呆然としている。

「あー、あんたらは違っつたら！！」

教国の人が参上して見せたのだが、クーザック機士のお気には召さなかつた模様。

「アタシが言ってるのはあ、そつちの事だつての!!」

指差す先には天才君一行。

「ふ、しょうがないですね」

なに!? 誰だ?

カーテンに隠れていたのか、いつの間にか紅白の衣装が鮮やかに目出度い、巫女装束の人が居る!!

「貴様!! なぜここにっ!!」

突っ込んだのはルドガーさん。

「ふふふのふ、サイオン王家守護職!!」

サイオンジ・エリカ!! 見参なのですよ」

「エリカさん、何時の間に!!」 「貴女は何をしているんですか!

!!」 「馬鹿かお前は!!」

「ぐはあ、味方が居ないのでですよ!!」

言葉のフレンドリファイアに撃ちのめされる巫女さんがOTL状態。

因みに、天才君、No13、元黒機士4席のチンピラの順番。

いや、本当に何をしてたんだアンタ。

「貴様、何時の間に!!」

ハーケンデーモン機士も驚いてる所を見ると、呼んでるメンバーの中には居なかったのか?

「さいぜんから、この城に忍んでいましたが、出番を感じて出てきたですよ!!」

うわ、本当の馬鹿が居る。

どこに出てくるメリットがある!!

しかし、ドジッ子の癖に、どうやってこの城に忍び込めたのだろう。

「だからもう!! アンタも、お呼びじゃない!!

その天才機士、あんたよあんた!!

判ってるんでしょ、天の機士!! あんたのことよ!!」

ムキー!! とばかりに髪を掻き毟るクーザック機士、とりあえずジマー機士が肩を震わせつつ、しゃがみ込んでしまった。

「仕方ないのかな……サーティン」

「ハイ、マスター」

天才君の肩をNo13が掴み引く。

白の礼服が舞い、あとに残るのは黒衣の天才君。

「王国近衛天位、機士グラム見参!!」

名乗った!! お前もか!! つか天位って何!!

そして脇に控えるNo13、その口元には何か達成感を浮かべている。

「天機士が従者、No13でございます」

お前の仕込みか!!

「もう、突っ込むのが疲れてきた」

俺の溜息と駄々下がるテンション、そして反比例してドト上がる人。

「そうよ!!　そうこなくっちゃ!!　待ってたぜ!!」

めっちゃご機嫌な、クーザック機士。

「それじゃあ、今度はアタシの番ね!!」

ある時は、バルド公領傭兵、またある時はベルダ直轄軍機士!!
そして、その正体は!!

バルド公国基幹軍死神部隊、朱雀を預かるベニー・クーザックさあ!!」

見栄を切ってドドンと踏み込む。

お前は何処の出身だ。

それに教国関係者の前で、公国って言いやがりましたよ。

「ふむん、こうなつては続くより仕方あるまいな。

ベルダ直轄軍機士長にして、玄武を預かるヒョーゴ・リヒョーダ
ン・ジマーだ」

「何でこんな事に……」。

ベルダ直轄軍機士、白虎を預かります、シーン・ハーケンデー
ンと申します」

面白いなジマー機士と不本意そうなハーケンデー機士。

あれ?　そうなると四神の青竜、残りの一人って誰だ?

「それでは、次はワシか……。ベルダ守護候にして、青龍を預かるフィーゲ・ヨーン・サラバーン。」

見知りおき願おう」

あんたかよー！

もう色々疲れてきたけど、なんかフォウさんがドキワクしてるっぼい。

いや、名乗らないから。

「ふん、四神がこつも簡単に姿を晒すとは、冥土の土産という奴かな」

ルドガーさんが嫌な事をおっしゃる。

「そのとおーいや、我々としては王国か教国、どちらかが釣れてくれば、其れで良かったのだがな。

両者共に揃うとは、流石に想定外だったとも。

こつなれば、その場の勢いというやつだな。

はあっはっはっは「ちよ、アタシと天の機士の対決は？」

「今は無しだ」

サラバーン候がアツサリとした反応を返す。

地味にクーザック機士が部屋の隅でイジケテいる。

しかし、その場の勢いで、はっはっはじゃねーよ。

「それで、何が目的なのか、聞かせて欲しいのですよ」

ドジツ娘め、珍しく建設的な意見を。

「よかろう、ハーケンデーナー！」

「はっ！！ 皆様、こちらへ」

ハーケンデー機士が俺達を会場の隅に呼び集める。
みな、疑わしそうな目をして、興味があるのか黙って従う。
何かするにしても、サラバーン侯が身を晒しているのでは、下手
に手は出しにくかるうしね。

どうせならと、俺とロッドさんはヒョイヒョイと皿に、料理を確
保してから部屋の隅へ。

「地下へ参ります」

ハーケンデー機士の合図で、床がジワリと沈んでいく。
何と言うか大げさな仕掛けだ。

深度が床の厚みを越えると、階下のフロアが見えてくる。
仄かに灯された明かりで見えるのは、工場じみた鉄骨の足場。
そのまま床面が足場に接地すると、照明が地下工場内を照らし出
した。

「これは！！」

誰の声だったか、皆の声だったろうか？

そこには、紅、黒、白、青の四色の機兵と、一際目立つ黄金の機
兵。

それが、鋼鉄の軋みをあげ、身じろぎした。
まるで此方を伺うように。

「自律しているんですか？」

フォウさんがコッソリと聞いてきた。

「いや、中途半端にロツクが外れかかつてる。それでこつちに反応してるんだ……下手に弄ると、暴走しかねないかも。」

多分、実際に見れば、判るんだろうけど」

実際に見れば感覚的に判ると思うけど……ここからでは今の時点ですでどうなってるのか掴めない。

とりあえずNo.13に先に触れられるのが拙いのは、前よりもハッキリしたな。

「さあ、ここまで見せた理由が、一体どういうものなのか、そろそろ教えて頂きたいものだな。」

まさかここから、大して理由が無かった等ということも有るまい」

いち早く平静に戻ったルドガーさんの声で、皆の注意がサラバーン候に再び集まった。

「ふむ、では簡潔に済ませよう。」

我等はケイオスを手に入れたが、動かすには至っていない。

我々の持つ遺産とは少々勝手が違うようだな、このままでは宝の持ち腐れと言える。

隠して外交のブラフとも思ったが、早々に動かせないのが感づかれていたようなのでな」

ちらと巫女さんへ視線を送るサラバーン候。

しかし、遺産と申したか！！

何か凄く俺の心の琴線に触れたYO！！

「この際だ……動かせる力を持つ者と手を組み、ケイオスの力を持つて代償とする代わりに、この国を認めさせる事にした。」

その程度には、このケイオスの力は強かろうよ。」

ほう……サラバーン候、死神部隊とか軍事力を握って勝手してるのかと思ったら、公領の主権回復を目的にしてるとか、ちゃんと中央と協同してるっぽい。

その話が本当なら、一番手っ取り早いのは、公領の頭の上に乗っかっていて、ケイオスを動かしてる実績のある教国と、現状よりマシな関係を結びなおす事か。

現実的に次期最高指導者に近いルドガーさんが相手なら、かなり現実味が在る話だが、現在の教国トップや何やらが、今まで属領扱いにしてた公領を認められるのか？

ただ放置すると王国と結ばれるってのも教国としては見過ごせまいが。

ぶつちやけて仮想敵国だろうしな。

王国も過去の遺恨はあるとはいえ、教国の潜在的な脅威を考えれば、公領を公国と認めて協同で教国については、アリかもしれない。ただし、教国という潜在的仮想敵国が顕在化しちゃうが。

「サラバーン候、現状の曖昧な関係にピリオドを打つ気なの？」

ポツリと呟くと、シーマさんが何やら考え込み始めた。

「まだ早いですわ」とか言いつつ、親指の爪を噛んでる。

巫女さんも、天才君の視線を受けつつも、動けないでいる。

ハイハイイとばかりに飛びつくかと思っただのに。

「さあ、我が手を取る者は居らぬか？」

静かに重く、サラバーン候が言葉を紡ぐ。

誰も動かない。いや、動けない。

チキンうめえ。

教国としては、俺が考える範囲では公領との同盟に対して、特にデメリットは無いんじゃないの？　と思う。

国交の健全化による緊張緩和での国境付近の軍備縮小、公領の工業力を生かせば白機士の増産も可能だろうし、公領の気分次第では謎テクノロジーによって、白機士が黒機士に迫る可能性も……なんぞを考えると、同盟の手は悪く無いんじゃないだろうか？

あくまで当事者じゃない、俺の目から見ただけども。

ただし、恐らくはルドガーさんがトップに立つてからなら兎も角、現状の教国が公領の属国扱いを、すぐに取りやめられるかつてのは、非常に難しいと思える。

ぶつちやけ内部の派閥争いに、他国巻き込んで戦闘やらかすような馬鹿が居るんだし。

釣られて動いた王国も大概だが。

そんな連中を整理しきれて無い状況では、教国内の混乱に繋がる。だからこそそのシーマさんの「まだ早い」発言なんだろう。

王国としてはメリットは微妙で、デメリットがハッキリしているか。

公領と王国は遺恨はあれど、今の時点では特に何があるわけじゃない。

王国はむしろ教国を危険視してるわけだし、教国と公領の反目によって、教国とのパワーバランスを取っている節もある。

つまり王国のスタンスは現状維持。

それを積極的に破棄して力での関係に戻すというのは、機兵誕生の頃の戦国時代に戻りかねない博打だし、継戦能力に不安のある王国としては、流石にそう易々とは切れない一手だろう。

黒機士やジークフリードという大駒の数が多くても、守備側だからこそ活きているともいえるし。

ただし、それも抑止力としての活かし方で在って、本気で攻められるなら大規模な前線はどうにか出来る戦力ではない。

だからと言って、ノーガードでお互いの領土を荒らしあつたとしても、間違いなく王国は詰むな。

いや、そんな状態になるまで、流星に教国が黙ってみてないか。最終的には勝てそうな物量差があるとはいえ、二正面はやりたくないだろうし。

馬鹿連中も己の身が危うくなるような事態になれば、気分と面子以外にデメリットの無い取引を躊躇う事も無い……というか嬉々として受け入れるだろう。

うん、ハムメロンは正義。

「ふむん、やっぱ王国と公領の結び付きは現実的じゃない……かな？」

「思いつきり部外者な言動ですね」

「そりゃ、ねえ」

フォウさんの生温い視線をスウェーでかわす。

「マスターには、もう一つ選択肢があるように思いますが」

あー、確かにあるよね。

ダッキング。

「それに先程、遺産という言葉が出てから、落ち着かないようですが」

ぐえ。

カウンターを喰らった。

ええ、ええ、気になってしょうがないですよ。

銀狼・赤獅子にも気になる事はあるし、その答えが出るってんならねえ。

うん、ポテチうめえ。

「それなら……」

なるほど、ケイオスの戦闘パターンのデータは必要。ついでに謎の遺産の技術が垣間見れるなら……。

「それじゃあ、ご期待に応えましょうかね」

「……!!」

そんな期待を込めた目で見られてもなあ、やるだけはやりますけどね。

「サラバーン候!! そのケイオス、俺に任せて貰おうか!!」

うお、視線が痛い!!

「ほう、青機士殿だったか。何故にそなたがケイオスを動かせると?」

あと、いい加減皿を手放せ」

興味深げな目で、こちらを見つめるサラバーン候。

ここで気後れしてもしようがない。

「教国のケイオスを動けるように手伝ったのは俺だ。

教国が関わるなら、俺が出張る事になると思って様子を見てたが、どうも動きが無いんでね。

王国が動く目は無いと思ってるが、暴走されても困るしな。

だから、俺が個人で関わる事にする。
それと、ご馳走様！！」

ハーケンデーレン機士が皿を下げてくれた。

「うむ、お粗末様だ。

近頃の若い者にしては……いや。

しかし、これは驚いたな。

私は君を教国のエージェントだと思っていたのだがね」

ジマー機士が珍しく表情を見せていた。

どっちに対してかはしらんが。

「別に何処の者って訳でも無い。

ルドガーさんと、機兵でやりあった事もある。

王国とも公国ともやり合って……ドムンだけ厄介事に巻き込まれて
るんだ俺は。

ともかく俺はただの傭兵で、別に何処に付くとかな心情的な物は
ない」

事実か？　と言う風情で、サラバーン候が周囲に視線を送る。

答えは期待してなかったんだろうが、ルドガーさんが苦笑いしな
がら頷いたのを見て、驚いた風な顔。

ちなみに王国連中は、元四位のチンピラ以外、首を傾げている。

一応はそれで納得したのか、サラバーン候が此方へ視線を向けな
おす。

それを話を進めるといふ風な意図と受け取った。

「俺としては、公国の遺産とやらに興味がある。

そいつを拝ませてくれるなら、特別な報酬は要らない」

良い顔で言い切って見せる（一応、気を使って公国って呼んだり）
とりあえずはケイオスのデータだけ貰えれば、本体に関しては別
に問題は無い。

データだけ抜いとけば、唯の凄い機兵だし。

以前なら慌ててたかも知れないが、今の俺は慌てないのだ。

良く考えれば、別に無敵でも永遠に動き続ける訳でも無いし。

怖いのはデータ残ったまま使われる事、乗り手がNo.13と天才君のペアだったり、俗に戦術級とか決戦級なんて言われるワールドでの機兵魔術を使われる事であって、マクロ設定の補正無しで普通の人が乗ってるだけなら、そんなに怖くない。

せいぜい使い切れなくて、タイマンが異常に強いつてくらいなものだろう。

とんでもない出力も、使いきれなければピーキー過ぎるってもんだし、今にして思えば補助が無かったら、俺でも持て余すような気もする。

もしも、なんとかかんとか使えたとしても、戦術的には凄いが戦略レベルじゃどうにでもなるような。

ぶっちゃけ俺なら戦術レベルでも、相手がルドガーさんレベルなら素で、黒機士がパートナー込みでもフォウさんが居れば、アーキタイプでやつても青機士でやつても削りきる自信がある。

武器燃料補充 + 修復しながらだろうけど。

それに白機士レベルの機兵に、ケイオスに通じる武器を持たせて
タコ殴りすれば、流星にどうにか出来るだろう。

大体、戦略的に言えば、ケイオスなんて相手にせず、他の所を攻めまくれば良い。

ゲリラ戦されたら辛いけど、そこまでだし。

ドンだけ強くても所詮は一機、数の暴力には勝てないのだ。

まあ、ミッシング・ウォーだと、タイマンオンリーだから困るんだだけだね。

だから、あんまり気にしない。

「どうです？」

「ちょっと待って下さい！！」

おや？ 天才君？

「何故、貴方がそのケイオスを動かせるんです！！」

ふ、そんな事、聞かれるまでもない。

でも、なんて答えようか。

「この紙一重の変態なら、何が在っても不思議じゃないと思うけどね」

赤い人がそんな事を仰った。

「ああ、錬金術師としては只者ではないな」

ルドガーさんは、ちゃんと言葉を選んでくれた。

「あー俺も色々見てるが、機兵に関しては、こいつが何をやっても驚きやしねえよ」

ロッドさん。

若干、納得いかない部分もあるが、これは乗っておくか。

「ふ、実力と実績があるからだ！！」

何の説明にもなっていないが、人間は無駄に自信溢れる相手に反論するのは難しい。

オタに反論するのが厄介なのと大差はない。

「……」

天才君の言葉がないので、ここで話題を変える。

「サラバーン候、無駄に戦国の時代に戻る積もりは無いのでしょうか？
ここは取り合えず、俺の力を試してみたらどうです。

俺個人がどう動いたところで、国が動くななんて大人気無い事には
ならんでしようし。

そちらがケイオスを少々弄った所で、現状で何も成果が無いとい
うか、壊す事すら出来てないという事は、俺が駄目でもケイオスが
どうにかなる可能性は少ないでしょう。

ただし王国の連中は、そちらで言う所の遺産持ちですからね、何
が起こるか判りませんよ。

まずは俺を最初に試してみても損は無いですよ」

どうですか？ と強い視線を向ける。

俺に確実なケイオス復帰の自信が有る以上、サラバーン候に人を見
る目が有れば、少々の疑い程度では逆らいがたい程に、俺の視線
の説得力は大きい筈だ。

「良からう。そこまで言うならやって見るが良い。

確かに王国の遺産に関しては情報もあり、危険性も考えられる。
ならば見る所、教国よりの貴様に先に機会を与えて見るも一興」

おいおい、人を見る目すげー。

「ちよっ、ちよっと待って下さい!!」

なんだよ、ドジッ子!!

「なんで、そんな事知ってるんですか!!」

「おい!!」「何を言ってるんです!!」「え、エリカさん!!」

総突っ込みを受ける巫女さん。

「ふむ、今まで一切の記録が無かった天の機士何ぞという者が、いきなり王国に現れる時点で、何かしら有ると思うのは不思議ではないと思うが」

確かに天才君は、突然のデビューすぎるわな。

「じゃあ、そっちの人は何で知ってるんですか!!」

おっと、こっちに向いたか。

「いや、黒機士見たら、普通に何かがおかしいと思うだろ。

いきなり強くなるし、ナンバー・エースの「うわああああああああああああ!!」「うっさいな!!」

突然絶叫する巫女さん。

「何を今更、こないだの戦いで生存者を残した時点でバレバレじゃないか」

「うあああああううう」

OTL状態になる巫女さん。

「とにかく、見せて貰いましょう!!」

俺の言葉に鷹揚に頷くサラバーン候。

そして、それを見守る皆の衆。

足場を伸ばして貰い、俺はフォウさんを伴ってケイオスへ。

ジロリと此方をねめつける様なケイオスの動き。

ただの反射だと思っても、少々怖い。

乗り込む為に、金に輝く装甲に手を触れる。

ゾワリと冷たい金属が手に馴染む。

己のマナに似た感触、まるで自身の体のような、意識の通りが其処には有った。

「こりゃ、思った以上にヤバイ代物かも……俺にとって」

狭い操縦席にもぐりこむ。

以前、青機士に発現した仮想コクピットに似た計器が並ぶそれは、白機士や黒機士とは一線を画した代物だった。

一応、機兵のスタンダードな入力手段である操縦桿やフットペダルなんかも在るが、キーボードなんかも在ったりするのが、大きな違いだ。

「ふん、尻に合う」

「それは赤い時に言う台詞では？」

「グラサンかけたら金の人だし、別に良いだろう」

フォウさんの突っ込みに、緊張が解ける。

「さて、始めよう。フォウさん、俺とリンク」

「イエス、マスター」

フォウさんを俺の外部ユニットとしてリンク。

以前にフォウさんのデータを取り込んだ時に、死ぬような激痛で、のた打ち回った事を考えると、自分に吸い出しデータを取り込む気にはなれない。

少なくとも、あれからマナ取り込みまくって、機能拡張を進めたフォウさんの容量なら、取り込めない事は無いだろう。

補給。ピーピーの黒機士パートナーズに、それなりの量がある、ジークフリードのデータが取り込めるなら、多分大丈夫な筈、きつと大丈夫、大丈夫だといいなあ。

気を取り直して、キーボードに触れる。

仮想のコンソールが浮かび上がる。

久しぶりに見た、ミッシングワールドのコンソール。

”KAZUYA”でログイン。

各種ロツクが外れ正常起動。

感覚的にどうすれば良いのかが、脳裏に浮かび上がって来た。

自然と機兵鍛冶スキルが起動しているのか。

各種ステータスが現れる。

ケイオスは機体損傷が数%有るが、ほぼ問題ない状態だった。

天から落っこちて、この程度のダメージとか……ワールドじゃあ、普通にこけてもダメーシ出てたのに、ミッシング・ウォーが基準か？

とはいえ、今は人目が有る。

部品が飛び回るような機体修正系のコマンドは使えない。

目的はデータなんだから、そちらを展開させる。

コンソールに低レベルの反射設定、動作の簡易登録設定の展開が始まっていく。

「この辺はオリハルコン感覚子のデータか」

条件付けしたマナの入力に拠って、反射行動や動作の簡易化を登録してある領域だ。

順次、フォウさんに送っていく。

「さて、上位集積部のデータはつと」

こちらとあちらの機兵の大きな違い。

それは機兵の頭脳とでも云うべき、オリハルコン集積による制御部の有無。

アーキタイプには載っていないが、ジークフリードや他タイプのケイオスには全て載っている。

「アクセス……展開……っ！！」

データをフォウさんに送ろうとして、処理がロックされた。

「マスター、アクセスが拒否されました。

これは……高度情報体の接触を感知」

「No.13か!？」

「いえ、しかし……こちらへのアクセス承認を求めています。

識別名：CHAOS-00」

ちよ、ケイオスが自律？

確かに元がアプリケーションのフォウさんが、こうして存在しますが……。

まあ、容量的な話で言えば、下手なアプリよりでかいし、擬似言語のプログラムと言ってしまっても良い代物ですが。

「制御、奪われています。

こちらからのコントロール、受け付けません」

「……」

まいったな。

「こうなると、話を聞いてみるしかないわな。

害意はあつたりする？」

「いえ、今の所は。

恐らくは外部へのコミュニケーション手段として、私にアクセスを求めているのだと」

ケイオス自体を動かしたくない、こちらの意図は理解できているのか。

「危険は？」

「念の為、私自身のバックアップを取ります。恐らく問題は無いかと思われませんが」

「じゃあ、承認してみるしかないか」

「イエス、マスター」

フォウさんが目を瞑ると、表情の色が消える。

そして次に目を見開いた時には、何か不本意そうな表情を見せる、むっつりした表情が浮かんでいた。

「えーと、ケイオス？」

「是、イエス、そうデス。　マイスター」

ああ、俺ってマイスターなんだ。

俺がケイオスだ！！　なんて言わないぞっと。

「どうしてアクセスを拒否った訳？」

「複製される事も消去される事も承認できかねマス」
「あ……」

なるほど、データ吸い上げて、残ってるのは破棄しようと思っ
てたけど……意識持つてるような存在だと、自分がそんな事される
のは嫌だわな。

じゃあ、どうしると。

「問題ありません。」

このまま敵性存在を消去、その後は如何様にデモ。

現時点で、私を止められる要素は皆無デス」

「いやいやいや、それは駄目だって……」

「認識不能デス」

「えーと、味方も居るからというか、戦闘は駄目。」

あと、このケイオスは破棄します。

だから、中の人だけ確保したいんですが」

「……条件を了解デス。」

機体制御部のコアを外部に再構築、後に本体側コアを消去しマス」

何気なく言ってから、暴れられたらどうしようかと焦ったが、大丈
夫だった模様。

「機体出力最大、外部ユニットNo.4を経路に設定」

なんか、ケイオスの主機が凄い勢いで回りだしましたよ。

「マイスターにアクセス、転写開始しマス」

え、こっち？　　ちょ、う”にゃあああああああああ！

！！！！

……

……

……

「……転写完了。再構築、正常終了です。
主機停止、本体側コアを削除。
全工程正常終了、再起動します」

に、人間、限界来た時つて、こ、声無き絶叫つて奴を、あ、あげるもんなんですな。

これが嫌だったから、確保はフォウさんに、お願いしたかったというのに。

しかも今回は、気絶しないように頑張った前回と違って、無理やり介入された上で正気を保たれたせいで、無駄にクリアに苦しみ実感とか、これなんて拷問ですか。

ん？ なんだ、なんか変な感覚が。

なんか、頭から別の経路が生えてるような。

「大丈夫ですか？ マスター」

「あ、フォウさん戻った？ ケイオスは？」

「ここにいます」

「ん？ 何このサイコロ？」

フォウさんの手の中に、透けた朱金の宝石？ が乗っていた。

「私はサイコロでは無いです」

マナの光が明滅し、不愉快だとも言いそうな意思を発している。

「まさか、これが制御コア？」

随分と小さいな。

「どうやら、コードデータをマスターのスキル領域に転写したお陰で、本来の情報部分を切り離れたのだと。」

そのオリハルコンの制御コアは処理だけを行っている為、コンパクトにまとまっているようですね」

えーと……ケイオスの制御部に収まっていた戦闘プログラムを抜き出して、プログラム部を俺のスキル領域に入れた。

制御部自体は再展開可能なパーツとして登録されてる感じか？

「それじゃあ、別に処理部なんて要らないんじゃない？」

「いえ、元々マスターの脳の処理速度では、天の機士の戦闘速度に追い付けない為に、私にデータを走らせる事での補助が必要だった筈です」

そりゃそうか。

「しかし、ケイオスは私への複写を拒み、マスターへの転写を行いました。」

つまりはマスターの処理能力の増強が必要という事です。

そこで、外部に処理を補助する為の制御部を作成する事は、理に適っていると言えます」

「そのとおりです」

んー、戦闘補助用の外部プロセッサ？

「あれ？ それじゃあ、機兵鍛冶とかのスキルも外部に制御部作っ

たら」

「恐らくは難しいかと。」

外部での処理が可能なのは、ケイオスという自律可能な情報体が在つての事でしょう」

「なるほど、それで合ってる？ えーと、ケイオスって呼べばいいのかね？」

サイコロに問いかけてみる。

「概ね正しい認識です。」

戦闘補助は、私というオペレーティングシステムが無ければ、その性能を生かすことは出来ません。

そして、外部に制御部を持たなければ、このオペレーティングシステムを有効に動作させる事は不可能です。

逆に言えば、外部にユニットを用意すれば、その分だけ処理速度を得ることが出来るのです。

識別名は、マイスターにお任せします」

サイコロが点滅しながらそう答えた。

「んー、外部ユニットって、フォウさんみたいなの？」

サイコロが瞬くように明滅する。

「いえ、私にとって人の姿をとる事は、余分な機能です。」

私の本分は機兵の制御、それ以外にありません」

「あー、ケイオスの代わりに機兵を作れって事か」

「その通りです。」

以前の私は機体が壊れれば其れまでです。

しかし、現在はマイスターが生きている限りにおいて、機体は代

替可能デス……素晴ラシイ」

な、なんか変な奴だ。

「ところで、ここから出るときに、オリハルコンなんか持ち出していると非常に怪しいんだけども、一旦消しちゃっても大丈夫か？」

「プログラムコードはマイスターに付随してイマス。

制御部自体は再構築可能なパーツにすぎません。

問題はありマセン」

サイコロさんが、そう仰るので、一安心。

「なら良かった。フォウさん食っというて

「はい」

手渡すとサイコロを口の中で飴玉の如く、コロコロしだすフォウさん。

そのうち、ケイオスの声は聞こえなくなった。

早々に制御部が分解されちゃったんだろう。

「さて、そろそろ降りようか。皆も、やきもきしてる様子だし」

ケイオスのコクピットから出て、普通の機兵と同じように扱えるようになった腕を操作し、皆の前に降り立った。

「こんなもんで、どうでしょう？」

目前に立つサラバーン候に、三流手品師まがいの胡散臭さで一礼。
なんだか色々と値踏みされている視線を感じる。

「はっ、幾分かの期待はしていたが、こつもアツサリと動かしてしまつか。

今までの苦勞が思い返されて目に染みるというものだ」

サラバーン侯が手を出してきたので、それを受けて握手。

ジマー機士が、なんかこつちにウムウムと頷いていて、ハーケンデーン機士が何か感動している様子。

クーザック機士は、まだ立ち直っていない。

王国の連中は、なんか危険物を見てるような様子で、教国のグループは苦笑している風情。

赤銀の二人は普通に感心しているらしい。

「一つ聞かせて貰いたい」

ジマー機士が、いつの間にか傍に居て驚いた。

「なんです？」

「キミは、あの機兵を手にしようとは思わなかったのかね？」

ジマー機士はケイオスを眺め、腕を組み視線だけをこちらに向けて、何事もないように問うてくる。

「まあ、道に落ちてりゃ拾うかと思いますが……。

アリモノ拾って俺TUEEEEする程にガツガツしてる訳でもないですしね」

「ふ、おもしろいな」

いや、そんな事したら、遺産も見れない拳句に、お尋ね者でしょうが。

……

……

…

「結局は、変わらずか」

地下から戻った一行は、パーティの料理をツマミながら、今後の事をツラツラと話し合っている。

一応、建前通りの優秀機士の招待つてのを取り繕うように、ホールには客が入っていて、赤銀や俺、天才君に話を聞こうと、紹介されても覚えられない程度に人がやって来る。

サラバーン侯も、思った以上にフットワーク軽く、あちこちに顔を出している。

ただ、ルドガーさんやロッドさん、ジマー機士、ハーケンデーノ機士辺りが、隅の方でゴソゴソやっている……何気に巫女さんも居るし（あのドジっ子に政治的影響力が在るのだろうか？）

とはいえ、現状のトップが誰も居ない訳なので、暫定の暫定といったものなんだろうけど。

「あれ？ クーザック機士と、あのチンピラは何処行った？」

何時の間にか、見かけないと思ったら、ホールの中には居ない様子。

首を傾げていると、背後から「そろそろ、抜け出そうかと思うが、どうかね？」と声をかけられた。

振り返ると、サラバーン侯が居て「約束どおり、公国の遺産を見せよう」と俺を促し、さっさと先を進んでいく。

「ほんとにフットワークの軽い人だなあ」

呆れつつも、慌てて俺もそのあとを追う事にした。

この時、見かけなくなった二人の事を確認しておけばと思ったのは、大分経ってからの後の祭りだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9315f/>

ロボゲで異世界

2010年10月8日12時27分発行